能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成26年1～2月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（日曜日6時～6時55分）

［1月］
1月26日㈰「葵　上」（観世流）岡　久広

［2月］
2月2日㈰「大原御幸」（観世流）梅若　玄祥
2月9日㈰「西行桜」（宝生流）小倉　敏克
2月16日㈰「八　島」（金剛流）今井　清隆
2月23日㈰「鵜」（観世流）武田　宗和

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［1月］
25日㈯　第25回万作を観る会
26日㈰　名古屋宝生会定式能　（番組①面）（有料）

［2月］
8日㈯　宝生流能公演　飛雲会　（無料）
9日㈰　名古屋観世会定例公演能　（番組②面）（有料）

［3月］
1日㈯　名古屋能楽堂3月定例公演　（番組③面）（有料）
8日㈯　名古屋片山能　（番組③面）（有料）

≡平成26年度≡ 名古屋能楽堂 定例公演

名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）、能楽協会名古屋支部共催の「平成26年度名古屋能楽堂定例公演」は、恒例のように今年6月から明年3月まで八回開催される。なお6月21日㈯若鯱能、明春1月2日㈮には、新春謡初めが催される。

公演日程と演能は次のとおり。

◇6月公演　6月7日㈯宝生流能「頼政」。各回とも狂言上演。
◇7月公演　7月6日㈰喜多流能「三輪」
◇9月7日㈰　第1部／喜多流能「田村」観世流能「杜若」
▽第2部／観世流能「松風」宝生流能「金札」
◇10月24日㈮　観世流能「邯鄲」
◇12月7日㈰　宝生流能「通盛」観世流能「大会」
◇1月3日㈯　観世流能「翁」観世流能「老松」
◇3月7日㈯　観世流能「定家」

第9回 萬歳楽座公演

能「恋重荷」古式 能「千手」重衣之舞

4月10日 国立能楽堂

能楽をより多くの方に楽しんでもらうため、能楽笛方・藤田流十一世宗家・藤田六郎兵衛氏が主催する観能の会「萬歳楽座」は、平成二十二年の初公演からの開催を閲して、きたる四月十日㈭国立能楽堂で〝叶わぬ恋・束の間の愛〟をテーマに、第9回公演を開催する。（開場午後五時三十分、開演午後六時三十分）

今回は、「萬歳楽座」始まって以来の、能二曲上演で観世流能「恋重荷・古式」（シテ梅若玄祥師）能「千手・重衣之舞」（シテ観世清和師）の二番。

「千手」の小書（重衣之舞）（きぬぎぬのまい）は、数年前に誕生した新しい小書（特殊演出）で、平成二十三年九月に大阪の大槻能楽堂企画公演で初演された。

主な出演者は「恋重荷」老人・老人の霊・梅若玄祥、女御・片山九郎右衛門、宝生欣哉、山本泰太郎、藤田六郎兵衛、観世新九郎、亀井忠雄、観世元伯。

「千手」千手の前・観世清和、平重衡・大槻文蔵、宝生閑　藤田六郎兵衛、大倉源次郎、亀井広忠その他の出演者・片山幽雪、観世銕之丞、観世喜正ほか。

入場料金（全席指定）S席一二、〇〇〇円、A席一〇、〇〇〇円、B席八、〇〇〇円、学生席三、〇〇〇円

チケット申込み＝電子チケットぴあ（TEL0570・02・999、Pコード433・243）、ローソンチケット（TEL0570・084・003、Lコード37751）国立能楽堂／窓口販売のみ（午前10時～午後6時）

藤田六郎兵衛事務所（TEL052・571・5763／FAX共・名古屋市西区幅下2－10－9）アポロ音楽事務所（TEL03・5379・8717）

演能案内

名古屋宝生会定式能（第158期 第1回）

平成二十六年一月二十六日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

番組

高砂
能
当山　淳司
内藤　飛能　橋本　宰
飯冨　雅介　河村眞之介
椙元　正樹　船戸　昭弘　鬼頭　義命
大野　誠
後見　竹内　澄子　玉井　博祐
地謡　清水　達光　真野　尚人　森下　和久荘太郎　大森　佐藤　正宜　辰巳大二郎　佐藤　耕司
問　野村又三郎

清水
狂言
シテ　鹿島　俊裕
アド　佐藤　友彦
後見　佐藤　融　竹内　澄子　玉井　博祐
地謡　金井　雄資　衣斐　正宜　佐藤　耕司

小塩
仕舞
クセ　竹内　澄子　玉井　博祐
地謡　金井　雄資　衣斐　正宜　佐藤　耕司

三山
花見　片桐　遵　花見　尾澤　征哉　花見　和久漢太郎　牛若　片桐　辰巳満次郎　花見　中村　賢
花見　片桐　愛　花見　内山　美希　花見　和久八重子　花見　中村　優文

鞍馬天狗
能
白頭　飯冨　雅介
橋本　叡
問　井上松次郎　今枝　郁雄
後見　衣斐　正宜　辰巳大二郎　衣斐　愛
地謡　杉浦　敏二　鈴木久仁七　竹内　孝成　平田　正文　内藤　飛能　金井　雄資　和久荘太郎　當山　淳司
河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛

終了予定　四時半頃

附祝言

正会員券　一八、〇〇〇円（年間通用4枚綴り）
（入場券料）鑑賞券　五千円　学生券　二千円
鑑賞券は芸文・栄プレチケ、名古屋市昭和区御器所3－23－19－802
振興事業団で取扱い
主催　名古屋宝生会
名古屋文化
TEL／FAX　052・882・5600　衣斐正宜方

謹賀新年

名古屋観世会

十世片山九郎右衛門
片山幽雪
京都市東山区新門前通大和大路東入西之町224
〒605－0088　電話（〇七五）五六一－二九一一

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町A番七号
電話（〇六）六七六四－〇八九八番

初陽会
武田宗和
宗典

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
高橋瞭一

名古屋観鴦会
山本勝一
山本博通

梅若万三郎

幽花会
片山伸吾

梅若玄祥

浦田保浩
〒606－0814　京都市左京区下鴨芝本町58
電話（〇七五）七二三－六八五〇

梅猶会
猶諷会
梅若猶義

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
須部甫
本田勲
今沢美和
梅田嘉宏
〒466－0033　名古屋市昭和区台町二丁目十六－五
電話（〇五二）八四一－四六三三番

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通3・8・2・306
電話（〇五二）八三一－三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五
電話（〇七九八）㈫二四五八

全国新作能面公募展

2月～3月 名古屋能楽堂で展示

「越前池田」能楽の里が選ぶ能面展「第12回全国新作能面公募展」は、今回は、全国35都道府県から三百九名、四百二十八点の応募がよせられた。

公募の審査は、観世流シテ方・久田勘鷗氏、和泉流狂言方・佐藤友彦氏、能面師桑田能忍氏らにより選考された約百五十点が二月一日から二月二十四日まで、池田町能面美術館で展示される。表彰式は二月二十二日㈯池田町能面美術館で挙行され、二月二十三日には、池田町水海の田楽能舞保存会により、狂言・和泉流「仏師」井上松次郎氏、佐藤融氏、能・観世流「紅葉狩」久田勘鷗氏により上演される。

また、県外特別展示として、名古屋能楽堂特別企画展として、二月二十八日㈮～三月二十四日㈪まで全国新作能面公募展入賞から佳作作品、過去の公募展最優秀作品など約五十点が展示される。

大槻能楽堂 自主公演

「鸚鵡小町」「関寺小町」

大槻能楽堂二〇一三年度自主公演能・改築三十周年記念は「老の美と悴」のテーマで大曲「鸚鵡小町」と「関寺小町」を上演する。

◇2月22日㈯午後2時開演

能「鸚鵡小町」杖三段之舞　シテ大槻文蔵、ワキ福王知登、笛・松田弘之、小鼓・幸清次郎、大鼓・亀井忠雄、後見・観世銕之丞ほか、地謡浅見眞州、浅井文義ほか

◇3月22日㈯午後2時開演

能「関寺小町」シテ梅若玄祥、子方・梅若秀成、ワキ福王茂十郎、ワキツレ福王和幸、ワキツレ福王知登、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、太鼓・亀井忠雄、後見・片山幽雪ほか、地謡・観世清和、岡久広ほか

入場料　前売S席一二、〇〇〇円、A席九、七〇〇円、B席六、五〇〇円、学生席四、八〇〇円

取扱所／大槻能楽堂事務局（大阪市中央区上町A－7）大槻能楽堂ホームページ、ローソンチケット

二月二十二日公演・Lコード51740、三月二十二日公演・Lコード51742

お問合わせ／大槻能楽堂（TEL06・6761・8055）

演能案内

飛雲会大会

二月八日（土）十時半始

名古屋能楽堂

素謡　高砂　シテ　中西孝文　ツレ　中西ひろみ　ワキ　水越允治

鶴亀　シテ　池本周子　ワキ　阿部聡

仕舞　猩々　山田悠登　猩々　山田健登　絃上　小林慈道

素謡　玉葛　シテ　白石米子　ワキ　大村敏江

殺生石　シテ　逸見由利子　ワキ　遊佐昌樹

仕舞　紅葉狩　草間悠貴　蝉丸　廣瀬安司　経政　キリ　阿部聡　花月　キリ　小林福子

独吟　花筐　クルイ　水越允治

舞囃子　西王母　奥田庸子　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭義命　大野義誠

仕舞　絃上　竹田征子　熊野　キリ　松山八郎　紅葉狩　池本周子　胡蝶　白石米子　羽衣　キリ　阿部信子　熊野　キリ　榎並典子　村　クセ　三浦義富

連吟　羽衣　キリ　小林かつこ　会員一同

舞囃子　枕慈童　福谷芙美子　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭義命　大野義誠

鞍馬天狗　丹羽郁子　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭義命　大野義誠

素謡　蝉丸　シテ　土方利恵子　ツレ　杉野茂　ワキ　廣瀬安司

独吟　駒ノ段　榎並典子

舞囃子　西行桜　榎原知治　河村総一郎　後藤孝一郎　榎原易子　大野誠

仕舞　砧　マエ　大塚恵　宮　キリ　小坂絢子　誓願寺　鈴木マチコ　岩船　土方利恵子　羽衣　逸見由利子　花筐　クルイ　千田美和子　口　キリ　大島田鶴江　江羽　森峰子　船弁慶　大村敏江　巻絹　遊佐昌樹

独吟　玉ノ段　杉野茂

舞囃子　海人　内藤飛能　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭義命　大野誠

番外　隅田川　シテ　竹内孝成　ワキ　真野久

素謡

〒三三三－〇八六六　埼玉県川口市芝二－四－二六

飛雲会

内藤飛能

名古屋観世会定例公演能

二月九日（日）十二時三十分開演

名古屋能楽堂

能　邯鄲　子方　味方梓　古橋正邦　番組　杉江勝久　元　高安相元　正樹　杉江淳　河村総一郎　加藤洋輝　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛　奥津健太郎

間　後見　清沢一政　久田勘鷗　地謡　本田勲　須部甫　山中雅志　武田梅田邦久　大志嘉宏　久保信一朗　祖父江修一

狂言　樋之酒　太郎冠者　松田高義　次郎冠者　主人　奥津健太郎　野口隆行　後見　伴野俊彦

仕舞　難波　武田大志　俊成　久田勘鷗　忠度　祖父江修一　采女　観世芳伸　藤戸　前シテ　後シテ　観世清和　地謡　加賀敏彦　久保信一朗　武田邦弘　山中雅志

能　梅　素囃子　喜多雅人　福王茂十郎　福王知登　河村眞之介　大倉源次郎　加藤洋輝　藤田六郎兵衛

間　後見　古橋正邦　梅田邦久　地謡　吉沢旭　八神孝充　松山幸親　高橋暸一　梅田邦弘　武田観世　久田勘鷗　嘉宏　芳伸　勘鷗

井上松次郎

附祝言

（四時半頃終了予定）

年間特別指定席券　四五、〇〇〇円
S席指定席券　三〇、〇〇〇円
A席指定席券　二五、〇〇〇円
年間自由席券（四枚綴）　二〇、〇〇〇円
当日指定席券　八、五〇〇円
当日自由席券　六、〇〇〇円

主催　名古屋観世会
事務所　名古屋市名東区一社3－162（久田勘鷗方）
TEL　052・734・6192

謹賀新年

名古屋修諷会
梅若修一

久田観正会
久田勘鷗

郁諷会　前野郁子
松諷会　松山幸親　星野路子
〒465－0093　名古屋市名東区一社3－162
電話（〇五二）七〇五－一五八五

武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘
武田大志

春鶯会
梅若善高
梅若善久

〒560－0084　豊中市新千里南町三丁目18－12
電話（〇六）六八三－七八五四
〒166－0003　東京都杉並区高円寺南4・27・7・908

笙月会
中川雅章

〒526－0036　長浜市地福寺町八ノ二九
電話（〇七四九）〇六三〇番

上田観正会能楽堂
上田観正会　TEL〇七八－六九一－五四四九
上田貴弘
拓司
公威
大介

橋岡会
舞謡会
橋岡久太郎
＊＊＊＊＊
坪内芷路之
荒木亮
宮下功
小出年彦
塚田章
吉田重雄
松原章
宮内美樹
小倉美富
橋岡佐喜男
橋岡信明
野池尚美
島田博人

松盛会
小松勝憲

松舞台
〒511－0851　三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX（〇五九四）二三－四五八二

能楽の友社

金剛流能「自然居士」

五色の会第15回公演

岡崎

「朋の会」（金剛流シテ方・羽多野良子師主宰）主催の「五色の会・第十五回能を見る」集いは、昨年末十二月二十三日(月)午後二時から岡崎市の花朋会敷舞台（岡崎市大西町奥長）で金剛流能「自然居士」を上演、会場いっぱいの三百人を越える熱心な観能がつづけられた。

番組は、仕舞「求塚」（シテ宇高通成）狂言「腰折」（野村又三郎、松田高義、藤波徹）、能「自然居士」（シテ羽多野良子、子方・伊藤詩美、ワキ高安勝久、相元正樹、アイ・野村又三郎、笛・鹿取希世、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・廣田幸稔、小鴨利辺華、伊藤雅子、地謡・宇高通成、宇高竜成、宇高徳成、百々康治、竹市幸司、惣明貞助ほか）

五色の会第15回公演
金剛流能「自然居士」
シテ　羽多野良子
平成25年12月23日 岡崎・花朋会敷舞台

名古屋能楽堂三月定例公演

三月一日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

［開演前ショート解説（午後一時四十五分）から午後二時まで］

番組

狂言　**秀句傘**（和泉流）
大名　野村又三郎
太郎冠者　野口隆行
坂東方の者　松田高義
後見　井上松次郎

能　**花筐**（宝生流）
ツレ　衣斐愛
子方　山田健登
衣斐　正宜
飯富雅介
橋本宰
相元正樹
橋本叡
河村眞之介
船戸昭弘
鹿取希世
後見　竹内澄子
玉井博祐
地謡　石森智幸
竹内孝成
竹内淳一
平田東川光夫
正文和久荘太郎
佐藤耕司
亀井保雄

（午後四時頃終了予定）

［チケット料金］
前売　指定　四〇〇〇円
自由一般　三〇〇〇円
学生　二〇〇〇円
自由席のみ当日　五〇〇〇円増
［取扱所］名古屋能楽堂（052・231・0088）
名古屋文化振興事業団（052・249・9387）
栄プレチケ92（052・953・0777）
チケットぴあ（0570・02・9999、Pコード434・110）

主催　公益財団法人　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
公益社団法人　能楽協会名古屋支部

第九回　名古屋片山能

三月八日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

能　**巴**
片山九郎右衛門
殿田謙吉
河村眞之介
後藤嘉津幸
藤田六郎兵衛
平木豊男
野口琢弘
間　野村又三郎
後見　青木道喜
小林慶三
地謡　大江広祐
大江信行
分林道治
片山伸吾
河村博重
武田邦弘
観世喜正
古橋正邦
地謡　大江広祐
古橋正邦
青木道喜
橋本忠樹

能　**猩々乱**
武田梅田
大志嘉宏
双ノ舞
殿田謙吉
河村眞之介
後藤嘉津幸
加藤洋輝
藤田六郎兵衛
後見　武田邦弘
片山幽雪
地謡　清沢一政
橋本忠樹
大江信行
分林道治
片山伸吾
古橋正邦
梅田邦久
河村博重

仕舞　**網ノ段**
片山幽雪
観世喜正

守

（終了予定午後五時三十分頃）

［チケット取扱所］
片山家能楽京舞保存財団（TEL075・551・6535）
名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）
名古屋文化振興事業団（052・249・9387）
チケットぴあ（0570・02・9999 Pコード：434・385）

指定席（正面・脇正面）　五、〇〇〇円
自由席（中正面・脇正面後方）　四、〇〇〇円
学生席（自由席のみ）　二、〇〇〇円

主催　名古屋片山能制作委員会

謹賀新年

梅春会　井戸和男　井戸良祐　〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17 電話〇六-六六二一-二二一九

名古屋淡交会　橋岡慈観　三交会　久田三津子　〒465-0093 名古屋市名東区一社3-162 電話〇五二-七〇五-一八八五

公益財団法人　鎌倉能舞台　中森貫太　鎌倉市長谷3-5-13

洗心会　奥村富久子

賀水会　加賀敏彦　〒463-0035 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九 電話〇五二-七七一-八九四五番

観修会　祖父江修一　〒507-0848 多治見市日ノ出町2の2 電話〇五七二-二二-三六五六

幸謡会　近藤幸江　〒444-2122 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三 電話（〇五六四）㉑二五二九

千早会　八神孝充　〒464-0818 名古屋市千種区池園町2-9 電話・FAX（〇五二）七五三-四一二九

倉本雅　〒658-0081 神戸市東灘区田中町1-13-22-809 電話（〇七八）四四一-五四六五番

司宝会　佐藤耕司　〒468-0056 名古屋市天白区島田二丁目三〇一 島田橋住宅二-一三一〇 電話（〇五二）八〇三-七三七二

名古屋宝生会

宝生和英

近藤乾之助　〒170-0002 東京都豊島区巣鴨五-二三-八 電話〇三（三九一五）一三七六番

名古屋巽会　豊橋巽会　辰巳満次郎

惠美寿会　衣斐正宜　衣斐正宜後援会　〒466-0051 名古屋市昭和区御器所3-23-19 御器所パークマンション802号 電話（〇五二）八八二-五六〇〇番

佐野由於　玄宜　弘宜

金剛永謹　龍謹

廣田鑑賞会　廣田幸稔

松野恭憲能の会　松野恭憲

金剛流　今井清隆　今井克紀

豊嶋能の会　豊嶋三千春

能楽おでかけ ワークショップ 中村文化小劇場

中村文化小劇場（名古屋市中村区中村町字茶ノ木25）では、二月十一日(火・祝)午後一時から「能楽おでかけワークショップ」を催す。

内容は、能面をつけて歩いてみよう！「高砂」の謡と仕舞に挑戦しよう！のテーマで、講師に松山幸親、八神孝充、吉沢旭（観世流シテ方）大野誠（藤田流笛方）船戸昭弘（幸清流小鼓方）河村眞之介（石井流大鼓方）加藤洋輝（観世流太鼓方）

料金五百円　申込みは一月二十六日（日）中村文化小劇場「能楽おでかけワークショップ係」（TEL052・411・4565）

和泉流 狂言づくし

2月8日　豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、二月八日（土）「狂言づくし」として、和泉流狂言「蚊相撲」（石田幸雄）「蛸」（野村萬斎ほか）「六地蔵」（野村万作ほか）を上演する。午後二時始

［入場料］正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円。

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥2

竹尾　邦太郎

拾貳　「藤田昭彦から藤田六郎兵衛へ」

⑧「花傳の會」から「藤田・龍吟の会」

―承前―

平成十一年八月八日㈰五時始。「花傳の會」と銘打ってはいないが番外として「まるはちの日　名古屋能楽堂能舞台　夜間特別公開」、午後五時から地元の狂言師による狂言、五時半から笛（能管）の独奏などがある。狂言は平成十年「花傳の會」が公募した狂言台本の中で、故本多静雄氏提供の「本多賞」を受賞した北島徹也作「山車争い」初演。

あらすじ　戦災で失ってしまった名古屋東照宮の祭礼の山車の人形である猩々、鶴、雷電、恵比須、大黒、巫女、獅子、弁慶、牛若丸が夢の中に出てきてそれぞれ自己紹介をします。そのうち山車の曳き出しを巡って本町の猩々と七間町の弁慶が喧嘩になり立ち回りますが、狂歌の応酬と成り、その後仲直りし、めでたく帰り車となります。

この日、午前十時半から「青陽会定式能」第四十三期第三回があったので「まるはちの日」夜間公演になったか。

平成十一年八月十四日㈯一時半始。第十六回「花傳の會」は六郎兵衛超個人的趣味之会　第四回花傳の会お盆特別公演最終回と銘打ち、囃子の魅力を探る太鼓　観世流・金春流　秘曲の会。

超個人的趣味の会については「囃子のこと」「囃子の魅力を探るシリーズ」として案内リーフレットに次のようにある。

能の世界では同じ楽器を使う他流同志が一緒に演奏することはありません。舞台の上でいろ〳〵な流儀の方とお相手をさせていただいているので同じ曲でも流儀が変われば掛け声や出す音色が違うことは分かっていますが同時に他流の小鼓方が演奏することを体験することは生涯できません。

それならば「試み」として各役（笛・小鼓・大鼓・太鼓）に集まっていただき普段できない他流との合奏と各楽器、各流儀の秘曲と呼ばれる普段滅多に舞台で聞けない曲にこだわり、またこの会でしか聞けない組み合わせを考え、言わば藤田六郎兵衛の超個人的趣味の会を作ってしまったのです。

今年で各楽器の紹介がすべて終わりましたので一応今年でこの会はおわりにわせていただきます。

藤田六郎兵衛の「超個人的趣味之会」として、平成8年の8月より毎年お盆の日に笛三流（藤田・森田・一噌）、小鼓四流（幸・幸清・大倉・観世）、大鼓五流（石井・大倉・葛野・高安・観世）と続けてまいりました「囃子の魅力を探る」シリーズ最終公演です。

番組は太鼓連調「出端」金春国和（金春流）前川光長（金春流）、一調一管「葛城」金春国和・藤田六郎兵衛・梅田邦久（謡）、一調一管「鷺」前川光長・藤田六郎兵衛・金剛永謹（謡）

この一調一管「鷺」は本年の藤田六郎兵衛の舞台生活四十年に因み、昭和三十八年（一九六三）五月十九日の九世藤田清兵衛重孝三十七回忌追善能で六郎兵衛が小学四年生（当時　昭彦）の折、笛方藤田流芸嗣子披露に演じた能「鷺」のシテ金剛永謹（当時　小学六年生）、太鼓の前川光長（当時　小学五年生）、この縁の三人、同窓会と名付け同曲を一調一管として上演。なお、能「鷺」のツレ王は豊嶋弥左衛門・ワキ高安滋郎・地頭は今井幾三郎・主後見を金剛巌、大鼓は亀井俊雄、小鼓田鍋惣太郎となっているが、田鍋惣太郎は当時、五月十日に入院、七月には復帰するが此の問は代勤に托して居り当時の番組には要注意。

一管「豊後下り端」一噌隆之（一噌流）杉市和（森田流）藤田六郎兵衛（藤田流）笛三流聞き比べ、一調「船弁慶」小寺佐七（観世流）観世栄夫（謡）、一調「杜若」観世元伯（観世流）山本博通（謡）、他。

平成十一年八月十五日㈰一時半始。第十七回「花傳の會」観客参加型特別公演と謳い、案内リーフレットには次のようにある。

若手能楽グループ大集合!!

何年かごとに能楽界の現在、そ

（⑤面へつづく）

「ツクスマ」のメンバー
左より上田　悟・大倉正之助・大倉源次郎・藤田六郎兵衛
「TSUXMA」リーフレットより転載

謹賀新年

金剛流
宇髙通成
竜成
徳成

シテ方金春流宗家
金春安明
〒167-0052 東京都杉並区南荻窪三丁目17-16
電話〇三(三三三一)二五七一番

本田光洋
〒164-0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三(三三八六)二六四一番

金春穂高
〒631-0821 奈良市西大寺東町一-三-十五
電話(〇七四二)三三-九七二〇

福王茂十郎
和幸
知登

髙安勝久

宝生閑
欣哉

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰

谷田同門会
原大
小林努
有松遼一
岡充

清水利宣
〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25
電話〇七二(六九四)五〇一七

藤田舞台
藤田六郎兵衛
〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9
TEL&FAX 〇五二-五七一-五七六三

大倉源次郎

幸友会
福井四郎兵衛

弘耀会
船戸昭弘
〒509-0103 各務原市各務東町4-67

（④面よりつづき）

して未来を憂い、また自らの技芸向上のためにグループが誕生します。この二十年間を振り返り現在は解散している「ツクスマ」大倉源次郎・大倉正之助・上田　悟をこの日のみ再結成してもらい、その後誕生したグループ「響」清水皓祐・成田達志・山本哲也・守家由訓・中田弘美を大阪より、そして名古屋の「鏡座」味方　団・大野　誠・後藤嘉津幸・河村眞之介・野村小三郎を招き、何に危機を感じ結成したのか、また今後の能楽界に対して思うこと、普段どういう活動をしているか等々を大槻文蔵氏（大槻氏も三十数年前にグループを持っていました）をゲストとして討論会か口論か罵り合いか、いずれになるか怖いのですが皆様にも聞いていただきたいと思います。

このあと装束の着付け、楽器紹介、狂言の擬音（鋸や雷の音）や簡単な歌謡指導といった若い時だからこそ出来る観客の皆様との交流現場を実際にこの場でしてもらいます。皆様にもご参加いただけるコーナーを設けます。

上演曲目　舞囃子三番「高砂」「井筒」「土蜘蛛」、小鼓一調、大鼓一調　演者は決めていません。グループでの競演は無いことなので本日は各曲の演者を皆様の前でくじかジャンケンで決定したいと思っています。

「ツクスマ」と藤田六郎兵衛の関係…「ツクスマ」結成当時から藤田六郎兵衛がまだ昭彦と名乗っていたときからのお付き合いです。藤田六郎兵衛がゲストとして一番多く参加しているようです。（笛方のいないグループなので）当時、チラシにはかならず藤田六郎兵衛と「ツクスマ」というように載り、藤田六郎兵衛がバンドリーダーのように思われていました。

「参考」　これより十年前、平成元年（一九八九）五月十三日、クイーン・エリザベス2世号が横浜港大桟橋に碇泊、船内劇場で「ツクスマ」による日本の音「能の音楽」があり、公演案内の立派な二ツ折りリーフレット（写真）に「ツクスマ」の説明がある。

耳慣れない言葉だと思います。「能」の世界の専門用語です。「能」の音楽は基本的には八拍子ですが、その中で一息でとる一番長い間をツクスマと呼びます。「能」との出合いを少しでも多くの人に、という私達の活動が息の長いものになるようにという思いでつけました。

昭和六年（一九三一）九月・観世流改訂本刊行會刊「能謡語彙」には次のようにある。

ま〔間〕（拍子）「間」は「間合」ともいひ、句と句との間隔の意なり。謡曲を構成せる文章は七五調の一句十二文字のもの多けれども、又必ずしも然か限られ居らず。十二字より多きあり少なきあり、其上に節附の関係もありて、之に拍子を配する時は、句間の距離同一なる能はず。是に於て其の間隔を長短により、古来、ヤ、ヤア、ヤヲ、ヤヲハ等の称呼を設けて種類を分てり。而して此等の間は、すべて一句の頭部に於ける字不足に因するを、其の前句の終字を引き延ぶることを以て補ふものとす。「間」の種別左のごとし。

と、ヤの間、ヤアの間、ヤヲの間、ヤヲハの間、と列挙して各解説を加えている。つくすま（ツクス間）は「ヤヲハの間」の異称。諸種の間合のうちにて最も長く、間拍子を尽くすとの意なり、と。

平成十一年九月二十五日㈯一時半始。第十八回「花傳の會」は藤田家三百七十年・藤田六郎兵衛舞台四十年を記念して「特別公演パートⅡ」　番組は芥川龍之介の詩による観世栄夫構成・作曲の能舞「相聞」観世銕之丞・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村眞之介・大槻文蔵（地頭）、一管独吟「芭蕉」藤田六郎兵衛・片山九郎右衛門（謡）藤田流ではこの「芭蕉」と「江口」の二番を一番重い習いに扱う。名古屋初演・堂本正樹台本　梅若六郎演出の復曲能「護法」茂山千作（嫗）野村萬斎（山伏）片山九郎右衛門（護法善神）藤田六郎兵衛・曽和正博・白坂信行・観世元伯・片山清司（地頭）伏が訪ねてくる。山伏の携えてきた椰の葉には「道遠しの年もやうやう老ひにけり思ひおこせよ我も忘れじ」と神からのメッセージが。感激して神楽を舞う老巫女だったが、年には勝てずよろめいてしまう。その時、虚空に護法善神が顕現し、不思議や老巫女の身体に力が漲り。――と梗概に。

――以下次号――

◆晩秋の舞台から◆

「第三四回　名古屋金春会」「名古屋観世会定例公演」

竹尾邦太郎

シテ、ワキを狂言方が勤めるよう改作され平成五年に復曲された能。

奥州名取の里に住む年老いた巫女のもとへ熊野明神から使いの山

「生田」

喜多以外、四流現行曲だが金春以外は「生田敦盛」の称呼。

大小前に鈍い金色引廻シの藁屋が大小前に。僧形（角帽子・襟赤・濃緑無地熨斗目着付・紫水衣・左手に数珠・右手に扇）の敦盛の遺児（子方・金春嘉織）を先立て法然上人に仕える男（ワキ宰、襟浅黄・白茶段熨斗目着付・素袍上下・小刀）が出る。名宣から子方と賀茂明神参詣に赴く趣旨、遺児の生い立ちからこれ迄を明快に述べるワキ語に説得力。子方はサシ・下歌・上歌に、神の恵みに夢なりとも父の姿に会いたい願い叶えて、の思いを確りした謡いぶりに吐露、惹きつける。生田の森へ下れの霊夢を得て子方、ワキとの問答もはき〳〵と上々、道行はワキの独吟。「先づかう御座候へ」とワキ、子方とワキ座に就くと藁屋の引廻シが取られ、床几に敦盛ノ霊（シテ穂高）が面敦盛・黒垂・梨打烏帽子・襟白赤・白地金青海波文縫箔着付・白地金波浪二貝文大口・暗青色単法被肩脱ギ・太刀を佩く姿で居る。虚無的な己れを託つ呟きを聞きつけたワキと掛合に、〽敦盛が幽霊来りたり、と明かすシテに、〽なう敦盛とは我が父かと、我を忘れ走り寄る子方、初同（安明・忍・俊之ら）〽袂に縋り、シヲルのも切ない。子方の孝心を汲む賀茂明神から閻魔王に付託されたシテの暫しの暇、シテが〽親子の契りも（今を限りなるべし）、と子方にアシラフ心情さぞや。

〽（夜もすがら昔を）いざや語らん、と直り、〽然るに（平家の栄華を）、と薫屋を出ると、一門西海に追われ一旦は生田の森まで盛り返すも一の谷に討死までの有様、舞ゲセにさび〳〵舞うと、仮初の夢の契りの喜びは〽親子鸚鵡の袖ふれて、感極まりシヲリ、名残りの中之舞を。舞上げ空気が一変、暫しの暇が「今までの遅参心得ず」と閻魔王の怒りは押し寄せる修羅の敵に。〽もの〳〵し、と太刀を抜くシテは力強い刀捌きをみせるが、〽月澄み渡りて、と空を見上げ右膝つくと〽（暁の空とぞ）なりたりける、と太刀を捨て子方へ寄り〽懇に弔ひて、と合掌、〽泣く泣く、とシヲリ扇開きつ、右へ廻り常座へ。〽露霜と、拍子一ツ踏み、〽失せにけり、と地一杯にシテ柱みて留拍子。

ワキの謹直、子方の殊勝、シテの舞ゲセ・中之舞・修羅の苦思に至る心象の微妙、好舞台。囃子は誠・嘉津幸・眞之介。（48分）

「半蔀・立花」

金春流の小書「立花」は先代信高宗家により整備され現行曲にされたといい名古屋初演。

都雲林院の僧（ワキ勝久）が所ノ者（アヒ又三郎）を伴い出ると、括袴・黒練水衣のアヒ一旦後見座にクツロギ、後見一人が花瓶の立花を正先に据えて切戸に退くと、ワキは名宣から花の供養を執り行う旨アヒを呼び出し、スミ近く出たアヒはワキとの問答から、立花供養に志ある方々は詣られたし、のワキの意向を「その分心得候へ、心得候へ」と触レ、ワキに「相触レ申して候」と報告、ワキの「心得てある」で笛前に。ワキはそれをみて正中へ出ると膝をつき「敬って白す立花供養の事、云々」のコトバの裡、大小アシラヒの囃子の裡に、里女（シテ光洋、後に夕顔ノ上ノ霊）は二ノ松に。ワキが〽悉皆成佛道、と祈り終ってワキ座へ行くと、同時にシテは立花の前へ進み膝つくと、白い花を手ずから瓶に生けるのも珍しく、立って確める心に眺めると、再び膝をつき、合掌する。〽手に取れば手ぶさに穢る立てながら三世の佛に花奉る、を具象に見せるのが面白い。

「如何なる花を立てけるぞ」と問うワキに、〽愚かのお僧の仰せやな、とワキに気を持たせるシテは、ワキを五条辺りへいざなうことになる中入地、キリの〽花の蔭に隠れけり、の返シ句にふと踏み止まるのはワキへ心を残し誘う心、如実にシテがイニシアチブ（率先して行動し、物事をある方向へ導く力）をとる。シテが中入すると所ノ者（アヒ又三郎）が立花供養に詣る態、ワキに請われ光源氏と夕顔ノ上とのことを居語して退くと、濃紫引廻シの半蔀屋が笛前にスミカケて据えられる。

ワキは教えの通り五条辺りスミ近くから夕顔の纏わる半蔀屋を眺め、ワキ座へ戻ると、中から荒れ果てた住まいを託つ声が。〽さらでも、と引廻シが取られると床几に夕顔ノ上（後シテ光洋）〽草の半蔀押し上げて、と白の長絹に紫大口の姿で〽立ち出づる御姿、そこはかとなきその姿の寂しみ。クセ（汎・廣明・八郎ら）に光源氏との懐旧談は殊にこの半蔀屋での馴初め、〽惟光を、招キ〽あの花折れ、と半蔀屋を指シ、大小前へゆき〽白き扇の、と扇を開き、〽この花を、と扇面に戴くと、〽源氏つくゞ〳〵、と扇面を見詰める風情に今更の邂逅の思い。花、〽折りてこそ、分る往事の気色を思い

（⑥面へつづく）

謹賀新年

長田驍後援会
〒514―2221 津市高野尾町三三五―四六
電話（〇五九二）㊇〇六九七番

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

大倉流小鼓 松月会
久田舜一郎
久田陽春子
高橋奈王子
〒662―0087 西宮市柏堂町一―八―三二三
電話（〇七九八）七三―六五八六

叶石会 河村総一郎
〒466―0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一―四八八二

河村大
〒603―8313 京都市北区紫野下柏野町五九―一
電話（〇七五）四六二―四一一五

河村眞之介
〒466―0064 名古屋市千種区山門町1―15―2
電話（〇五二）七五一―七六六一

石井仁兵衛
石井保彦
〒606―0913 京都市左京区松ヶ崎芝本町一―一―403
電話〇七五（七二三）五〇〇一

飯嶋六之佐
〒920―0961 金沢市香林坊2―8―17
電話（〇七六）二六二―四三四〇

亀井俊一
忠雄
保雄
実

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594―0041 和泉市いぶき野4―2―101
電話（〇七二五）三〇―一三七〇
名古屋　名古屋市中区栄5―6―4 栄能楽堂
稽古場　電話（〇五二）二六二―一一八三

長生会
鬼頭義命
〒490―1323 愛知県稲沢市平和町城西137
電話（〇五六七）㊇一九六〇番

茂山良暢
〒606―8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話〇七五（七〇一）二〇一一番
FAX〇七五（七〇一）二二三一

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
千太郎
基誠
〒177―0053 東京都練馬区関町南4―22―7―304
電話（〇九〇）三二一三―六九二三

㈱大阪能楽会館
〒530・0015 大阪市北区中崎西2―3―17

（⑤面よりつづき）

舞う序之舞、初段に左、右と拍子踏み指シて半部の下へ行くところに味わい。舞上げてキリはへまた半部の内に、と正面から入って直り、扇で面蔽い沈むと、へ夢とぞ、で立ってへなりにける、と謡が切れる時、右側へ出てその侭何事も無く橋懸へ、当然トメ拍子は踏まず、立花は最後までひかなかった。夕顔の上の気品、余情揺曳。囃子は希世・嘉津幸・総一郎。（1時間20分）

「佐渡狐」

年貢を納めに上洛の道すがら、越後ノ百姓（アド隆行）が佐渡に狐は居るまいと佐渡ノ百姓（シテ又三郎）を挑発すれば郷党の面目にかけても弱みはみせられないシテ、否定はするもの、居らぬが事実。互いの小刀を賭け、有無の裁定を奏者（小アド高義）に仰ぐことになってシテ、アドに先んじ奏者に会うと早速賄賂を。役の手前、奏者は烈火の如くに怒り峻拒はするが、シテが重ねて事を進めれば、そこは習い性のお役人、辺りを窺い、すかさず懐中するとシテと顔を見合わせ北叟笑む。この辺りの機微に妙味。しかし、結局奏者との企み巧くいきかけるが帰途、アドに狐の啼き声を問われ、苦しまぎれに「ぐう〳〵と啼くいやい」とやって嘘が露見。俗に遣り込められてぐうの音も出ない、とは言うもの、「ぐう」は出たと言うべきか。気合の入ったトリオの熱演。（26分）

「熊坂」

僧に化現の熊坂長範ノ霊（シテ尚久）、旅僧（ワキ雅介）に回向を請い己が館に誘うが、持佛堂には似合わぬ武具の山、つれ〴〵にその理由を語るシテ語からクセ（光洋・忍・八郎ら）、坦々と話が展開してゆく趣でシテに無気味な妖気のようなものは余り感じられない。所ノ者（アト隆行）が散策に出てワキと出合い、問答・居語に熊坂長範の悪行の顛末から牛若に討たれるまでの故事を、口跡爽やか格調高く長広舌を振るって退くと後場。

後場は長範（ノ霊）と牛若の闘争を見せる。出端（誠・昭弘・眞之介・洋輝）で一ノ松へ出るシテは長刀を二ツ突き立て威勢を示し、舞台へ入っては地のへ月は出でても、と床几に掛けるが、どっかりという訳にはゆかず、重みが出るのはこれから。シテ・ワキ掛合に手駒の郎党の面々を紹介するところはハキハキと小気味よく、地のへ皆われ先にと、で床几を立つと長刀捌きも大きく鮮やかに奮闘。へ打物業にて叶ふまじ、と長刀押し遣ると、へ手捕りにせんと、大手を拡げ、摑み掛からんとして姿は見れども、へ手に取られず、と打合セのようにするところ、摑みそこねての無念が。キリはへ力も弱り、と安座、へこの松が根の、と右手開き目付柱へ指し、へ末の世潤け給へと、片膝立てワキに合掌、へゆふつけも、と立ち、へ赤坂の松蔭に、で二ツ拍子、へ松蔭にこそは隠れけれ、と常座でシテ柱みてトメ拍子踏んだ。（1時間15分・11月3日・第34回名古屋金春会）

「實盛」

加賀の篠原は実盛が討たれた古戦場、この地で遊行上人（ワキ勝久）の説法を日々聴聞に来る老翁（後に実盛ノ霊・シテ玄祥）、へ笙歌遙かに聞ゆ、と一ノ松に、へあら尊や、とワキを見込み合掌、鐘の音・念佛の声によそ乍ら聴聞せんとへ老眼の通路、で運ビ出すとへ少しは遅くとも、と舞台に入り、へ遠かるまじや、と片膝つきワキへへ南無阿弥陀佛、と合掌、ワキに声を掛けられ問答・掛合に。シテの姿がワキにしか見えず「皆人不審しあへり」とあってワキに名を問われ、ば「これは思ひも寄らぬ」とワキにアシラヒ、へかしこうぞ（よくもまあ）長生して、と直り、今の此のへ無比の歓喜をなす処にへ輪廻妄執の閲浮の名をへまた改めて名乗らん事、とワキにアシラフと、へ口惜しうこそ候へとよ、と直り語気強く抗う。ワキに「申す所理至極せり然りながら一つは懺悔の廻心ともなるべし」と説かれ、ば人払いして名乗るに至るが、力の籠る熱の入ったシテ・ワキ問答・掛合が素晴らしい。大小前・右膝つき「昔長井の齋藤別当実盛は」とシテはワキにアシラヒ、再びシテ・ワキ問答・掛合に。「この御前なる池水にて」と直ルと実盛の鬢鬚が洗われ執心の残る幻、シテがへ老木をそれと御覧ぜよ、とワキにアシラフと、へ不思議やさては、とワキ、シテは実盛が幽霊と名乗り、二百余歳を経てなお浮かばれぬと。初同（邦久・勘鶴・正邦ら）へ草葉の霜の翁さび、でワキから直り、杖をとり立つとワキを見込へ亡き世語も恥かしとて、右へ廻り常座へ、へ見れば篠原の池の辺、と杖を手放すと（写真）へ掻き消すやうに失せにけり、の返シ句一杯に橋懸へ。一寸ミステリアスな前場の展開、面白い。シテが中入するとワキの独り言を不審する里人（アヒ俊裕）、ワキに篠原の古戦場での実盛の故事を問われ、「懇に承り候ものかな」とワキに言わしめる歯切れよく刻明な討死の経緯を語る居語が上々。

後場、ワキは臨時の踊り念佛を以て実盛の霊を弔う由アヒに触レさせ床几を立つと従僧（ワキツレ元・正樹）と待謡。出端（希世・舜一郎・眞之介・洋輝）でへ極楽世界に往きぬれば、と一ノ松に出る実盛（ノ霊・シテ玄祥）、地と掛合に（念々毎に）往生す、と舞台に入り、へ南無と云っば、と一ツ拍子踏みスミへ出ると袖返シ、左へ廻り込み常座へ、へ有難や、とワキに合掌。地のへ即ち廻向発願心へ心を残す事なかれ、と正中、床几にかゝりへ陰野の露と消えし有様、とワキにアシラフとシテ語。名調沁々聞かせる。首洗いの場は床几に掛けて（写真）、へ鬚を洗ひて見れば、の鞏固な型に根差す柔らかみは、老武者でありながらの華やぎ、素晴らしく、クセからキリへ、力の入った充実の舞台だった。（1時間42分）

「鳴子遣子」

野遊びに出た男・甲（アド融）田圃の鳥威しを見て鳴子だ、と言えば、男・乙（アド郁雄）は遣子だ、と言い張り決着がつかず、一腰（小サ刀）を賭けて深泥池の茶屋（シテ松次郎）に裁定を委ねることに。それ〴〵己れが勝てば甲は大茶釜を、乙は茶壺をやろうとシテを買収にかゝるが（写真）ラチは明かず、結局「論ずるものは中から取れ」とばかりにシテが賭物を攫ってしまう。自説に拘りむきになる甲と乙、醒めている茶屋、三者の按配がよい。（21分・11月10日・名古屋観世会、他に「蝉丸」は次号）

観世会「実盛」
梅若玄祥　マエ
（杉浦賢次撮影）

観世会「鳴子遣子」左より今枝郁雄・井上松次郎・佐藤　融　（杉浦賢次撮影）

観世会「実盛」
梅若玄祥　アト
（杉浦賢次撮影）

観世会「鳴子遣子」左より今枝郁雄・井上松次郎・佐藤　融　（杉浦賢次撮影）

謹賀新年

和泉流
狂言共同社
代表
鷂今　鹿今　井佐　大佐　井
見枝　島枝　上藤　野藤　上
政　靖　俊　郁松　弘友　菊
次　次
行雄　裕雄　郎融　之彦　郎

〔事務所〕
〒466-0826
名古屋市昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D
電話　052・834・8607
FAX

狂言やるまい会
野村又三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021
名古屋市中区平和一―二〇―四
野村事務所　気付
電話　052(350)7971
FAX052(350)7972

ウシマド写真工房
牛窓正勝
雅之
〒602-8381
京都市上京区北野上七軒
TEL(〇七五)四六一一三四一
FAX(〇七五)四六一一五七七二

五〇〇年の伝統を護る
一色能
一色町能楽保存会
会長　吉川貞夫
〒516-0011
伊勢市一色町1306番地の2
電話(〇五九)六二一五―六五二六

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓　後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―六―四
電話(二六二)一一八三番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話　〇五六一五③二三四六番
能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

〔おことわり〕年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜わりますようお願い申し上げます。

喪中につき年賀欠礼いたします
観世清和
廣田泰三

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成26年２～３月）

◈ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

［２月］
２月23日　「鵜」　（観世流）武田　宗和

［３月］
３月２日　「絵　馬」（観世流）野村　四郎
３月９日　「無布施経」（狂言・和泉流）石田幸雄
　　「歌争い」（狂言・和泉流）深田博治
３月16日　「忠　度」（観世流）河村　和重
３月23日　「雨　月」（宝生流）三川　泉
３月30日　「隅田川」（喜多流）粟谷　能夫

演能カレンダー

◈名古屋能楽堂◈

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［３月］
１日(土)　名古屋能楽堂３月定例公演　（番組①面）（有料）
２日(日)　新作能「紅天女」　（能組①面）（有料）
８日(土)　第９回名古屋片山能　（番組①面）（有料）
15日(土)　さわってみよう一能の世界
16日(日)　第２回名古屋宝生会定式能　（番組②面）（有料）
22日(土)　四大学交流会　（無料）

［４月］
12日(土)　青陽会定式能　（番組③面）（有料）

豊田市能楽堂“桃花能”

能「隅田川」狂言「舟渡聟」

3月8日 午後2時開演

豊田市能楽堂は、三月八日（土）“桃花能”として、午後二時から能「隅田川」狂言「舟渡聟」を上演する。

主催・公益財団法人豊田市文化振興財団、豊田市・豊田市教育委員会。

番組は、和泉流狂言「舟渡聟」船頭・三宅右近、聟・三宅近成。女・三宅右矩、後見・高澤祐介

金剛流能「隅田川」　シテ豊嶋三千春、子方・佐々木奏太、ワキ宝生閑、ワキツレ則久英志

笛・竹市学、小鼓・荒木賀光、大鼓・河村総一郎、後見・豊嶋幸洋、竹市幸司、百々康治

地謡　松野恭憲、豊嶋晃嗣、田中敏文、中嶋謙昌、重本昌也、都丸勇、山口尚志、向井弘記

入場料／全席指定・税込

二十六世観世宗家改名

清和改め「清河寿」

二十六世観世宗家・観世清和氏は、このたび平成二十六年一月より清和　改め「清河寿」（キヨカズ）を名のることとし、あいさつしている。

改名にあたって、宗家は「観阿弥生誕六八〇年・世阿弥生誕六五〇年という節目の年にあたり、室町幕府三代将軍足利義満により創建された臨済宗相国寺派の大本山である相国寺有馬頼底管長に相談して改名を決めさせて頂きました。相国寺は観世家とは縁が深く、公私にわたって長らくおつきあいさせて頂いており、臨済禅の法に従って「キヨカズ」の音（オン）はそのままに、字体（漢字）を変えて「清河寿」としたら如何かとお勧めいただきました。名前を変えるという事は新たな人生が始まるという意味合いがあり、いろいろな面で広がりがもたらされ、改名を機に大いに活躍していただきたいとのお言葉をいただきました。

流儀の皆様と共に新たな気持ちで歩んで参りたいと思います」とあいさつしている。（「観世」誌より）

小・中学生能楽鑑賞会など

能楽協会名古屋支部の活動

公益社団法人・能楽協会名古屋支部による能楽公演は、名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）との共催による「名古屋能楽堂定例公演」が前号既報のように、今年６月から明年３月まで平成26年度公演が開催されるが、そのほか受託公演として次の演能が予定されている。なお２月23日、24日は、福井県池田町・能楽の里文化交流会館で、能楽ワークショップ、能楽鑑賞会が催されている。

受託公演の日程は次のとおり。

▽７月８日、９日「名古屋市小中学生鑑賞会」会場・名古屋能楽堂

狂言「柿山伏」能「殺生石」など

▽７月29日、30日、31日、８月１日、５日、６日「豊田市中学生鑑賞会」会場・豊田市能楽堂

狂言「泉山伏」能「船弁慶」

▽８月17日「わくわく能楽体験」会場・豊田市能楽堂

▽９月６日「小牧山薪能」会場・小牧山城趾公園

▽12月３日、４日「名古屋市小中学生鑑賞会」会場・名古屋能楽堂

演能案内

名古屋能楽堂三月定例公演

三月一日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

［開演前ショート解説（午後一時四十五分）から午後二時まで］

番組

狂言　秀句傘（和泉流）
大名　野村又三郎
太郎冠者　野口　隆行
坂東方の者　松田　高義
後見　井上松次郎

能　花筐（宝生流）
ツレ　衣斐　愛
子方　山田　健登
衣斐　正宜
飯冨　雅介
橋本　宰
相元　船戸　河村眞之介
橋本　正樹　昭弘　鹿取　希世
叡
後見　竹内　澄子　石森　智幸　佐藤　耕司
竹内　孝成　亀井　保雄
玉井　博祐　地謡　竹内　淳一　東川　光夫
平田　正文　和久荘太郎
（午後四時頃終了予定）

主催　公益財団法人　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
公益社団法人　能楽協会名古屋支部

［チケット料金］
前売　指定　四〇〇〇円
自由一般　三〇〇〇円
学生　二〇〇〇円
自由席のみ当日　五〇〇〇円増

［取扱所］名古屋能楽堂（052・231・0088）
名古屋文化振興事業団（052・249・9387）
栄プレチケ92（052・953・0777）
チケットぴあ（0570・02・9999、Pコード434・110）

新作能　紅天女（くれないてんにょ）

三月二日（日）
２部公演
午後一時開演
午後五時開演

国立能楽堂委嘱作品

漫画「ガラスの仮面」より新作能「紅天女」（くれないてんにょ）2006年、国立能楽堂で初演され評判の舞台となった。名古屋では初めての上演。

漫画の作者、美内すずえの監修のもと、宝塚歌劇団の植田紳爾が脚本を担当、芸術院会員・梅若玄祥が演出・主演する。演出・能本補綴。

［出演］
お話　美内すずえ
阿古衣・紅天女　梅若　玄祥
仏師・一真　福王　和幸
東の者　茂山七五三
西の者　茂山千三郎
朗読（月形千草）
笛　花瀬みずか
小鼓　藤田六郎兵衛
大鼓　後藤嘉津幸
太鼓　河村眞之介
地謡　加藤　洋輝
林　宗一郎
味方　団
田茂　廣道
角当　直隆
松山　隆之
河村　和貴
川口　晃平
河村　和晃
山崎　正道
小田切康陽
大江　信行
後見

［チケット料金］S席　一〇〇〇円
A席　九〇〇〇円
B席　七〇〇〇円

［取扱い］CBCラヴァーズショップ（TEL052・242・1181）
チケットぴあ（Pコード433・780）
アイチケット　TEL0570・00・5310
芸文プレイガイド　TEL052・972・0430

主催　中部日本放送
中日新聞社
制作　国立能楽堂
問い合わせ　CBC事業部
電話052・241・8118

第九回　名古屋片山能

三月八日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

能　巴
片山九郎右衛門　殿田　謙吉　河村眞之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
平木　豊男
野口　琢弘
間　野村又三郎
後見　青木　道喜　大江　広祐
小林　慶三　地謡　大江　信行　河村　博重
分林　道治　武田　邦弘
片山　伸吾　観世　喜正
古橋　正邦

仕舞　網ノ段　片山　幽雪
守　観世　喜正　地謡　大江　広祐
古橋　正邦
青木　道喜
橋本　忠樹

能　猩々乱
武田　大志
梅田　嘉宏
双ノ舞　殿田　謙吉　河村眞之介　加藤　洋輝
後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
後見　武田　邦弘　清沢　一政
片山　幽雪　地謡　大江　信行　橋本　忠樹　古橋　片山　伸吾
分林　道治　正邦
河村　博重
梅田　邦久

（終了予定午後五時三十分頃）

［チケット料金］
指定席（正面・脇正面）　五、〇〇〇円
自由席（中正面・脇正面後方）　四、〇〇〇円
学生席（自由席のみ）　二、〇〇〇円

［チケット取扱所］
片山家能楽京舞保存財団（TEL075・551・6535）
名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）
名古屋文化振興事業団（052・249・9387）
チケットぴあ（0570・02・9999　Pコード：434・385）

主催　名古屋片山能制作委員会

五世梅若吉之丞 三回忌追善会

3月29日 東京・観世能楽堂

東京

五世梅若吉之丞三回忌追善能は三月二十九日（土）東京・観世能楽堂で催される。能組は次のとおり。主催・東京梅猶会。

連吟「江口」鷲野末千代　小川晴子

仕舞「通盛」梅若基徳、「松風」立花香寿子、「船弁慶」梅若雅一

能「実盛」　シテ梅若猶義、ワキ宝生欣哉、ワキツレ則久英志、御厨誠吾、間・山本東次郎、笛・一噌隆之、小鼓・曽和正博、大鼓・柿原光博、太鼓・三島元太郎

仕舞「隅田川」梅若万佐晴、「遊行柳」クセ・野村四郎、「藤戸」梅若玄祥

能「三輪」白式神神楽　シテ梅若修一、ワキ安田　登、間・山本則重、笛・一噌庸二、小鼓・観世新九郎、大鼓・国川純、太鼓・金春国和

仕舞「花匡」クルイ　梅若猶彦、「通小町」岡田晃一

仕舞「経正」キリ　梅若利成、「殺生石」梅若秀成

狂言「地蔵舞」山本東次郎、山本則重

仕舞「笹之段」梅若万三郎、「山姥」キリ　観世銕之丞

能「天鼓」弄鼓之舞　前シテ梅若善高、後シテ梅若善久、ワキ村瀬提、間・山本則秀、笛・寺井宏明、小鼓・幸信吾、大鼓・柿原弘和、太鼓・徳田宗久

・午前十一時始

入場料・S席一二〇〇〇円、A席一〇〇〇〇円、自由席八〇〇〇円、学生席三〇〇〇円

申込先　観世能楽堂（TEL03・3469・5241）

・問い合わせ先　岡田晃一（TEL03・3450・3372）、梅若雅一（TEL03・3755・2750）梅若善高（TEL090・3039・2431）

五〇〇年の伝統を誇る一色能

一色神社例祭奉納能

能3番、3月16日演能

伊勢

五百年の伝統を誇る一色能は、平成二十六年度一色神社例祭の「奉納能」を三月十六日（日）一色町公民館仮設舞台で開催する。

主催／一色町能楽保存会、一色町自治会、一色神社。

演能は、「翁」（太夫・吉川貞夫）、半能「松虫」（シテ稲葉秀美）番外狂言「鐘の音」（太郎冠者・藤波徹）半能「志賀」（シテ石原隆明）ほか連吟、仕舞、独吟など合わせて二十二番。

開演午前十一時、後援／三重県、伊勢市、三重県文化振興事業団、伊勢市観光協会など。

一色の能は、昭和三十三年に伊勢市無形民俗文化財に、神楽が三重県無形文化財に、能面、能装束、小道具類、鏡板類が平成六年に三重県有形文化財に、翁が平成七年に国の選択無形民俗文化財に指定された。保存会は平成九年十一月に文部大臣より地域文化功労者表彰を受賞、同二十五年一月法政大学催花賞受賞、地域の文化の高揚と活性化のため活動をつづけ、高く評価されている。

“音とリズムから能を知る”

廣田幸稔氏、久田舜一郎氏

3月15日 名古屋でセミナー

名古屋

金剛流シテ方・廣田幸稔氏と大倉流小鼓方・久田舜一郎氏のコラボレーションによる〝詩（うた）とリズムから能にふれる〟セミナーは、今回七回目を数え、きたる三月十五日（土）、午後二時から名古屋・東区の「ギャルリhu」（名古屋市東区筒井3－22－2、TEL052・935・4808）で催される。

講義は、講師二人の演奏とお話を交えながら能の詩の良さ、せりふと歌の組み立て方、そのリズムの面白さと魅力を表現し、歌舞劇としての能の音楽性の面白さが体感できる企画。

今回のテーマ曲は、世阿弥作の名曲「清経」。定員二十五名、講座料金三五〇〇円。

受講申込み、詳細は、FAX：052・953・5363、またはTEL090・4198・9763に問い合わせる。

会場は地下鉄桜通線「車道」下車、徒歩2分。

名古屋宝生会 演能日程

名古屋宝生会の平成26年度定式能（第五十八期）は、第一回（1月26日）、第2回（3月16日・番組本号掲載）につづいて、第三回（6月15日）第4回（11月16日）の日程で開催される。いずれも午後1時開演。

［第3回］6月15日（日）

能「半蔀」（竹内澄子）

能「雷電」（宝生和英）

ほか狂言・仕舞

［第4回］11月16日（日）

能「三井寺」玉井博祐

能「飛雲」衣斐　愛

ほか狂言・仕舞

名古屋宝生会／TEL・FAX052・882・5600

金沢能楽会 定例能

3月2日（土）

石川県立能楽堂

能　右近　高橋　憲正

狂言　伊文字　炭　光太郎

仕舞　笹之段　広島　克栄

能　兼平　藪　俊彦

4月13日（日）

石川県立能楽堂

能　桜川　島村　明宏

連吟　胡蝶

狂言　佐渡狐　鍋島　憲

能　来殿　広島　克栄

主催　金沢能楽会

電話〇七六（二五五）〇〇七五

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥3

竹尾　邦太郎

拾貳　「藤田明彦から藤田六郎兵衛へ」

⑨「花傳の會」から「藤田・龍吟の会」へ

――承前――

平成十二年、「花傳の會」は主催に中部日本放送（CBC）と中日新聞が加わることになり左の通り「道成寺」の連続公演を催す。

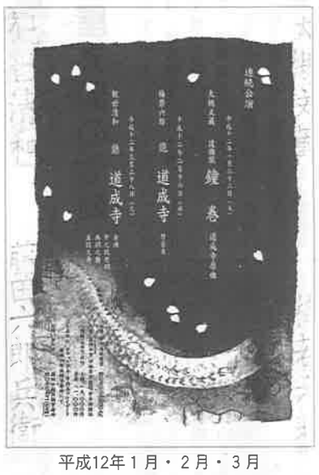
平成十二年一月廿二日（土）二時始、第十九回「花傳の會」は西野春雄（法政大学能楽研究所々長）による解説のあと、「道成寺原曲」の復曲能「鐘巻」大槻文蔵・中村弥三郎・茂山千之丞・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村　大・前川光長・阿部信之（地頭）観世栄夫（後見）赤松禎友（鐘後見）。ワキツレ、アドアヒ不明。

平成十二年二月十六日（水）午後六時始、第二十回「花傳の會」は案内リーフレットによれば、この時は「梅若六郎の会」名古屋後援会発足記念特別公演としており、主催は梅若六郎の会・花傳の會・中部日本放送・中日新聞。番組は、舞囃子「百萬」片山九郎右衛門・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・河村眞之介・助川　治、仕舞二番「白楽天」山本勝一「天鼓」大槻文蔵、狂言「蝸牛」野村又三郎・井上祐一・松田高義、能「道成寺・替装束」梅若六郎・宝生　閑・宝生欣哉・則久英志・野村小三郎・野口隆行・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村総一郎・助川　治・片山九郎右衛門（地頭）山本勝一（後見）梅若晋矢（鐘後見）。

平成十二年三月廿八日（火）一時半始、第廿一回「花傳の會」。番組は馬場あき子（歌人）のお話のあと、能「道成寺・赤頭・中之段数圃・無躅之崩・五段之舞」観世清和・福王茂十郎・野村万作・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・守家由訓・観世元伯・大槻文蔵（地頭）大江将董（後見）藤井徳三（鐘後見）、ワキツレ、アドアヒ不明。

平成十二年、秋、「花傳の會」は第廿一回を以て納会となり「藤田・龍吟の会」に改まる。理由を審らかにしないが「花傳の會」発会時に挨拶を寄せ、後援を惜しまなかった本多静雄・名古屋民芸協会々長・杉本美術館々長が前半の平成十一年五月六日、死去されたこともあろうか。元々、笛方藤田流には社中会に「龍吟会」があり、記録に現われるのは大正六年（一九一七）四月十四日、呉服町能楽倶楽部舞台での囃子会。後にプロとなる鈴木直恒・田島香園の名がみえる。当時の藤田流宗家は九世藤田清兵衛重孝（一八六五－一九二七）、大正十三年（一九二四）田鍋豊二郎が藤田家へ養嗣子に入り、昭和二年（一九二七）九世没後に家督相続、昭和十四年（一九三九）十世六郎兵衛を襲名する。この間、昭和初期及び戦中戦後「龍吟会」は空白期もあったが昭和廿四年から昭和三十年代は毎年春・秋の囃子会を励行、以後も概ね春季囃子会を催すが、昭和五五年十月廿六日、十世没後は通年能繁期状態の事もあり、いわゆる社中の囃子会は稽古人口の減少もあり笛に限らず三鼓も同様であろう。当代十一世六郎兵衛が「龍吟の会」と「の」を加えたのは社中素人会と一線を画する事と思われる。さて、「藤田六郎兵衛　龍吟の会」の初演は、先の「道成寺」連続公演を受けて藤田・龍吟の会・中部日本放送・中日新聞の主催。便宜的に回数を付ければ、

（③面へつづく）



平成12年１月・２月・３月の連続公演

龍吟の会
源氏物語ゆかりの能　三選
平成13年

第58期・第2回 名古屋宝生会定式能

三月十六日（日）午後一時始　名古屋能楽堂

番組

能　須磨源氏　和久荘太郎　杉江　元　高安　勝久　河村眞之介　相元　正樹　船戸　昭弘　野村又三郎　加藤　洋輝　大野　誠

間　後見　竹内　澄子　玉井　博祐　地謡　森下　光　片桐　真　杉浦　敏二　石森　智幸　内藤　飛能　辰巳満次郎　小倉健太郎　辰巳大二郎

狂言　棒縛　太郎冠者　井上松次郎　次郎冠者　今枝　郁雄　主人　大野　弘之　後見　佐藤　融

仕舞　籠太鼓　佐藤　耕司　是界　内藤　飛能　地謡　玉井　博祐　竹内　澄子　衣斐　愛

能　隅田川　子方　坂口　正宜　衣斐　愛　飯富　雅介　杉江　元　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

（②面よりつづき）

第一回「龍吟の会」平成十二年十一月七日（火）一時始。今回は特別公演を謳い、尾張徳川家秘蔵の能管「蝉折」と「苅田蒔絵鼓」を使用のため徳川美術館も主催に加わる。番組は、一調一管「龍田川辺」観世清和（謡）藤田六郎兵衛（笛）大倉源次郎（小鼓）、復曲能「長柄の橋」片山九郎右衛門・片山清司・中村弥三郎・茂山七五三・藤田六郎兵衛・荒木賀光・山本　孝・三島元太郎・大槻文蔵（地頭）片山慶次郎（後見）、能「土蜘蛛」梅若六郎（土蜘蛛ノ精）大槻文蔵（僧）観世晄夫・観世清和（頼光）観世喜正（頼光ノ従者）福王茂十郎（独武者）福王和幸・福王知登・井上靖浩・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・観世元伯・片山慶次郎（地頭）梅田邦久（後見）。解説文には次のようにある。

「甦る桃山時代の音色」

ある演能の折に小鼓を勤めた大倉長右衛門宣安（大倉流三世）は三代将軍徳川家光より自作の小謡『龍田川辺』の詞章を下され、その場にて独謡一調で演じたと伝えられています。そののちの将軍の所望により大倉流の秘曲として数度の演奏が記録されています。今回の話題は三人の家元の出演と使用の名器でしょう。尾張徳川家お抱えの笛役、藤田流七世藤田清兵衛重村が「獅子田」の作と折紙に極め「蝉折」と銘のある室町時代の能管、そして小鼓は慶長十六年（一六一一）、豊臣秀頼から尾張徳川家初代の徳川義直（家康九男）に贈られた室町時代の名品、ともに尾張徳川家の由緒ある重宝として秘蔵され、現在は徳川美術館に所蔵されています。かって名古屋城内の能舞台に響いたであろう名器の音色を今回、特別にご鑑賞いただきます。

「非在の橋、歌枕という中世の小宇宙」

この曲は室町時代の記録を最後に上演がとだえていましたが、今年二月に大阪の大槻能楽堂で復曲初演されました。

旅の僧が歌枕として知られる摂津・長柄の橋の旧跡を通ると、橋を作り続ける老人に出会います。老人は長柄の橋の謂れや和歌のことなどを物語り、この橋を架ける際に人柱となった男こそ自分と告げて芦の間に消え失せます。夜半、弔う僧の前に男の亡霊が現れ、大石を背負って沈められ今なお受ける地獄の苦しみ、そして当時すでに失われているはずの長柄の橋への尽きぬ怨みと執心を訴えるのです。

第８回
藤田・龍吟の会

龍吟の会
特別公演

第二回「藤田・龍吟の会」平成十三年六月十六日（土）二時始。定例公演。番組は藤田六郎兵衛「恋の音取」についてのお話のあと一調一管「猩々乱」香川靖嗣（謡）杉　市和（笛）前川光長（太鼓）、能「清経・音取」友枝昭世・内田成信・宝生　閑・藤田六郎兵衛・曽和正博・河村　大・香川靖嗣（地頭）内田安信（後見）。案内リーフレットに小書「音取」につき次の解説がある。

「音取」は「恋之音取」とも呼ばれる小書で、かって藤田流では一子相伝とされた秘曲です。江戸時代よりシテ方各流儀と藤田流との間でこの秘曲の申合せ（取り決め事）がされていましたが、喜多流とのみ、その機会がなく、四百年来初めての上演となります。しめやかな笛の独奏に誘われるようにシテが橋掛りを来ては留まり、また留まっては歩み、「恋ノ手」という旋律が奏でられます。夫婦の密やかな愛情が思われるすぐれた演出です。

第三回「藤田・龍吟の会」平成十三年十月十三日（土）二時始。源氏物語ゆかりの能　三選の内の一。復曲能「碁」大槻文蔵・武富康之・中村弥三郎・茂山逸平・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村総一郎・阿部信之（地頭）赤松禎英（後見）。

第四回「藤田・龍吟の会」平成十三年十一月九日（金）午後六時半始。源氏物語ゆかりの能　三選の内の二。馬場あき子（歌）のお話のあと、蝋燭能「葵上・古式」梅若六郎・山本博通（照日ノ神子）角当直隆（青女房）福王茂十郎・福王和幸・井上靖浩。藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井広忠・助川　治・大槻文蔵（地頭）山崎正道（後見）。

第五回「藤田・龍吟の会」平成十三年十二月一日（土）二時始。源氏物語ゆかりの能　三選の内の三。馬場あき子（歌人）のお話のあと、能「半蔀・立花供養」片山九郎右衛門・宝生欣哉・野村又三郎・藤田六郎兵衛・曽和博朗・柿原崇志・大槻文蔵（地頭）片山清司（後見）川瀬敏郎（たてはな）。

第六回「藤田・龍吟の会」平成十四年六月八日（土）二時始、八世観世銕之丞先生を偲んで。能「三山」観世銕之丞・西村高夫・宝生　閑・野村万作・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・白坂信行・山本順之（地頭）浅見真州（後見）、能「合浦」観世浮夫・宝生　閑・野村又三郎・野村小三郎・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・河村総一郎・金春惣右衛門・観世銕之丞（地頭）片山清司（後見）。

第七回「藤田・龍吟の会」平成十四年十月廿六日（土）二時始、十世藤田六郎兵衛重明廿三回忌追善能。番組は、舞囃子「海人」辰巳満次郎・鹿取希世・柳原富司忠・亀井広忠・助川龍夫・一調「松虫」大槻文蔵（謡）鵜澤速雄（小鼓）、狂言「萩大名」野村又三郎・井上祐一（太郎冠者）野村小三郎（茶屋）、能「関寺小町」片山九郎右衛門・観世淳夫・宝生　閑・宝生欣哉・則久英志・大目方寛・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井忠雄・梅若六郎（地頭）大槻文蔵（後見）。

第八回「藤田・龍吟の会」平成十六年一月廿四日（土）二時始。舞囃子「海士」山本博通・藤田六郎兵衛・後藤嘉津幸・河村眞之介・加藤洋輝・上田拓司（地頭）、復曲能「当願暮頭」大槻文蔵（兄当願）宝生　閑（志度寺の住持）宝生欣哉・殿田謙吉（従僧）井上靖浩・佐藤融（能力）藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井広忠・助川治・片山清司（地頭）赤松禎英（後見）。

第九回「藤田・龍吟の会」平成十七年七月二日（土）二時始。一管「津島」藤田六郎兵衛、能「安宅・勧進帳・瀧流」観世銕之丞・片山清司ら（同山）福王茂十郎・井上靖浩・佐藤　融・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・河村総一郎、同山・地謡・後見は番組不備で不明。

これ以後の「藤田・龍吟の会」公演を知らない。軸足が東京へ移ったか、平成廿二年、新たに「萬歳楽座」が彼地で発足、一応「藤田・龍吟の会」の項は今回で擱筆する。

◆晩秋から冬の舞台◆

「名古屋観世会」「茂山忠三郎三回忌追善狂言会」と「名古屋能楽堂十二月特別公演」

竹尾邦太郎

『名古屋観世会』「蝉丸」
左より佐藤友彦、梅田邦久
（杉浦賢次撮影）

『名古屋観世会』「蝉丸」
武田大志
（杉浦賢次撮影）

「蝉丸」　勅諚とはいえ盲目の皇子・蝉丸（シテ　邦久）を山に捨てる廷臣・清貫（ワキ雅介）、君の仕打ちを訝るも蝉丸自身は、過去の因果を現世で償いさせ未来に救済を得させんがための親の深謀と達観、これぞ真の慈悲とは言うものの、いざ独りになり僧形に身を窶れさせられると流石に前途の不安に寂寥、〈捨てられて、と慨嘆。地謡（邦弘・正邦・修一ら）〈さりとては、と蝉丸を残して発つワキは一礼すると〈尽きぬ涙、にシヲリつゝ立ち橋懸へ向かうと輿（ワキツレ宰・淳）も後に続き、蝉丸は杖をとると正中へ。〈杖を持ち、で蝉丸は笠を、次いでに杖も手放すと退りつゝ、安座、双シヲリの姿に深い孤独感が緊々と、心情巧みにみせる。そこへ何事もなく出る博雅三位（アヒ友彦）、蝉丸の境遇を憐れみ、雨露を凌ぐ藁屋を設え迎える（写真）

（④面へつづく）

青陽会定式能（第58期 第1回）

四月十二日（土）十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞　采女（キリ）今沢　美和
網之段　村井　邦子　地謡　角田　尚香　星野　路子　前野　郁子　瀬戸　洋子

能　清経
久田勘吉郎　久田三津子
高安　勝久　河村眞之介　船戸　昭弘　鹿取　希世
後見　武田　大志　前野　郁子　地謡　伊藤　裕貴　吉沢　旭　瀬戸　洋子　星野　路子　松山　幸親　祖父江　修一　久田　勘鬼　高橋　暸一

仕舞　春日龍神　吉沢　旭
須磨源氏　清沢　一政
隅田川　梅田　邦久
国栖（キリ）松山　幸親
地謡　伊藤　裕貴　高橋　暸一　祖父江　修一　八神　孝充

狂言　痩松
今枝　郁雄　鹿島　俊裕　後見　佐藤　友彦

能　天鼓
久田　勘鬼　杉江　元　河村総一郎　加藤　洋輝
弄鼓　後藤孝一郎　大野　誠
間　井上松次郎
後見　吉沢　旭　久田三津子　地謡　角田　尚香　村井　邦子　八神　孝充　美和　清沢　敏彦　梅田　一政　武田　邦久　大志

後見　玉井　博祐　衣斐　愛　地謡　津田　節武　平田　正文　竹内　淳一　玉井　道夫　石黒　孝　亀井　保雄　辰巳　満次郎　佐藤　耕司

（終了予定　四時半頃）

主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区御器所3－23－19－802
TEL　052・882・5600

〔チケット〕正会員券一八、〇〇〇円（年間通用4枚綴り）
鑑賞券五、〇〇〇円
学生券二、〇〇〇円

附祝言

主催　青陽会
事務局　名古屋市名東区一社三の一六二
久田勘鬼事務所
TEL052・734・6192

※前売券
〔取扱い〕二、五〇〇円、当日券　三、〇〇〇円
チケットぴあ（TEL0570・02・9999、Pコード786・492）
サークルKサンクス、セブン・イレブン、名古屋能楽堂、出演楽師

『名古屋観世会』「蝉丸」
左より武田大志、梅田邦久
（杉浦賢次撮影）

（③面よりつづき）

と、「何にても御用のこと候はば博雅三位と召され候へ、その分心得候へ」と触レて退き、急調の小鼓から一声の囃子（誠・嘉津幸・総一郎）、皇女・逆髪（ツレ大志）が一ノ松に。面十寸髪・襟白赤・白地雪輪文摺箔着付・浅黄赤段唐織脱下の姿、蝉丸と同じく因果の故に放逐され流離う姿は舞台に入るとカケリに神経の昂りをみせ、道行にかけては地と掛合に、始末に負えない髪の毛の厄介さを〈手にも分けられず、と左手に髪を握り、右手の扇を櫛に擬して梳く型の気合い、踏み出す足（写真）に如実。道行になると、都を遠ざかる淋しさ、水鏡に写る窶れた〈現なの我が姿、にシヲル逆髪の悲哀。琵琶の音をもせで、近付き蝉丸と再会の場は、〈姉宮かと、絶りつかんばかりの蝉丸（写真）、感動的。クセは居グセ、上ゲ端まえの地〈竹の柱に、以下が少々乱れたように聞かれたのが残念だったが、逆髪と蝉丸の掛合のロンギは逆髪の高い調子を蝉丸が巧く抑え情趣纏綿、交々心情よく現われ素晴らしい。キリは三ノ松から〈藁屋の軒に、と蝉丸を見返る逆髪、蝉丸は〈佇みて、と立ち、杖をつき常座近くへ、逆髪を見送る心に望見、〈顧みおきて、と逆髪はシヲリのま、入り、地一杯に蝉丸がシヲリ留メに。（1時間38分・11月10日・名古屋観世会）

二〇一四年度　大槻能楽堂自主公演能
《能の魅力を探るシリーズ》
世阿弥生誕六百五十年記念
名作とその作者たち

大槻能楽堂自主公演能（能の魅力を探るシリーズ）の二〇一四年度演能は〈〝世阿弥生誕六百五十年記念〟名作とその作者たち〉をテーマにその魅力を四月から明年三月まで次のスケジュールで上演する。

▽4月13日（日）午後2時開演
基調講演　世阿弥と私
梅原　猛
仕舞「芭蕉」　片山　幽雪
一節切　「津島」藤田六郎兵衛
一調「雲林院」　大槻　文蔵
対談　記念能を語る
天野文雄・大槻文蔵
▽4月19日（土）午後2時開演
「年々去来の花」を見せた観阿弥の代表作
能「自然居士古式」　上田　拓司
お話　松岡　心平
▽5月24日（土）午後二時開演
世阿弥が確立した「軍体」の能
能「実盛」　大槻　文蔵
お話・馬場あき子
▽6月28日（土）午後二時開演
世阿弥が仕上げた「幽玄無上」の古作能
能「松風」　見留　梅若　玄祥
お話・天野　文雄
▽7月27日（日）午後二時開演
世阿弥の禅観
能「山姥」　白頭　野村　四郎
お話　山折　哲雄
▽8月23日（土）午後二時開演
元雅が開拓した新しい「詩劇」
能「隅田川」　多久島利之
お話・増田　正造
▽9月27日（土）午後二時開演
救いのない贖罪を描く元雅の「修羅」
能「重衡」　復曲　観世清河寿
お話　村上　湛
▽10月25日（土）午後二時開演
禅竹の「身に沁む」秋の色
能「野宮」　片山　幽雪
お話　馬場あき子
▽11月22日（土）午後二時開演
禅竹の神祇観による「神」の能
能「三輪」　観世銕之丞
お話　天野　文雄
▽12月20日（土）午後二時開演
信光が拓いた「風流能」の名作
能「船弁慶」重前後之替
武富　康之
お話　西野　春雄
▽1月24日（土）午後二時開演
能「正尊」起請文・翔入
赤松　禎英
お話　羽田　昶
▽2月28日（土）午後二時開演
これ程の能を誰がいつ作ったのか
能「景清」松門之会釈・小返
浅見　真州
お話　天野　文雄
▽3月21日（土）午後二時開演
中世の罪業観と親子関係
能「烏頭」　友枝　昭世
お話　大谷　節子
［入場券］
4月13日　前売一般二一〇〇円（当日二三〇〇円、学生一〇〇〇円（当日一三〇〇円）
4月13日以降　前売一般四三〇〇円（当日四八〇〇円）学生二七〇〇円（当日三一〇〇円）
全12回（プラスワン）五一五〇〇円
大槻能楽堂（大阪市中央区上町A番7号）　電話06・6761・8055

なお番組の記載にはシテ蝉丸、ツレ逆髪とあって本来の役が逆転、小書「替之型」なら双シテとなるが藁屋の位置、装束付も替るのでこれでもなく不審。金剛流の小書「琵琶之会釈」だとシテ・ツレ今回の様に逆転するが。

「二人袴」

まだ子供気分の抜けない聟（シテ良暢）、日柄が良く聟入をさせたい兄（正邦）に、恥づかしいので嫌だと駄々をこね、欲しい物を買うてくれゝば、とねだる我儘は弁慶の人形や犬ころ、饅頭などと幼児性を発揮して他愛もないが「忠三郎狂言会に入れて下されゝ」のアドリブは勇み足。更に「兄様ついて来て下さるか」と、きては流石に兄も呆れるが、ついて行かねば行かないとあっては承諾せざるを得ない。この辺りの両者の問答、幼いとみえても強かなシテに甘えられる兄が翻弄される趣が面白い。聟入は祝儀、当然ながら衣冠整えるシテの正装は士烏帽子赤地調頭掛・段熨斗目着付・長袴、兄に叱咤され一人で舅（アドあきら）へ挨拶に出るも太郎冠者（次アド道郎）に兄も同道と知られ、兄も呼ばれる事になれば一領しかない長袴を交替で着けねばならない仕儀。慌しく入れ替り立ち替りする様に、両人揃ってとなっては一悶着、体面繕わねばと向きになる兄、長袴は引っ張り合って裂け二片に。そこは兄の分別、後ろは気掛りもお互い一片を前に当て舅の前へ。型通りの酒宴、肴に舞を望まれて聟、一旦は断るも「この所の大法」是非にとなれば、後ろを危惧する兄へ目配せに合図、へきこし召せや、と片膝立てただけで舞う型をすれば、立って舞うようせがまれ小舞「土車」を。気転を利かせて無邪気な詐術で舅の目を逸らせ、くるりと小回りに舞上げれば、狐に摘まれた様な舅、してやったりの兄弟も、目出度く三人合舞となって興に乗りすぎては長袴の小細工も露見、調和のとれた活き〜〜した好舞台だった。（33分）

「盆山」

盆山は盆石とも。盆の上に自然石や砂を配して風景を写し賞翫する。男（シテ千三郎）、盆石を沢山持っている知名の有徳人（アド童司）から一つぐらい、とねだるが呉れる気配もなく、盗もうと忍び込めば、感付かれて石の後ろに慌て、潜む。石をねだりに来た男なら顔は先刻承知の有徳人、男を散々からかってやろう、とばかりに人かと思えば「犬ぢや」「狼ぢや」などと決めつけて、その都度それ〳〵の生態模写・声帯模写をさせて喜び、果ては「鯛ぢや」に至って少々意地悪が過ぎるか。男には鯛の啼き声などなど想定外だったろう、「タイ〜〜」と叫び逃走するのみ、「タイ〜〜」は「痛イ〜〜」だったろう。奇想天外のオチが利く。（16分）

「素袍落」

主（アド茂）の使いで太郎冠者（シテ良暢）、明日の参宮に伯父（次アド正邦）は行くか否かを尋ねに。急な事で行けぬ伯父は汝の門出祝いにと振舞酒を。伯父の酌に太郎冠者、恐縮はするも喉を鳴らし大盞呑み干すが風味を問われ、「ただ胸の辺りがひいやりとしたばかりで」とあっけらかん、「風味を覚えとうござる」と遠慮が無い。二盞目で「知れました」との、と素袍を探し回る太郎冠者を尻目に謡い舞う。終始一貫三者力量を発揮、調和のとれた充実の舞台だった。（38分・11月15日・金剛能楽堂・茂山忠三郎三回忌追善狂言会）

『名古屋能楽堂12月特別公演』
「融」左より八神孝充、高安勝久
（杉浦賢次撮影）

「百萬」

男（ワキ雅介）、奈良西大寺で母にはぐれた童（子方・怜）を拾い嵯峨の大念仏に。そこで門前ノ者（アと健太郎）と問答、童に何か面白いものあれば、と尋ね女物狂（シテ愛）を教えられる。童は我が子を求め狂おしく舞う女物狂を見咎め、我が母、とワキに告げ、それとなく確めてと。ワキはシテと問答に身辺事情を知り慰めると、喜ぶシテは、それにつけても真剣に法楽の舞を、と。

二段の舞グセのトメ、〈あら我が子、と悲痛なシテの叫び、〈恋しや、と受ける地（正宜・耕司・荘太郎ら）、シテが右ウケ目付柱へ見るは涙隠す心、シヲルとカケリに。スミで右、左と眺め、左へ廻り込み常座から一ノ松へ、直り、面使ヒ〈これ程多き人の中に、とシヲリ、我が子無きを嘆くのも切ない。舞台へ戻ると〈逢はせて賜び給へ、と安座にシヲルを〈見るも傷はしや、とワキ、子方をシテの方に押しやる。〈怨めしや、と子方を見て立つシテ、なぜもっと早くの思いは母子相寄るとユウケンの喜び（写真）、よい舞台だったが子方はもっと小さな童であって欲しかった。（58分）

『名古屋能楽堂12月特別公演』
「融」八神孝充
（杉浦賢次撮影）

「懐中聟」

聟入作法に暗い初婚の聟（シテ俊裕）舅の家で粗相の無いよう世事に明るい教エ手（アド隆行）に問えば、これしきの事がと見縊られ、弄ばれて盃事のあった後、出される引出物を懐に入れ、ばよいと教えられる。いざ当日、事に当面すれば、引出物に出された物は重代の弓。聟は長い弓をどの様に懐に入れゝばよいかと苦心惨憺、その姿（写真）が可笑しく、舅（アド融）も悪戯つ気を出し、「この所の慣い」だから是非にと肴に舞をと所望する。これも作法の一かと聟は不自由な恰好で案山子よろしく舞い熱演。（30分）

「融」

小書の記載はないが「思立之出」「今合返」、旅僧（ワキ勝久）の飄然と旅立つ風情が如何にも。汐汲ノ老翁（シテ孝充）、旅僧と出会うと融大臣の旧跡の事ども坦々と語り、ところの名所を問答・掛合に教える辺り（写真）も割にさら〜〜と、汐汲みは田子を振り舞台に投げ出す型。前場は慎重そのものの印象。

後場は融大臣（ノ霊・後シテ）の優雅な日々。曲水の宴に舞う早舞は三段。二段オロシに常座で袖被クところは袖巻上げるのみ、ロンギの象徴的な型所の一齣〜〜もそつ無く決めるが、栄華を極めた融大臣らしい大きく伸びやかな闊達さが欲しかった。（1時間25分・12月1日・名古屋能楽堂12月特別公演）

『名古屋能楽堂12月特別公演』
「百萬」左より衣斐　愛、坂口　怜
（杉浦賢次撮影）

『名古屋能楽堂12月特別公演』
「懐中聟」鹿島俊裕
（杉浦賢次撮影）

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成26年３～４月）

◆Ｅテレ　４月27日(日)　21時～23時
能　「道成寺」～喜多流
シテ　粟谷　明生　ワキ　森　常好
アイ　野村　萬斎

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）
３月30日　「隅田川」（喜多流）粟谷　能夫
４月６日　「藤　戸」（観世流）関根　知孝
４月13日　「祇　王」（宝生流）今井　泰行
４月20日　「難　波」（金春流）高橋　忍
４月27日　「小袖曽我」（観世流）角当　行雄

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［３月］
22日(土)　四大学交流会　（無料）
素謡　鞍馬天狗
仕舞多数

［４月］
12日(土)　青陽会定式能　（番組①面）（有料）
（第58期第一回）

［５月］
10日(土)　関西観世花の会　（番組②面）（有料）

［６月］
８日(日)　名古屋観世会定例公演能　（番組②面）（有料）
15日(日)　名古屋宝生会定式能

〈廣田陛一追善〉
廣田鑑賞会能
４月６日　金剛能楽堂

京　都

金剛流・廣田鑑賞会（廣田幸稔氏主宰）は、きたる四月六日（日）金剛能楽堂で「廣田陛一追善・第22回廣田鑑賞会能」を開催する。

演能は　仕舞「養老」「藤戸」狂言「魚説法」舞囃子「西行桜」能「清経」小書・披講之出端、午後一時半始曲。

廣田後援会は、幸稔氏厳父・廣田陛一氏、叔父・廣田泰三氏により自主公演能の先駆けとして平成二十八年に発会、六十二年にわたりその伝統を保持し、演能がつづけられている。

今回は、廣田陛一氏の追善にあたり、幸稔氏は「清経」をつとめる。

番組は次のとおり。

［仕舞］「養老」　廣田明幸
「藤戸」　廣田泰三
地謡　廣田幸稔、廣田泰能
宇高徳成、山田夏樹

［狂言］「魚説法」　茂山千五郎、松本　薫

［舞囃子］「西行桜」　金剛　永謹
笛・杉　市和、小鼓・久田舞一郎、大鼓・谷口　正寿、太鼓・前川　光長

［こあんない］演劇評論家　権藤芳一氏

［能］「清経」披講之出端
シテ廣田幸稔、ツレ廣田泰能、ワキ高安勝久、笛・杉市和、小鼓・久田舞一郎、大鼓・河村大後見・金剛永謹、廣田泰三、豊嶋幸洋、地謡・松野恭憲、今井清隆、種田道一、金剛龍謹、宇高竜成、今井克紀、豊嶋晃嗣、宇高徳成

料金　一般八〇〇〇円（正面・脇正面）五〇〇〇円（中正面席）
会員七五〇〇円、学生二五〇〇円

主催　廣田鑑賞会、指導・宗家・金剛永謹、後援・金剛会、京都新聞社

チケット取扱所　ローソンチケット（Ｌコード　54880）▽金剛能楽堂（ＴＥＬ075・441・7222）▽京都新聞社文化センター▽ＫＥＮＳＹＯインターネットチケットサービス▽廣田鑑賞会（ＴＥＬ075・722・9123）

名古屋能楽堂
定例公演能
演目日程
〝秀吉と能〟テーマに

名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）能楽協会名古屋支部共催の「名古屋能楽堂定例公演能」は既報（一月号）のように今年六月から平成二十六年度演能が行われる。能の演目はすでに発表されているが、このほど「狂言」の演目も決定、〝秀吉と能〟のテーマで六月七日を初演として明春三月まで七月の二部公演をふくめ八回催される。

能、狂言などの演目は次のとおり。

［六月公演］　６月７日（土）
開演午後二時
和泉流狂言「附子」（シテ松田高義）　宝生流能「頼政」（シテ衣斐正宜）
指定席四〇〇〇円、自由席一般三一〇〇円

［七月公演］　７月６日（日）
（市民能楽セミナー）開演午後二時。
解説「三輪」の見どころ・聞きどころ（30分）
和泉流狂言「水掛聟」（シテ鹿島俊裕）　喜多流能「三輪」（シテ長田驍）
指定席三一〇〇円、自由席一般二一〇〇円

［九月公演］　９月７日（日）
（能楽普及公演）　第一部開演午前十時
喜多流能「田村」（シテ長田驍）和泉流狂言「祐善」（シテ佐藤友彦）観世流能「杜若」（シテ瀬戸洋子）
指定席券四一〇〇円、自由席一般三一〇〇円

［第二部］開演午後二時
宝生流能「松風」（シテ玉井博祐）和泉流狂言「鷹雁金」（シテ野村又三郎）金剛流舞囃子「呉服」（シテ田中春奈）観世流半能「金札」（シテ武田大志）
指定席四一〇〇円、自由席一般三一〇〇円。

［十月公演］　10月24日（金）開演午後六時三十分
和泉流狂言「蟹山伏」（シテ今枝郁雄）観世流能「大会」（シテ梅田嘉宏）
指定席四一〇〇円、自由席一般三一〇〇円

［十二月公演］　12月７日（日）
開演十二時三十分
宝生流能「通盛」（シテ衣斐愛）和泉流狂言「首引」（シテ井上松次郎）金剛流舞囃子「江口」（シテ竹市幸司）観世流能「邯鄲」（シテ久田勘鶴）
指定席五二〇〇円、自由席一般四一〇〇円

［三月公演］　３月７日（土）午後二時開演
和泉流狂言「柑子」（シテ野村又三郎）観世流能「定家」（シテ久田三津子）
指定席四一〇〇円、自由席一般三一〇〇円

［正月特別公演］　１月３日（土）午後一時開演
観世流能「翁」（シテ久田勘鶴、三番叟・野口隆行）和泉流狂言「八幡前」（シテ奥津健太郎）観世流能「老松」（シテ清沢一政）
指定席五二〇〇円、自由席一般四一〇〇円

前売券発売は約二ヵ月前から。事前学習講座は二週間程前に開催される。
名古屋能楽堂／電話052・231・0088、FAX052・231・8756

文化庁芸術祭新人賞
狂言　大蔵流　茂山良暢氏受賞

平成二十五年度（第六十八回）文化庁芸術祭賞の受賞者として、演劇部門で能楽界から狂言方大蔵流の茂山良暢氏が（忠三郎狂言会における「二人袴」の成果）で、文化庁芸術祭新人賞を受賞した。（忠三郎狂言会・十一月十五日・京都観世会館）

受賞理由は「明朗な発声と、素直で邪気のない大らかな演技によって、見事に愛嬌ある婿を演じた良暢は、忠三郎家の芸風を真っすぐに継承するものである。付き添い役を演じた善竹隆平、舅役の茂山七五三との掛け合いも絶妙で、今後の成長を確信させるものであった」というもの。

茂山良暢氏は、昭和五七年（一九八二）京都生れ。四世忠三郎の長男。父に師事、四歳に「伊呂波」のシテで初舞台。その後「釣狐」「三番三」「花子」を披く。海外公演も積極的に行い、ワークショップや狂言教室など、能楽の普及活動に尽力している。

訃
人間国宝　金春惣右衛門氏

能囃子方太鼓金春流宗家・金春惣右衛門氏（本名金春惣一）は三月十一日、心不全で死去、享年八十九。

通夜は十七日午後六時、葬儀は十八日午前九時三十分から東京都港区南青山の青山葬儀所で執行。喪主は長男国和氏（くにかず）。

平成四年重要無形文化財保持者（人間国宝）、平成八年日本芸術院賞受賞、平成十七年から芸術院会員。

青陽会定式能（第58期第1回）

四月十二日（土）十二時開場
十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞　采女（キリ）　今沢　美和
網之段　村井　邦子　地謡　角田　尚香　星野　路子　前野　郁子　瀬戸　洋子

能　清経　久田勘吉郎　久田三津子
高安　勝久　河村眞之介　船戸　昭弘　鹿取　希世
後見　武田　大志　前野　郁子　地謡　伊藤　裕貴　吉沢　祖父江修一　瀬戸　洋子　久田　勘鶴　星野　路子　高橋　暸一　松山　幸親

仕舞　春日龍神　吉沢　旭
須磨源氏　清沢　一政
隅田川　梅田　邦久
国栖（キリ）　松山　幸親　地謡　伊藤　裕貴　高橋　暸一　祖父江修一　八神　孝充

狂言　痩松　今枝　郁雄　鹿島　俊裕
後見　佐藤　友彦

能　天鼓　久田　勘鶴
弄鼓　杉江　元　河村総一郎　加藤　洋輝
間　井上松次郎　後藤孝一郎　大野　誠
後見　吉沢　旭　久田三津子　地謡　角田　尚香　村井　邦子　清沢　加賀　八神　孝充　梅田　敏彦　今沢　美和　邦久　一政　武田　大志

附祝言

主催　青陽会
事務局　名古屋市名東区一社三の一六二　久田勘鶴事務所
ＴＥＬ052・734・6192

※前売券　二、五〇〇円、当日券　三、〇〇〇円
［取扱い］チケットぴあ（ＴＥＬ0570・02・9999、Ｐコード786・492）
サークルＫサンクス、セブン・イレブン、名古屋能楽堂、出演楽師

金剛流発祥の地 金剛流宗家 斑鳩公演

4月29日 いかるがホール

金剛流発祥の地・奈良県生駒郡斑鳩（いかるが）では、公益財団法人斑鳩町文化振興財団が主催して「金剛流宗家　斑鳩公演」を今春四月二十九日（火・祝）開催する。

開催趣旨は、ふるさとに根ざした伝統芸能の継承と発展をめざし、多くの方に能楽　金剛流発祥の地「斑鳩の里」を知っていただくことを目的として、金剛流宗家二十六世宗家、金剛永謹氏により里帰り記念公演を行うとあいさつしている。

開催日時　四月二十九日（火・祝）　開場十三時、開演十三時三十分、終演十六時予定

会場　いかるがホール　大ホール（全席自由席）／奈良県生駒郡斑鳩町興留10丁目6番43号

［演能］

能　「龍田」　金剛永謹

仕舞「羽衣」　今井清隆

「野守」　金剛龍謹

狂言「文荷」　茂山千五郎

狂言「舟船」シテ茂山あきら、アド・丸石やすし

仕舞「田村」クセ松浦信一郎、「采女」山本章弘「春日龍神」河村栄重

能「西行桜」　シテ波多野晋、ワキ福王和幸、ワキツレ広谷和夫、中村宜成、喜多雅人、アイ茂山千三郎

笛・杉市和、小鼓・久田舜一郎、大鼓・守家由訓、太鼓・上田悟

地謡・山本順之ほか

入場券一般券五五〇〇円、学生券三〇〇〇円

問い合わせ　山本能楽堂／TEL06・6943・9454、FAX06・6942・5744

入場料　前売三五〇〇円、当日四〇〇〇円（全自由席）

主催　公益財団法人斑鳩町文化振興事業団

問合せ先　斑鳩町文化振興財団いかるがホール、電話0745・75・7743、FAX0745・75・7799

山本能楽堂 たにまち能

4月5日 能「百万」「西行桜」

大阪

山本能楽堂定期能「たにまち能」は4月5日（土）山本能楽堂で、能「百万」狂言「舟船」能「西行桜」が上演される。午後一時開演。

能「百万」　シテ林本　大、子方・吉井紹智、ワキ福王知登、ワキツレ是川正彦、喜多雅人、アイ・丸石やすし、笛・貞光義明、小鼓・荒木建作、大鼓・森山泰幸、太鼓・中田弘美、地謡・山本博通ほか

南都春日・興福寺古儀 伝統の「薪御能」

5月16日、17日演能

〝薪能〟として最も由緒のある南都春日・興福寺古儀「薪御能」は、きたる五月十六日（金）十七日（土）、春日大社（舞殿・春日若宮拝の舎）興福寺南大門跡「般若之芝」で催される。

演目は次のとおり。

▽五月十六日（金）

呪師走りの儀　午前十一時始　春日大社舞殿

金春流能「翁」金春穂高　他

南大門の儀　午後五時半始

興福寺南大門跡「般若之芝」

宝生流能「清経」　辰巳満次郎　他

大蔵流狂言「太刀奪」　茂山千三郎　他

金剛流能「鵜飼」　金剛永謹　他

▽五月十七日（土）

御社上りの儀　午前十一時始　春日若宮拝の舎

金春流能「阿漕」　金春欣三　他

南大門の儀　午後五時半始

興福寺南大門跡「般若之芝」

金春流能「葛城」　金春安明　他

大蔵流狂言「魚説法」　茂山良暢　他

観世流能「弱法師」

〈薪御能〉南大門の儀

薪御能は、869年興福寺修二会で薪猿楽が舞われたと伝えられており、能楽が大成される室町時代には、最も盛況を極めたといわれている。

観世・金春・宝生・金剛の能楽四座による能と大蔵流による狂言が演じられる。午後6時半過ぎ、興福寺衆徒（僧兵）の手によって篝火に火が入れられ、観る人々を幽玄の世界へと誘う。

※雨天の場合は、興福寺会場のみ「なら一〇〇年会館」にて開催予定。

鑑賞は、協賛席（有料）一般席（無料）がある。

雨天の場合は安大門の儀は無料席はない。満員のときは入場制限がある。

協賛席一名四五〇〇円（解説書つき）、事前受付一名四〇〇〇円（解説書つき）、協賛席は全席自由席。

問い合わせは、薪能保存会（奈良市観光協会内）電話0742・22・3900

後援・奈良県・奈良市・奈良県教育委員会・公益社団法人奈良市観光協会、協賛・春日大社・興福寺・公益社団法人能楽協会。

観世能楽堂 2016年 銀座に移転

東京

観世能楽堂（東京都渋谷区松涛一）は、このたび東京・銀座旧松坂屋跡地の再開発地区に建設予定の複合ビルへ移転することになった。ビルは平成二十八年八月に完成予定で開場は同年秋が見込まれている。

同能楽堂は、昭和四十七年（一九七二）に新宿区大曲より現在の松涛へ移転。以来観世会主催公演をはじめ能楽界の中心となって演能が続けられてきたが、建物の老朽化が進むなどしたため今回の移転を決定。二〇二〇年（平成三二年）の東京オリンピックを迎えることもあり、日本の伝統文化を世界に発信する場として期待されている。

現能楽堂は、明年の平成二七年までは現状のまま運営され、移転までの間は、観世会主催公演は東京・中野区の梅若能楽学院会館（東京都中野区東中野二―六―一四）で行われる予定。

新作能面展

面匠会主催

面匠会主催の「第二十回新作能面展」は三月十八日（火）より二十三日（日）まで名古屋市民ギャラリー栄・第5展示室（中区役所・朝日生命共同ビル7階）で開催。

後援／愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会。来場歓迎。

演能案内

第十八回公演 関西観世花の会

五月十日（土）十二時半開演　名古屋能楽堂

仕舞　高砂　井上貴美子
鵜之段　塩谷恵
江口（キリ）　佐伯紀久子
柏崎（道行）　森壽子
葵上　大亀藤英

地謡　小川晴子、赤井きよ子、山崎芙紗子、池内頼子

能　経正　村井邦子、高安勝久、河村総一郎、船戸昭弘、大野誠

後見　近藤幸江、大槻文蔵

地謡　星野路子、小川晴子、池内頼子、井上貴美子、赤井きよ子、藤井千鶴子、前田和子、山崎芙紗子

狂言　舟ふな　太郎冠者　井上松次郎　アド　佐藤友彦

舞囃子　山姥　近藤幸江、河村眞之介、船戸昭弘

地謡　大亀藤英、大野誠、赤井きよ子、森壽子、塩谷恵

独吟　弓之段　藤井千鶴子

仕舞　嵐山　前田和子
屋島　小川晴子
杜若（キリ）　池内頼子
蟬丸　星野路子
松虫（キリ）　赤井きよ子
鞍馬天狗　山崎芙紗子

地謡　村井邦子、大亀藤英、佐伯紀久子、井上貴美子

仕舞　笠之段　上田貴弘
笹之段　大槻文蔵

地謡　星野路子、山崎芙紗子、藤井千鶴子、池内頼子

能　梅　前野郁子、橋本宰、飯冨雅介、椙元正樹、河村眞之介、後藤孝一郎

間　井上松次郎

後見　佐伯紀久子、上田貴弘

地謡　村井邦子、小川晴子、井上貴美子、大亀藤英、前田和子、森壽子、塩谷恵、近藤幸江、加藤洋輝、鹿取希世

（終了予定四時半）

附祝言

［入場料］五〇〇〇円、学生一〇〇〇円　主催　関西観世花の会

［取扱い］チケットぴあ　URL:http://pia.jp/t　電話0570・02・9999（Pコード435・484）

サークルKサンクス、セブン・イレブン

名古屋能楽堂・出演者宅

［問い合わせ］前野郁子（名古屋市東区葵2・13・3・701　電話052・932・8805）

名古屋観世会定例公演能

六月八日（日）十二時三十分開演　名古屋能楽堂

能　楊貴妃　大槻文蔵、高安勝久、河村眞之介、後藤嘉津幸、藤田六郎兵衛

台留

間　井上松次郎

後見　梅田嘉宏、梅田邦久

地謡　八神孝充、本田勲、高橋暲一、山中雅志、武田大志、久田勘鬼、武田邦弘、祖父江修一

狂言　鱸包丁　伯父　佐藤友彦　甥　今枝郁雄

後見　佐藤融

仕舞　雲雀山　近藤幸江
水無月抜　久田三津子
善知鳥　前野郁子
姥（キリ）　今沢美和

地謡　吉沢旭、久保信一朗、古橋正邦、加賀敏彦

能　鵜飼　観世芳伸、飯冨雅介、橋本宰、里人　鹿島俊裕、河村総一郎、後藤孝一郎、加藤洋輝、大野誠

間　後見　大志田勘鬼、武田久志、地謡　吉沢旭、松山幸親、山中雅志、久保信一朗、梅田正邦、清沢一政、古橋嘉宏

◆年間自由席券（四枚綴り）二〇、〇〇〇円

当日指定席券八五〇〇円、当日自由席券六〇〇〇円（四時頃終了予定）

お問合わせ　名古屋観世会事務所　〒565―0093名古屋市名東区一社3―162　久田勘鬼方　TEL052・734・6192　FAX052・705・1585

〈第9回能の旅人〉観世流能「鵺」

6月7日 千種小劇場

第九回「能の旅人」公演は六月七日（土）、名古屋市千種文化小劇場で催される。午後一時始。

千種文化小劇場（ちくさ座）は、市営地下鉄桜通線「吹上駅」下車、徒歩三分。

チケットは全席指定、正面席六千円、側面席五千円。

番組は次のとおり。

［チケット専用携帯］
E－mail：noh－tabibito.2013@softbank.ne.jp/TEL080－9116－5789

観世九皐会事務所　TEL03－3268－7311

番　組

囃子序曲
〈メンバートーク〉

仕舞　頼　政　片山伸吾　地謡　吉沢　駒瀬　観世　直也　喜正　旭

舞囃子　猩々乱　味方　團　河村眞之介　加藤　竹市　洋輝　学
双之舞　味方　玄　後藤嘉津幸　吉沢　駒瀬　観世　直也　喜正　旭

能　鵺　観世　喜正　有松　遼一　河村眞之介　加藤　竹市　洋輝　学
アイ　佐藤　融　後藤嘉津幸　吉沢　片山　味方　伸吾　玄　旭
後見　駒瀬　直也　地謡　味方　團

（終演十五時三十分頃）

［チケット］全席指定（四月八日発売開始）正面席六〇〇〇円、側面席（舞台両サイド）五〇〇〇円
見切り席・学生席三〇〇〇円

観世九皐会事務所
TEL　03・3268・7311

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥④

竹尾　邦太郎

拾参　「名古屋能楽鑑賞会」①

昭和六〇年代、名古屋市各区の社会教育センターの教養講座の一として例えば天白区の「伝承芸能能の楽しみ方」や昭和区の「能と狂言に親しむ講座」、千種区の「能・狂言の世界」などが能楽協会名古屋支部に所属の久田徹二（当時）藤田六郎兵衛らを講師に開講、閉講後も熱心な受講者有志によって「能楽友の会」が結成されたり、新聞各社の文化センターに於ける能・狂言関連講座受講の愛好者などが母体となり、各講座で献身的にコーディネーターを務めてきた岩田はるみを代表に、学者有識者による「能楽懇談会」や各界の著名士が発起人（二〇名）となり「名古屋能楽鑑賞会」が発足することになる。

記念すべきオープニング特別公演は一九九〇年六月二三日（土）二時始・熱田神宮能楽殿。「橋の会」創立メンバーの一人・松岡心平（東大助教授）の解説があり能「重衡」浅見真州・殿田謙吉・能村英丘・一噌隆之・北村　治・柿原崇志・山本順之（地頭）浅井文義（後見）。

因に「橋の会」は、観世寿夫（一九二五－一九七八）が一九七〇年一二月、能役者が新劇人と共に新しい舞台活動の創造を目指して結成した「冥の会」の志を継ごうと寿夫没後の一九八〇年、能楽プロデューサー萩原達子らの呼び掛けで能・狂言を他の芸術や伝統と現代をつなぐ架け橋にと創立された。

能「重衡」は一九八三年（昭和五八）一二月六日、第一二回「橋の会」特別公演として五百五十年ぶりに復曲、水道橋の宝生能楽堂で上演、六日後の一二月一二日（月）此の年九月一五日に落成し開場をみた国立能楽堂でも浅見真州・宝生　閑・三宅右近・一噌庸二・敷村鉄雄・亀井忠雄で再演されている。

なお「名古屋能楽鑑賞会」は納会までの十年間、公演毎にA5判小冊子の会報を出す。頁数は8頁から最大32頁（大方は12頁から16頁）、巻頭には概ね曲にまつわる研究者や識者の小文、中は番組・解説・出演者紹介・上演詞章・観能だより・アンケートより・巻末は次回公演予告・会計報告・入会案内である。

此の会の有り様の原点は岩田はるみ代表の次の言葉に尽きる。

「重衡が観たい！」のワガママ宣言。松岡心平氏（橋の会・東京大学助教授）のご協力、ご快諾を頂いた発起人の方々。新聞・雑誌の記事掲載のご協力。「チラシに広告を載せない。後援会を組織しない。寄付金を受け取らない」を守れのアドヴァイス。古い種蒔き人は愛知教育大学附属名古屋中学校同窓会。各区社会教育センター（現・生涯学習センター）中日文化センター「能・狂言鑑賞講座」講師の方々。感謝感激の発足。

第二回　一九九〇年（平成二）十月三十一日（水）午後一時始・熱田神宮能楽殿。

解説　羽田　昶、仕舞二番「花筐」片山九郎右衛門「天鼓」片山慶次郎・地頭梅田邦久、狂言「鱧包丁」山本東次郎・山本則直、能「恋重荷」観世鐃之丞・観世暁夫・宝生　閑（西村欽也代勤）山本則直・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・片山慶次郎（地頭）片山九郎右衛門（後見）

第三回　一九九一年（平成三）三月二日（土）午後二時始・熱田神宮能楽殿。

解説　西　哲生、狂言「鈍太郎」野村又三郎・松田高義・野村信行、能「野宮」近藤乾之助・宝生　閑・野村又三郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村　大・佐野萌（地頭）辰巳　孝（後見）。

第四回　一九九一年九月十四日（土）午後二時始・熱田神宮能楽殿。

解説　増田正造、狂言「萩大名」野村万之亟・野村良介・野村又三郎（茶屋）、能「卒都婆小町」梅田邦久・中村弥三郎・広谷和夫・杉市和・曽和博朗・山本　孝・観世鐃之亟（地頭）片山九郎右衛門（後見）。

名古屋能楽鑑賞会（別会）狂言尽し　一九九一年十二月二十二日（土）午後二時始・熱田神宮能楽殿。

解説　小林　責、素囃子「男舞・瀧流シ」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎、狂言四番「墨塗」井上祐一・井上靖浩・佐藤友彦（女）「節分」山本東次郎・山本恭太郎、「川上」野村万作・野村武司「濯ぎ川」茂山千五郎・茂山千三郎（婿）茂山正義（姑）。

第五回　一九九二年（平成四）三月二十八日（土）午後二時始・熱田神宮能楽殿。

解説　小林　責、仕舞二番「通小町」粟谷菊生「谷行」長田驍、狂言「素袍落」茂山千五郎・茂山千三郎（主）木村正雄（伯父）、能「邯鄲・傘ノ出」友枝昭世・塩津圭介（子方）宝生　閑・森　常好・坂苗　融・梅村昌功・佐々木則之（輿）大日方寛（輿）茂山真吾・一噌仙幸・大倉源次郎・国川　純・金春惣右衛門・粟谷菊生（地頭）粟谷辰三（後見）。

第六回　一九九二年十月三十一日（土）午後二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能を楽しむために」堂本正樹、狂言「木六駄」野村万作・野村武司（主）野村万之介（茶屋）野村又三郎（伯父）、能「絃上・琵琶ノ会釈」梅若六郎（姥）山本博通（龍神）宝生　閑・野村武司・杉　市和・曽和正博・白坂信行・前川光長・山本順之（地頭）山中義滋（後見）。

会報No.7に堂本正樹の「原作に戻る絃上」と次のようにある。

現在観世流は「玄象」と書くが、これは大成版からで、古くは「玄上・絃上」のどちらかだった。梅若は、謂ば古い観世の題名を継承しているのだ。今回梅若六郎が現行の誤りを正す演出を行なうのも、故無しとしない。

「絃上」は、最も古い田楽の能の変形らしい。貞和五年（一三四九）の春日若宮の臨時の祭りに、巫女による素人能と祢宜の田楽があり、後者の一つとして「村上天皇がその臣下を使いして入唐せしめて、琵琶の三曲を日本に伝えたる事」なる演目が見える。

しかしいつ、誰が猿楽の能に取り入れたのかは全く分からない。金剛では自流の能として誇るが、台本・演出面に根拠がない。

速い話、現在の各流の台本（謡本）では、この能が何故「絃上」というのか分からないではないか。細かい理由は省くが、現在の台本は江戸の復活のズサンが響いている。

絃上とは村上天皇の愛した名器で、現在師長の手にある。それで天皇は遺愛の品を慕って現れ、龍神に下界の獅子丸を浮上させ、合奏するのである。終わって龍神は獅子丸を携えて去る。……現在だと師長が獅子丸を貰うようだが、これも誤りだ。

本物の琵琶を弾くのは金剛流にあるが、昔は各流にあったらしい。だが復活後は前シテとなる。本来後シテが琵琶の秘曲を師長に伝授するのだから、後でなくては成るまい。今回は総て原作に帰り、現行演出の誤りを一掃する。

今回の演出は台本も現在の観世・梅若とも違い、多くの文章の挿入によって主題を明らかにし、天皇は本琵琶を弾き、楽を舞う。「面白かりける秘曲かな」の本旨だ。

分かり易く正しく、面白い能を！

――以下次号――

名古屋能楽鑑賞会

ごあいさつ

「名古屋能楽鑑賞会」は、私達の見たい曲を、見たい演者の最高の条件のもとに演じてもらうことを、私達の手で実現させようとするものです。

観客をあくまで主体とした鑑賞会として、各流儀、流派にわたって、ひろく来演を願うとともに、通常の能会では見られない新しい試み・企画をも実現できる場にしたいと考えます。

名古屋能楽界諸師と連帯し、そのご協力をあおぎながら、できるだけ低料金で質の高い舞台を提供してまいります。

皆様の御入会をお待ちいたしております。

発起人

名古屋市博物館顧問　浅井　昕　一
俳優　天野　鎮雄
名古屋大学名誉教授・愛知県総合教育センター顧問　飯島　宗一
椙山女学園大学客員教授（能楽懇談会）　飯塚　恵理人
彫刻家・名古屋造形大学教授　石黒　鏘二
徳川美術館元副館長　大河内　定夫
料理研究家・有名クッキングスクール校長　加藤　敏彦
劇作家　北村　想
岐阜大学教授（能楽懇談会）　久野　壽彦
仏教大学教授　関山　和夫
岐阜女子短大教授（能楽懇談会）　辻　宏一
日本舞踊西川流三世家元　西川　右近
名古屋女子大学助教授（能楽懇談会）　野崎　典子
現代俳句家　野々村　明子
染色家　堀江　勤之助
JR東海会長　三宅　重光
現代詩人会会員（能楽懇談会）　村瀬　和子
作家　山下　智恵子
名古屋大学教授（能楽懇談会）　山下　宏明
女優　山田　昌
（五十音順・敬称略）

◆晩秋から冬の舞台（その二）◆

「名古屋宝生会」と「豊田市能楽堂特別公演」

竹尾邦太郎

「野宮」　旅僧（ワキ勝久）、晩秋の嵯峨野に曽て斎宮にたった皇女が潔斎に籠った野の宮の旧跡で里女（シテ博祐）と出遇い怪しまれる。此の日、長月七日は昔を偲ぶ日、毎年へ人こそ知らね、宮を清め神事を行うゆえ知らぬ人の立入はへ憚りあり、帰られよと。咎められても怯まぬ

（④面へつづく）

名古屋能楽鑑賞会　会報　No.1　1990.6.1
発行責任者　名古屋能楽鑑賞会

■ごあいさつ

岩田はるみ
名古屋能楽鑑賞会会長

「名古屋能楽鑑賞会」は緑の美しい季節にスタートします。

私は今、能を楽しみたいお仲間が、このように集まってくださった「よろこび」と共に、「重い責任」を感じています。

いつの時も、ひたすら能を愛し続けて来ましたが、ここへ来る道は決して真直ぐではありませんでした。でも、様々な立場を超えて、の多くの方々の力強い励ましが歩みを続けさせてくれました。今ここに立つ事が出来、私の胸は、どのような喜悲をもってしてもあらわしきれない感謝の心持に満れています。

さあ一皆さんと一緒に歩き始めましょう。

名古屋は勿論、東西から能楽師の方達が、芳醇らしい舞台への情熱を燃えてやって来てくださいます。豊かな感性のバックグラウンドを拡げて、それを待ちうけましょう。

よい絵を観、音楽を聴き、映画や演劇を楽しみ、文学に触れ、無数な人とおつきあいしましょう。それを糧にして、私達の感性は、拡がり、ますます豊かすまされていくでしょう。その時、能は素晴らしい姿を見せてくれる筈です。

いろいろな運動をしながら、楽しく歩みを続けていく夢の出来ますよう、運営委員一同、心をこめてお手伝いさせていただきます。

積極的なご意見、ご要望を忌憚かせください、お待ちしています。

■お祝いのことば

お祝いのことば

愛知県知事　鈴木　礼治

名古屋能楽鑑賞会の発足を記念する特別公演「重衡」の開催を心からお慶び申し上げます。

長い歴史と伝統を有する能楽は、我が国の誇る代表的な古典芸能であり、この文化的財産にふれる機会が数多くもたれますことは、文化豊かな地域づくりを進める上で、大きな力となるものであります。

名古屋能楽鑑賞会の今後ますますのご活躍を大いに期待します。

お祝いのことば

名古屋市長　西尾　武喜

本日ここに名古屋能楽鑑賞会のオープニング公演が開催されますことを心からお慶び申し上げます。

より良いものに触れることを目的としたまことに意義深い数々の優秀の団体が活躍されておりますが、伝統芸能の世界では稀有のことと承っております。

こうした団体が昨年市政百周年を迎え、更なる飛躍を目指す名古屋で活動を開始されますことは、「芸どころ名古屋」を支える大きな力となるものと確信致しております。

本会の一層のご発展と、「能」の原点とも言えます本日の舞台を心ゆくまでお楽しみいただけますことを心からお祈りいたします。

（③面よりつづき）

ワキ、世捨人の気任せは毎年此の日に昔を偲ぶ謂われを問い掛けて動じない。押しの一手のワキに押されてシテは光源氏と六条御息所の一件を吐露、光源氏が訪ねる折、目印にと榊を垣の内に挿したを見咎めた御息所が、直ぐ皮肉な一首を詠んだのもへ今日ぞかし、と。これを話の接ぎ穂にシテはワキと打ち解け、懐旧の思いは旧跡の佇まいから御息所のことどもへと。前の東宮未亡人・御息所と光源氏のいきさつを述べるクリ・サシ・クセ、へそも〳〵この御息所と申すは、とシテはクリ地（雅・澄子・愛ら）に正中、床几にかゝる（御息所の化身ゆえの身分の高さ、観世では下居）。クセ中、へ心の水に誘はれて、と立つとへ鈴鹿川、を右へ眺める寂しみ、へ伊勢まで誰か、と面使ヒ常座へ。へ多気の都路、とワキへ進み正中に下居、袖アシラヒしおらしくへ怨みなりけれ、とシラル辺りワキへ同情を求めるか。曰くありげなシテに素性を問うワキ、ロンギにシテは御息所はへ我なりと、ワキへアシラヒ中入地に。へ森の木の間、と立ち、へ影幽かなる、と面使ヒ木下闇を眺め、へ黒木の、とフッと上を見、鳥居に溶け込む心に消え失せる情趣、送り笛の名調（学）と相俟ち哀感一入。野の宮の神事に赴く里人（アヒ隆行）が居語に御息所と光源氏との束の間の逢瀬のことなど格調高く語って退くと後場。

御息所ノ亡霊（後シテ博祐）、紫長絹・緋大口に品位、ワキと掛合に賀茂の祭の葵上との車争いの様を。へ人々轅に取り付きつゝ、と扇開きつゝ正へ、左袖さっと返しへ人だまひの奥に、押しやられる心にたら〳〵と退りシヲルも前世の報いへ妄執を晴らし給へや、とワキに合掌すると気分が一転。懐旧の思いは序之舞三段、舞上げてへ庭の佇まひ、と扇で撫で廻す様に眺め、へ露打ち払ひ、と左の垣を払い、訪われた私もへその人（光源氏）も、と薄く面テラス追慕の心はへ虫の音、を扇翳し聞く心持も沁々と破之舞に。キリはへ恭くも、と合掌、へ鳥居に出で入る、と左手で柱を摑み右足つと出し引っ込めるところ、冥界のとば口、おっかなびっくりの気持だったのでは。全体は全女性陣の地謡と相俟つて女流のシテらしいたお〳〵と優しい印象だった。（1時間56分）

「太刀奪」

「太平の世に道具は要らぬ物ぢやなあ」と主（アド又三郎）は言うもの、太郎冠者（シテ高義）にしてみれば主に太刀を佩かせたい一念。たま〳〵通行人（小アド隆行）の持つ立派な太刀を目にして奪取しようと鐺に手をかければ嚇され、「怪我に触った、堪忍して」と這う〳〵の態。無体が通る訳もなく逆に主から一応護身に預った小刀を奪われ、「また帰りにも通る。狼狽えて居たら細首を打ち落すぞ」と凄まれる始末。帰路も通ると知れば重代の小刀を惜しむ主、太郎冠者と二人して捕まえ羽交締めにしたはよいが、捕縛する縄を持たず場当たりの縄ない。縄がなえればなえたで「縄を掛けよ」の主命が主の思い通りとはならず、まんまと逃げられてしまう失態。太郎冠者、頓珍漢にしてはわざとらしさ無きにしも。（14分）

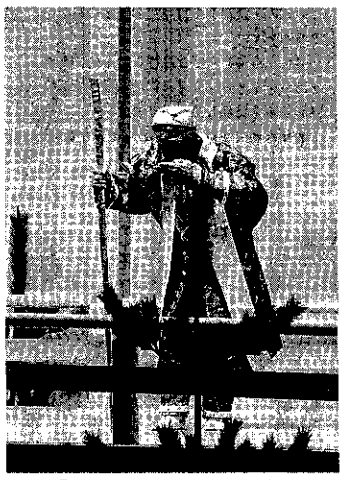
『豊田市能楽堂特別公演』
「茶子味梅」左より佐藤友彦、佐藤融
（撮影・杉浦賢次）

「殺生石・白頭」

玄翁道人（ワキ雅介）

沙門帽子・小格子厚板着付・白大口・茶水衣掛絡の姿、能力（アヒ又三郎）を伴い出ると一ノ松でアヒ「落ちるわ〳〵」と天を仰ぎ叫ぶを「汝は何事を申すぞ」と咎めるワキに、飛鳥が「通るかとみえて此れなる大地に落ちてござる」とアヒ、問答の間に里女（前シテ和英）が呼掛で出る。面萬媚・摺箔着付・色入唐織のすっきりした姿に一抹の妖気も。シテ・ワキ問答・掛合に殺生石のこと、玉藻ノ前のこと口跡爽やかに説得力をもって述べ、へそも〳〵この玉藻ノ前と申すは、とクリ地（満次郎・優・荘太郎ら）に下居のワキ、へ何処の誰とも白雲の、とシテも正中下居、地とシテ掛合からクセへ玉藻ノ前の事蹟が詳細に。上ゲ端へ帝それよりも、からへ御悩とならせ給ひしかは、と受ける地は弾むように、己が心の昂りをワキに伝えるか。シテ・ワキ問答に素姓問われ、「今は何をか包むべき」とシテはワキにアシラフと直り、古は玉藻ノ前、今は那須野の殺生石の石魂と。へあら恥ずかしや我が姿、とワキにアシラヒ、へ立ち帰り夜になりて、と直ッて返し句に静かに立ち、へ懺悔の姿あらはさん、と扇開きへ夕闇の夜の空なれど、と雲ノ扇に本性に戻る心情をみせ、常座で開キへ石に隠れて、と何事もなく中入するところに却って凄味が。里女の出現を不審のアヒ、ワキの問いに玉藻ノ前のこと、那須野の殺生石のこと居語に小賢しく語り、ワキに払子を預けて退くと後場。

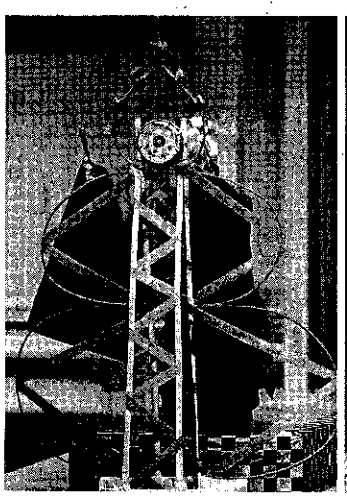
ワキの待謡は無く直ぐノット（希世・孝一郎・眞之介・義命）、ワキは一ノ松近くへ行きへ木石心無しとは申せども、と幕（殺生石）へ向かい祈る態は、「汝元来殺生石」と詰メルとへ急々に去れ〳〵、と払子を置き下居、へ自今以後汝を成仏せしめ仏体真如の善心となさん摂取せよ、と祈り、払子を取りワキ座に戻る。出端の囃子に幕内で野干ノ精（後シテ和英）がへ石に精あり、と謡い出し、地のへ（今ぞ現す石の）二つに割るれば、と一ノ松に走り出るシテ、床几にかゝる。泥小飛出・白頭・白地半切・袷法被の姿、へ玉藻ノ前とはなりたるなり、とワキへキッと面切ル凄味、へ玉藻に御幣を持たせつゝ、と右へ見て扇を幣に擬して左手に捧持し、へやがて五体を苦しめて、と踏む打切拍子、返シに六ツ拍子踏む。へ幣帛をおっとり飛ぶ空の、と右手に扇もち替え空を指シ、へ其後勅使立って、と立ち舞台へ。キリは三浦介・上総介の那須野に於ける野干ノ精退治。激しい型の連続は、扇を弓に擬し、また矢と見てへ追っつまくっつ、と射伏せられるところなど、きび〳〵と若さの躍動感、へ約束固き石となって、三ノ松へ走り姿を失せる心に袖被キ飛返り立って留メ拍子。気鋭の宗家の面目あざやかにみせた。（55分・11月17日・宝生会定式能）



『豊田市能楽堂特別公演』
「茶子味梅」佐藤友彦
（撮影・杉浦賢次）

「茶子味梅」

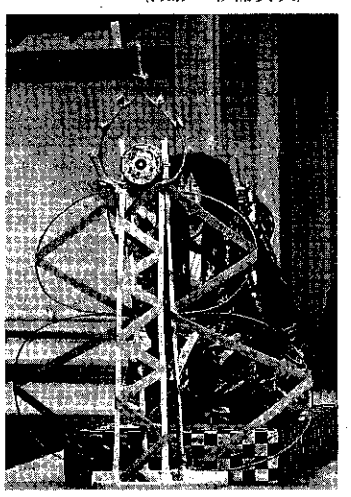
多分、唐土から筑紫箱崎へ漂着したのであろう唐人（シテ友彦）と結ばれた日本人妻（アド融）、国際結婚で意思の疎通を図るのに求められるのは言葉の問題。十年連れ添つてお互い言葉を理解し得ても十全という訳にはゆかず、夫が時に耳慣れない唐語で「ニホンジンムシンジガトウサイレン（日本人無心自我唐妻恋）」と呟き泣き出せば妻も案じようというもの。唐語の意味を確めるため物知り（小アド俊裕）に問えば、唐語を和歌に敷衍、「日の本の、人の心のなかりしに、我がもろこしの妻ぞ恋しき」と。夫の真意を知り激怒の妻、怒りは尤もだが異国に在る夫の寂しさも理解し慰撫せよ、と諭されゝば、その他にも夫は何のかのと申し「サスアンバイ」やら「キスアンバイ」と。それは「茶が飲みたい」「酒が飲みたい」の意味、精々もてなせと助言され、戻って夫の機嫌を取ろうと妻。折柄、帰宅途次の夫、唐頭巾（?）カルサン・側次の唐人姿に段ボウジを巻いた長杖を持ち一ノ松に（写真）、「ニホンジンムシンジガトウサイレン」と故郷に残した妻を恋う思いに駆られシヲルのも切ない。夫が舞台に入れば機嫌をとり歓心を買わんとする妻の、一種過剰サーヴィスは頻りに酒を勧め、差しつ抑えつの宴に。「カイ〳〵ユーカイ」は「快々愉快」か、肴の小舞謡「よしの葉」を舞う妻、唐音で問答する夫は、「唐土の楽（がく）とやらを舞うて」と妻にねだられ、唐団扇で達拝掛の楽（弘之・吉兵衛・良太郎・光長）を舞う（写真）のが面白い。唐土の楽に触発されたか、夫はまた「ニホンジンムシンジガトウサイレン」と口走って妻の怒りを買い、「食い裂こうか」と迫い立てられる。稀曲、唐音の奇抜さを聞かせる趣向も歯切れのよさが身上、こなれた明快平明さはあったか。能「天鼓」同様いわゆる唐物、能と狂言に「楽」の舞を並べてみせる番組の妙。（24分）



『豊田市能楽堂特別公演』
「天鼓」（マエ）友枝昭世
（撮影・杉浦賢次）

『豊田市能楽堂特別公演』
「天鼓」（マエ）友枝昭世

『豊田市能楽堂特別公演』
「天鼓」（アト）友枝昭世



『豊田市能楽堂特別公演』
「天鼓」友枝昭世（アト）
（撮影・杉浦賢次）

「天鼓」

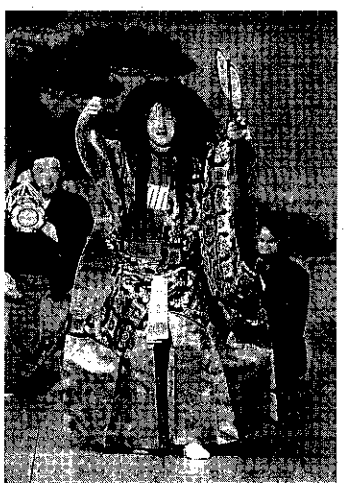
帝の立場を嵩に少年・天鼓を水死させてまでして手に入れた鼓を鳴らせようもなく、肉親の老父・王伯ならば、と勅使に立つ廷臣（ワキ閑）、冒頭の、天鼓と名付けられた少年の経緯からこれまでを述べる重々しく神妙なワキの独白が素晴らしく、舞台が締まる。一声ノ囃子（弘之・吉兵衛・純・光長）で三ノ松に出る王伯（前シテ昭世）へ露の世になほ老の身のいつまでか、と老い先を自嘲するかにシヲルと、ワキは宣旨を伝えに一ノ松へ。

子に先立たれた孔子や白居易さえ愁歎の故事を引き、我らの歎きも当然、消えぬ悲しみは忘れるよりも忘れたいと思う方が辛く、己の命あるを恨む、と述べるシテのサシ・下歌・上歌を省き直ぐワキとシテの問答に。宝生流の小書「呼出」と同じだが演能当日配布の詞章には此の省略部分の記載は無く、小書を特に謳ってはいない。

宣旨を伝えるワキ、その意図に遅疑逡巡するシテは促されて悲痛な覚悟でワキに随い、へ生きて在る身は久方の、と舞台に入ると大小前に下居（写真）。老いの繰り言にへ苦しみの海に沈むとかや、とシヲルと、親子の恩愛の情を沁々述べるクセを省き、へ鼓の時も移るなり、と急かされるようにロンギ。へげに〳〵これは大君の、とゆっくりシヲリの手を下ろすと、へ老の時も移るなり、と扇を腰に差し、立つとへ老の歩みも足弱く、と台に上り静かに膝をつき、撥をとり一打（写真）する。へ心耳を、と静かに腰を落すと開き入り、直ぐ立つて台を下り正中から前へ進み龍顔を見詰める心、退って下居に合掌する。中入はアヒの送り込み、アヒは常座に戻るとこれまでのいきさつを立シャベリに、管絃講を以て天鼓を弔う旨を触レて退くと後場。

待謡に法事を執り行う場の情景描写。幕を見込み、へはや三伏の夏闌け風一声の秋の空、と天鼓ノ亡霊（後シテ昭世）を呼びよせる口寄せの様にワキの名調を聞く。ワキが戻って座着くと一声の囃子でする〳〵と常座に出るシテ、喜々としてへあら有難の御弔ひやな、と。「月宮の昔も」と台に上がり、膝をつき唐団扇を置き撥をとるとへ菩薩もこゝに、と羯鼓に寄り、へ天降ります気色にて同じく打つなり天の鼓、とシテ・ワキ同吟は心も一つ。へ打ち鳴らす其の声の、と一つ打ち（写真）、へ呂水の波は、とサシ廻シ、再にへ打つなり〳〵、と打って撥おくと唐団扇をとって台を下り楽をきび〳〵と爽やかに舞う（写真）。

キリ地（能夫・康雅・茂ら）へ夜半楽にもはやなりぬ、で袖返シ舞台一巡、へ月に嘯き、と招キ扇、へ水に戯れ波を穿ち、と膝をつきサシ廻シ、立つて袖返スと時の鼓に急かされるか、へ数は六つの巷の声、と再び台に上がり喜悦の風情（写真）へまた打ち寄りて、台を下りると常座、返シ句にサシ込開キ、喜多流の羯鼓台・一畳台は他流と異なり目付柱前と脇正面に置かれるのが珍しかった。シテ・ワキ二人の人間国宝の共演、格調高い力の入った好舞台。（1時間22分・12月8日・豊田市能楽堂特別公演）



『豊田市能楽堂特別公演』
「天鼓」（アト）友枝昭世
（撮影・杉浦賢次）

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１３００円
郵送の場合　１年　２０００円
一　部　１２０円

ＮＨＫ放送予定（平成26年４～５月）

◈Ｅテレ　４月27日(日)　21時～23時
能　「道成寺」～喜多流
シテ　粟谷　明生　ワキ　森　常好
アイ　野村　萬斎
笛・一噌　幸弘　小鼓・太倉源次郎
大鼓・亀井　広忠　大鼓　金春国和ほか
解説　高桑いづみ

◈ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）
４月27日(日)　「小袖曽我」（観世流）角当　行雄
５月４日(日)　「千手」（観世流）　観世　喜正
５月11日(日)　「花筐」（宝生流）　大坪喜美雄
５月18日(日)　「頼政」（観世流）　大槻　文蔵
５月25日(日)　「融」（喜多流）　塩津　哲生
（平成24年７月６日放送）

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［５月］
６日(火)　西村同門会第７回研究会　（番組①面）（無料）
10日(土)　第18回関西観世花の会　（番組①面）（有料）
25日(日)　狂言ござる乃座　（番組②面）（有料）
31日(土)　第57回狂言やるまい会名古屋公演　（番組②面）（有料）
～野村又三郎　愛知県芸術文化選奨受賞記念～

［６月］
８日(日)　名古屋観世会定例公演能　（番組②面）（有料）

平成25年度 愛知県芸術文化選奨
狂言方 野村又三郎氏受賞
芸術文化の振興に貢献

愛知県では、芸術文化の分野ですぐれた業績をあげた方々を顕彰する「平成二十五年度愛知県芸術文化選奨」の受賞者として、能楽部門で狂言方・十四世野村又三郎氏（本名・野村信行）を決定、三月十二日午後一時半から愛知県庁講堂で授賞式が行われた。

文化賞は、野村又三郎氏とともに、華道・石田秀翠氏、絵画・吉岡弘昭氏が受賞、文化新人賞は、〈個人〉舞踊・浅井信好、書道・後藤啓太、陶芸・今野朋子ら三氏、団体として「新しいうたを創る会」名古屋支部が受賞している。

◈野村又三郎氏業績概要◈

狂言和泉流の一派である野村又三郎家に生まれ、昭和51年満４歳で初舞台を踏んで以来、能楽師狂言方として、様々な舞台に立つ。平成11年国立能楽堂自主公演にて上演が絶えていた番外狂言「浦島」を約百年ぶりに復曲上演するなど狂言の分野で意欲的な活動を続けている。一方、平成15年には、ハリウッド映画「ラストサムライ」の劇中劇に脚本・演出及び出演で参加するなど、狂言以外の分野においても、高い評価を得ている。また、地域に直門教場を開設し、アマチュアへの指導を積極的に行い、能楽の普及教育にも長年尽力するなど愛知県芸術文化の振興と向上に大きく貢献している。

（関連記事②面）

能「俊寛」狂言「牛盗人」
5月5日 豊田市能楽堂 さつき能

豊田市能楽堂は、五月五日（月・祝）「さつき能」として宝生流能「俊寛」（辰巳満次郎ほか）、和泉流狂言「牛盗人」（井上松次郎ほか）を上演する。

当日は午後二時開演、入場料は全席指定（税込）正面席六〇〇〇円、脇中正面席四〇〇〇円

チケットは、豊田市コンサートホール能楽堂事務局（豊田参合館８階）電話0565・35・8200、チケットぴあ（TEL0570・02・9999、Pコード434・889）

出演は次のとおり

「牛盗人」シテ井上松次郎、アド井上蒼大、アド奉公人佐藤友彦、太郎冠者・今枝郁雄、次郎冠者・佐藤融、後見・鹿島俊裕　地謡・松田高義、野口隆行、奥津健太郎

能「俊寛」シテ辰巳満次郎、ツレ康頼・内藤飛能、ツレ成経・辰巳和暦、アイ鹿島俊裕、ワキ殿田謙吉、笛・大野誠、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村総一郎、後見・衣斐正宜、佐藤耕司、地謡・今井泰行　山田崇生ほか

解説・田崎未知

主催／公益財団法人豊田市文化振興財団、豊田市・豊田市教育委員会。

購読料改訂のお知らせ

本紙では、このたび消費税増税にともなう郵便料金引上げ等により、やむを得ず五月一日より購読料の改訂を行うことになりました。

新しく行う購読料および年間購読料は次のとおりです。御愛読とともに何卒ご理解をお願い致します。

購読料一年千三百円
郵送の場合・一年二千円
一部は百二十円

演能案内
第7回 西村同門会研究能

五月六日（火・振替休日）開場十一時半
名古屋能楽堂

こども能楽教室　おけいこ発表
指導　大倉三忠・前野郁子・伊藤裕貴

しかいなみ（高砂）
ただたのめ（熊野）
はるばるきぬる（杜若）
りょくじゅかげ
しずんで（竹生島）
一口謡

舞囃子　草紙洗小町　伊藤真希子　大鼓　大倉三忠　小鼓　後藤嘉津幸　笛　大野誠
仕舞　老松　金田真侑　玄象　田村鴻英
仕舞　唐船　筧陽華　合浦　河合航太郎
仕舞　玄象　田村伯大　荻田風斗

試けいこ　はなさかば（鞍馬天狗）
小袖曽我　米田敬史　唐船　伊藤蓮
仕舞　合浦　筧侃大　玄象　伊藤沙倉
老松　伊藤芽太郎　伊藤琳太郎　鈴木詩乃

素囃子　羽衣　大鼓　筧侃大　小鼓　筧陽華
仕舞　老松　波多野心咲　小袖曽我　金田暖生　飯塚比呂人
仕舞　唐船　木下心那　鈴木梓実　玄象　大下乎心　大下古都帆

舞囃子　竹生島　萩野斗樹　大鼓　大倉三忠　太鼓　加藤洋輝　小鼓　後藤嘉津幸　笛　大野誠

研究能開演　一時
高安流　素謡　羅生門　渡辺綱　橋本　頼光　小林保昌　宰　原努大　地謡・立衆　相元正樹　有松遼一　岡充　丸尾幸生　高安優

宝生流　舞囃子　屋島　小林陸　大鼓　河村裕一郎　小鼓　後藤嘉津幸　笛　大野誠
仕舞　宝生学生　指導　竹内澄子　地謡　竹内澄子

和泉流　狂言　鬼継子　シテ（鬼）今枝郁雄　アド（女）佐藤融　後見　井上松次郎

喜多流　能　春栄　春栄　原陸　ツレ　松井俊介　シテ　長田驍　ワキ　飯冨雅介　ワキツレ　橋本叡　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤嘉津幸　笛　大野誠

従者　井上松次郎　松田幸孝　長田郷　長谷川多美也　粟谷浩之　高林昌司　高林呻二　伊藤英毅　大島輝久　福田勝
終了　午後四時半頃
後見　平塚昭子　山本雅枝　地謡　高林昌司　伊藤英毅　福田勝
問　主催　脇方高安流　西村同門会
連絡先　名古屋市瑞穂区甲山町二－四四　TEL　052・851・0070
［無料］

第十八回公演 関西観世花の会

五月十日（土）十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞　高砂　井上貴美子
仕舞　鵜之段　塩谷恵
仕舞　江口　佐伯紀久子
仕舞　柏崎　森　澪子
仕舞　葵上　大亀藤英　地謡

能　経正　村井邦子　高安勝久　河村総一郎　船戸昭弘　大野誠
後見　近藤幸江　大槻文蔵　地謡　星野路子　小川晴子　池内頼子　井上貴美子　赤井きよ子　藤井千鶴子　前田和子　山崎芙紗子

狂言　舟ふな　太郎冠者　井上松次郎　アド　佐藤融　後見　今枝郁雄

舞囃子　山姥　近藤幸江　河村眞之介　船戸昭弘　地謡　加藤洋輝　大野誠

独吟　弓之段　藤井千鶴子
嵐山屋島　前田和子　小川晴子　池内頼子　地謡　赤井きよ子　森澪子　塩谷恵

仕舞　杜若　大亀藤英
仕舞　蟬丸　星野路子　赤井きよ子　地謡　村井邦子　佐伯紀久子　井上貴美子
仕舞　松虫　山崎芙紗子
鞍馬天狗

仕舞　笠之段　上田貴弘　大槻文蔵　地謡　星野路子　山崎芙紗子　藤井千鶴子　池内頼子
仕舞　笹之段　

能　梅　前野郁子　飯冨雅介　相元正樹　橋本宰　河村眞之介　後藤孝一郎　加藤洋輝　鹿取希世
問　井上松次郎
後見　佐伯紀久子　上田貴弘　地謡　村井邦子　小川晴子　井上貴美子　大亀藤英　前田和子　森澪子　塩谷恵　近藤幸江

附祝言

［入場料］五〇〇〇円、学生一〇〇〇円
［取扱い］チケットぴあ　URL:http://pia.jp/t
電話0570・02・9999（Pコード435・484）
サークルKサンクス、セブン・イレブン
名古屋能楽堂・出演者宅
［問い合わせ］前野　郁子（名古屋市東区葵２・13・３・701　電話052・932・8805）

（終了予定四時半）

主催　関西観世花の会

野村又三郎氏の略歴

愛知県芸術文化選奨・文化賞を受賞した狂言方・野村又三郎氏の略歴は次のとおり。

昭和四十六年六月　名古屋市に生まれた。
平成六年三月　東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業
平成八年三月　東京藝術大学音楽学部別科邦楽修了
平成八年五月　四世野村小三郎を名跡継承
平成二十一年二月　名古屋市芸術奨励賞受賞
平成二十三年五月　十四世野村又三郎を襲名

〔近年の活動内容〕
「愛・地球博」開会式で創作舞踊狂言「叡智の袋」を脚本・演出・出演する（平成17年）
パティオ池鯉鮒での「まちおこし新作音楽人形劇／平安人形絵巻・かきつばた姫」に語り手として出演（平成24年）
NHKドラマ「父の花、咲く春～岐阜長良川鵜閒物語～」に出演（平成25年）

梅猶会 大阪能楽公演

梅猶会主催の平成二十六年度第二回大阪・能楽公演は、能「邯鄲」能「葵上」狂言「清水」の上演で六月七日（土）大阪能楽会館で行われる。午後一時開演
入場料（税込）前売五〇〇〇円、当日券五五〇〇円、学生当日券三〇〇〇円
梅猶会定期能連絡所／豊中市千里南町三―一八―一二、梅若善高方、TEL06・6831・7854、能組は次のとおり。

第二回 大阪能楽公演

六月七日（土）午後一時始

能 邯鄲
舞童 淺見 悠花　立花香寿子
後見 井戸 和男　梅若 修一
地謡 森本 幸治　福王 知登　広谷 和夫　喜多 雅人
間 善竹 隆司
狂言 清水
太郎冠者 善竹 隆平　主人 善竹忠一郎　後見 上西 良介
仕舞 駒之段 梅若 善高　蟬之段 赤瀬 雅則　小川 晴子
仕舞 鐘之段 上野 雄介　丸 上田 大介　井戸 和男　小松 勝憲
能 葵上
梅若雄一郎　梅若 基徳
後見 赤瀬 雅則　梅若 猶義
地謡 福王茂十郎　中村 宜成　山本 哲也　久田舜一郎　上田 悟　野口 亮
空之祈 善竹 隆平
間 上野 雄介　永田 克壬　池内光之助　今村 哲朗　善高 善久　井戸 良祐
梅若 雅一　梅若 善久
終了 午後四時半頃
附祝言
主催 大阪梅猶会

豊春会春の能

5月18日金剛能楽堂

金剛流・豊春会（豊嶋三千春師主宰）は、五月十八日（日）京都金剛能楽堂で「春の能」を開催する。
演能は、豊嶋三千春師の「隅田川」と豊嶋幸洋師の「舎利」、茂山師一門の狂言「腹不立」はじめ独吟、仕舞。
能「隅田川」（シテ豊嶋三千春、梅若丸・佐々木奏太、ワキ江崎金治郎、地謡・松野恭憲、山口尚志ほか）
能「舎利」（シテ豊嶋幸洋、韋駄天・豊嶋晃嗣、ワキ江崎敬三、地謡・北川米喜、藤田章三ほか）
狂言「腹不立」（出家・茂山七五三、茂山あきら、網谷正美）
独吟「熊野」（谷口雅彦）
仕舞「高砂」（植田恭三）「実盛」キリ（重本昌也）「鞍馬天狗」（田中敏文）
午後一時半始、入場料一般券七〇〇〇円、学生券三〇〇〇円。
申込み／振替口座「豊嶋後援会」01030―6―28887。FAX075・541・8987
次回秋の能は十月十九日（日）

〝能と吉野〟

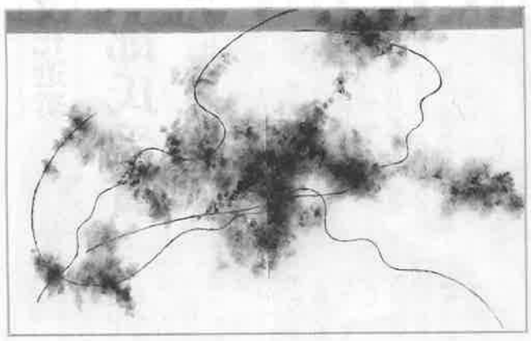
豊田市能楽堂 6月公演

豊田市能楽堂では、「能と吉野」のテーマで、六月二十九日（日）朗読劇と能を上演する。
朗読劇は「額田王と吉野」
解説は、奈良大学文学部教授・上野誠氏
朗読は松坂慶子、尺八・松本太郎、箏・十七弦・伊藤麻衣子、古代衣装・山口千代子
能（観世流）「二人静」
出演は　シテ梅田嘉宏、ツレ武田大志　ワキ飯冨雅介、アイ・佐藤融
笛・竹市学　小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・祖父江修一、清沢一政
地謡・梅田邦久、武田邦弘、古橋正邦、高橋暸一、本田勲、吉沢旭
午後一時三十分開場、午後二時開演
入場料　正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円

「生きている老松」

金沢能楽美術館 6月1日まで春季特別展

金沢能楽美術館では、今春三月二十一日から六月一日（日）まで「生きている老松／山本浩二」をテーマに、古典と現代＝能楽と現代抽象の対峙をかかげ開館している。
山本浩二氏（やまもと・こうじ）は、一九五一年大阪生まれ。マドリード留学、ロンドン滞在制作、イギリス文化庁展が英国を巡回。英米仏伊、スイスの国際展招待。ロレンツェッリアルテ・ミラノで大規模な個展を開催、「凱風館／老松」を制作、生命の時間性などを描く抽象的な作品は、世界的に高い評価を受けている。
観覧料／一般・大学生三〇〇円、65歳以上二〇〇円、高校生以下無料
金沢能楽美術館／金沢市広坂一―二―二五、電話076・220・2791



写真は、「黒松」カンバスに墨と絵具、山本浩二作品

演能案内

狂言 ござる乃座

五月二十五日（日）午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言 武悪
武悪主 野村 万斎　太郎冠者 野村 万作　深田 博治

狂言 花折
新発意 住持 野村 万斎　立衆 石田 幸雄　立衆 高野 和憲　立衆 内藤 連　立衆 中村 修一　立衆 飯田 豪　立衆 岡 聡史

主催 万作の会
東京都文京区関口二―二―七
TEL 03・5981・9778

狂言 第57回 やるまい会 名古屋公演

野村又三郎［愛知県芸術文化選奨・文化賞］受賞記念

～稀曲を楽しむ～

五月三十一日（土）午後一時半開演
名古屋能楽堂

［チケット料金］
S席 七〇〇〇円、A席 六〇〇〇円
B席 五〇〇〇円
［取扱い］ チケットぴあ、サークルK・サンクス

狂言 松（まつゆずりは）
百姓 野村又三郎　百姓奏者 野口 隆行　松田 高義

狂言 吃（どもり）
夫 野村 萬斎　妻 中村 修一　何某 深田 博治

狂言 饅頭（まんじゅう）

（休憩二十分）

大名 山本泰太郎　饅頭売 山本 則秀

素囃子 猩々乱

大鼓 河村眞之介　小鼓 船戸 昭弘　太鼓 加藤 洋輝　笛 竹市 学

狂言 唐人子宝（とうじんこだから）

唐人 野村又三郎　何某 井上松次郎　太郎冠者 奥津健太郎　次郎冠者 伊藤 泰　唐子 野村 信朗　唐子 奥津健一郎　日本子 井上 蒼大

［入場料］
A券前売七〇〇〇円（当日八〇〇〇円）（正面席）
B券前売五五〇〇円（当日六五〇〇円）（正面席以外）
申込先　野村事務所
ファックス　052・350・7972
チケットぴあ（Pコード：453・987）
問合先　野村事務所
電話　090・8323・3210

名古屋観世会定例公演能

六月八日（日）十二時三十分開演
名古屋能楽堂

能 楊貴妃
大槻 文蔵　台留 髙安 勝久　後見 河村眞之介　後見 藤嘉津幸　問 藤田六郎兵衛　井上松次郎

狂言 鱸包丁
伯父 佐藤 友彦　甥 今枝 郁雄　後見 佐藤 融

仕舞 雲雀山 近藤 幸江
水無月抜 久田三津子
善知鳥 前野 郁子
姥キリ 今沢 美和
地謡 吉沢 久保信一朗　古橋 正邦　加賀 敏彦　旭

能 鵜飼
観世 芳伸　飯冨 雅介　橋本 宰　後藤孝一郎　河村総一郎　大野 洋輝　加藤 誠
里人 鹿島 俊裕
問 吉沢 旭　松山 幸親　山中 雅志　久保信一朗　梅田 嘉宏　古橋 正邦　梅田 一政　清沢 邦久
後見 武田 大志　久田 勘鬼
地謡 梅田 嘉宏　本田 勲　高橋 暸一　山中 雅志　久田 勘鬼　武田 邦弘　祖父江修一　武田 大志　八神 孝充
（四時頃終了予定）

◆年間自由席券（四枚綴り）二〇、〇〇〇円
当日指定席券八五〇〇円、当日自由席券六〇〇〇円
お問合わせ　名古屋観世会事務所
〒565―0093 名古屋市名東区一社3―162
久田勘鬼方
TEL052・734・6192
FAX052・705・1585

春狂言

5月11日大阪公演

新作、創作、異流共演など多彩な企画で魅了するKENSYO（株式会社セクターエイティエイト）の「春狂言」の大阪公演は、五月十一日（日）大槻能楽堂で催される。

番組は次のとおり。

五月十一日(日)午後一時半開演

「鵜聟」　聟・茂山宗彦、舅・茂山千五郎、太郎冠者・島田洋海、教え手・松本薫

「棒縛」太郎冠者・野村又三郎、主・茂山七五三、次郎冠者・茂山正邦

新作狂言「さくらんぼ」男・茂山あきら、女房・茂山童司ほか

五月十一日（日）午後五時半始

「川上地蔵」座頭・茂山七五三、女房・茂山あきら、地蔵・茂山童司

「太刀奪」太郎冠者・茂山千五郎、主・茂山茂、道通人・茂山宗彦

「花折」新発意・茂山正邦、住持・茂山あきら、花見の衆・茂山茂ほか。

入場料　各公演五〇〇〇円、セット券九五〇〇円

セクターエイティエイト／TEL06・6353・8988、チケットぴあ0570・02・9999（Pコード433・753 1）大槻能楽堂（06・6761・8055）

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ㊺

拾参　「名古屋能楽鑑賞会」②

竹尾　邦太郎

第七回　一九九三年三月一三日(土)二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能を楽しむために」増田正造、狂言「八句連歌」山本東次郎・山本則直、能「道成寺」本田光洋・宝生　閑・宝生欣哉・殿田謙吉・山本東次郎・山本則直・藤田六郎兵衛・鵜沢速雄・亀井忠雄・観世元信・高橋　汎（地頭）金春信高（後見）瀬尾菊次（鐘後見）山本則俊（鐘吊後見）。

会報№8の巻頭に「間狂言（アイキョウゲン）の役目」として山本東次郎の説明がある。

能はひとつの美学を基本として人間の建前の姿を描くものです。それに比べて狂言は、生の人間の本音の部分で生きる姿を描いています。本狂言は勿論ですが、間狂言の場合もその論理は変わっていません。――中略――「道成寺」では鐘供養の現場を任された下級僧侶の自負が、美女の色香に禁制を破る結果となるのです。みんなみんな凡人の発想。

俊成、定家以来の幽玄という美意識を能に取り入れ、生かし具現しようとした世阿弥は、性急なまでの改革で、リアルなもの、コミカルなもの、騒然たるものを捨て去りました。しかし、人間を描く演劇である以上、そうした部分は欠くことが出来なかった筈です。ギリギリ必要な部分だけを狂言に客演させたという事も考えられます。

もうひとつ、古く民間の祭礼に「追う鬼」と「追われる鬼」があり、それがどうやら民族的な区分けになっていたようです。つまり追う鬼は支配する民、追われる鬼は被支配の民、断言は出来ませんが、侵略の民族、弥生の民族と先住の民族、縄文の民とも考えられます。そして狂言は多くの場合、舞台では正座です。しかし能は片膝を立てて座します。民族の習慣の違いからだとすると、数百年も一緒に演じながら、能と狂言は案外昔から異なっていたのかもしれません。

第八回　一九九二年一二月四日(土)二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能を楽しむために」西　哲生、狂言「縄綯」茂山千之丞・丸石やすし(主)茂山真吾、能「松風・見留」山本順之・片山清司・宝生　閑・茂山あきら・藤田大五郎・北村　治・柿原崇志・観世銕之丞(地頭)浅見真州(後見)。

第九回　一九九四年三月二六日(土)二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能・狂言を楽しむために」西　哲生、舞囃子「高砂・五段」豊嶋訓三・宇高通成（地頭）、狂言「悪太郎」野村万蔵・野村又三郎（伯父）野村良介、能「羽衣・盤渉」豊嶋三千春・宝生　閑・一噌幸政・荒木照雄・河村総一郎・上田　悟・宇高通成（地頭）豊嶋訓三（後見）。

第一〇回　一九九四年九月二四日(土)二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能を楽しむために」堂本正樹、仕舞「玉之段」香川靖嗣・粟谷能夫（地頭）、舞囃子「枕慈童」友枝昭世・松田弘之・福井啓次郎・河村総一郎・吉谷清・粟谷能夫（地頭）、狂言「空腕」茂山千作・茂山千五郎、能「鬼界島」粟谷菊生・粟谷明生・中村邦生・宝生　閑・茂山千三郎・松田弘之・福井啓次郎・河村総一郎・友枝昭世（地頭）粟谷辰三（後見）。

会報№11に第一〇回を迎えた名古屋能楽鑑賞会の運営委員の一人・平田正文（宝生流）が「ウーマンパワーで十回目」の題で会の諸相に就き次の所感を寄せる。

「重衡」を名古屋でも観たい、との思いがきっかけで「瓢箪から駒」のように名古屋能楽鑑賞会が生まれ、早くも十回目を迎えることとなりました。

運営方法、出演交渉、資金問題、観客動員等、何も知らない面々の前には多くの壁がありました。観たい曲を最適の演者でとの気持がとにかく本会を発足させたと言えます。

運営上実質的に最も困難且つ重要なことは常に観客席を満席にするということです。この最も困難な仕事は、ほとんど岩田さんの個人的ネットワークに頼る形でクリアしました。この結果として、多くの女性会員が会員の大勢を占め、レベルの高い観客層を形成しているのが、本会の一つの特徴となっています。

もう一つの大きな問題は、出演料と会費の問題です。発足の目的を満足させるには、出演料以外に交通費と宿泊費が当地の催しでは大幅なハンディとなります。会費は一定ということは、総収入はほぼ一定ということですので、その総収入と出演料、他諸経費を質的妥協を排しつつ、調和させることが、毎回の重要テーマとなり、試行錯誤の結果、多少はノウハウ作りができたかというところです。

まだまだ問題も沢山抱えていますが、本会の催しは特にシテ方の御理解による多大な御協力を得て成り立っており、今後ともこの状況が大きく変わらないとすれば、多少は演者の選定に不自由さもあると思われますが、この点、予め御了解と御協力をおねがいいたします。

最後になりましたが、これまでの催しに御出演いただいた演者の皆様、会を支えて下さった会員の皆様に、厚く御礼申し上げます。

◆岩田はるみ代表の言（抜粋）

◆喜び　予想外の十回目。かけがえのない多くの「出逢い」。笑顔で参加下さる会員。公演後届くアンケート。演者の方々の「ご出演快諾」。恵まれたスタッフの心意気。毎回増える会員。良い演目、演者、観客が良い観客を増やすことの立証。私自身の成長。

◆そして今　良かった事は「おかげ様」。悪かった事は「身から出たサビ」。いっぱいの反省とお詫び。いつまで続けられるかの課題。言葉をもってしては表せない感謝の心。

第一一回　一九九五年三月一八日(土)二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能・狂言を楽しむために」堂本正樹、狂言「昆布売」茂山忠三郎（昆布売）茂山千作、能「清経・恋之音取」野村四郎・片山清司・宝生　閑・藤田大五郎・曽和博朗・亀井忠雄・観世銕之丞（地頭）浅見真州（後見）。

第一二回　一九九五年一〇月二八日(土)二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能・狂言を楽しむために」羽田　昶、狂言「栗焼」善竹幸四郎・茂山千作、能「井筒」片山九郎右衛門・宝生　閑・茂山千作・藤田六郎兵衛・曽和博朗・河村総一郎・観世銕之丞（地頭）武田欣司（後見）。

会報№13「観能だより」に寄せた論客・堂本正樹「講演者と聴衆」を次に転載。

先回の名古屋能楽鑑賞会で、当日の能と狂言の「講演」をさせていただきました。貴会では三回目だったでしょうか。

総じて私は話好きで、当然「講演」も好みますから、スケジュールの可能な限り、お頼まれするとお断りした事がありません。勿論お話する内容は、主題に添って事前に考え、構成も拵えておきます。しかしそこは「現場」です。当日の聴衆の反応に添い、話している内容も弾力的になり、思わざる理解、意図せぬ解釈も色々と浮かんできます。つまり、場との相互交感による、自己の中に眠っていたものも発掘なのです。これは机上の文章では出てこない「+α」で、「思想」というものが古代ギリシャで「人中で語られる」ものだった事がよく分かります。

先回は能が『清経』だったので、仏教に於ける「絶対の非暴力思想」についてお話させて頂きました。少年時代に読んだ武者小路実篤の『釈迦』で感銘した「釈迦族の滅亡」の物語から、亀井勝一郎の『聖徳太子』の「山背大兄王子一族の滅亡」などで培われた原始仏教への畏怖。おそらくそれが中世の民衆の、当然『清経』の作者世阿弥の基本思想だったでしょう。となるとこれを現代に演じる能役者も、中世仏教の基本思想を、劇の基底にある「思想」として理解して貰わないと、役の実感に欠けることになりませんか。かの「おうむ真理教」で、仏教が戯画化されている今日、ここはきちんと押さえて置きたいものです。

で今回の講演は、実に気持ちが良かった。「巧く話せた」のではなく、聞き手に適度に抵抗があり、その加圧力が、語り手の言葉に責任を与え、その責任感が今一つの自然を汲み出して、講演者本来の能力を羽搏かせる。そうした「聴衆」の豊かで確固とした軟らかさが、講演を励まし、ノセる。

この「聴衆」を「観客」に、「講演者」を「役者」に替えれば、能の舞台と観客になります。最高の聴衆は最高の観客で、それは名古屋能楽鑑賞会そのものの、「質」の照明でもありましょう。

（演劇評論家）

第一三回　一九九六年二月二四日（土）二時始・扶桑文化会館。

解説「本日の能・狂言を楽しむために」羽田　昶、狂言「武悪」茂山千之丞・茂山千作（主）山本東次郎（太郎冠者）、能「船弁慶・重前後替」梅若六郎・梅若晋矢（義経）宝生欣哉・茂山千五郎・藤田六郎兵衛・北村　治・山本孝・観世元信・大槻文蔵（地頭）山本勝一（後見）。

第一四回　一九九六年五月二八日(土)二時始・熱田神宮能楽殿。

解説「本日の能・狂言を楽しむために」西　哲生、狂言「棒縛」野村万蔵・野村万作（次郎冠者）野村又三郎（主）、能「高野物狂」近藤乾之助・田崎　甫（子方）福王茂十郎・善竹十郎・一噌庸二・鵜沢速雄・安福建雄・今井泰男（地頭）寺井良雄（後見）。

第一五回　一九九七年（平成九年）四月一二日（土）一時半始・名古屋能楽堂。

会報№15の巻末、岩田はるみ代表は「ご挨拶」として次のように述べている。

平成二年六月から始まった名古屋能楽鑑賞会では、第十四回を迎えます。毎回熱心にご参加くださる会員の皆様と、ご出演の皆様とともに、能・狂言を楽しむひとときを過ごした熱田神宮能楽殿での会は今回で終ります。

新しい能楽堂では、本会は開館記念の名古屋市協賛行事として開催させて頂けるとの事です。「女の細い腕？」で一回ごとに会員の皆様とともに、心をこめて続けてきた事への、名古屋市からの「ご褒美」だと思うのです。ご一緒に喜びをもって受けましょう。―後略―

新設成った名古屋能楽堂開館記念式典は四月三日（木）柿落シに観世流廿六世宗家・観世清和が「翁」を厳修。四月五・六の両日、市と能楽協会名古屋支部の主催で舞台落成祝賀能が催された。第一五回名古屋能楽鑑賞会もこれに相応しい能組。

解説「本日の能を楽しむために」増田正造、能「翁」粟谷能夫・山本則直（千歳）山本東次郎（三番三）一噌仙幸・清水晧祐（頭取）荒木建作・上田敦史・柿原崇志・粟谷菊生（地頭）粟谷辰三（後見）、舞囃子「高砂」粟谷菊生・一噌仙幸・上田敦史・柿原光博・吉谷　潔・香川靖嗣（地頭）、狂言「二人袴」山本泰太郎（聟）山本則俊（親）山本東次郎（舅）山本則孝（太郎冠者）、能「湯谷」友枝昭世・中村邦生・宝生　閑・高井松男・一噌仙幸・大倉源次郎・柿原崇志・粟谷菊生（地頭）粟谷辰三（後見）。

――以下次号――

◆晩秋から冬の舞台（その三）◆

「平成廿五年度　金剛定期能納会」「青陽会定式能」

竹尾邦太郎

「鉢木」　民情視察にと旅僧に身を窶し廻国の最明寺入道（ワキ勝久）上野国佐野で不遇の武士・源左衛門常世（シテ清隆）から受けた滅私の持て成しに感じ入り、帰国後、諸国の軍勢に召集を掛ければ、窮乏を厭わず駆け参じた常世を呼び出し、その律儀、意気軒昂を称揚。あの時の旅僧が執権その人と知り恐懼の常世、安堵の御教書を賜わり意気揚々と帰る。

前場。雪中、長袴を捌き足元気遣う運び、一ノ松で直り、じっくりと右から左へ「あ、降ったる雪かな」と眺め、へ袂も朽ちて、と左袖に目を留めへあら面白からずの雪の日やなや、の概嘆、当今各地の大雪情報も思われシテの心情、実感。夫不在とて宿乞うワキをよそに、軒先で帰宅を待ち佇む妻（ツレ克紀）、それを見咎めて「この大雪に」と訝るシテは事情が分りワキと問答、貧ゆえ「傷はしくは存じ候へども」と宿を断れば、「あら曲もなや」とワキ、苦々しい口吻如何にも。とぼとぼと去るワキ、へ斯様な人に値遇申してこそ後の世の便りとも、と諫められワキを呼び戻そうとシテ。「なう〳〵旅人」と声を掛けるも遠く三ノ松辺りで聞えぬ態に佇立のワキ、「袖なる雪をうち払ひ、うち払ひし給ふ気色」に詩趣を覚えてシテ、ほの〴〵した心を受ける地（恭憲・幸稔・泰能ら）のうちに追いつきへ一夜は泊り給へや、と右手の扇で軽くワキの肩を叩くところ、東北の、仮設に住まう人達への事ども、思われ、優しい心でありたいの思い伝わるか。ワキ・シテと舞台に入るとツレと共に下居に鼎座、「御宿は参らせて候へども」とシテ、「参らせうずるものも無く候は如何に」とワキの食事を案じツレと問答。粟の飯のことに触れ、地のへ住みうかれたる古里の、で正先に角台輪の鉢木（観世は丸台輪）が据えられる。ワキを持て成すにシテは秘蔵の盆栽、梅桜松を焚き暖をとらせんと。固持するワキに斯様の時こそ義を、の思いのシテ、問答の張り詰めた空気は、掛合からクセへと固唾呑む思いに。先づ梅を突き伐り、桜は膝ついて伐ると上ゲ端へさて松はさしもげに、あと、へ今は嵐吹く、と伐った枝を手に立ちワキの前へ。温情をよろこぶワキに問われて名を明かし、儘なら

（④面へつづく）

（③面よりつづき）

ぬ身辺私事に応える此の問答も素晴らしい。へさて合戦始まらば、と居立チ、へ敵大勢ありとても、と右肩脱ギ、返シ句に扇開き、すっくと立ち、割って入る気魄が一転、この儘なら徒らに餓死にの命、へなんぼう無念の事ざうぞ、と打合セがっくり膝をつく心情の落差の大きさ鮮やかにみせる。

中入はシテ・ツレ両人とワキの掛合に妙味が。へ今日ばかり留り給へや、とワキへアシラフ両人に、へ名残は宿に留れども暇申して、とワキ、皆まで言わせずへ御出でか、と同吟に両人、へさらばよ常世、と立つワキにツレは腰を浮かす心に居立ち、へまたお入り、とシテ・ツレ共に立つ呼吸、ワキとの別れの寂寥一入の情趣。

後場。「急がしや〳〵」と早打（アドアヒ薫）慌しく常座へ、集まる関八州の軍勢の様子立シャベリ、舞台一巡、触レて退く。一声の囃子で沙門帽子・白綾着付・白大口・紫水衣・掛絡の姿に威風、最明寺入道（後ワキ勝久）が二階堂と従者（ワキツレ遼一・充）を伴い床几にかけると、早笛（保美・吉兵衛・哲也）で源左衛門常世（後シテ清隆）が一ノ松へ。段熨斗目着付・白大口・法被（袖折込）小刀・鞭を腰に長刀を担げ、旅人から鎌倉へ馳せる軍勢の多きを知り逸る心、憤懣を街道に見立て、尻込みする痩馬に手古摺り鞭を入れ漸く一ノ松（鎌倉）に辿り着く風情が面白い。鞭をそこに捨て、二階堂ノ下人（オモアヒ逸平）から御前に、と命じられてシテ、人違いではと言うも、アヒが端的にシテの貧な風体をあげつらえば納得。「これは二階堂から承りにあるぞ」と、虎の威を借りる狐よろしく威張るアヒが可笑しい。

キリは緊張の中にも晴れやかに、御教書を有難く戴き懐中すると、へさて（国々の諸軍勢）、と長刀拾って立ち、馬上の心は二ノ松で長刀一薙ぎするとへ帰るぞ嬉しかりける、と地一杯聞き入った。端正、精気溢れる好舞台だった。（1時間50分）

「蝸牛」　独得の言葉の抑揚で「山伏デェース」と名乗る山伏（シテ七五三）、修行を終え早朝、下山の途次睡魔に襲われ藪の中に横臥。一方、祖父の更なる長命を願う主（アド実）、太郎冠者（次アド童司）に長寿の素・蝸牛を探しにやる。蝸牛の何たるかを知らぬ太郎冠者、主の望みに適う蝸牛を「詮索を致いて捕って参りませう」と請け合う。藪の中、らしきものを見つけ気持ちが昂る太郎冠者、「かたつむり殿ではないか」と迫ると、眼を剥き一寸たじろぐ山伏だが、事が分れば慰みになぶってやろうの悪戯心。武井武雄のとぼけた童画の世界の趣は、七五三に伍して童司がよい味。（23分）

「現在七面」　居の日蓮上人、いつも花水を捧げる女人を訝れば、女人は仏縁を得んがため、なお、女人成仏の謂れをお聞かせ、と。上人が法華経の理を説くと、三熱の焔が免れられる、と女人。その言葉に上人は女人が龍女の化現と分り、懺悔に元の姿を見せよと。恥じ乍ら報恩に在りし姿を、と女人は荒天の中を消えると、約束通り龍女の姿で現れ、上人の唱える経文に忽ち天女となって神楽を舞い、山の鎮守になると約し天に上る。法華経の功徳で女人も成仏するという霊験譚。

前場。脇座に上人の高座として一畳台が。何事もなく上人（ワキ和幸）従僧（ワキツレ和夫・正彦）を伴い座着く。角帽子・襟白浅黄・白綾着付・白大口・淡萌黄水衣・掛絡の姿で冒頭、朗々と唱える説法に犯し難い気品。次第（学・尚靖・大・光長）で舞台へ入る里女（シテ永謹）、へありがたの霊地やな、と御山の佇まいは外には無い自然の風物の素晴らしさ、へげに有難き御山かな、と左ウケテ眺め、返シ句に詰メルのは惹かれる心も。ワキに見咎められ素姓問われて問答は、滅多に出合えない有難い御法との出合の嬉しさ。此の機を逸すれば亦いつの世を待つことに、と明暮通いつめへ上人に結縁をなすばかりなり、とワキにアシラフところ、へげに奇特なる信心かな、とワキに言わせずは置かない目力。更にへ悪人女人おし並めて成仏する事疑ひなし、と言わしめ、へさては殊更ありがたや、とシテ、ワキへアシラフのも喜色。女人成仏の謂れは、へそも〳〵法華経といつば、のクリ（地）からサシ（はワキ）・クセで、ワキを代弁する地謡（通成・道一・龍謹・幸洋ら）が法華経の由緒・教理に説く。居グセで特に型は無くロンギになっても概ねアシラフだけ。ロンギの中、へ三熱の焔を、のシテの言に、三熱は仏教で龍や蛇の受ける三つの苦悩と知るワキはシテの素姓を看破、シテはへ在りし姿を現はさんと、居立ッてワキにアシラヒすっと立つと、きっと面切りスミへ、激しく四拍子踏みへ夕風も烈しく立つや、と文字通り疾風迅雷の凄まじさで走り込む。

代って能力頭巾・茶無地熨斗目着付・萌黄縷水衣・括袴の能力（アヒやすし）、常座で立シャベリに日蓮上人法華経の功徳は身延詣の女人の事どもを、上人の説法聴聞をと触レルところへ稲妻、「あーら光った」と悲鳴を上げて飛上がり、題目唱え数珠を揉み、退散すると後場。

勢かかった早笛（学・尚靖・大・光長）で面般若・赤頭・輪冠大龍戴・鱗箔着付・緋大口・紺地袷法被の恐ろしい大蛇の姿の龍女（後シテ永謹）が走り出ると、へあら不思議やな、と地のうち舞台に入り、へ慚愧懺悔の姿を、正中で膝を屈して曝し、高座のワキを仰ぎ、己れの醜状訴えるかに頭を垂れゝば、ワキも点頭、経巻を手に高らかに偈を唱えるや、へたちまち蛇身を、で立つシテは囃されるイロエのうち後見座へ、物着に。副後見（幸稔・夏樹）が几帳よろしく小袖幕を張り、中で主後見（泰三）が蛇体を面増・里垂・天冠・着付同断・緋大口・白地楽器尽シ舞衣壷折の天女に三分余で変えると、シテは地のへ更けゆく夜半の月も霜も、で幣を受けとり、へ謹上、と幣を振って祓うと神楽。途中、神舞に直ッて幣を扇に替え舞い進め、くる〳〵と舞台を巡る辺り、踏む拍子、軽やかな袖捌きに溢れるような女人成仏の喜悦、舞上げてキリはひたすら法華経への感謝の気持ち、へ代々を重ねて衆生を広く、と指廻シ、へ済度せん、と正中下居にワキを仰ぎ堅く約束へ申しつゝ、立つとへ行方も白雲にたち紛れて、と返シ句に常座へ、虚空へ上る心に留メ拍子。のびやかな、悠揚迫らざる大夫芸の大きさ、遠い曲で堪能でき嬉しかった。（1時間32分・12月15日・平成廿五年度金剛例会納会）

「野宮」　一所不住ノ僧（ワキ元）、偶然九月七日に嵯峨野は野宮の旧跡を訪ねると紅白段唐織着流シに榊を持つ艶めく里女（シテ一政）に遭遇、今日は神事の日ゆえ関係無き人は帰られよ、と咎められるも僧に免じて宥恕を願い、神事の謂れを問えば、シテは往昔の六条御息所と光源氏とのことをワキと問答・掛合から初同（邦久・邦弘・修一ら）に。へうら枯れの、と常座から鳥居へ進み、へ草葉に荒る、野の宮の、と返シ句に榊を鳥居の先へ置き退ると（写真）荒れた旧跡に思いを馳せ懐旧に浸るか。へ物はかなしや、と小柴垣に目をやり、へ今も火焚屋の幽かなる、と右へ眺める風情なか〳〵。ワキから更に御息所の事を、と乞われ、へそも〳〵この御息所と申すは、とクリで正中に下居、地と掛合に東宮没後も御息所は光源氏の恋意に委ねられたかの忍ぶ恋、それもへまた絶え〴〵の仲、となったが、とワキにアシラフと、忘れ去られることも無く遠路を通い情ある言葉を下さる愛おしさ、へ御心の中ぞ哀れなる、とアシラフも切ない。へその後柱の御祓ひ、と上ゲ端から息女と共に〈多気の都路に、とアシラフところ、心のうちを〈怨みなりけれ、と訴えるか。クセ切にきて里女は御息所に化身。ロンギとなりワキを代弁する地にへ御息所は、と問われ、へ我なりと、答えると〈夕暮の秋の風、と直り、クリからの長い下居から立つ。へ森の木の間の夕月夜、と目付柱上へ眺め右へ廻り常座へ。へ黒木の、と直ッて鳥居を眺めて詰メルと右に廻りへ跡立ち隠れ、と橋懸へ、極く静かにゆっくり送り笛で入る。

野宮の神事とて参詣の里人（アと都雄）、ワキと出遇い乞われて野宮の謂れ、御息所のこと居語に語り、御息所ノ亡霊の跡ねんごろに御弔いを、と勧めて退くと後場。

六条御息所ノ亡霊（後シテ一政）は浅黄長絹に濃紫大口の気品。車争はシテ・ワキ掛合にへ車の前後に、へぱっと寄りて、の辺り、へ人々轅に取りつきつゝ、のところも、憎さ悔しさの感情が少々希薄か。序之舞三段、袖被クのも綺麗に舞上げ、へ露うち払ひ、と左袖垣一つ払い、へ風茫々たる、と招キ扇に出、へ野の宮の夜すがら懐かしや、と面伏せがちに退ってシヲリ、シヲリ返スと懐旧の思いは破之舞に。舞上げ、へ此処は元より、と鳥居に掴まりへ出で入る姿、と右足鳥居の外へ一寸出して（写真）引込め、へ生死の道を、と右へ行きかけ左へ、が象徴的。ワキ前からツマミ扇にへまた車に打ち乗りて、と乗込拍子に常座へ。へ火宅の門をや出でぬらん、と左袖返シ、右ウケ、へ火宅の門、と詰メて留メ。拍子は踏まなかった。叮嚀に慎重な舞ぶりに好感。囃子は誠・孝一郎・大。（1時間58分）

「痺」　来客があるとて肴を求めに太郎冠者（シテ蒼大）を和泉の堺へ遣るつもりの主（アド松次郎）だがシテはしびりが切れて行かれぬと膝を抱かえ動かない。先刻、仮病と知る主、しびりを治すまじない、と塵をシテの額に擦り付ける（写真）。塵は散りと同源、しびりの痛みを散らす謂か。しかし、シテは親直伝のしびり容易くは治らないと。それなら伯父御の供応に同行はならぬな、と主に鎌をかけられゝば、しびりに宣命（因果）を含めれば治るとシテ、盛んに言い聞かせれば「ホイ」としびりが反応をみせる態。飛んだり跳ねたりしてみれば（写真）主にあっさり魂胆見透かされる。雇い主への精一杯の無邪気な抵抗、親子共演が微笑ましかった。（17分）

「三輪」　玄賓僧都（ワキ宰）の許へ日々樒閼伽の水を届ける里女（シテ大志）、罪の救済を願い合掌する（写真）と、山居の淋しい自然の日常は樋の水音、風の音を描写の初同（正邦・嘉宏・瞭一ら）。秋深み夜寒、問答にシテはワキに衣一重を乞い、ワキは衣を与え住まいを問えば歌にある三輪の山もとと、不審なら〈杉立てる門を、印に尋ねてと言い捨て作物に消える。深井の、中年の里女が佳い姿。

里人（アヒ融）が作物に掛かるワキの衣を訝りワキと問答に、先の里女は三輪明神の化身ではと進言、夜の様子を御覧あれかし、と退くと後場。

ワキは作物に立寄り実見すると、衣の褄に金色で〈三つの輪は、の和歌が。戻ると作物の中から〈千早ぶる、と声が。シテ・ワキ掛合から〈たゞ祝子が著すなる、と黒風折・面増・白地摺箔着付・緋大口・紫長絹の美わしい女姿の三輪明神（後シテ）が作物から現われる。クリ・サシに神代の昔物語は末代の衆生を教え導く手段、中でも和歌の道は尊く神の威光が増すを、大和の国の一夫婦を例に挙げクセにその姿を、〈八百萬の神遊、で後見から幣を受け、へちはやぶる、と神楽を幣で舞い始め、位変って幣を扇に替えて舞上げると天の岩戸説話。居立ッて岩戸開く処、大きく伸びやかに、へ常闇の、と立ち、キリはワキへ向き〈関の戸の夜も明け、と左袖返シ雲ノ扇の処も（写真）すかっと美しかった。囃子は誠・昭弘・総一郎・洋輝。（1時間34分・12月23日・青陽会定式能）

『青陽会定式能』
「野宮」マエ清沢一政
（撮影・杉浦賢次）

『青陽会定式能』
「野宮」アト清沢一政
（撮影・杉浦賢次）

『青陽会定式能』
「痺」左より井上蒼大、井上松次郎
（撮影・杉浦賢次）

『青陽会定式能』
「痺」井上蒼大
（撮影・杉浦賢次）

『青陽会定式能』
「三輪」マエ武田大志
（撮影・杉浦賢次）

『青陽会定式能』
「三輪」アト武田大志
（撮影・杉浦賢次）

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1300円
郵送の場合　1年　2000円
一　部　120円

NHK放送予定（平成26年5～6月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（日曜日6時～6時55分）

5月25日(日)「融」（喜多流）　塩津　哲生
（平成24年7月6日放送）
6月1日(日)「遊行柳」（観世流）　浅見　真州
6月8日(日)「歌　占」（宝生流）　亀井　俊雄
6月15日(日)「雲雀山」（金春流）　櫻間　右陣
6月22日(日)「百　萬」（観世流）　梅若　玄祥

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［5月］
25日(日)　狂言ござる乃座　（有料）
31日(土)　第57回狂言やるまい会名古屋公演
（番組①面）（有料）
～野村又三郎　愛知県芸術文化選奨受賞記念～

［6月］
7日(土)　名古屋能楽堂六月定例公演（番組①面）（有料）
8日(日)　名古屋観世会定例公演能　（番組①面）（有料）
15日(日)　第58期第三回名古屋宝生会定式能
（番組①面）（有料）
21日(土)　（10時～11時30分）　若鯱能研究発表会
（番組②面）（無料）
21日(土)　（13時～16時）　若鯱能　（番組②面）（有料）
22日(日)　三交会　（番組②面）（無料）

第8回　若鯱能

6月21日　名古屋能楽堂

能2番・狂言1番

能楽協会名古屋支部では、毎年六月の熱田祭に合わせて奉納能を開催してきたが、平成十九年から名古屋能楽堂で、若手能楽師の発表の場として「若鯱能」を開催、今年で第八回を迎え、六月二十一日(土)午後一時から開催される。

番組は、観世流能「田」（シテ吉沢旭）和泉流狂言「隠狸」（シテ鹿島俊裕）金剛流舞囃子「安宅」（シテ大川麿美）喜多流能「小鍛冶」（シテ松井俊介）

チケットは全自由席一般二千円、学生（中学生以上）千円、小学生五百円。

（番組②面掲載）

若鯱研究発表会

また能楽協会名古屋支部では、文化庁主催による〈平成二十六年度　次代の文化を創造する新進芸術家育成事業〉に共催して、「若鯱研究発表会」を六月二十一日(土)午前十時から名古屋能楽堂で開催する。

演能は、観世流能「猩々」狂言「附子」ほか舞囃子、仕舞など。

入場無料（番組②面掲載）

◆花の会名古屋特別公演

観世宗家「道成寺」

7月20日　名古屋能楽堂

能楽伝承プロジェクト〝花の会〟では、きたる七月二十日(日)名古屋能楽堂で「名古屋特別公演」として、二十六世観世宗家・観世清河寿師による「道成寺」を主催・公演する。

開場十二時、開演午後一時。

企画制作・NSマネジメント株式会社、協力／観世宗家、一般財団法人観世文庫

能組は次のとおり。

解説　土屋恵一郎

舞囃子「天鼓」盤渉　シテ久田三津子、笛・竹市学・小鼓・吉阪一郎、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋輝、地謡・観世芳伸、上田公威、木月宣行、上田宜照、久田勘吉郎

仕舞「西行桜」関根祥六、「船弁慶」キリ・久田勘鶴

地謡・岡久廣、角幸二郎、清水義也、上田彰敏

一調一管「葛城」藤井徳三、観世元伯　藤田六郎兵衛

能「道成寺」シテ観世清河寿、ワキ森常好、ワキツレ・森常太郎、ワキツレ舘田善博、笛・一噌隆之、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井忠雄、太鼓・観世元伯　間・井上松次郎、野村又三郎

後見・関根祥六、武田宗和　坂口貴信

鐘後見　上田貴弘、木月宣行、清水義也、上田公威、吉沢旭

入場料S席（指定席）一六〇〇円、自由席）一一、〇〇〇円、学生五〇〇〇円

チケットは、観世能楽堂（03・3469・5241）名古屋能楽堂（052・231・0088）チケットぴあ（0570・02・9999）＝Pコード436・396）栄プレチケ92（052・953・0777）ナディアパークプレイガイド（052・265・2015）など。

問い合わせ／NSマネジメント株式会社（052・265・5391）NPO法人名古屋能楽振興協会（052・734・6192（9時～18時）

野村又三郎師受賞記念

狂言　やるまい会

5月31日　名古屋能楽堂

和泉流狂言方・十四世野村又三郎師(略)は、先号既報のように平成二十五年度愛知県芸術文化選奨・文化賞を受賞、これを記念してきたる五月三十一日(土)名古屋能楽堂で、狂言やるまい会（第五十七回）を公演する。

番組は、既報のように〝稀曲を楽しむ〟をテーマに、狂言「松楪」（まつゆずりは）「吃」（どもり）「饅頭」（まんじゅう）「唐人子宝」（とうじんこだから）と素囃子「猩々乱」（しょうじょうみだれ）（番組①面掲載）

演能案内

狂言　第57回　やるまい会　名古屋公演

野村又三郎［愛知県芸術文化選奨・文化賞］受賞記念

～稀曲を楽しむ～

五月三十一日(土)午後一時半開演
名古屋能楽堂

狂言　松楪（まつゆずりは）
百姓　野村又三郎
百姓　野口隆行
奏者　松田高義

狂言　吃（どもり）
夫　野村萬斎
妻　中村修一
何某　深田博治

（休憩二十分）

狂言　饅頭（まんじゅう）
大名　山本泰太郎
饅頭売山本則秀

素囃子　猩々乱
大鼓　河村眞之介
小鼓　船戸昭弘
太鼓　加藤洋輝
笛　竹市学

狂言　唐人子宝（とうじんこだから）
唐人　野村又三郎
何某　井上松次郎
太郎冠者　奥津健太郎
次郎冠者　伊藤泰
唐子　野村信朗
唐子　奥津健一郎
日本子　井上蒼大

［入場料］
A券前売七〇〇〇円（当日八〇〇〇円）（正面席）
B券前売五五〇〇円（当日六五〇〇円）（正面席以外）
申込先　野村事務所　http://kyogen.net/
ファックス　052・350・7972
チケットぴあ（Pコード：453・987
問合先　野村事務所
電話　090・8323・3210

名古屋能楽堂六月定例公演

六月七日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

開演前ショート解説（午後一時四十五分から午後二時）
「頼政」について　和久荘太郎

狂言
（和泉流）附子　太郎冠者　松田高義　主人　伊藤泰　次郎冠者　野村又三郎

能
（宝生流）頼政　衣斐正宜　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世　アイ　井上松次郎

後見　衣斐正宜　亀井雄二　今井基　太谷哲也
地謡　川瀬隆士　辰巳大二郎　武田孝史　内藤飛能　辰巳満次郎　小倉伸二郎　澤田宏司　和久荘太郎

（終了予定　四時半頃）

［有料］
正会員券一八〇〇〇円（年間通用四枚綴り）
事前ワークショップ参加券つき
［入場券料］鑑賞券　五〇〇〇円（一回限り）
学生券　二〇〇〇円（一回限り）

取扱いは出演楽師または事務局まで

主催　名古屋宝生会
事務局　名古屋市昭和区御器所3－23－19－802
TEL／FAX　052・882・5600
衣斐正宜方

［有料］

主催　公益財団法人　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
公益社団法人　能楽協会名古屋支部

名古屋宝生会定式能

六月十五日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

（午後四時二十五分頃終了予定）

後見　玉井衣斐　竹内博祐　竹内愛　地謡　竹内孝成　竹内淳一　佐藤耕司　平田正文　辰巳満次郎　内藤飛能　高橋亘　和久荘太郎

［チケット料金］
前売　指定　四一〇〇円
自由一般　三一〇〇円
学生　二一〇〇円
自由席のみ当日　五〇〇円増

［取扱所］名古屋文化振興事業団（052・231・0088）
名古屋能楽堂（052・249・9387）
栄プレチケ92（052・953・0777）
チケットぴあ（0570・02・9999、Pコード436・110）
お問合わせ　名古屋能楽堂
TEL　052・231・0088

能
半蔀　竹内澄子　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
間　井上松次郎
後見　和久荘太郎　辰巳大二郎
地謡　阪口泰子　藤田光子　倉本雅都　大塚恵　玉井博祐　芳賀カズ子　衣斐愛　石黒実都

狂言　不見不聞　太郎冠者　野村又三郎
主人　奥津健太郎　菊市　松田高義
後見　伴野俊彦

仕舞　俊成忠度　キリ　衣斐愛
野守　辰巳満次郎
地謡　亀井雄二　武田孝史　和久荘太郎　内藤飛能

能
雷電　宝生和英　橋本宰　飯冨雅介　椙元正樹　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤大野洋輝　誠

間　奥津健太郎
後見　衣斐正宜　亀井雄二　今井基　太谷哲也
地謡　川瀬隆士　辰巳大二郎　武田孝史　内藤飛能　辰巳満次郎　小倉伸二郎　澤田宏司　和久荘太郎

（終了予定　四時半頃）

［有料］
正会員券一八〇〇〇円（年間通用四枚綴り）
事前ワークショップ参加券つき
［入場券料］鑑賞券　五〇〇〇円（一回限り）
学生券　二〇〇〇円（一回限り）

取扱いは出演楽師または事務局まで

主催　名古屋宝生会
事務局　名古屋市昭和区御器所3－23－19－802
TEL／FAX　052・882・5600
衣斐正宜方

会と催し

幸謡会45周年記念大会

6月1日　岡崎城能楽堂

岡崎城幸江師主宰の幸謡会はこのたび創会四十五周年を迎え、これを記念して六月一日（日）岡崎城二の丸能楽堂で、幸謡会四十五周年大会を開催　能「杜若」素謡「山姥」「求塚」はじめ舞獅子、仕舞など十余番で催会する。来場歓迎。正午始（番組②面掲載）

名古屋宝生会ワークショップ

6月7日　名古屋能楽堂

名古屋宝生会では、第三回名古屋宝生会定式能（六月十五日（日）、番組本紙①面掲載）の鑑賞に役立つワークショップ（事前講座）を六月七日（土）名古屋能楽堂で開催する。

演目は「半蔀」「雷電」能楽師による演目の時代背景や詞章解説、鑑賞のポイント、実演を交えた解りやすい内容で行う。

時間／午前十時～十一時半、参加料千円
問い合わせ・申し込み　名古屋宝生会・衣斐正宜方　TEL／FAX　052・882・5600。

名古屋能楽堂　検定試験つき
能楽講座〈初級〉
7月から全六回開催

名古屋文化振興事業団「名古屋能楽堂」では、今回七月から八月にかけて全六回にわたり「能楽講座（初級）」を開催、時には実演をまじえながら能楽や能楽鑑賞のための基礎知識について解説、最終日には検定試験を行い、能楽を楽しく学ぶことができる企画を実施する。

能楽講座（初級）の日程と内容および講師は次のとおり。

［第一回］7月15日（火）午後二時～三時三十分、会場は名古屋能楽堂会議室（以下各回とも同じ）
内容「能楽への誘い」能楽堂に一歩足を踏み入れてみませんか。あなたを能楽の世界に誘います。
講師・橋場夕佳（京都造形芸術大学非常勤講師）

［第二回］7月22日（火）午後二時～三時三十分
内容「狂言方について」狂言と能はパートナー、本狂言の他に能の中に間狂言として出演する。
講師・井上松次郎（和泉流狂言方）

［第三回］7月29日（火）午後二時～三時三十分
内容「シテ方について」主役であるシテ方を始め、ツレ、地謡、子方、後見など様々な役目を担当する。
講師・衣斐正宜（宝生流シテ方）

［第四回］8月5日（火）午後二時～三時三十分
内容「囃子方について」笛・小鼓・大鼓・太鼓で構成されるオーケストラの魅力に迫る。
講師　加藤洋輝（観世流太鼓方）

［第五回］8月12日（火）午後二時～三時三十分
内容「ワキ方について」物語の進行役を担うワキ、僧侶など現世を生きる男性役で登場する。
講師・高安勝久（高安流ワキ方）

［第六回］検定・8月19日（火）午後二時～三時三十分
内容◎初級なごや能楽検定
問題は、講義、定例公演チラシ・パンフレットの内容などから出題。問題解説のあと、合格者には認定証が交付される。

［要項］
受講料　三六〇〇円（検定試験を含む全六回通し）
定員　六〇名　※応募者多数の場合は抽選
応募方法　郵便はがき、FAXにて、①郵便番号②住所③氏名④電話番号を記入のうえ、名古屋能楽堂まで申し込む。
応募締切り　6月24日（火）消印有効
申し込み先　〒460・0001、名古屋市中区三の丸一丁目一番一号「名古屋能楽堂・能楽講座〈初級〉係
電話052・231・0088　FAX052・231・8755。

名古屋宝生会・衣斐正宜方　TEL／FAX　052・882・5600。

四十五周年記念
幸謡会

六月一日（日）十二時開演
岡崎城二の丸能楽堂

能組

仕舞　難波　村井邦子
仕舞　小鍛冶（クセ）　近藤幸子
仕舞　柏崎（道行）　芝崎恭子
仕舞　巻絹（キリ）　高取良昌
素謡　山姥　芝崎恭子　天野信義　高取良昌
舞囃子　猩々　石川晴子　河村総一郎　船戸昭弘　加藤洋輝　大野誠

素謡　求塚　石川晴子　近藤幸子　芝崎恭子
舞囃子　桜川　杉浦壽康　河村総一郎　船戸昭弘　大野誠
熊坂　三浦美由紀　河村総一郎　船戸昭弘　加藤洋輝　大野誠

番外仕舞　老松　近藤幸江　大槻文蔵
能　杜若（恋之舞）　飯冨雅介　後見　武富康之　大槻文蔵　地謡　村井邦子　星野路子　墨敬子　前野森子　郁子　塩谷壽子　恵

附祝言
［御来場歓迎］

主催　幸謡会　近藤幸江
岡崎市鴨田本町1113　TEL／FAX　0564・21・2529

若鯱研究発表会

六月二十一日（土）午前十時始
名古屋能楽堂

番組　○印　育成会会員

舞囃子（宝生）　加茂　○江渕陽三　大鼓　河村眞之介　小鼓　船戸昭弘　太鼓　加藤洋輝　笛　○山村友子　地謡　森下光　片桐真　内藤飛能　和久荘太郎　津田節武

舞囃子（宝生）　八島　○小林陸　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤嘉津幸　笛　○山村友子　地謡　片桐真　内藤飛能　和久荘太郎　津田節武

仕舞（宝生）　花月（キリ）　○片桐賢　○片桐遵　地謡　阪口泰子　竹内澄子　松浦祥子

狂言（和泉）　附子　シテ太郎冠者○大橋則夫　アド（次郎冠者）○中島知亮　アド（主人）今枝郁雄　後見　佐藤友彦

シテ（猩々）○角田尚香
能　猩々　ワキ（高風）○橋本叡　大鼓○河村裕一郎　小鼓　後藤孝一郎　太鼓　加藤洋輝　笛　○山村友子　地謡　村井邦子　今沢美和　前野郁子　八神孝充　久田勘鷗　松山幸親　後見　久田三津子　祖父江修一

附祝言
（十一時三十分頃終了予定）

主催　文化庁
共催　公益社団法人能楽協会　名古屋支部
入場無料
御来場歓迎

※平成二十六年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

若鯱能（第八回）

六月二十一日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

番組

能　巴（観世）　吉沢旭　高安勝久　井上松次郎　間　河村総一郎　後藤嘉津幸　竹市学

狂言（和泉）　隠狸　シテ　鹿島俊裕　アド　今枝郁雄　後見　佐藤友彦　後見　前野郁子　久田勘鷗　地謡　村井邦子　今沢美和　八神孝充　本田勲　高橋瞭一　松山幸親　清沢一政　祖父江修一

舞囃子（金剛）　安宅　大川麿美　後見　河村眞之介　後藤嘉津幸　地謡　田中春奈　鈴村昌美　竹市学　加藤かおる　伊藤雅子　羽多野良子

能（喜多）　小鍛冶　松井俊介　飯冨雅介　橋本佐藤幸融　間　河村眞之介　船戸昭弘　加藤洋輝　大野誠

附祝言

後見　長田長田　郷　地謡　伊藤英毅　高林昌司　福田勝　栗谷浩之　松井彬　高林呻二

午後四時頃終了予定

全自由席
一般二千円
学生（中学生以上）千円　小学生五百円
チケット取扱　名古屋能楽堂・各出演能楽師
プレイガイド：愛知芸術文化センター（地下二階）
ナディアパーク（七階）・中日ビル（一階）
名古屋市文化振興事業団チケットガイド／TEL（〇五二）二四九一九三八七

三交会大会

六月二十二日（日）開演午前十時
名古屋能楽堂

連吟　猩々　シテ　園さなえ　外山恵美　中村壽賀子　北澤育代　増永悦子　渡辺幹子　中村立子

素謡　野宮　坂井田セツ子　松井輝子
素謡　求塚　秋田恵美子　戸松花枝　岡佳代子

仕舞　田村（クセ）　外山恵美
仕舞　玉鬘　北澤育代
仕舞　鵜之段　渡辺幹子
仕舞　歌占（キリ）　中村立子

―正午頃―

能　羽衣　和合之舞　山田紗智子　杉江元　河村眞之介　林吉兵衛　鬼頭義命　鹿取希世

仕舞　雲林院（クセ）　秋田恵美子
仕舞　笠之段　増永悦子
仕舞　隅田川　岡佳代子
仕舞　天鼓　菊地翠子

―一時頃―

能　杜若　二ノ宮眞佐恵　高安勝久　上野義雄　成田達志　加藤洋輝　竹市学

舞囃子　養老（五段）　大輪真由美　河村眞之介　成田達志　加藤洋輝　藤田六郎兵衛

百萬　山内満智子　河村眞之介　成田達志　加藤洋輝　藤田六郎兵衛

熊坂　早川功一　河村眞之介　成田達志　鬼頭義命　竹市学

―二時半頃―

能　隅田川　子方　住友正宙　原田千恵子　高安勝久　杉江元　上野義雄　林吉兵衛　藤田六郎兵衛

仕舞　高砂　夏樹陽子
仕舞　大江山　藤井圓隆
仕舞　井筒　瀬戸勝治
仕舞　巴　藤井一美

（番組③面へつづく）

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥⑥

竹尾　邦太郎

拾参　「名古屋能楽鑑賞会」③

――承前――

第一六回　一九九七年（平成九年）九月二七日（土）二時始・名古屋能楽堂。

解説「本日の能・狂言を楽しむために」堂本正樹、狂言「魚説法」野村太一郎（新発意）野村万蔵（檀那）能「江口」浅見真州・浅見慈一・西村高夫・宝生　閑・野村万蔵・藤田大五郎・鵜沢速雄・亀井忠雄・野村四郎（地頭）観世銕之丞（後見）。

先回、名古屋能楽鑑賞会はそれまで本拠であった熱田神宮能楽殿を離れ、新設成った名古屋能楽堂の、開館当時一種社会問題化された感のある若松の鏡板舞台で初めて行なわれたが今回は二度目。先回に引き続き解説者として来名の堂本正樹、会報№17「観能だより」に示唆に富む論考「舞台条件の中の湯谷」を寄せて居るので参考のため次に転載する。

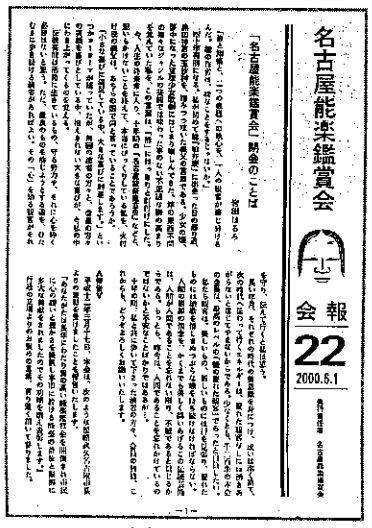
問題の「羽子板松」の前で、友枝昭世の見事な『熊野』を見た。筆者に取って、名古屋能楽堂での初めての立体総合舞台だった。

それまで、建造物としての能舞台は見ていた。そして危惧していたのである。その実際を体験し得た一日。

こうした場合、「芸が見事なので、後ろの松は全く気にならなかった」と云った形容をしたくなるが、これは矢張り嘘であろう。本当にそう思えたのは、舞も俄の村雨に差し止められる、結末近くなってからである。そこに至ると、それまで囃子方を含めた演者の身長に比して余りに大きく不自然だった若松も、やっと演技や音楽の中に包み込まれ、見えなくなった。背景がやっと、能の外へ出てくれたのである。

しかし、昭世のシテ湯谷が、つかの間の開放の喜びに明るく橋懸りを往還し、一ノ松の欄干にズッと出て、「明け行く跡の山見えて」と、大きく左手に扇を翳して空を見た時、折角のシテの喜悦の表情が、照明の関係で真っ暗になった。橋懸り出る型はクライマックス中のクライマックスで、歌舞伎で云えば花道の七三で見得を切った時、照明が消えたようなものだ。

これは国立能楽堂の照明設計と同じで、為に同じ欠点も背負い込んだものらしい。歌舞伎役者はこうした場合すぐ駄目を出し、ネジ込むが、能役者は面を掛けているので自覚が無い。現に友枝昭世にその事を聞いても、気が付かなかったと云っていた。…後日この日の録画が放送されたから、それで改めて実感されたろう。


名古屋能楽鑑賞会　会報 22　2000.6.1

会報最後号

能は本来戸外のものだから、こうした発揚を欄干ギワや角で型をする。中は暗く、自然光は前面にのみ恵まれるからだ。それが新劇式室内照明で逆効果になっているのである。

そこで今一度問題の「鏡板の松」に戻るが、常の老松でなく、敢えて描かれた奇異な「若松」が、演者の寸法を無視した大きさで、その釣り合いはさながら「ミクロの決死隊」である。漫画的なのだ。この効果は役者が配備され、動いて見てこその実感であろう。それにしても、若松というより昔の子供用の羽子板の裏に描いてあった門松のような「背景」は、やはり一時も早く排除しなくてはなるまい。能は、能役者の演ずる「能」を見るためにあるのだから。

さて友枝昭世の『湯谷』（本来遊女の源氏名は神仏の名を戴くことが多いので、これは『熊野』でなくてはならない。喜多流は遅く成立したので、この常識が分からなかったらしい）だが、個々の演技は欠点の無い造形的なものだった。袖や腰の直線が、真の丸さの集積と分かる、実態の見事さ…。

しかし、猫の唾液の付いたお碗でも、欠けた皿でも、辻留の料理なら美味しいだろうか？

また、会報№17には「アンケートより」「鏡板について」観能歴の長短は様々であろうが四二人の意見が収録されてをり概ね老松を好しとしている。

第一七回　一九九八年（平成一〇年）三月二八日（土）一時半始・名古屋能楽堂。

解説　演劇評論家・堂本正樹、狂言「鷺」野村万之丞（太郎冠者）野村万蔵（主）・松田弘之（笛）、能「弱法師（世阿弥自筆本による）」大槻文蔵（俊徳丸）斎藤信隆（俊徳丸ノ妻）宝生　閑（四天王寺ノ僧）坂苗　融（従僧）則久英志（従僧）野村万之丞（能力）野村万蔵（高安通俊）藤田六郎兵衛・曽和博朗・山本　孝・野村四郎（地頭）泉　嘉夫（後見）。

第一八回　一九九八年九月二三日（水・祝）一時半始・名古屋能楽堂。

解説　演出家・村　尚也、狂言「千切木」野村萬斎（太郎）野村小三郎（太郎ノ妻）石田幸雄（当屋）月崎晴夫（太郎冠者）小川七作・松田高義・井上靖浩・佐藤融（立衆）野村又三郎（後見）、能「朝長」梅若万紀夫・梅若紀長・梅若久紀・工藤和哉・野村萬斎・藤田朝太郎・大倉源次郎・柿原弘和・金春国和・伊藤嘉章（地頭）山中義滋（後見）。

第一九回　一九九九年（平成一一年三月二七日（土）一時半始・名古屋能楽堂。

解説　能楽評論家・西　哲生、狂言「清水」茂山千作・茂山千五郎、能「隅田川」粟谷菊生・粟谷尚生（子方）宝生　閑・宝生欣哉（船客）一噌仙幸・北村　治・柿原崇志・友枝昭世（地頭）粟谷辰三（後見）。

この年、会報№20（一九九九・三・一）に名古屋能楽鑑賞会が次回で閉会となる旨「事務局より」として次のように報じられる。

◇二十回で閉会する本会事務局へ多くの方よりお便りを頂き、感慨無量です。そして、最後まで充実した会を開催できますことを嬉しく思います。会員の皆様の御協力の下、静かな足どりで此処まで来たという思いをかみしめております。

◇鏡板は、一年毎に、老・若と入れ替えることは、ほぼ確実のようです。せめて、主催者、演者の希望により入れ替えていただけるよう、陳情したいものです。

◇したがって、二十回は若松の鏡板で開催する事になります。秋の名曲「野宮」は、あのにぎやかな若松の鏡板を背景にして無理ではないかと考え、梅若六郎氏と相談の上「楊貴妃」に変更することになりました。今、絢爛と芸の花咲き誇る梅若六郎氏に「若松」に負けじと、豪華な「楊貴妃」を舞っていただきましょう。そして狂言「若菜」で春をおみやげにしていただきます。ご期待下さい。

第二〇回　名古屋能楽鑑賞会納会

二〇〇〇年（平成一二年）一月八日（土）一時半始・名古屋能楽堂。

解説　東京国立文化財研究所・音楽舞踊研究室長・羽田　昶、能「楊貴妃・玉簾」梅若六郎・宝生　閑・山本則俊・一噌仙幸・大倉源次郎・安福建雄・山本順之（地頭）山本勝一（後見）、狂言「若菜」山本東次郎（大名）山本則俊（太郎冠者）山本則重（次郎冠者）山本則直（大原女・立頭）山本泰太郎・山本則孝・山本則秀・遠藤博義・若松　隆（大原女・立衆）大島寛治（後見）一噌仙幸・大倉源次郎・安福建雄・上田　悟・山本東次郎（台本作成演出）山本則直（節付）復曲研究（小山弘志・小笠原恭子・山本東次郎）。

全二〇回の能・上演曲目のシテとワキ

修羅物

「重衡」浅見真州・宝生　閑

「清経・恋ノ音取」

野村四郎・宝生　閑

「朝長」梅若万紀夫・工藤和哉

鬘物

「松風・見留」

山本順之・宝生　閑

「井筒」片山九郎右衛門・宝生　閑

「江口」浅見真州・宝生　閑

「楊貴妃」梅若六郎・宝生　閑

「野宮」近藤乾之助・宝生　閑

「羽衣・盤渉」

豊嶋三千春・宝生　閑

「湯谷」友枝昭世・宝生　閑

四番目物

「恋重荷」観世銕之丞・西村欽也

「卒都婆小町」

梅田邦久・中村弥三郎

「弱法師」世阿弥自筆本による

大槻文蔵・宝生　閑

「高野物狂」

近藤乾之助・福王茂十郎

「道成寺」本田光洋・宝生　閑

「邯鄲・傘之出」

友枝昭世・宝生　閑

「鬼界島」粟谷菊生・宝生　閑

「隅田川」粟谷菊生・宝生　閑

切能物

「絃上・琵琶之会釈」

梅若六郎・宝生欣哉

「翁」粟谷能夫・山本東次郎

（三番三）山本則直（千歳）

狂言・全三三番の内訳

「鱸包丁」東次郎「節分」東次郎「漕ぎ川」千五郎「素袍落」千五郎「八句連歌」東次郎「縄綯」千之丞「空腕」千作「昆布売」忠三郎「栗焼」幸四郎「武悪」千之丞「二人袴」泰太郎「清水」千作「若菜」東次郎、以上大蔵流13。

「鈍太郎」又三郎「萩大名」万之丞「墨塗」祐一「川上」万作「木六駄」万作「悪太郎」万蔵「棒縛」万蔵「魚説法」太一郎「鷺」万之丞「千切木」萬斎、以上和泉流10。

惜しまれつゝ納会となった名古屋能楽鑑賞会の特色の一つは毎回発行される会報である。これまでもグラビヤ紙を用い舞台写真・解説識者による随想などを収めた「中日五流能」のような立派なパンフレットもあったが、本会は写真は無くとも加えて見所からの観能だより・アンケート（曲の内容・会の活動などについての忌憚の無い意見）が洩れなく収録されてをり、各回毎に会計報告がなされていることが異色、見事。21・22号には能楽師からも多数賛辞が寄せられてをり、改めて此の会の存在意識の大きかったことを知らされる。

平成一二年三月一七日、市の文化に多大な寄与があった功績により岩田はるみ代表が市長表彰を受けた。

素謡　葵上　菊地　翔子　伊藤　和美　藤井　圓隆　早川　功一　藤井　一美

素謡　山姥　藤吉　幸子　名和　一孝

番外仕舞　兼平　久田　勘鷗

女郎花　久田三津子

車僧　久田勘吉郎

附祝言

「御来場歓迎」

（三交会会番組つづき）

―（終了予定五時半頃）―

◆春の舞台から◆

「名古屋能楽堂正月特別公演」「豊田市能楽堂新春公演」「第一五回　万作を観る会」

竹尾邦太郎

「翁」　正月恒例で注連の張られた清々しい舞台に瑞気満ち、いかにも謹賀新年の雰囲気。先づ露払いの「千歳」は久田勘吉郎、緊張のうちにも颯爽として活き〳〵した力強さで（写真）晴れ〳〵と舞い納めると、「翁」は一昨年に続き久田勘鷗。ゆったりした所作重々しく厳粛に勤め、左袖被キ扇で面を翳スいわゆる翁の型に風格（写真）。「三番叟」は井上松次郎、揉之段の溢れる力感は踏む足拍子の重み（写真）、遠くからも吐く息の聞かれる熱演、黒色尉の面を掛けた鈴之段は種蒔キの型に素朴な味。なお、小鼓は頭取に曽和尚靖、脇鼓に成田達志・古田知英、と京阪神から幸流の来演が珍しい。（1時間）

「三本柱」　山に伐り置いた三本の材を太郎（アド融）次郎（アド俊裕）三郎（アド郁雄）の三冠者に一人宛二

『名古屋能楽堂　正月特別公演』
「翁・千歳」
久田勘吉郎
（杉浦賢治撮影）

『名古屋能楽堂　正月特別公演』
「翁」
久田勘鷗
（杉浦賢治撮影）

本を持ち帰れ、と謎を掛けて言い付ける大果報者（シテ弘之）、成り行きや如何と待ち受けるところ、三冠者は太郎冠者の才覚で無事謎を解き、只持ち帰るだけでは能が無いと、各々が二本の材を担げた態を囃子物に、と。〽三本の柱を三人の者どもが二本づつ持ったり、〽げにもさありやよがりもさうよの、と賑やかに囃しながらやって来るを（写真）みて呵々大笑の大果報者（写真）、三冠者を統べて祝言の極、見事。（25分）

『名古屋能楽堂　正月特別公演』
「翁　三番叟」
井上松次郎
（杉浦賢治撮影）

「高砂」

新年、折角「翁」が厳修されるのならば式能の形状に則りアタマだけでも「翁」本脇能「高砂」脇狂言「三本柱」の順に番組を並べて欲しいもの。出来れば「翁」と「高砂」のシテは同一人に（諸般の事情だろうが当今この形めったにみられず、従って翁付の登場楽に音取・置鼓も聞かれないのは残念）。――閑話休題――

阿蘇宮ノ神主（ワキ勝久）、上洛の途次、高砂の浦で老夫婦（シテ一政・ツレ幸親、実は住吉・高砂の松ノ精）に遇う。二人が相生の松のこと話せば、離れ〴〵に住むという二人を不審するワキに、〽万里を隔つれども、互に通じ合う夫婦の〽道は遠からず、とツレ。当代の単身赴任、遠距離恋愛も思われて面白い。更にワキの問いに相生の松、高砂の松のめでたさを説き、クセは上ゲ端あと、〽霜は置けども、とシテは竹杷（サラエ）を取って立ち、〽立ち寄る蔭の朝夕に〽掻けども落葉の、と左へ二度、取り直して右へ一度サラエを使い、〽相生の松ぞめでたき、と松の緑を言祝ぎワキへ進み正中へ、下居から直ルと後見はシテの肩下ロス。ワキを代弁する地（邦弘・修一・嘉宏ら）と掛合に〽相生の松の精、〽夫婦と現じ来りたり、とシテ・ツレ同吟に素姓を明かし共にワキへアシラフと、シテは〽住吉に先づ行きて、の地で扇を上げて橋懸の方を指示、立つと正先へ〽小舟にうち乗りて、と乗込拍子、〽追風に任せつつ、と両袖拡げ帆に風を孕ませる心に中入へ。次いでワキの従者（ワキツレ元）に呼び出されて高砂の浦人（アヒ友彦、士烏帽子・括袴・掛素袍の姿）が高砂の松の子細を居語に、加えて、住吉へ渡るには某の新造船で、と勧めて退くと後場。

世上、婚礼に謡われ人口に膾炙する〽高砂や、の船路を往くワキ・ワキツレの待謡が済すむと出端ノ囃子（誠・嘉津幸・眞野介・洋輝）でする〳〵と一ノ松へ降臨の住吉明神（後シテ一政）地の〽西の海、で舞台に入ると地と掛合に早春の景に親しみ、〽二月の雪、と狩衣の左袖拡げるところ雪を受け損ねた様にみえたが神舞へ。二段目にきりりと袖巻キ慎重に舞上げ、キリは終りが見えるとて地と相俟ち元気溌剌の印象、爽やか。（1時間29分・平成26年1月3日・名古屋能楽堂正月特別公演）

『名古屋能楽堂　正月特別公演』「三本柱」
左から佐藤融、今枝郁雄、鹿島俊裕
（杉浦賢治撮影）

『名古屋能楽堂　正月特別公演』
「三本柱」
大野弘之
（杉浦賢治撮影）

『名古屋能楽堂　正月特別公演』「高砂」
左から清沢一政、松山幸親、楢元正樹
（杉浦賢治撮影）

「独翁」

近江の日吉大社に元旦の払暁、現在も京都・片山家の当主が出仕して行われる祭事。シテ翁ひとりが装束をつけて地謡の数人と掛合に神歌（四日之式）を謡い乍ら翁舞を舞う。今回は昔、専ら近江猿楽の山階座が出仕して居た所縁で、末裔たる山階家へ養嗣子に入った観世芳宏改め山階弥右衛門が勤める。

舞台周囲に立てられる燭台に、幕と切戸から一人づつ出た楽屋ハタラキが蝋燭に点火するが、森厳な日吉大社の杜の社殿の、身の引き締まるような、冷え〴〵と粛然とした雰囲気は望むべくもなかった。

「戎毘沙門」

美人の娘に富のある男を聟に取らせたい有徳人（アド健太郎）、神仏を頼り鞍馬と西宮に祈願すれば、先づ聟募集の高札を立てよと。早速応募してきたのは他ならぬ鞍馬の毘沙門（アド隆行）、相前後して西宮の戎三郎（シテ又三郎）も。

毘沙門が、自身の聟入の用に戎は魚を商いに来たのかと揶揄すれば、戎も、自分の聟入りには沢山魚が食されるゆえ毘沙は山椒の皮を売りに来たのかと雑ぜ返す。因に『和漢三才図絵』には「椒樹皮山城鞍馬ノ産ハ皮薄く味勝レリ」とある。蜜柑の皮を乾燥させた陳皮（ちんぴ）同様、食べすぎの健胃剤になるのであろう。

互いに雑言は無用と果報者に窘められ、何れにせよ聟は富貴で位の高い方とあって此の度は系図争いに。自分の身上を自分では言い難いゆえ互いに相手の身上を、とは言い条まづ自己宣伝してからサブを誹謗するビシャ、負けじと己れ大事からビシャを中傷するサブ、埒が明かずに有徳人、〽誠の聟になりたくは宝を我にたび給へ、と。各々舞働を舞い、ビシャは鉾を、サブは魚ごと釣針を与えるが、〽尚も舅に欲しがりて（聟に入り有徳人に舅になって欲しくて）、更にビシャは冠を、サブは烏帽子を与え連舞に、〽何れも劣らぬ福天なれば此所にこそ納まりけれ、と留メ。結局、決着つかずということか。山に鞍馬寺の毘沙門天、海には西宮神社の蛭子命、仏と神が気易くビシャ、サブと呼び合い美人の娘を張り合う戯画化された世界の親近感。又三郎の元気に負けじと隆行、有徳人らしからぬドライな健太郎、又三郎家の結束力が発揮される。囃子は学・孝一郎・眞之介・元伯、地頭は高義。

「小鍛冶」

勅使（ワキツレ雅人）から御剣を打つようにとの宣旨を受けて三条宗近（ワキ和幸）、優れた相槌が居なければ、と躊躇するが勅命とあれば奇跡を恃むばかり。氏神の稲荷明神に赴けば、曰くありげな童子（シテ喜正）から先刻承知とばかりに自分の名を呼び掛けられ、御剣のことまでも指摘されて訝る。シテは代弁の地（芳伸・勘鷗・義也ら）で〽ただ頼め、と全てを任せよの心、クリ・サシ・クセに和漢の名剣の威徳を説く。クセでは日本武尊が枯野で賊に囲まれて草薙剣を揮い、退治した故事の様をみせるシテ、〽遠山にかゝる薄雪を、右に見やり、三ノ上ゲ端〽尊は剣を抜いて、と扇を剣に擬してスックと立つと猛火を薙ぎ払い、きび〳〵した切れのよい型の連続に鋭気颯爽たるところをみせ充実ぶりを。中入地、〽通力の身を変じ、て向き直り、〽夕雲の稲荷山、と消えるところには変化の気配が。宗近ノ家人（アヒ又三郎）が常座で立シャベリに御剣鍛錬に纏わる事ども語って退くと後場。

正先に注連を張った一畳台、士烏帽子を風折烏帽子になど装束を改めて後ワキ、ノットで台上、幣を祓って御剣の成就を神々に祈念し一旦台を下りると、早笛（学・孝一郎・眞之介・元伯）で稲荷明神ノ化身霊狐（後シテ）が槌を指シへ如何にや宗近、と舞台へ走り込み、舞働の敏捷、舞上げて〽童男壇の、と台上に。急かされるかに台に上るワキ、刀身を取り出しへはったと打てば、〽ちゃうと打つ、シテ、相槌の気合小気味よくシテ・ワキ息の合った好舞台だった。（51分・1月13日・豊田市能楽堂　新春能）

「木六駄」

雪の日、都の伯父へ歳暮の木六駄・炭六駄を届けるよう主（アド連）に言い付かる太郎冠者（シテ万作）、独りで牛一二頭を追い、更に角樽まで持たされる不満をあまりくどくど言わず、お仕着せの布子の綿を多めに、足袋も穿かせるとあって割にあっさり請け合うのも愚直な雇い人気質か。主が退き、太郎冠者も身拵えに一旦中入すると代って生まれつき虚弱で百姓が出来ず、峠で茶を商っての渡世という茶屋（アド萬斎）、降る雪に街道も人少なであろうが先づ茶を沸かして、と座着くと峠の下から牛を追う声が。

着付の熨斗目、半袴・肩衣を括袴・布羽織に替え三尺帯を締め、ホクソ頭巾に雪の付着した蓑笠つけて十二頭の牛を追って来る太郎冠者。笞を巧みに使い「サセイホウセイ、チヤウ〳〵〳〵」と嶮路を往くところ、路を外れたり、沓を履き切ったり、群れて進まなかったりを、その都度、人に接する様に斑やら飴牛やら小黒などと牛を愛称で呼びかけ、話しかけ、叱りつけたりと大童、就中、沓を履き替えさせるところなど、拗ねて嫌がる牛を叱り宥める辺り、正に其処に牛が見えるか。正中で笠に左手をやり「降るは降るは」と、空を見上げ、やっと峠に辿り着いた心は激しい息使いも聞かれて如実。即、酒にありつきたい太郎冠者に「酒は切らいた」と無情にも茶屋、「泳ぎつく様に来たが」と、呆けたように落胆の太郎冠者、身につまされる。太郎冠者の余りの虚脱ぶりにふと角樽に目を留めた茶屋が問えば、あっけらかんと「さけぢゃ」と。頑なに主の酒に拘泥する太郎冠者、唆されてというよりは「命あっての事ぢゃ」と分れば勧められ、一度栓が抜かれゝば一瀉千里の勢い。茶屋が燗をつけようと言うと「飲むうちに温まるわいなう」と干すが唯ひいやりとしたゞけと。二杯目は躊躇するも「一つ飲むも二つ飲むも同じ事ぢゃ」と舌鼓を打って飲めば茶屋にも勧めざっと酒盛に。御相伴に与って茶屋、盃も進み促されて肴に紅葉狩の一節へ所は山路の菊の酒、とくると太郎冠者と顔見合わせ、〽何かは苦しかるべき、と同吟して大声するところ、所を得た詩趣も横溢、素晴らしい。興がる侭に太郎冠者、茶屋から一さしと煽られゝば、茶屋に囃させ掛合に酔歩舞う鶉舞、矢を番え鶉に近寄る様の真剣味も〽鳥は残らず逃げければ〽鶉な（鳴・無）くなる深草山よ、と自嘲も。更に重ねる盃、水を足しても酒の匂いのする水にしかならない、となれば残りを飲み尽し気もさば〳〵と太郎冠者、下山に木一駄を茶屋に進上、残り五駄は小遣にするので売り払って、と。

蓑笠脱ぎ牛共も半減、身軽になり火照った顔に雪も気持ちよく、鼻歌気分は〽大原木召され候へ、と上機嫌に伯父御（アド幸雄）宅へ。案内を乞い主からの状を渡せば炭六駄は目につくが木六駄が無いと。状を見せられて太郎冠者、「これは筆者の誤りぢゃ」と。先頃、太郎冠者は木六駄と改名したので「木六駄に炭六駄」は「木六駄に、炭六駄」のこと、言い逃れんとするも酒に及んでは通じず、「真直ぐに言へ」と太刀に手を掛けられては万事休す、余りの寒さに「ごぶ〳〵と致しました」と。

悴む手の指が盃を手にするうち緩んでくる辺り万作の表現力は流石。（50分）

「弓矢太郎」

異端児が苛めの対象にされるのは昔も今も。

天神講に遅参の太郎（シテ萬斎）、当屋（アド博治）から「これは由々しいお出立ちで御座る」と冷かされるも意に介せず、弓矢を手挟むのは田畑荒す鳥獣を射、婦人老幼の難を救うため、と。講中の面々（立衆、悠樹・和憲・豪・聡史）は、太郎が弓矢太郎などと名乗って武張った異装をするのも所詮は臆病のカムフラージュ、怯えさせてやろうと狐に纏わる玉藻ノ前の怪異譚を。動じないとみて面々、天神の森で巨大な鬼が出たこと縷々語れば、聞くうち目を回し失神する太郎。醒めて面々の失笑を買っていると知れば向きになり、眼気がさしただけ、起して呉れゝば弓矢で鬼を、と臆病を糊塗して体面をとり繕う厚顔。「あの空腕立を聞かっしゃれ」と面々、「鬼は恐ろしうないか」と返答を迫り、ここぞと肝試しに太郎を天神の森へ行かせることに。行くだけでなく証に此の扇を松の枝に掛けてきたら鳥目百貫の褒美を貰えるとあって妻に嗾けられ、怖さより欲か、身支度に一旦中入。

怖さも自身鬼にして同化してしまえば怖くないものか、鬼に扮し、丑ノ刻に間があると闇に紛れて太郎。一方、鬼の存在の信憑性のため行き掛り上、鬼に扮した当屋、ばったり出くわせば共に驚愕、失神するも太郎が先に醒めて逃げ出すと、松明灯した大勢の声。様子や如何と太郎が隠れると、軈てやって来た面々が失神の当屋を見つけ、まことに鬼が出た、と。謀られたと知って太郎、飛び出して慌てふためく面々を脅す。歯切れよい萬斎の口跡。（43分・1月25日・第15回万作を観る会）

宝生流「雷電」の上演

名古屋宝生会は、六月十五日（日）、本年度第三回定式能を開催する。（今号①面番組掲載）

上演の能「雷電」について、案内のなかで次のように解説している。

◆宝生流では、能に堪能な加賀藩主、前田斉泰（なりやす）が、前田家の祖先である菅原道真公を鳴る「雷電」をはばかったので十五代宗家宝生友千（ともゆき）が早舞物に改作した「来電」（らいでん）を現行曲として演能していますが、二十代宗家宝生和英（かずふさ）により「来電」は試演能として復曲され、今回は4回目の上演と記されている。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1300円
郵送の場合　1年　2000円
一　部　120円

NHK放送予定（平成26年6～7月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（日曜日6時～6時55分）

6月29日　「百　萬」（観世流）　梅若　玄祥
7月6日　ワールドカップ放送のため中止
7月13日　「通　盛」（観世流）　観世　恭秀
7月20日　「邯　鄲」（喜多流）　高林白牛口二
7月27日　「草紙洗」（宝生流）　当山　孝道

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［6月］
22日(日)　三交会　（無料）

［7月］
5日(土)　青陽会定式能　（有料）（番組①面）
6日(日)　名古屋能楽堂七月定例公演　（有料）（番組①面）
8日(火)9日(水)　名古屋能楽堂小中学生芸術鑑賞会　（関係者）
11日(金)　名古屋能楽同好会夏の発表会　（無料）
13日(日)　第15回記念御洒落名匠狂言会　（有料）（番組①面）
19日(土)　まいまい狂言会　（全席指定）（有料）
20日(日)　花の会名古屋特別公演　（有料）
21日(月)　狂言　也留舞会　（無料）
23日(水)24日(木)　名古屋能楽堂夏休み親子能楽堂まつり　（関係者）
27日(日)　第6回全国学生能楽コンクール　（無料）

名古屋名駅薪能

能「巴」半能「融」

7月27日　JR名駅タワーズ・ガーデン特設会場

「名古屋名駅薪能」は、ことし第13回をむかえ、きたる七月二十七日（日）、観世流宗家・観世清河寿師が来演して、JR名古屋駅タワーズガーデン特設会場（JR名古屋駅桜通口駅前広場）で開催される。開場午後六時、開演午後七時。

能組
能　「巴」（観世清河寿）
仕舞　「班　女」（久田三津子）
狂言　「魚説法」（井上松次郎）
半能　「融」　思立之出・酌之舞（久田勘鷗）

――詳細②面掲載

入場は無料、ただし整理券六百枚（抽選）、自由席立見含六百名

整理券の応募方法は、往復はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、希望席数（1通2名まで）を記入のうえ、次の宛先へ送る。応募締切7月10日。

当選発表は発送をもって代える。

宛先　〒453・0024名古屋市中村区名楽町4－16　大黒寺内、名古屋名駅薪能実行委員会事務局。電話052・482・3580　自由席は当日先着分

ホームページからの応募　http//www.takigino.jp

主催　財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会、後援・愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県芸術文化協会、愛知県観光協会、NHK、民放、報道関係各社ほか。

信州安曇野薪能

8月23日　龍門渕公園

信州安曇野薪能は、本年で二十四回目の開催となり、長野県内では屈指の実績を誇り、豪華な出演者による能舞台は、毎年県内外の大勢の愛好者から好評を博している。

信州安曇野薪能実行委員会（会長・宮澤宗弘安曇野市長）では、本年の演能は、安曇野文化大賞受賞記念、安曇野市功労者表彰受賞記念、世阿弥生誕六五〇年記念をかかげて、八月二十三日（土）、安曇野市明科龍門渕公園特設能舞台で開催される。（全席自由）午後五時三十分開演、午後四時開場、午後八時三十分頃終了予定。雨天の場合は明科体育館。

演能は、人間国宝・片山幽雪、野村萬両氏が来演、能組は次のとおり。

新作能「恋の龍門淵」（青木道善、宝生欣哉）
狂言「佐渡狐」（野村萬、野村太一郎、野村万蔵）
舞囃子「山姥」（片山幽雪）
能「天鼓」弄鼓之舞（片山九郎右衛門、宝生欣哉）

午後四時二十分から市内の小・中学生による能楽発表が行われる。

入場料＝一般前売三千円（当日三千五百円）学生・大学生千円、高校生以下五百円

第13回名古屋名駅薪能の開催に当たって

東海旅客鉄道株式会社
代表取締役会長　葛西敬之

名古屋の夏を彩る名古屋名駅薪能の開催を今年も迎えられることを心よりお祝い申し上げます。

大都市名古屋の玄関口、JR名古屋駅において、日本の伝統芸能である「能」を演じるこのユニークな催しも着実に回を重ね、今年で13回目となります。これもひとえに一般財団法人観世文庫や名古屋名駅薪能実行委員会をはじめ、地元の皆様方のご尽力の賜物と感謝致しております。

併せまして平成21年から始まりました名古屋名駅薪能全国学生能楽コンクールも今年で6回目を数えます。名駅薪能が更なる広がりを見せていることに対し協賛する一企業として大変嬉しく存じます。

この大変意義深い行事が今後も多くの皆様に親しまれることを期待いたします。

演能案内

青陽会定式能（第58期第2回）

七月五日（土）十二時半開演
名古屋能楽堂

能組

能　女郎花　角田清尚　沢一政
杉江　元
間　今枝　郁雄
後見　村井邦子　前野郁子
地謡　伊藤裕貴　吉沢孝旭　八神孝充　今沢美和　松山幸親　武田大志　梅田邦久　高橋瞭一

仕舞　雲雀山　瀬戸洋子
花筐　狂言　前野郁子
地謡　村井邦子　久田三津子　今沢美和　星野路子

狂言　茶壺　佐藤融
井上松次郎　大橋則夫
後見　佐藤友彦

仕舞　竹生島　伊藤裕貴
三輪　高橋瞭一
邯鄲　舞アト　八神孝充
地謡　吉沢雅旭　山中武志　久田勘鷗　松山幸親

能　殺生石　久田勘吉郎
高安勝久
間　鹿島俊裕
後見　久田三津子　久田勘鷗
地謡　伊藤裕貴　瀬戸洋子　星野路子　前野郁子　加賀敏彦　山中雅志　祖父江修一　武田大志

附祝言
主催　青陽会

［チケット販売］
前売券　二五〇〇円、当日券　三〇〇〇円
販売　チケットぴあ、サークルKサンクス、セブン・イレブン
お問合せ　名古屋市名東区一社三の一六二　久田勘鷗事務所　電話〇五二－七三四－六一九二

名古屋能楽堂七月定例公演

―市民能楽セミナー―

七月六日（日）午後二時始
名古屋能楽堂

解説　「三輪」について　長田　驍

狂言　水掛聟　鹿島俊裕　アド　大野弘之　アド　佐藤融
長田　驍
後見　佐藤友彦

能　三輪（喜多流）　飯冨雅介
間　今枝郁雄
後見　長田郷　松井俊介
地謡　福田昌勝　高林司　佐藤寛奈　伊藤英毅　大島輝久　粟谷充雄　高林呻二　粟谷浩之　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤洋輝　大野誠

前売　指定　三一〇〇円　自由　一般　二一〇〇円　自由席　当日　五〇〇円増
主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）　能楽協会名古屋支部
電話　052・231・0088

第十五回記念　御洒落（おしゃらく）　名匠狂言会

七月十三日（日）十三時三十分開演
名古屋能楽堂

引敷聟　聟　今枝郁雄　太郎冠者　大野弘之　何某　大橋則夫　鹿島俊裕
（後見　井上松次郎）

瓜盗人　盗人　佐藤友彦　畑主　佐藤融　笛　大野誠
（後見　鹿島俊裕）

武悪　主人　善竹十郎　武悪　茂山良暢　太郎冠者　善竹富太郎
（後見　善竹大二郎）

金津地蔵　親　井上松次郎　子　井上蒼大　田舎者　佐藤融　在所の衆　今枝郁雄　在所の衆　中島知亮　在所の衆　大橋則夫　在所の衆　鹿島俊裕
（後見　大野弘之）

（終演予定　十六時三十分）

［前売券］
S席（正面）七〇〇〇円
A席（脇正面）五〇〇〇円
B席（中正面）四〇〇〇円
当日券は千円高
［チケット取扱い］
チケットぴあ　0570・02・9999（Pコード437・562）
文化振興事業団　052・249・9387
能楽堂　052・231・0088
狂言共同社　834・8607、911・8784

主催　狂言共同社

いわむら城趾薪能

恵那市制10周年記念

8月23日　新作能「覇王」

恵那市制10周年を記念して、いわむら城趾薪能実行委員会では、八月二十三日（土）、岩村城藩主邸趾で、「第30回いわむら城趾薪能」を公演する。

演能は、新作能「覇王」。薪能三十周年を記念して、宝生流・辰巳満次郎師の監修、椙山女学園大学・飯塚恵理人教授の作による女城主の里・岩村の歴史を題材とした新作能で、「日本一〇〇名城」に選定された岩村城趾でくりひろげられる岐阜県と岩村を愛した先人たちへの鎮魂歌である。

とき八月二十三日（土）午後四時半開場・午後五時三十分開演雨天の場合・恵那特別支援学校体育館。

番組　舞囃子「枕慈童」シテ玉井博祐

火入れ

仕舞「草紙洗小野」竹内澄子

「砧」前・石黒孝

狂言「萩大名」大名・茂山千五郎、太郎冠者・島田洋海、庭の亭主・茂山七五三

新作能「覇王」　信長・辰巳満次郎、修理夫人・和久荘太郎、森蘭丸・辰巳大二郎、家臣・茂山逸平、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・玉井博祐、石黒実都、地謡・廣島克栄、石黒孝、山内崇生、澤田宏司、内藤飛能、片桐真、清水達郎、中村成利

後援　恵那市、恵那市教育委員会、恵那市観光協会岩村支部など

チケット販売　前売三〇〇〇円、当日三五〇〇円、中・高生一〇〇〇円

チケット取扱所／町並ふれあいの館（電0573・43・4622）恵那文化センター（電0573・25・5121）チケットぴあ（電0570・02・999 9）など

武蔵野大学能楽センター講座

7月10日から4回開講

武蔵野大学では、平成26年度能楽資料センター公開講座として、「能と妖怪（もののけ）―異界への招待」をテーマに、七月十日から四セッションを開催する。

〔第1回〕七月十日（木）「妖怪とお化け」　徳田和夫（学習院女子大学教授）

〔第2回〕七月三十一日（木）「鵺と頼政」平家物語と能に見る妖怪」観世鐵之丞（観世流能楽師）、池田英悟（武蔵野大学講師）

〔第3回〕十月九日（木）「能に登場する御霊たち」―菅原道真と崇徳上皇―梅若紀彰（観世流能楽師）三田誠広（武蔵野大学文学部長）

〔第4回〕十月三十日（木）「能の鬼女」―般若と山姥―鵜澤光（観世流能楽師）西哲生（能楽評論家）

時間／午後二時三十分～午後四時十分、会場／武蔵野キャンパス5号館グリーンホール（西東京市新町一―一―二〇）

聴講無料（予約不要）

問い合わせ／武蔵野大学能楽資料センター（電話042・468・9742）

実盛供養六百年「異界と能」シリーズ

金沢能楽美術館

金沢能楽美術館では、〝異界と能シリーズⅠ・幽霊と能〟をテーマに、六月六日から九月二十八日（日）まで「実盛」のテーマで舞囃子奉納　実盛ゆかりの謡跡見学、ミニ講座、写謡の会を開催するほか、夜間無料開館、別会能特別講座（七月五日・講師：宝生流シテ方・藪俊彦氏）能楽の夕べ・プレ講座、能の楽器体験を企画、開催する。

今年は、遊行上人実盛供養六〇〇年（時宗遊行寺十四代・太空上人が十念を授けて成仏させた応永二十一年（一四一四年）から六百年）となり、地元の江沼神社に伝来した前田家旧蔵の能面・能装束なども紹介される。

休館日　月曜日・祝日の場合はその次の平日、金沢能楽美術館（金沢市広坂一―二―二五、電話〇七六・二二〇・二七九〇、FAX〇七六・二二〇・二七九一）

第7回　まいまい狂言会

七月十九日（土）十時三十分開演

名古屋能楽堂

狂言　**口眞似**　野村信朗　野村さよ　ほか

狂言　**柿山伏**　野村又三郎　野口隆行

親子で楽しむワークショップ

狂言でまいろう!!

司会　原田さとみ

主催　まいまい狂言会

お問い合せ

マザーリーフ内

（まいまい狂言会）

電話　080・1618・9713

第13回　名古屋名駅薪能

七月二十七日（日）午後六時開演

JR名古屋駅タワーズガーデン特設会場

料金　二〇〇〇円

全席指定

能組

能　**巴**　替装束　間狂言　野村又三郎

観世清河寿　高安勝久　河村眞之介　久田舜一郎　藤田六郎兵衛

後見　上田貴弘　坂口貴信　地謡　上田宣照　吉沢孝旭　八神光充　松山幸親　林宗一郎　上田公威　観世芳伸　大西礼久

仕舞　班女　舞・アト　久田三津子

狂言　**魚説法**　井上松次郎　鹿島俊裕　後見　今枝郁雄

半能　**融**　思立之出　酌之舞　久田勘鬼　高安勝久　河村眞之介　久田舜一郎　加藤洋輝　藤田六郎兵衛

後見　観世芳伸　林宗一郎　地謡　久田勘吉郎　上田彰敏　関根祥丸　八神孝充　坂口貴信　大西礼久　上田貴弘　森本哲郎

（記事①面）

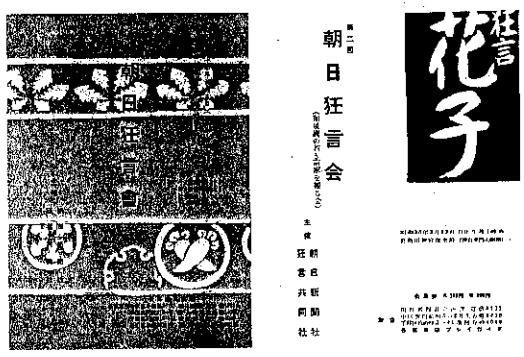
当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥⑦

竹尾　邦太郎

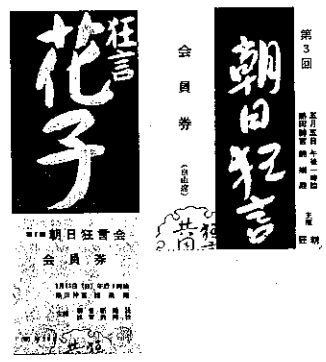
拾四　「朝日狂言会」①

昭和三四年（一九五九）四月五日（日）、表記の会が朝日新聞社と狂言共同社との主催で熱田神宮能楽殿を舞台に発足する。肝煎りとしてその推進に関わった朝日新聞名古屋本社企画課長・前田満穂は第一回番組の案内・紹介リーフレット（写真）に「朝日狂言会について」と題し次のように述べている。

一時「狂言ブーム」ということがいわれた。このごろは、そうしたブーム呼ばわりをする者はいなくなったようだが、これは狂言への関心が薄れたということではあるまい。むしろ、古典芸能の中に占める狂言の位置が安定した証拠と見る方が妥当ではあるまいか。



番組・曲目解説の案内リーフレットの表紙



第1回より第3回までの会員券

能という歌舞劇の影響が、歌舞伎の発展に大きく作用したことはいうまでもないが、そのためにこれまで本筋からはずれてママ子扱いをされていた狂言という科（しぐさ）白（せりふ）劇が、現代劇または新劇の発達に伴って、正当な評価をうけるようになった……というのが「狂言ブーム」のもつ意義だと思う。いまでは、演劇関係者は、俳優といわず演出家といわず、もはや狂言を無視できないところまで来ている。

名古屋は和泉流の本城である。古来市民の狂言への関心の高いのも当然である。それでいて、限られた愛好者以外、広く大衆を対象とした公開の狂言会が開かれること、余りに少いのはどうしたことか。狂言共同社の「狂言の夕」が催されるようになったのも、ごく最近のことである。いろんな意味で、こうした催しがもっともっとあっていい。それは古典の理解に、現代芸能への反省に役立つこと多大であろう。朝日新聞社が狂言共同社と協力して「朝日狂言会」を催すのもこの趣旨に外ならない。広く各位の御支援を願って止まない。

また、番組の曲目解説をした狂言共同社同人・歌村彦四郎は狂言共同社の機関誌『狂言』の紙説コラム「狂言人語」で第一回朝日狂言会を取り上げる。

四月五日の朝日狂言会には、旧藩主として当地和泉流狂言とつながりの深い、徳川義親氏がお話をして下さいますことは、誠に意義のあること、存じております。

又、狂言界の最長老として唯一人の芸術院賞受賞者、無形文化財、大蔵流の茂山弥五郎師が、御老体にかかわらず一家を引連れての御来演は、まことに弥五郎師の狂言を見る会と言っても差しつかえないと思います。地元の共同社々中も一生懸命に努力いたしております、何卒御鑑賞の程をお願いいたします。

番組は徳川義親氏の「おはなし」のあと狂言五番、「福の神」茂山彌五郎・茂山幸四郎・中津信夫、「墨塗」佐藤卯三郎（大名）河村丘造（女）佐藤秀雄（太郎冠者）、「連歌盗人」茂山喜三・茂山幸四郎・茂山彌五郎（何某）、「蟹山伏」井上松次郎・井上禮之助（強力）市橋良治（蟹）、「花折」石田喜樹（新発意）歌村彦四郎（住持）佐藤秀雄・山本光次郎・井上祐一・佐藤友彦・井上義次・大野弘之。

第二回　朝日狂言会（和泉流の若き宗家を観る会）昭和三五年三月一三日（日）一時始。

番組の案内・紹介リーフレットに所載の前田満穂の所見「若き家元への期待」

朝日狂言会の第二回である。昨年春第一回を開いて幸いに好評を博したので、今回も力の入れがいがあった。第一回のときに感じられたことと思うが、能と離し狂言だけ独立に鑑賞した方がよっぽど狂言の面白さが分って楽しい。能の間にはさんで、能のお添えものような格構で上演するやり方は、マンネリズム以外の何ものでもない。狂言は立派に能とは別個の鑑賞にたえる古典芸能なのである。

今回は和泉流の若き家元保之氏の芸を鑑賞することに主眼がある。和泉流は名古屋が本場であるように、われ〳〵はうぬぼれてい

（③面へつづく）

（②面よりつづき）

るのだが、そのくせ家元の芸を見る機会に恵まれているとはいえない。若いとはいえ、名手三宅藤九郎を父にもつ人だ。狂言界の将来を背負って立つホープに間違いはない。またそうなるようにバック・アップしてあげることが、和泉流の本城を自負する名古屋人の義務、といっても、いゝ過ぎにはなるまい。殊に上演狂言は「花子」という大曲である。能の「道成寺」にも当たる大ものを保之氏がどうこなすか。技巧の妙と同時に若さにみちた感覚のさえを期待したい。そして、そこに狂言の現代的あり方を示唆する何ものかがうかがえたら、第二回朝日狂言会は大成功と自画自賛していゝと思う。（終）

また、同リーフレットには作家・平岩弓枝が「和泉保之さんのこと」として昭和三三年九月二七日、大曲の観世会館における和泉会で和泉保之の「花子」（写真）を見た印象・感想を寄せている。

――前略――休憩時間に友達と二階へお茶を飲みに行った私は、そこで和泉保之さんが今しがた楽屋で倒れたという事実を知った。

「おそらく代役でしょう……」げっそりしてしまった。「花子」の曲を若い狂言師で観たいと私は想った。名人芸でも年輩の演者では私の考えている作品のイメージではなくなってしまう。得手勝手な不満である。

第2回　朝日狂言会
リーフレットより転載
和泉保之「花子」披キ

しかし、開演ベルが鳴って、私は唖然とした。病気を押して舞台をつとめるのだという。高々と上った幕の下から橋がかりに現れた保之さんは顔色も蒼く、それと知っているせいか足許にも不安を感じた。演者の身体を気遣う心があると見所は正直なもので素直に舞台に融けこめない。早く無事に終ってくれゝばよいとそればかりを願った。そんな中でシテの大名は太郎冠者に身代りを申しつけて中入となった。大名の長袴の裾を引いて保之さんは後見の前を通り、橋懸りを歩く。その刹那、私は彼の横顔に或る感動が走るのを見たような気がした。同時に気がついたものだ。後見座にびしりと坐っている三宅藤九郎師が息子の後姿に注いでいる視線をである。仮借のない厳しさの中に熱っぽい労わりの情が溢れていると私は思った。おそらく保之さんはその父の眼を見たに違いないと感じた。

再び揚げ幕をはなれて橋懸りに出た保之さんの芸は生気に満ちていた。人が変ったかと思われる程である。気迫の塊りみたいな彼の舞台に気を呑まれ、圧倒され、私はいつの間にか彼の身体を忘れてしまった。

専門的な眼から見たら完成された「花子」の芸には欠ける舞台だったかも知れない、けれど私は「芸を超えた芸」に胸を締めつけられた。いい舞台を観せて貰ったと思った。

舞台を終えて再度、橋懸りを入る保之さんを見送ってひっそりと後見座を立った三宅藤九郎師の頬に幾筋もの涙が光っていたのを、私は今だに忘れかねる。（直木賞受賞作家）

番組は高木市之助文学博士の講演「これからの狂言」のあと狂言五番、「鬼瓦」河村丘造・佐藤秀雄、「鎌腹」三宅藤九郎（男）和泉保之（女）三宅右近（某）、「縄ない」井上松次郎・井上礼之助（主）佐藤卯三郎（某）、「花子」和泉保之・井上松次郎（女）三宅右近（太郎冠者）、「首引」佐藤卯三郎（親鬼）石田喜樹（為朝）井上礼之助（姫）佐藤秀雄・山本光次郎・市橋良治・大野弘之・井上祐一・佐藤友彦・井上義次。

第三回　朝日狂言会（大蔵流和泉流両宗家出演）昭和三六年五月五日（祭）一時始。

先回に続き前田満穂の所見「名人と両家元」

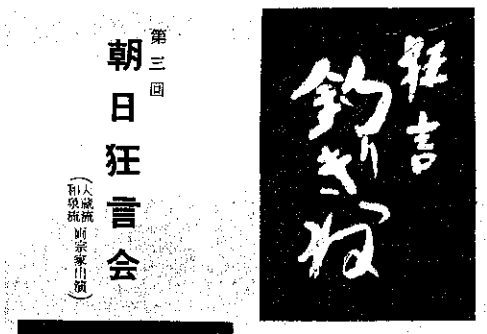
朝日狂言会も第三回を迎えた。一、二回とも盛況で、主催者の喜び、これに過ぎるものはなかったが、第三回の今年はまた、大蔵、和泉の両家元に、名人弥五郎の登場という大狂言会になった。新鋭野村又三郎も加えて、東京でもちょっと見られぬ豪華顔揃え。演目がまた素晴らしい、秘曲「釣狐」に珍品「髭櫓」何から何まで文句のつけようのないような狂言会…と、主催者側が、ひとり悦に入っていては、観客の皆様に相すまぬ次第だが、こんな良いものずくめは、主催者の努力だけで出来るものでない。なみ〳〵ならぬ出演者の御好意、ファン諸氏の御援助のたまものと、しみ〴〵有難く思うのである。

古典は古格を重んじなければならぬ、といって清新の気を欠いては魅力を失う。能、狂言と並ぶ古典歌舞伎の現在の凋落ぶりはまことに悲しい。しかし、興行者、役者を責める前に、歌舞伎自体が、古典的存在を貫き得ぬ自己矛盾を内包している点を見逃してはなるまい。幸いにして狂言は、歌舞伎よりは、はるかに安定した古典性をもっている。……とはいうものゝ、図にのると、歌舞伎の二の舞を演じないとは限らない。名人の古格と、若き家元らの清新さを較べ見て、狂言の在り方に、あらためて思いをひそめるのも決して無駄ではないと思う。（朝日新聞名古屋本社企画課長）

番組は素囃子「羯鼓」寛　三男・田鍋惣一郎・西尾孫太郎、と狂言六番、「鼻取相撲」山本光次郎（大名）佐藤秀雄（太郎冠者）大野弘之（奉公人）、「文荷」茂山幸四郎（太郎冠者）茂山弥五郎（主）、（次郎冠者）茂山圭五郎、「井杭」佐藤卯三郎（占師）石田喜樹（井杭）井上松次郎（伯父）、「釣狐」大蔵弥太郎・茂山喜三（猟師）、「棒しばり」河村丘造（太郎冠者）野村又三郎（次郎冠者）佐藤秀雄（主）、「髭櫓」和泉保之（夫）井上松次郎（妻）井上義次（早打）井上祐一（女）佐藤友彦・横井勝彦・丹羽鉄治・加藤光彦・金田正孝・中野釣。

茂山弥五郎が自家の会ではない催会に家芸を継ぐ息男五人のうち長兄忠一郎を除く全員を率いての来演が珍しい。

――以下次号――



第三回
朝日狂言会
（大蔵流 和泉流 両宗家出演）

昭和36年5月5日（祭）　午后1時始
熱田神宮能楽殿（神宮鬼門入南側）

【会員券】固定席 ¥400 自由席 ¥300
児童席 ¥200

【会員券取扱】
朝日新聞社企画課　☎8131
熱田神宮能楽殿　☎2921
中区栄門前町5-2加藤方　☎430
千種区内山町3-41宋祥方　☎4046
出演者方、みやこ屋ナゴヤ

主催　朝日新聞社
狂言共同社

◆春の舞台から（その二）◆

「観世会定例公演」「茂山狂言会　四世茂山千作一周忌追善狂言会」と「名古屋能楽堂三月定例公演」

竹尾邦太郎

「邯鄲」

科挙（官吏登用試験）に落ちた落胆の挙句であろうか、人生の無常に解を仏道に求め羊飛山へ赴く盧生（シテ正邦）、途次、邯鄲の宿で来し方往く末の悟りが開けると仄聞する枕を女主人（アヒ健太郎）に勧められて投宿、一炊の夢に人生の栄華の儚さを知る。

「こなたへ御通りさむらへ」とアヒ、床几にシテを掛けさせ、問答に枕の効能を説けば、「さらば立ち越え」とシテ、立つと瞬時右上方に目を泳がせ静かに台上へ。膝をつき、「さてはこれなるが」と沁々枕を見つめ、へ一村雨の雨宿り、とゆっくり面を上げると初同（邦久・修一・嘉宏ら）返シ句からへ日はまだ残る、と右へ庭を眺める心、袖掻き合わせへ邯鄲の枕に、と横臥。短い出だしの緊張感が中々。夢中、帝位に就き栄華の絶頂、へ日月遅し、と双手を挙げる辺り、俗説に全盛極めた平清盛が入日を招き返す姿も斯くや。シテの更なる長寿を、と仙薬を勧める大臣（ワキツレ元）、酒宴となり酌に立つ舞童（子方・味方梓）、肴の舞は可憐で達者（写真）。興に駆られ台上で舞い出すシテの「楽」は余裕、空下りは右手で柱を持ち、左足下し板に着くや颯と引き上げる。

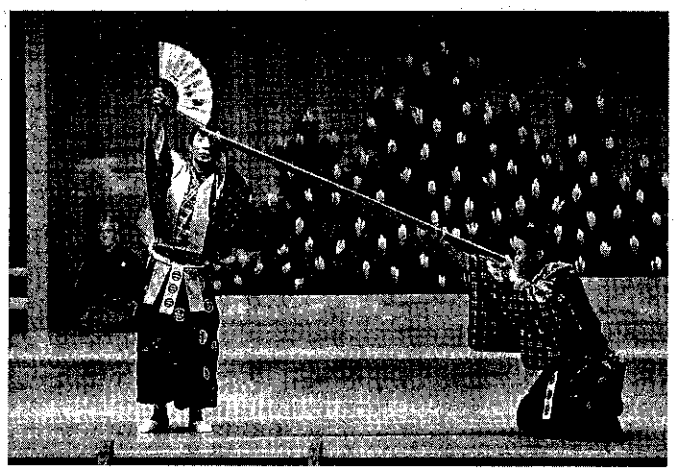
再び台上に横臥の処は脇正からツツツと台に進み、端に足が掛かるや身体を半転、素早く横臥し所謂飛込みの冒険はせず無難。夢醒めへつら〳〵人間の有様を、と唐団扇を抱きか、え呆然と天を仰ぎ、へ命終れば夢ぞかし、と沁々下を見詰め、へ齢の長さも、と面上げへげに何事も一睡の夢、へ南無三宝、と膝を打ち立つと、へ知識は此の枕、と又台上に、枕を押し戴く風情に大悟の心が。（1時間28分）

『観世会』「邯鄲」
味方　梓
（杉浦賢次氏撮影）

『観世会』「邯鄲」
古橋正邦
（杉浦賢次氏撮影）

「樋之酒」

留守中、太郎・次郎の両冠者（シテ高義・小アド隆行）が盗み酒をするので、主（アド健太郎）は両人を別々の蔵に番をさせれば、酒蔵の次郎冠者は徒然なる侭に横着にも壷の蓋を取り、飲み出して小歌気分。それを聞きつけ羨む太郎冠者に次郎冠者が才覚を発揮、樋を見つけて隣り蔵に渡し、流し素麺よろしく酒を送り込めば（写真）太郎冠者も相伴に与り、果ては自分の持ち場をほっぽり出して次郎冠者の許に入り込み、ざっと酒盛に。互いに酌が行き交い、肴に小舞謡の応酬、「さて強か飲んだが少しも減らぬなあ」と太郎冠者、「いかさま弥増しに湧き出る酒ぢゃ」と次郎冠者の能天気に、「いざこの態を舞ふ程に謡はしや」と図に乗ってくる太郎冠者が、へ夜も尽きじ、と舞い出せば、へ薬の水も泉なれば、と連吟の調子の良さ。好いコンビ、愉快。（23分）



『名古屋観世会』「樋之酒」
左より野口隆行、松田高義
（杉浦賢次氏撮影）

「梅・素囃子」

先年、平成二五年（二〇一三）は世阿弥生誕六五〇年と喧伝され、世阿弥作の曲が多出したが「梅」は世阿弥（一三六三―一四四三）没後、三五九年のち、観世流一五世宗家元章（一七二二―一七七四）が一七六五年四三歳の時の作。重習・初伝の観世流専有曲で当地では殆んど上演がなく、昭和五四年一月七日、熱田神宮能楽殿での青陽会でシテ上田照也・ワキ西村欽也・アヒ井上松次郎・地頭梅田邦久、以来。

前場、都の藤原何某（ワキ茂十郎）、難波津の春景を愛で、興を催しへ桜花今盛りなり難波の海おし照る宮に聞し召すなへ、と家持の古歌を口ずさみ、「今は花、未だ含みて梅の盛りにて候」と桜を待つ心に居ると、呼掛で里女（シテ清河寿）が出、歌の詞を咎める。シテがワキと問答に、家持が此の歌を詠んだ経緯を説き、ワキを納得させれば、素姓を問われてシテ、「いや誰とても」と舞台へ入り、道理を知れば人の名など無用、それより先の詞に「花いまだ含みて梅の盛り」と言われたが「梅の盛りは花ならずや」とワキに詰メルところ（写真）には未だ

『観世会』「梅・囃子」
観世清河寿
（杉浦賢次氏撮影）

『観世会』「梅・囃子」
観世清河寿
（杉浦賢次氏撮影）

『観世会』「梅・囃子」
観世清河寿
（杉浦賢次氏撮影）

『観世会』「梅・素囃子」
観世清河寿
（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

詰問の口吻が。花の呼称は桜だけに非ずの論、もっと深くと請うワキに中入地（芳伸・邦弘・勘鷗ら）へこの木の下に下臥して待たせ給はゞ、と言い置いてシテ、地一杯に送り笛で中入すると、里人（アヒ松次郎）居語に梅の花は春の訪い事など語って退くと、梅立木も下げられ後場。

ワキ・従者（ワキツレ知登・雅人）の待謡から一声（六郎兵衛・源次郎・眞之介・洋輝）で梅ノ精（後シテ清河寿）梅立天冠・緋大口・白地長絹の清々しくも神々しい姿で「舞を奏で、慰めんと」と現われる。シテ・ワキ掛合に、音楽は自然界の音に委ねるとてへ昔を返す袖ならめ、と左袖返すと（写真）へそも〳〵神代の習はし、とクリで床几に掛かり、サシ・クセへと梅が古来から大いに尊ばれてきたことを自賛、へ梅のその名を許りたるなり、とサシ留メにユウケン扇して晴れやかな得意を見せ（写真）扇畳み立つと舞グセに。端正な舞ぶりはへ天の日蔭の鬘垂で、と開いた扇を捧げ持ちクセ留メへいざや奏でん、とワキへアシラヒ左袖返シ、拍子二ツ間を置いて踏み、小書「素囃子」で立回りに。鶯の声も長閑な春の梅の匂いに満ち足りた気持を醸し、謡すゝみへ花咲き実を結び、と双手高く上げ（写真）退って下居、扇を胸に抱きかゝえ（写真）切地へ人民もたゞ安らかに、と立ち、トメはへたゞ幾久に天地の、と常座で翳シて小廻りして留メ拍子。優に美しく気品のある舞台だった。（1時間20分・2月9日・観世会定例能）

『観世会』「梅・囃子」
観世清河寿
（杉浦賢次氏撮影）

「枕物狂」

三老曲の一、重習。平成一〇年一一月六日「第三回千作の芸を見る会」でシテ千作・アド千三郎・宗彦・乙あきら・地頭千五郎、の上演があった。その千作一周忌追善に嗣子千五郎が手向ける。

祖父（シテ千五郎）が恋をするを不審に思い二人の孫（アド竜正・虎真）、あの年になっての恋は似合わぬが老いの慰みに成るならば叶えて上げたいと見舞いに出れば、枕尽しの謡を吟じて狂乱の態。二人が恋の真疑を問えば、何んぢゃ鯉を呉れる？と惚け、真意を問えば、自身の事には話題を逸らせ、志賀寺の上人・柿本の紀僧正の恋物語を語り出して、気持が昂り、つい己れの恋の相手を洩らし、色に出ては隠しお、せなくなる。相手の出逢のしおらしさに、戯れてちょっかいを出したら枕を投げつけられ、それが却っていぢらしくも恋しい、と祖父。倒れ伏す愁嘆に孫の一人が祖父の相手乙御前（子方・蘭）を連れて来て被キを取り祖父に会わせれば、祖父は喜悦、へげにもさありやようがりもそうよの、と手の舞い足の踏む所を知らず、「のう愛しの人、こちへわたしめ」と招き、乙御前、祖父、孫二人と退いてゆく。平成一〇年の千作のときよりアドと乙御前は未だ小学生半ば、如何にも初々しくメルヘンチック、面白かった。（39分）

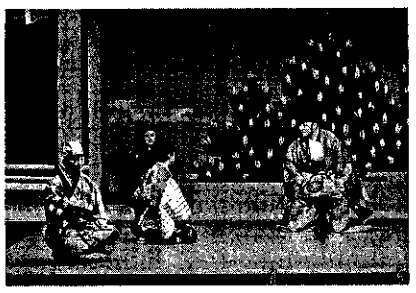
「無布施経」

住持（シテ正邦）、檀家（アド童司）で経を上げた帰り、いつもの布施が出ないので此れが例になってはと危惧、逡巡しつゝ教化に事寄せて再三立ち戻り、「雲となり雨となり不晴不晴の時」などと布施を匂わす言葉を連発しても、檀家は住持の教化の意図に全く気付かず、焦燥に駆られて苛立つ住持。遂には策を案じ、袈裟を懐中して戻ると、「辺りに落ちては」と。袈裟は鼠が食い空けた穴を伏せ縫いにしてあると言われ、漸く気付く檀家、見栄を張り何やかやと直ぐには受取らない住持の懐へ布施を押し込めば、はずみで出た袈裟にその場を繕う住持。住持の、世間体を気遣う癖に金銭に吝い俗物ぶりがよく出てをり、檀家の度忘れぶりも旨かった。キリは、檀家が悪態をつくのではなく、淡々と「ようござった」は自身の失態をさりげなく糊塗するためか、住持も「南無阿弥陀仏〳〵」と退いてゆくのに救われた。（34分）

「唐相撲」

久しく唐に在る日本の相撲取（アド逸平）、通辞（アドあきら）を介して唐帝（シテ七五三）に帰朝を願えば叶えられ、名残りに臣民達を相手にして相撲を取るように命じられる。いわゆる晴れの天覧相撲が舞台、士烏帽子・掛素袍を脱ぎ、着付の熨斗目に裃掛け、括袴の相撲取、我も〳〵と立ち合う面々を千切っては投げ悉く退ける。一ノ松から勾欄越しに投げ飛ばされる者、目付柱に攀じ登り逃れる者、張手、脚取など技も多彩。行司は通辞、唐人同士の珍妙な唐音の会話が可笑しい。全員敗退すれば帝の出番、身拵えに暇が掛かり、悠長に玉台で「楽」を舞い、空下りまで見せ、いざ立合となれば玉体に触れたとクレームがつき、物着に荒菰の胴衣で防護、帝の一挙手一投足に囃子（保美・尚靖・正寿・敬介）がつく太平楽。結局は帝の面子を憚り引分けか。「ワンスイ、ワンスイ、チンプルパー」と賑やかに（騒がしく？）還幸。

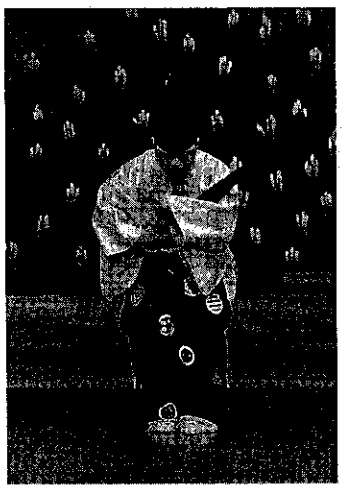
達者な孫や曾孫、一門の手向け、泉下の千作翁以て冥すべし。（1時間・2月15日・四世茂山千作一周忌追善狂言会・金剛能楽堂）


『三月定例公演』「秀句傘」
左より松田高義、野口隆行、野村又三郎
（杉浦賢次氏撮影）

「秀句傘」

近頃、人の集まりでドッと笑いが起るは何事、と大名（シテ又三郎）、太郎冠者（アド隆行）に問えば秀句の集まりと。大名は流行なら秀句に堪能な者を抱えようと大袈裟に八千人と放言、太郎冠者に窘められて五百人にはするがそれも不可能で二人「それも汝共にと言ふ事ぢゃ」となり太郎冠者は求人に出掛けるが、大名が新参ノ者を抱える常套の筋と分ってはいても可笑しい。太郎冠者が傘張りの板東方ノ者（小アド高義）を連れて戻ると、太郎冠者に彼の委細を問う大名（写真）、早速、彼から秀句を聞きたいと問答になれば、秀句（言葉遊び）に無智な大名は、「え申さぬ」などと言われゝば、「え」は傘の「柄」の秀句と気付く訳も無く、太刀に手を掛ければ太郎冠者に止められて一転、褒めに回るが、何でもない常の会話にさえ何処かは傘についての秀句が、と独り合点、その都度、身につけたものを褒美に与え、板東方ノ者が立ち去る前に太郎冠者を介して手にした傘をひろげ小歌を一くさり、「あーあ、秀句と言ふものは寒いものぢゃ」と傘を抱くと（写真）留メ、傘を担げて入る。

大名らしく大仰で力でぐい〳〵押してくる又三郎が力量を発揮。（34分）


『三月定例公演』「秀句傘」
野村又三郎
（杉浦賢次氏撮影）

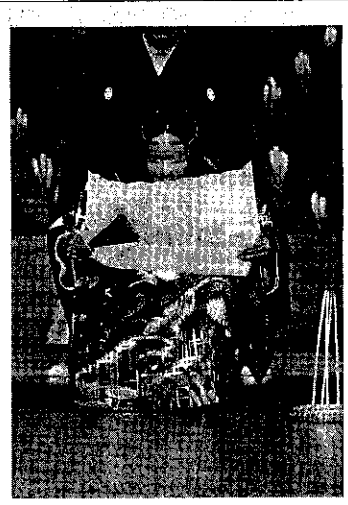
「花筐」

男大迹ノ皇子、皇位継承のため急遽上京を使者（ワキツレ宰）から伝えられ、文と形見の花籠を手にする寵姫照日ノ前（シテ正宜）、愁嘆に暮れるも文を残す有難さ、沁々文を読み（写真）ひっそりと退いてゆく短い前場に風情。次いで、即位の継体帝（子方・山田健登）が輿（ワキツレ正樹・叡）で官人（ワキ雅介）を伴い紅葉狩に行幸の心で出ると、帝を慕い狂わんばかりに脱下ゲ姿で、侍女（ツレ愛）に形見の花籠を持たせて照日ノ前（後シテ正宜）が上京して来る。たまたま行幸の先払いをするワキと行き合い、ツレが無礼打ちに花籠を打ち落とされゝば、シテの怒りにツレも気負い、花籠の来歴の勿体なさにシテ・ツレ掛合に二人してワキの無礼を咎め、へ恐ろしや、と地（保雄・光夫・荘太郎・耕司ら）狂ヒに。水の月を取らんとする猿の様に、届かぬ帝への恋慕の情、へ叫び伏して、とたら〳〵常座へ退り安坐シヲルも切ない。ワキが、御車近くで舞ってみよの宣旨を伝えると、へいざや狂はん諸共に、とシテは居立チつゝワキへアシラヒ立つと地、へ御幸に狂ふ囃こそ御前を払ふ袂なれ、とイロエを舞い、漢帝と李夫人への故事をなぞらえるサシからクセ舞に（写真）、へ夜更け人静まり、の辺り何か重苦しいような雰囲気。クセ留メにへ枕ひとり袂をかたしく、と下居すると、ワキがツレに花籠を持てと伝えるとシテ・ツレ同吟にへ余りの事に胸塞がり、と。ツレがシテに花籠を託し、シテがこれをワキに、ワキは帝の前へ。

紛れも無き花籠に文、とワキはシテにアシラヒ、宣旨の趣を伝えると、シテとワキは掛合に花籠の徳を謡うが、宝生流ではへげにありがたや……、へ花の筐の名を留めて、へ形見と名づけ……、はシテ謡でなく、シテ・ツレ同吟。帝の寵愛はシテだけなので、ツレが花籠・文に関わってくるのは納得し難く、そしてツレ役が女性で声がシテの声に馴染まない憾み。キリは帝の還幸に供奉し、輿とワキが退いて行きシテが常座で送る。

シテはいつも手堅い舞台だが円みというか柔らかみの欲しいところ。（1時間16分・3月1日・名古屋能楽堂三月定例公演）

『三月定例公演』「花筐」
衣斐正宜
（杉浦賢次氏撮影）


『三月定例公演』「花筐」
衣斐正宜
（杉浦賢次氏撮影）

［前号の訂正］

3頁8段14行目	意識→意義	
4頁3段22行目	済すむ→済む	
23行目	眞野介→眞之介	
7段3行目	大声→大笑	

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１３００円
郵送の場合　１年　２０００円
一　部　１２０円

ＮＨＫ放送予定（平成26年８月）

◆ＮＨＫ能楽鑑賞

８月３日　〔故人をしのんで〕（６：00～６：55）
杉浦元三郎
井上　嘉介

８月10日　〔故人をしのんで〕（６：00～６：55）
五木田武計
豊嶋　訓三

８月17日　〔人間国宝に聞く〕（６：00～６：55）
太鼓方金春流　金春惣右衛門

８月24日　〔人間国宝に聞く〕（６：00～６：55）
観世流　片山　幽雪

８月31日　狂言（６：00～６：55）
野村　万蔵、野村太一郎

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［８月］
17日(日)　七彩会　（来場歓迎）
24日(日)　第30回衣斐正宜後援会能　（有料）（番組①面）

［９月］
７日(日)　名古屋能楽堂９月定例公演（番組②面）（有料）
15日(祝)　名古屋観世会定例公演能　（有料）
20日(土)　名古屋片山能記念公演　（有料）
21日(日)　和久荘太郎師「演劇空間」　（有料）

衣斐正宜後援会能

能「正尊」上演

８月24日
名古屋能楽堂

宝生流・衣斐正宜後援会では、第三十回記念能として、きたる八月二十四日（日）名古屋能楽堂で、能「正尊」を上演する。

仕舞「笠之段」「松風」
能「正尊」シテ衣斐正宜、ワキ殿田兼吉

なお、開演（午後二時）に先立ち詩人・村瀬和子氏により「悲劇の始まり」と題して講演が行われる。午後一時始。（番組①面掲載）

入場券五〇〇〇円、学生二〇〇〇円。（番組①面）

久田舜一郎古稀記念能　鼓楽の会

能「関寺小町」上演

９月21日　大阪能楽会館

大倉流小鼓方・久田舜一郎師は、今年古稀を迎え、記念の能会をきたる九月二十一日（日）大阪能楽会館で、古稀記念能「鼓楽の会」を開催する。午後一時開演。

演能は、能楽二百数十曲の内で最も大切にされている「三老女」の内、最奥の秘曲「関寺小町」を梅若万三郎師のシテで上演する。

記念能開催にあたり、久田舜一郎師は案内のなかで「小野小町は、晩年、百歳に及んで、逢坂山から大津に下る途中、琵琶湖を望む、関寺の近くに住したと伝えられています。

七夕の夕、子供達に手習いを教え、その夜の星祭りに、稚児の愛しい舞に誘われ、華やかだった昔日に、心帰り、懐旧の舞を枝にすがりつつ舞い始めます。老いの喪失感の中に、ふと美しく気品高い小野が立ち現れます。極く静かに上品です、技術よりも曲趣、境地を描くのが難しい曲といえます。現大倉宗家始め、流儀の先輩も小鼓方を大切にする一調で花を添えてくださいます。ご知友お誘い合わせいただき、ご高覧賜りますよう、何卒宜敷くお願い申し上げます」とあいさつしている。

観能券／A指定席・前売一五〇〇円（当日一六〇〇円）B指定席前売一二〇〇円（当日一三〇〇円）２階自由席・前売七〇〇〇円（当日八〇〇〇円）

第三十回　衣斐正宜後援会記念能

八月二十四日（日）午後一時開演
名古屋能楽堂

講演「悲劇の始まり」
講師　詩人　村瀬和子

仕舞　松風　笠之段
内藤　飛能
衣斐　愛
地謡　東川　光夫　水上　輝和　武田　孝史　辰巳大二郎

能　正尊
シテ　衣斐　正宜
ワキ　殿田　謙吉
間　井上松次郎
ツレ　東川　尚史　〃　〃　〃　当山　淳司
ツレ　澤田　宏司　〃　〃　〃　亀井　雄二
ツレ　小林　晋也　〃　〃　〃　和久荘太郎
義経　水上　聡優　〃　〃　〃　小倉伸二郎
子方　野月　侑　〃　〃　〃　大友　順
　　坂口　立来　〃　〃　〃　佐野　登
　　岭和
後見　小林与志郎　東川　光夫　辰巳大二郎
地謡　竹内　孝成　平田　正文　内藤　飛能　水上　輝和　亀井　保雄　武田　孝史　武田　孝史　辰巳大二郎
　　竹内　淳一　近藤乾之助
　　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛

附祝言

◆入場券　五〇〇〇円（学生二〇〇〇円）
お問い合わせ　衣斐正宜後援会事務所
TEL　052・882・5600

鼓楽の会

九月二十一日（日）大阪能楽会館
開演　午後一時

解説　神戸女子大学教授　大谷　節子

舞囃子
猩々乱　双之舞　仕舞　久田勘吉郎　辻　芳昭　上田　悟　上野　朝彦　久田　勘鶴　高橋奈王子　野口　亮　大西　礼久　山本　章弘　青木　健一
鶴亀　寺澤　忠芳
蝉丸　上野　朝義
歌占　地謡　井上　裕久　寺澤　拓海　伊藤　嘉章　上野　雄三　上野　雄介
一調　屋島　山本　章弘　能　清水　皓祐

稚児　寺澤　杏海
小野小町　梅若万三郎
後見　梅若　妃長　大槻　文蔵　伊藤　文蔵　嘉章
関寺小町　福王　知登　福王茂十郎　福王　和幸
地謡　亀井　忠雄　久田舜一郎　長山　耕三　武富　康之　寺澤　上野　雄三　浦田　保親　観世　朝義　観世銕之丞　観世　喜正
狂言　蝸牛　善竹忠一郎　善竹　善竹　隆司　隆平
一調　俊寛　大西　智久　荒木　賀光
茂　観世　喜正
筒井　大槻　文蔵
仕舞　熊坂　観世銕之丞　地謡　長山　耕三　浦田　保親　上野　朝義　大西　礼久
一調　橋弁慶　大坪喜美雄　半能　大倉源次郎
赤獅子　寺澤　拓海
白獅子　寺澤　幸祐
石橋　福王　知登　大獅子　山本　哲也　久田陽春子　三島元太郎　竹市　学
後見　山本　章弘　大西　智久　井上　裕久
地謡　久田勘鶴　上野　朝彦　武富　康之　久田　熊　大槻　文蔵　寺澤　忠芳　大西　礼久　久田　勘鶴　大槻　裕一　上野　雄三　久田　熊　久田　勘鶴
台後見　梅若　久紀　青木　慶一　上野　雄介　山田　熊　久田　勘鶴

久田舜一郎後援会事務局

大阪市北区芝田一－六－二（リーチアート）内
電話０６・６３７３・１１１７

暑中御伺

名古屋観世会
観世清河寿
十世片山九郎右衛門
片山幽雪
京都市東山区新門前通大和大路東入西之町224
〒605－0088　電話（〇七五）五六一－二九一一

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町Ａ番七号
電話（〇六）六七六四－〇八九八番

初陽会
武田宗和
宗典

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
高橋瞭一

名古屋観鴦会
山本勝一
山本博通
梅若万三郎
幽花会
片山伸吾
浦田保浩
〒606－0814　京都市左京区下鴨芝本町58
電話（〇七五）七二三－六八五〇

梅猶会
猶諷会
梅若猶義

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
本田勲
今沢美和
梅田嘉宏
〒466－0033　名古屋市昭和区台町二丁目十六－五
電話（〇五二）八四一－四六三番

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通３・８・２－306
電話（〇五二）八三二－二八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五
電話（〇七九八）73－二四五八

会と催し

也留舞会 社中会

7月21日　名古屋能楽堂

狂言「也留舞会」（野村又三郎師主宰）は、七月二十一日名古屋能楽堂で也留舞会社中会を開催。

〔第一部〕午前十一時開演

「伊文字」女：使いの者・坂倉純子・主：宇佐美昭子・太郎冠者・野村又三郎「痺」太郎冠者・加美山響、主・野村信朗「舟船」（主・林恭子、太郎冠者・野口隆行「いろは」（金法師・仁木淳太、親・野村又三郎「雷」（雷・高村幸子、薬師・松田高義）「魚説法」（新発意・神谷愛々、檀家・藤百々「謀盛ヶ種」（太郎冠者・白石敦子、伯父・野口隆行

〔第二部〕午後二時開演

「宝之笠」（太郎冠者・吉村由起子、主・奥津健太郎、スッパ・野村又三郎）「引括」男・小瀬木弘子、妻・藤波徹

狂言小舞「都の町」「暁の明星」市川敬子

「柿山伏」（山伏・加美山舞・畑主・奥津健太郎）「不見不聞」太郎冠者・磯村義和・菊市・安保育子、主・伴野俊彦「二九十八」男・吉本有李、お告げの女・伊藤泰祝言・番外袴狂言「福之神」福之神・伴野俊彦・参詣人・奥村健太郎、参詣人・野口隆行

（終演予定・午後四時十五分頃）

（御来場歓迎）

主催　也留舞会、参加・如月会

稽古場・野村松花堂、連絡先・野村事務所・名古屋市中区平和一丁目二十番四号、TEL〇五二・三五〇・七九七一

第36回 七彩会

八月十七日(日)午前十時始　名古屋能楽堂

番外　仕舞「江口」竹内澄子

素謡「田村」「三井寺」「葵上」

舞囃子「敦盛」「須磨源氏」「女郎花」

能「班女」松浦祥子

素謡「専僧」「源氏供養」

舞囃子「難波」「熊野」「安宅」

「龍田」「西行桜」

仕舞　20余番

「入場無料」　七彩会（にじのかい）

名古屋市名東区にじが丘3―27―1

電話　052・782・4171　竹内澄子

岐阜幽謡会

7月27日　萬松館

岐阜幽謡会（片山幽雪主宰）は七月二十七日（日）、岐阜萬松館で、幽謡会素謡会を開催する。午前十時始。

素謡「経正」（高井澄恵、高井昭裕）「半部」（安江幸洋・曽根健之）「百万」（子方・高井澄恵、浅井徳光、高井昭裕）「天鼓」（河崎博、永津邦彦）「定家」（冨田静美、武本香奈絵）「実盛」（太田和夫、曽根健之）「隅田川」（子方・味方梓、小寺妙子、堀野公子、富田静美）「遊行柳」（平川力、福井藤次郎）「卒都婆小町」（平野薫夫、片山九郎右衛門、味方玄）

番外仕舞「砧」（片山幽雪）

終了予定午後五時四十五分頃

（御来場歓迎）

和久荘太郎師「演劇空間」能「葵上」上演

9月21日　名古屋能楽堂

宝生流能楽師・和久荘太郎師主宰の能楽公演「演劇空間」は、昨年第一回公演を催し、満席の盛会で評判をよんだが、今秋九月二十一日（日）名古屋能楽堂で第二回公演を開催する。開場午後一時、開演午後二時

番組は次のとおり。

挨拶　和久荘太郎

演目解説　金子直樹（能楽評論家）

能「橋弁慶」シテ辰巳満次郎、牛若丸・和久凜太郎、トモ・辰巳和磨、間・今枝郁雄　笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・河村眞之介、後見・衣斐正宜ほか。

地謡・宝生和英・朝倉俊樹・佐野登・山内崇生・小倉健太郎・小倉伸二郎・内藤飛能・辰巳大二郎

狂言「魚説法」シテ井上蒼太・アド井上松次郎

能「葵上」シテ和久荘太郎、ツレ高橋憲正、ワキ宝生欣哉、ワキツレ御厨誠吾、間・野村又三郎　笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・河村眞之介、太鼓・観世元伯、後見・衣斐正宜ほか。

地謡・高橋章、宝生和英、朝倉俊樹、佐野登、山内崇生、小倉健太郎、小倉伸二郎、内藤飛能

（終演予定午後五時）

入場料　S席八〇〇〇円、A席七〇〇〇円、自由席五五〇〇円。

演能案内

能「葵上」狂言「狐塚」

豊田市能楽堂　9月6日

「ろうそく能」

豊田市能楽堂主催の「ろうそく能」は、九月六日（土）金剛流能「葵上」無明之祈（シテ金剛永謹）大蔵流狂言「狐塚」（シテ善竹忠一郎）で、豊田市能楽堂で催される。午後1時30分開場、午後2時開演。

番組は次のとおり。

解説・村瀬和子

狂言「狐塚」　シテ・太郎冠者・善竹忠一郎、アド・主・善竹隆司、アド次郎冠者・善竹隆平、後見・上吉川徹

金剛流能「葵上」無明之祈

前シテ・後シテ金剛永謹、ツレ豊嶋晃嗣、ワキ高安勝久、ワキツレ丸尾幸生、アイ善竹隆司、笛・帆足正規、小鼓・林吉兵衛、大鼓・佃良勝、太鼓・前川光長、後見・広田幸稔・豊嶋幸洋・宇高徳成井克紀、宇高竜成、竹市幸司

主催　公益財団法人　豊田市文化振興財団、豊田市、豊田市教育委員会

入場料　全席指定・正面六千円、脇・中正面席四千円

チケットの販売　豊田市コンサートホール能楽堂事務局（電話〇565・35・8200）

地謡　種田道一、宇高通成、廣田泰能、金剛龍謹、百々康治、今

名古屋能楽堂九月定例公演

［秀吉と能］―のふにひまなく候

九月七日（日）第一部　午前10時開演　第二部　午後2時開演

［第一部］

能　田村（喜多流）シテ　長田　驍

狂言　祐善（和泉流）シテ　佐藤　友彦

仕舞　弓八幡（金春流）広瀬　雅弘

能　杜若（観世流）シテ　瀬戸　洋子

［第二部］

能　松風（宝生流）シテ　玉井　博祐

狂言　鴈金（和泉流）シテ　野村又三郎　アド　佐藤　融

舞囃子　呉服（金剛流）シテ　田中　春奈　アド　井上松次郎

名古屋観世会定例公演

九月十五日（祝）12時30分始　名古屋能楽堂

能　賀茂　梅田嘉宏　山中雅志　観世喜正　問　飯富雅介　橋本宰　岡充　後藤嘉津幸　河村眞之介　末社ノ神　鹿島俊裕　鬼頭義命　竹市学

後見　武田大志　久田勘鷗　地謡　吉沢旭　八神孝充　松山幸親　高橋暸一　清沢一政　久保信一朗　古橋正邦　武田邦弘

狂言　飛越　道明寺　井上松次郎　佐藤融　後見　今枝郁雄　梅田邦久　高橋暸一　清沢一政　古橋正邦　加賀敏彦　久保信一朗　祖父江修一　山中雅志

仕舞　江口之段　鐘キリ　梅田邦久　高橋暸一　清沢一政　古橋正邦　地謡　久保信一朗　古橋正邦　武田邦弘　高橋暸一　清沢一政　加賀敏彦　久保信一朗　祖父江修一　山中雅志

能　金札（観世流）シテ　武田大志　ワキ　高安勝久

前売　指定　四一〇〇円　自由　一般　三一〇〇円　自由席　当日　五〇〇円

［前売券取扱所］名古屋能楽堂（052）231・0088　文化振興事業団　チケットガイド（052）249・9387　チケットぴあ（0570）02・9999（Pコード437・683）

主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）　能楽協会名古屋支部

電話　052・231・0088

（番組③面へつづく）

御伺

暑中

名古屋修諷会　梅若修一

久田観正会　久田勘鷗

郁諷会　前野郁子

松諷会　松山幸親　星野路子

〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162　電話（〇五二）七〇五―一五八五

武田謡楽会　武田欣司　武田邦弘　武田大志

春鶯会　梅若善高　梅若善久

〒560―0084　豊中市新千里南町三丁目18―12　電話（〇六）六八三一―七八五四

〒166―0003　東京都杉並区高円寺南4・27・7・908

松盛会　小松勝憲

松舞台　〒511―0851　三重県桑名市西別所一〇六一の五　TEL・FAX（〇五九四）二三―四五八二

上田観正会能楽堂　上田観正会　TEL〇七八―六九一―五四四九

上田貴弘　拓司　公威　大介

橋岡会舞謡会　橋岡久太郎

＊＊＊＊

坪内芷路之　荒木亮　宮下功　小出年彦　塚田章　吉田重雄　松原章　宮内美樹　小倉美富　橋岡佐喜男　橋岡信明　野池尚美　島田博人

梅春会　梅井戸和男　良祐

〒545―0004　大阪市阿倍野区文の里3―16―17　電話〇六―六六二一―二二一九

名古屋淡交会　橋岡慈観　三交会　久田三津子

〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162　電話（〇五二）七〇五―一五八五

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ㊽

拾四　「朝日狂言会」 ②

竹尾　邦太郎

――承前――

第四回　朝日狂言会・昭和三七年六月三日（日）一時始。番組の案内・紹介リーフレット（写真）に掲載の前田満穂の所見「第四回狂言会によせて」

朝日狂言会もいよいよ第四回目の催しとなった。世に〝三号雑誌〟という言葉がある。理想にもえてスタートしても三号目ごろには、矢つき、力つきてゆくものが多い。だが古典芸能〝狂言〟を伝承し、発展させようとする主催者の理想は、種々の難関を乗越えて、ここに第四回を迎えた。これは主催者のみの努力ではない。芸どころ中京の名にふさわしい狂言愛好家の観客諸氏の声援のたまものでもある。

今年も顔を見せる和泉流の若き家元和泉保之が、このほど名古屋演劇ペンクラブ賞を受賞した。この狂言会でつとめた「花子」「髭櫓」など一連の演目の好演に対して贈られたものである。演劇ペンクラブ賞の能狂言部門への授賞は、おそらくこれが初めてであったと思う。和泉保之のもつ現代的な狂言解釈が選考委員を動かしたと云っても過言ではないだろう。そしてこれはとりもなおさず、現代での、この狂言会の活動が大きく認められたことであり出演者一同に心からのお祝いをおくるとともに、今後の努力を願いたい。

今回も意欲あり、バラエティに富んだプログラムである。多勢の出演で、サルの面がずらりと並ぶ愉快な「猿聟」、そして大蔵流の重鎮茂山千五郎父子が「鎌腹」「千鳥」で息の合った軽妙さを見せる。和泉保之、井上松次郎、野村又三郎と和泉流精鋭のそろう「茶子味梅」は、名古屋では初の上演であり、「東は東」の原本というべきもの。それに「祢宜山伏」では歌村彦四郎ら共同社元老たちが顔を合わせるのも珍らしい。（朝日新聞社名古屋本社企画課長）

番組は「猿聟」佐藤秀雄（聟）河村丘造（舅）井上祐一（太郎冠者）井上松次郎・山本光次郎・井上義次・佐藤友彦・井上斌資・石田嘉樹・井上礼之助（以上伴猿）・和泉保之・野村又三郎・佐藤卯三郎（地謡）、「千鳥」茂山七五三（太郎冠者）茂山千五郎（酒屋）比果光真（主）、「茶子味梅」和泉保之（唐人）野村又三郎（女）井上松次郎（所ノ者）、「鎌腹」茂山千五郎（太郎）比果光真（女）茂山七五三（済人）、狂言小舞五番「小鼓」石田喜樹「土車」井上義次「津の国」佐藤友彦「掛川」井上祐一「景清」和泉保之、「祢宜山伏」井上松次郎（山伏）佐藤卯三郎（祢宜）河村丘造（茶屋）歌村彦四郎（大黒）。

なお第一回から第四回までの曲目解説は歌村彦四郎が担当する。

第五回　朝日狂言会・昭和三八年六月二日（日）一時始。此の回より番組・案内リーフレットの表紙に注目の曲名を記す（写真）。今回の曲目解説は野村広二、また、前田満穂に代り「朝日狂言会によせて」として朝日新聞名古屋本社企画部長・井之丸喜久蔵が次の稿を寄せている。（原文は横書き）。

朝日狂言会も第5回を迎えました。これは日本の古典芸能、伝統芸術の〝狂言〟を継承してゆこうとする主催者の理想を、芸どころ中京の皆さんがご声援くださったたまものと感謝しています。とくに年々若い観客層が目立ってまいりましたことはうれしいことです。

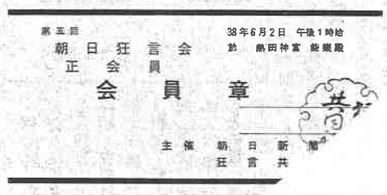
この朝日狂言会では、毎回東西狂言界の第一線からも出演者を迎えておりますが、今度は関西大蔵流狂言の茂山忠一良、茂山倖一らを招くことになりました。茂山忠一良は、現大蔵流家元大蔵弥太郎の兄で、大蔵流狂言の本筋の人、茂山倖一は大蔵流の名家茂山忠三郎家の当主に当り、関西狂言会で重きをなす人ですが、ともに名古屋来演は戦後初めてです。

プログラムはなかなか多彩で、茂山忠一良、倖一、孝夫の「入間川」「悪太郎」では、関西狂言の伝統が見られるでしょう。また今回も来演する関東の和泉流の家元和泉保之、野村又三郎の狂言小舞は楽しみの一つです。

一方地元の狂言共同社は、河村丘造、佐藤卯三郎、井上松次郎、佐藤秀雄らが顔をそろえての総出演で「因幡堂」「馬口労」「二人袴」など有名な狂言を演じます。初めて狂言に接する人達にも〝狂言〟独特の素朴にして人間的なユーモアを満喫させるものと信じます。

番組は「入間川」茂山倖一（大名）茂山孝夫（太郎冠者）茂山忠一良（入門の何某）、「因幡堂」河村丘造（夫）野村又三郎（妻）、素囃子「神舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・筧鉱一・野崎太郎、「馬口労」井上松次郎（博労）佐藤秀雄（十王）・和泉

（④面へつづく）



能　遊行柳　久田　勘鶴

高安　杉江　元　勝久　椙元　正樹　（名古屋観世会番組②面からつづき）

上野　義雄　後藤孝一郎　加藤　洋輝　大野　誠

青柳之舞　間　所ノ者　佐藤　友彦

後見　吉沢　武田　邦旭　弘　地謡　八神　孝充　本田　武田　松山　幸勲　大志　山中　雅志　梅田　祖父江　修一　梅田　邦久　嘉宏

（四時半頃終了予定）

暑中御見舞申し上げます

公益財団法人
鎌倉能舞台
中森貫太
鎌倉市長谷3―5―13

洗心会　奥村富久子

賀水会
加賀敏彦
〒463―0035 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話（〇五二）七七一―八九四五番

観修会　祖父江修一
〒507―0848 多治見市日ノ出町2の2
電話（〇五七二）二二―三六五六

幸謡会　近藤幸江
〒444―2122 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）㉑二五二九

千早会　八神孝充
〒464―0818 名古屋市千種区池園町2―9
電話・FAX（〇五二）七五二―四二九

宝生和英

名古屋宝生会

司宝会
佐藤耕司
〒468―0056 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅二―二二一〇
電話（〇五二）八〇三―七三七二

金剛永謹
龍謹

近藤乾之助
〒170―0002 東京都豊島区巣鴨五―二三―八
電話〇三（三九一五）一三七六番

名古屋巽会
豊橋巽会
辰巳満次郎

惠美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
〒466―0051 名古屋市昭和区御器所3―23―19
御器所パークマンション802号
電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

佐野由於
玄宜
弘宜

菊之会
廣田泰三
廣田泰能

廣田鑑賞会
廣田幸稔

松野恭憲能の会
松野恭憲

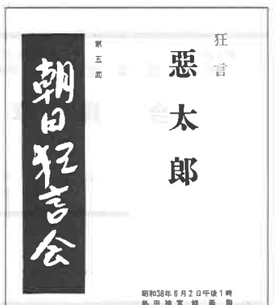
金剛流
今井清隆
今井克紀

豊嶋能の会
豊嶋春会

豊嶋三千春

金剛流
宇髙通成
竜成
徳成

能楽の友社



（③面からつづき）

保之・井上祐一・佐藤友彦（地謡）、「悪太郎」茂山忠一良（悪太郎）留川多三郎（伯父）茂山倖一（僧）、狂言小舞四番「忍ぶ其夜」石田喜樹「若松」井上義次「水車」野村又三郎「鵜飼」和泉保之、「二人袴」井上祐一（聟）佐藤卯三郎（舅）井上礼之助（親）佐藤友彦（太郎冠者）。

なお些事だが、初回はともかく二・三回は一寸味のある会員券（チケット）だったが先回から会員券の体裁が変る（写真参照）。毎回色は替るが第五回から第一七回までは右隈のミシン目を切り取る形、第四回だけ左隈なのは千切り難かったので次回から右隈にしたか。

第六回　朝日狂言会・昭和三九年七月五日（日）二時始。番組は素囃子「早舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・吉田定男・鬼頭八郎、「三本柱」井上松次郎（大名）井上礼之助（太郎冠者）大野弘之（次郎冠者）井上祐一（三郎冠者）、「文山立」茂山千之丞（山賊）茂山七五三（山賊）、「法師ヶ母」佐藤卯三郎（夫）河村丘造（妻）、狂言小舞「海道下り」和泉保之、「棒縛」茂山七五三（次郎冠者）茂山正義（主）茂山千之丞（太郎冠者）、「小傘」和泉保之（僧）佐藤秀雄（田舎人）野村又三郎（新発意）河村丘造（尼）井上礼之助・大野弘之・佐藤友彦・井上祐一（以上立衆）。

この回より番組リーフレットはアート紙になり第三九回（平成九年七月一三日）まで表紙のレイアウトは変らない。曲目解説は無記名となり、初回から第五回まで続いた朝日新聞社企画課（部）の所見は無くなる。

第七回　朝日狂言会・昭和四〇年七月四日（日）一時始。番組は「腰折」佐藤卯三郎（祖父）野村又三郎（山伏）佐藤友彦（太郎冠者）「水掛聟」高井則安（舅）山本則直（聟）山本則寿（女）、素囃子「安宅・瀧流シ」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・河村総一郎、「名取川・カケリ入」和泉保之（僧）河村丘造（某）、「茶壺」山本則寿（すっぱ）山本則直（中国ノ者）高井則安（目代）、狂言小舞五番「暁」石田喜樹「小鼓」山本光次郎「柳ノ下」大野弘之「七ツ子」井上祐二「海人」和泉保之「止動方角」井上松次郎（太郎冠者）佐藤秀雄（主）井上礼之助（伯父）井上義次（馬）。

第八回　朝日狂言会・昭和四一年七月九日（日）五時半始。

「懐中聟」和泉保之（聟）河村丘造（舅）井上祐一（太郎冠者）佐藤卯三郎（教人）、「左近三郎」善竹圭五郎（左近三郎）大蔵弥太郎（出家）、素囃子「羯鼓」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・吉田定男、「大盤若」井上松次郎（僧）佐藤秀雄（神子）和泉保之（何某）、「呼声」大蔵弥太郎（太郎冠者）善竹忠一郎（主）善竹圭五郎（次郎冠者）、狂言小舞「芦刈」和泉保之、「六地蔵」佐藤卯三郎（すっぱ）井上礼之助（田舎人）大野弘之・佐藤友彦・井上義次（以上すっぱ）。

因に善竹忠一郎・圭五郎は旧姓茂山、昭和三八年一〇月四日、師父茂山弥五郎が金春流七九世金春信高より芸道格別の功労に依り善竹姓を授与されたので一家を挙げての改姓。

その経緯は本紙第四八〇号（平成一八年一二月一〇日）「戦後名古屋能楽史」に詳しい。

第九回　朝日狂言会・昭和四二年七月八日・五時始。

「孫聟」佐藤卯三郎（祖父）井上松次郎（舅）佐藤友彦（太郎冠者）井上義次（聟）、「お茶の水」茂山忠三郎（新発意）茂山正義（女）茂山千作（老僧）、素囃子「早舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎、「朝比奈」佐藤秀雄（朝比奈）井上礼之助（閻魔王）・野村又三郎・井上祐一・大野弘之（以上地謡）、狂言小舞二番「蛸」野村又三郎「宇治ノ晒」河村丘造、「縄綯」茂山千作（太郎冠者）茂山正義（主）茂山忠三郎（何某）、「煎物」和泉保之（煎物売）三宅右近（当屋）野村又三郎（立頭）大野弘之・佐藤友彦・井上礼之助・井上松次郎（以上立衆）井上祐一（太郎冠者）。

第一〇回　朝日狂言会・昭和四三年七月六日（日）五時始。

「文相撲」井上松次郎（大名）佐藤友彦（太郎冠者）井上礼之助（坂東方ノ者）、「佐渡狐」茂山千五郎（佐渡ノ百姓）茂山正義（越後ノ百姓）善竹忠一郎（奏者）、「六人僧」野村又三郎・佐藤秀雄・井上祐一（以上佛詣人）大野弘之・井上義次・佐藤友彦（以上妻）、語「奈須与市語」和泉保之、素囃子「神舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・筧鉱一・鬼頭八郎、「瓜盗人」善竹忠一郎（瓜盗人）茂山千五郎（畑主）、「長刀応答」佐藤卯三郎（太郎冠者）河村丘造（主）井上礼之助・井上松次郎・野村又三郎・大野弘之・井上祐一・井上義次（以上立衆）。

さて、朝日狂言会は昭和三四年の初回から平成一一年の納回まで全四一公演、公演月は初回から第五回までは四・三・五・六・六月とばらついたが以後、納回までは第一一回の六月だけを除くと七月公演に定着。開演時間は一時が9

（⑤面へつづく）

出版紹介

越前出目家の系図の謎解き

保田紹雲著

能面作家・保田紹雲氏は、このほど「越前出目家の系図の謎解き」の著作を刊行された。（平成26年2月28日発行）

江戸時代の世襲面打家・越前出目家の系図には不明な点が認められてきたが、長く見過ごされたままであった。本書は、その謎を解明すべく、出目家の子孫が遺した伝書を収集し（第一章）、伝書ごとに異なる記述内容を統合して、ついに正しい系図を復元させた（第二章）力作である。

また、異なる系図が成立した事由として本家争いの証明などの目的があったことや（第三章）越前出目家の一人一人の人物像が浮き彫りにされるなど（第四章）、面打師たちをめぐるユニークな能楽史ともなっている。問い合わせは直接著者へ。保田紹雲氏＝（〒490・1136）愛知県海部郡大治町花常東江端39、電話052・441・1538

名古屋片山能記念公演

『能と京舞』

9月20日　名古屋能楽堂

名古屋片山能（片山九郎右衛門師主宰）は、このたび第十回を迎え、九月二十日（土）名古屋能楽堂で、「名古屋片山能記念公演～能と京舞～」を公演する。午後二時開演。

今回は、片山家ならではの企画として、能と京舞の合同公演を開催。京舞「珠取海女」京舞「山姥」仕舞「山姥」能「海士」の上演、京舞は、京舞井上流五世家元・井上八千代と長女・井上安寿子が出演する。主催・名古屋片山能制作委員会、番組は次のとおり。

第十回　名古屋片山能　記念公演　～能と京舞～

地歌　**珠取海女**　京舞　井上安寿子　歌・三弦　菊原　光治　京舞

地歌　**山姥**　井上八千代　歌・三弦　菊原　光治　（休憩二十分間）　仕舞

山姥　片山　幽雪　地謡　大江　広祐　古橋　正邦　青木　道喜　橋本　忠樹

能

海士　片山　清愛　片山九郎右衛門　宝生　欣哉　間　井上松次郎　後見　味方　玄　片山　幽雪　青木　道喜　地謡　本田　武田　大志　梅田　嘉宏　清沢　一政　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛　古橋　正邦　保向　梅田　邦久　武田　邦弘

（終了予定午後四時半頃）

指定席（正面・脇正面席）五〇〇〇円、自由席四〇〇〇円、学生席二〇〇〇円。チケット取扱い＝片山家能楽・京舞保存財団（電話052・551・6535）CBCラヴァースショップ（電話052・231・0088）チケットぴあ（電話0570・02・9999）（Pコード437・542・1181）名古屋能楽堂（電話052・222・0869）（Pコード437・535・739）

問い合わせ・片山家能楽・京舞保存財団（電話075・551・6535、FAX075・532・2841）

伺　御　中　暑

シテ方金春流宗家

金春安明　〒167-0052 東京都杉並区南荻窪三丁目17-16 電話〇三（三三三一）二五七一番

本田光洋　〒164-0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二 電話〇三（三三八六）二六四一番

金春穂高　〒631-0821 奈良市西大寺東町一-二-十五 電話（〇七四二）三三-九七二〇

長田驍後援会　〒514-2221 津市高野尾町三三五一-四六 電話（〇五九二）（四〇）〇六九七番

福王茂十郎　和幸　知登

高安勝久

宝生欣閑　哉

西村同門会　飯冨雅介　杉江元　椙元正樹　橋本宰

谷田同門会　大原努　小林一　有松遼　岡充

藤田舞台　藤田六郎兵衛　〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9 TEL&FAX〇五二-五七一-五七六三

大倉源次郎

幸友会　福井四郎兵衛

桂会　後藤孝一郎　嘉津幸

（④面よりつづき）

回、一時半17、二時10、二時半2、だが第八回公演から第一〇回公演の三ヶ年、五時半、五時、五時と陽が永い七月とは言え終演が八時を過ぎる夜公演だったのが珍しい。会場は第三八回まで熱田神宮能楽殿、あと三公演は新設なった名古屋能楽堂である。

――以下次号――

◆春から初夏への舞台◆

「豊田市能楽堂　桃花能」

「宝生会定式能」

竹尾邦太郎

「舟渡聟」　聟狂言は概ね若年者がシテになるが芸歴・年功などを勘案、舅をシテ、聟はアドとするケース。

聟入挨拶に赴く聟（アド近成）、途次、舅へ持参の角樽に船頭（シテ右近）が目を付け、飲まれる破目に（写真）。舌舐りせんばかりに、にた〳〵するシテが生彩なら、シテの押しの強さに押しまくられるアドが初々しい。舅宅で姑（小アド右矩）に舅との面会を請えば、「寄合いで留守」とあって姑が呼びに出れば、一ノ松先で酔臥のシテと一悶着。船中で酒を強要した相手が聟とあって進退窮まるシテ、姑から大髭を落し形を変えて出よと責められ、已むを得ず大髭を落し、左袖をつまんで口の辺りを掩ってアドの前に。当然、祝いの盃事になるが、「匂ひを嗅ぎましても酔ひまする」と神妙にシテ、「最前から窮屈さうに」とアドに不審されゝば苦しい弁解。更には顔を見知るため袖の掩いを外すよう促され、姑も、あのように言わせられるので、と差し出れば、「己れが何を知って」と怒声を上げるシテの苛立ちもさこそ。それならば私が、と乗り出すアドに、「このまゝ置いて」と懇願するも、袖が払い除けられゝば（写真）、「南無三宝、現はれた」とシテ。身体を捩りアッと驚くアドだが面目失墜のシテを庇い、惜しむ名残。二人は、折柄の日没に思いを托す連吟に、立つと連舞、数時間前のことゝは言え懐かしみの風情も一入。シテ・アド向き合いガッシ留メに。三宅家、父子共演に充実ぶりをみせた。（33分）

『豊田市能楽堂　桃花能』
「舟渡聟」左から三宅右近、三宅近成、三宅右矩

『豊田市能楽堂　桃花能』
「舟渡聟」左から三宅右近、三宅近成
撮影：杉浦賢次（能楽写真家協会会員）

「隅田川」　人商人に攫われ東へ下ったと聞く我子を尋ねる母（シテ三千春）、流離う心に千鳥掛ケに遅ビ一ノ松。へ人の親の心は、と後にした幕の方へ振り返り小廻り、狂と笠担ゲ、笠目深に俯き加減、地（恭憲・見嗣・敏文ら）の〈松に音する習ひあり、の裡に舞台へ入ると焦燥のカケリに。昂り静まれば、地と掛合で四鳥に事寄せ苛酷な親子別離の心情を吐露、我子を尋ねる気力も果てるか、へ隅田川にも着きにけり、の返シ句には漸くの思いも。船頭（ワキ閑）が立ち、「わらはもその舟に」と懇願するシテ、ワキと問答に。「面白う狂へ、狂はずは」と乗船を拒むワキに、「うたてやな」とシテ。ここの件は『古今和歌集』「巻九羇旅歌」の中、業平の歌の序詞を踏む。

むさしのくにと、しもつふさのくにとの中にある、すみだ川のほとりにいたりて、宮この、いとこひしうおぼえければ、しばし河のほとりにおりゐて思やれば、かぎりなくとをくもきにけるかな、とおもひわびてながめをるに、わたしもり、はや舟にのれ、日くれぬ、といひければ、舟にのりてわたらむとするに、みな人ものわびしくて、京に思人なくしもあらず、さるおりに、しろき鳥の、はしとあしとあかきが、河のほとりにあそびける、京にはみえぬとりなりければ、みな人見知らず、わたしもりに、これはなにとりぞ、と、ひければ、これなむみやこどり、といひけるをきゝてよめる

名にしおはゞいざこと、はむ宮こどり
我おもふ人は有やなしやと
在原業平

隅田川の渡守なら「日も暮る、舟に乗れとこそ」あるべき、へ隅田川の渡守とも覚えぬ事な宣ひそ、と業平の故事に拠り抗するシテ、更に、白い鳥の名を巡る問答から掛合、次第に昂る感情は、業平が都の妻を忍び狂女が東に子を尋ねるのもへ思ひは同じ、とワキ、恋しいと思う心はとシテ、ワキと向き合い詰メルところに気持ちが解け合うか。へ我もまた、と狂との段になり、へ我が思ひ子は東路に、と正へ出、へ問へども問へども、とスミへ、持ち笹で指廻シへげにや（舟競ふ）、と左へ廻りこみ常座を過ぎ一ノ松へ行き掛かる時、ふっと姿が消えた。シテ柱

（⑤面へつづく）

『豊田市能楽堂　桃花能』
「隅田川」左より豊嶋三千春、宝生　閑

『豊田市能楽堂　桃花能』「隅田川」

『豊田市能楽堂　桃花能』
「隅田川」豊嶋三千春、宝生閑、財久　英志

『豊田市能楽堂　桃花能』「隅田川」

『豊田市能楽堂　桃花能』「隅田川」
左より豊嶋三千春、宝生　閑

『豊田市能楽堂　桃花能』
「隅田川」
左より豊嶋三千春、宝生　閑

暑　中　御　伺

清水利宜
〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-28
電話（〇七二）六九四-五〇一七

大倉流小鼓　松月会
久田舜一郎
久田陽春子
高橋奈王子
〒662-0097 西宮市柏堂町一-八-三二三
電話（〇七九八）七三-六五八六

叶石会　河村総一郎
〒466-0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一-四八八二

河村大
〒603-8313 京都市北区紫野下柏野町五九-一
電話（〇七五）四六二-四一一五

河村眞之介
〒466-0064 名古屋市千種区山門町1-15-2
電話（〇五二）七五一-七六六一

石井仁兵衛
石井保彦
〒606-0913 京都市左京区松ヶ崎芝本町一-一-403
電話〇七五（七二三）五〇〇一

飯嶋六之佐
〒920-0961 金沢市香林坊2-8-17
電話（〇七六）二六一-四三四〇

亀井俊一
亀井忠雄
亀井保雄
実

金春流太鼓　青耀会
上田悟
〒594-0041 和泉市いぶき野4-2-101
電話（〇七二五）二二〇-一二七〇
名古屋稽古場　名古屋市中区栄5-6-4　栄能楽堂
電話（〇五二）二六二-一一八三

長生会
鬼頭義命
〒490-1323 愛知県稲沢市平和町城西137
電話（〇五六七）46-一九六〇番

茂山千五郎
茂山七五三
茂山千三郎

茂山良暢
〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話〇七五（七〇一）二〇一一番
FAX〇七五（七〇一）二二三一

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
千太郎
基誠
〒177-0053 東京都練馬区関町南4-22-7-304
電話（〇九〇）三二一三-六九二三

㈱大阪能楽会館
〒530-0015 大阪市北区中崎西2-3-17

（⑤面よりつづき）

下は白洲へ落ちたとみて後見、舞台から覗き込み（写真）無事と分り戻れば、シテは白洲を伝い（写真）段階を上がり舞台へ（写真）、地謡は何事も無かったかに謡い続け、囃子も。

〽水際に来居つゝ鳴くは、白州に来居つるシテ、〽遠くも来ぬるものかな、と墨堤へ上る心に舞台へ上がるシテの感慨もさこそ、と思われた。演能前、面は天下一大和の曲見と解説があったが、女面の狭い視野のなか冷静沈着な行動には感服するのみ。シテ三千春、趣味はハンドボール、テニスその他スポーツ万能と仄聞するが、それにしても昭和14年生の運動神経の鋭敏、身体能力の高さには吃驚した。一人だけ拍手があったが静粛だった見所は立派。

この奇禍に気を取られ笠と狂ヒ笹の措置如何を気付かずだったが後見の働キがあったろう。さて、シテの無事を見て下居したワキに、〽さりとては渡守、と笹で指シ乗船を乞うシテ（写真）は〽乗せさせ給へ、と下居に合掌する。「構えて舟中にて物に狂ヒ候な」のワキの詞が意味深長に思え慰撫する響が妙。次いで旅ノ男（ワキツレ英志）を促し乗せると船中の場。

旅ノ男に対岸の念仏を問われて語るワキの話は、もだし難い惻隱の情を謹直に語る印象。シテは下居の左膝に笠を立て、持ち、面伏せたまゝ身じろぎもせず、「母上こそ何より以って恋しく」のところで聞耳たてるかに面をや、右へ向けると「ついに終って候」で笠から手が離れ双シヲリの悲嘆（写真）。舟が着くも立てず、改めてワキとの問答に、念仏の対象たる子供の身元の一々確めずは居られない虞れの緊張。今や「それは正しき我が子」と認めざるを得ないシテ、双シヲリのまゝワキの介添でワキ正は塚の前、漸くシヲリ解くと「よく〳〵御弔ひ候へ」とワキに促されて塚を眺め、クドキにこみ上げる此の世の哀惜無常。〽この下にこそ、と逸る思いに塚へ寄りへこの土をかへして、と撫でさすり、立つて戻ると安座双シヲリの痛哭、切ない。ワキが母の弔いこそ亡者の喜びとシテに鉦鼓を勧め、シテはシヲリ解くと念仏の段に。

子方の有無はこれまで様々言われてきたが、三千春の師父弥左衛門は『弥左衛門芸談』の中で次のようにある。

金剛流では必ず出すことになっている。しかし、ぴったりした子方が相にくいない時は、子方はいない方がいい。シテの舞いかたひとつで、もし子方がなくとも出来れば、かえってそのほうがいいともいえよう。しかしその場合は、型がむつかしい。また、子方を出さないと、さびしすぎる、ともいえる。確かに、いい子方がいると、効果があがるものである。子方ひとりで「南無阿弥陀仏」を謡うところがあるが、子方がこゝで、しかつめらしい大人の謡を謡うと、やさしさが出ない。微妙なところである。また、太った大きい子方は、いけないものだ。かれんでなければならない。

今回、子方は出るが塚を出ず、見方によっては子方無シ、子方が独りで唱える〽南無阿弥陀仏〳〳、は生憎く胴間声、梅若丸十二歳は理屈だが就学前の幼童がなければ地謡に任せたかった。我子の幻を追うシテ（写真）、キリは〽塚の上の、と空を掻き撫でる様に手を泳がせ、〽草茫々として、と塚を凝視、正二直ルと双シヲリに留メ。一体は悲しみの激情に駆られるのでなく、哀しみが深く沈潜してゆく趣、奇禍を超越してシテ・ワキ充実の舞台だった。（1時間22分・3月8日・豊田市能楽堂　桃花能。蛇足だが渡守の人物像をみせる二番、選曲が憎い）

「須磨源氏」

須磨は光源氏の流謫の地、日向の神官藤原興範（ワキ勝久）、伊勢参宮の途次、旧跡や縁の若木の桜を一目見たいと思い、折柄来掛かった樵翁（シテ荘太郎）を古老とみて源氏の事たずねれば、問答・掛合からクリ地〈満次郎・健太郎・飛能ら〉へ忘れて過ぎし古を語らば袂やしをれなん、と正中下居。サシ・上歌とワキにアシラヒつゝ源氏五十四帖の巻名を巧みに織り込み源氏一代を詳しく語るうち、樵翁が光源氏に成り代ったかの思いが。更にロンギでワキ代弁の地と掛合にシテ、旧跡の場所委しくと問われ、分らないが〽月の夜を待ち給ふべし、とワキにアシラヒ、杖取って立ち〽この海に影向あるべし、と面使ヒ、ワキを納得させるかに詰メルと小廻りしつゝ常座に。〽雲隠れして、の返シ句に杖を手放し送り笛で中入。浦ノ者（アヒ又三郎）ワキと問答から乞われて光源氏の事ども居語に語り、重ねて奇特を御覧に、と勧めて退くと後場。

出端（誠・昭弘・眞之介・洋輝）で出る光源氏（後シテ荘太郎）面中将・初冠（垂纓）紫指貫・白単狩衣の気品・一ノ松で〽あら面白の海原やな、とサシ、〽青海波の遊楽に、と四ツ拍子に波の音、〽月の夜汐の波、と舞台へ。〽天も映るや、と露取り大小前で遠拝、優美清爽に舞う早舞三段、おしなべてさっぱりした舞台だった。（1時間16分）

「棒縛」

留守中に盗酒をさせないため、謀って太郎冠者（シテ松次郎）を棒縛りに、次郎冠者（アド郁雄）を後ろ手に縛り上げて主（アド弘之）、安堵は束の間、戻れば二人は酒盛り。

必要は発明の何とやら、不自由な状態であればこその知恵才覚の出しどころ、酒が入れば肴は小舞謡。太郎冠者が〽そもさても我御寮は、と「七ツ子」の地を謡えば次郎冠者が舞い、次郎冠者の「暁」の地で太郎冠者が舞うなどやりたい放題、挙句、まんまと縄を解けば野放図に。戻った主が大盃に寄れば、映る主の顔に散々悪態をつき、「松風」の一くさりで悪巫山戯。よくこなれた舞台が低俗に流れないのは主・弘之の重み。（30分）

「隅田川」

船頭（ワキ雅介）は素袍上下、旅ノ男（ワキツレ宰）は白大口・掛素袍、職種が違うゆえ同装でないのが好ましい。狂女（シテ正宜）面曲見・白地摺箔着付・無紅縫箔腰巻・灰色水衣。狂ヒの段は、〽我もまたいざ言問はん、と笠に手を掛け右へ眺め、〽我が思ひ子は東路にありやなしや、と狂ヒ笹もどかしく振り、〽堀江の川の、で笠を脱ぎ、〽それは難波江、と一ノ松後ろ勾欄へ抜け、〽限りなく遠く来ぬるものかな、と面伏せ沁々感慨に耽けるも、こうしては居られない心、足早に戻ると、舟狭くとも〽さりとては乗せて、と笠を捨て下居、左手ワキを指シ〽賜び給へ、と懇願、笠は後見がひく。船上は狂と笹置き、左手膝にのせ下居、ワキ語の間、不吉な慎れに硬直の態。舟が着岸しワキツレは立つがシテは立てない。「あら優しや、只今の物語を聞き候ひて落涙し候よ」とワキ、下船促されてシテは「今の物語はいつの」と、一度はシヲリ解くが、我子と分ればへあら浅ましや候、と双シヲリ。「さては御身の子」と、思わず竿手放すワキ、シテを介添えすると立たせ「此方へ渡り候へ」と塚へいざなう。

クドキに、募る感情の昂りは、〽この下にこそあるらめや、と塚に迫るのでなく、「藤戸」の、老母が佐々木盛綱に肉迫するに似て、ワキにむしゃぶりつく様に突進したのに吃驚した。派手な型少ない宝生流と思っていたが珍しい。〽母に会はせ給へや、と退り安座双シヲリも痛恨あり〳〳。「うたてやな」とワキ、「母の弔ひ給はんをこそ亡者も喜び給ふべけれと」シテに寄り首に鉦鼓を掛けると念佛の段に。やはり梅若丸（子方・怜）が出てシテが幻を追い求める方が、出さないよりは曲の据りがよく、今回それを実感。

梅若丸の理不尽な死への悲憤、〽塚の上の草茫々として、と塚を撫でさする胸中の思い、起伏の激しかった感情描写に妙、正宜好演。地は保雄・満次郎・孝ら、囃子は六郎兵衛・孝一郎・惣一郎。（1時間24分・3月16日・宝生会定式能）

能楽堂　特別企画

東海能楽研究会20周年記念展

――伝統を受け継ぐ――

名古屋能楽堂　7月29日より

名古屋を中心とする東海地域の能楽史の解明と次世代への継承・普及を目的として、当地の能楽師と研究者が一体となって活動する「東海能楽研究会」（林和利代表）は今年二十周年を迎え、その記念事業を計画してきたが、その一環として、次のように展示企画を実施する。

東海能楽研究会は、昭和十七年法政大学能楽研究所により、東海地方の芸術文化の振興に貢献が顕彰され「催花賞」を受賞、活動がつづけられている。

同会二十周年展示企画の大要は次のとおり。

⊙展示タイトル

「東海能楽研究会20周年記念《伝統を受け継ぐ》

展示期間　平成二十六年七月二十九日（火）～九月五日（金）

〔展示内容〕

①筧鉱一氏を偲んで（遺品　下田文庫など）

②豊橋能楽資料（狂言伝書・狂言面など）

③狂言装束・小道具（「靭猿」「三番叟」「釣狐」）入場無料

〔連絡先〕

名古屋能楽堂（電話　052・231・0088）

暑中御伺

弘耀会
船戸昭弘
〒509-0103 各務原市各務東町4-67

和泉流
狂言共同社
代表　井上菊次郎
佐藤友彦
大野弘之
佐藤融
井上松次郎
今枝郁雄
鹿島俊裕
今枝靖雄
鷲見政行
〔事務所〕
〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町54 サンハウス滝川3D
電話 FAX 052・834・8607

狂言　やるまい会
野村又三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
藤波徹
伴野俊彦
伊藤泰
〒460-0021 名古屋市中区平和一-二〇-四 株式会社野村事務所 気付
電話 052(350)7971
FAX052(350)7972

五〇〇年余の伝統を護る
一色能
一色町能楽保存会
会長　吉川貞夫
〒516-0011 伊勢市一色町1306番地の2
電話(〇五九六)二五-六五二六

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓　後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五-六-四
電話(二六二)一一八三番

東海能楽研究会
代表　林和利
名古屋市天白区高宮町1302
名古屋女子大学天白学舎

能面作家
保田紹雲
愛知県海部郡大治町花常東江端39
電話　052・441・1538

能楽写真
能楽写真家協会会員
杉浦賢次
刈谷市板倉町二丁目16番地5
電話0566・22・1277

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話　〇五六一五③二三四六番
能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

〔おことわり〕暑中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜わりますようお願い申し上げます。

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１３００円
郵送の場合　１年　２０００円
一　部　１２０円

ＮＨＫ放送予定（平成26年９月）

◆◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

８月31日(日)「鐘の音」（和泉流狂言）
シテ野村　萬　アド野村　太一郎
９月７日(日)「仲　光」（観世流）武田　宗和
９月14日(日)「柏　崎」（宝生流）金森　秀祥
９月21日(日)「未　定」
９月28日(日)「木　賊」（観世流）山本　順之

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［８月］
24日(日)　第30回衣斐正宜後援会能
31日(日)　ＮＰＯむすめかぶき主催「隅田川」（有料・自由席5000円）

［９月］
７日(日)　名古屋能楽堂９月定例公演　（有料）
13日(土)　東海巽会大会　（無料）
15日(月)(祝)　名古屋観世会定例公演能　（有料）
20日(土)　第10回名古屋片山能記念公演
～能と京都～
21日(日)　第２回和久荘太郎師「演劇空間」　（有料）
23日(火)(祝)　102周年　鳳鳴会　（無料）
27日(土)　28日(日)　和泉流狂言大会　（無料）

小牧山薪能

能「羽衣」「葵上」狂言「鶏聟」

9月6日　小牧山史跡公園

こまき信長お月見まつり小牧山文化事業として催される「小牧山薪能」はきたる九月六日（土）午後六時から信長の館跡・小牧山史跡公園で催される。入場無料。雨天の場合は小牧市市民会館。

主催・小牧市・小牧市教育委員会、企画運営・小牧山薪能実行委員会・共催・小牧市観光協会・小牧青年会議所など、後援・公益社団法人能楽協会名古屋支部・小牧商工会議所

薪能開始前に小牧市謡曲連盟や名古屋市立名東高校能楽研究部による仕舞等のセレモニーが催される。

午後五時四十五分　火入れ式
（午後六時）観世流能「羽衣・和合之舞」　シテ武田大志、ワキ飯冨雅介、笛・鹿取希世、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・鬼頭義命、後見・梅田邦久・祖父江修一

地謡　武田邦弘、古橋正邦、清沢一政、松山幸親、本田勲、吉沢旭

和泉流・狂言「鶏聟」シテ・野口隆行、アド・松田高義、鹿島俊裕、井上松次郎、後見・野村又三郎

観世流能「葵上・梓之出」シテ・祖父江修一、後シテ清沢一政、ワキ高安勝久、ワキツレ椙元正樹、間・佐藤融、笛・大野誠、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋輝、後見・武田邦弘、武田大志

地謡・梅田邦久・古橋正邦・高橋瞭一・松山幸親・本田邦・吉沢旭

（終演八時）

東海能楽研究会

20周年記念行事

～伝統を受け継ぐ～

東海能楽研究会では、設立二十周年記念公演として、八月三十日名古屋能楽堂で、東海能楽研究会20周年記念～伝統を受け継ぐ～「筧鑛一先生を偲ぶ会」記念公演を開催する。入場無料。（番組①面掲載）

また同会では、この公演とともに、七月二十九日（火）より九月五日（金）まで、名古屋能楽堂八月企画展示として「伝統を受け継ぐ」をテーマとして、同研究会の活動成果を披露するとともに、同研究会の創設者・故筧鑛一先生をしのぶコーナーを特設、豊橋の安海熊野神社蔵の能楽資料、狂言面、狂言伝書など、さらに狂言共同社蔵の狂言装束・小道具を展示する。

東海能楽研究会
二十周年記念
筧　鑛一先生を
偲ぶ会

八月三〇日(土)
十二時四十五分開演

伝統を受け継ぐ　第一部
こども能楽教室
仕舞、一口講
こども狂言発表会
口真似　太郎冠者　今枝　信二、主人　今枝　孝大、客　今枝　郁雄

呉竹会　発表会
独鼓　竹生島　大倉　三忠　筧　陽華
一調　鐘ノ段　坂野　晃　中里三紀子
居囃子　船弁慶　堀野　晃　大鼓　小汐　伴　小鼓　米田　眞理
舞囃子　経政　中島　暉　大鼓　松浦　祥子　小鼓　小坂　洵子　笛　浅田　宏
独鼓　天鼓　キリ　大倉三忠　筧　侃大
独鼓　江口　キリ　坂野　晃　大蔵三忠

伝統を受け継ぐ　第二部
座談会　筧鑛一先生を偲んで
司会　林　和利（東海能楽研究会代表）
仕舞　融　長田　驍　伊藤　英毅
地謡　長田　郷　平塚　昭子
狂言　二千石　主人　佐藤　友彦　太郎冠者　佐藤　融　後見　今枝　郁雄
独鼓　花月　長田　驍　大倉　三忠

主催　東海能楽研究会
協賛　朝川直三郎基金　呉竹会

問い合わせ先
代表　林　和利
名古屋女子大学　天白校舎　林研究室
名古屋市天白区高宮町１３０２
携帯電話　０９０・８５４４・５３４８

演能案内

ＮＰＯむすめかぶき上演会

八月三十一日（日）午後五時開演
名古屋能楽堂

隅田川
お話　詩人　村瀬　和子
渡守　十四世　高安流宗家　高安勝久
班女　市川櫻香
地謡　梅田邦久
清元志仕　雄太夫
打ち物　仙波清彦

自由席五千円（当日券のみ）
学生　当日券のみ三千円

隅田川公演事務局
ＴＥＬ　０５２（３２３）４４９９
ＦＡＸ　０５２（３２３）４５７５
〒名古屋市中区千代田十番三号

宝生流　和久荘太郎師主宰

演劇空間　第二回

九月二十一日（日）午後二時開演

能　**橋弁慶**
トモ　辰己　和鹿
子方　和久凛太郎　辰己満次郎
間　今枝　郁雄　地謡　河村眞之介　観世　元伯　成田　達志　藤田六郎兵衛
後見　衣斐　正宜　辰己大二郎　佐野　登　内藤　飛能　朝倉　俊樹　小倉伸二郎　宝生　和英　小倉健太郎　山内　崇生

狂言　**魚説法**　井上　蒼大　井上松次郎

能　**葵**
高橋　憲正
和久荘太郎
宝生　欣哉
御厨　誠吾
間　野村又三郎
河村眞之介　観世　元伯　成田　達志　藤田六郎兵衛
後見　衣斐　正宜　地謡　内藤　飛能　佐野　登　小倉伸二郎　高橋　章　小倉健太郎　宝生　和英　山内　崇生　朝倉　俊樹

百二周年　鳳鳴会

九月二十三日（祝）午前九時半始
名古屋能楽堂

チケット販売
S席　八〇〇〇円　A席　七〇〇〇円
自由席　五五〇〇円　学生席　二〇〇〇円
事務局　０３・３６５５・２６８１

◇名古屋能楽堂　プレイガイド・中日文化センター
愛知県芸術文化センタープレイガイド・栄プレチケ92

番組

素謡　**吉野天人**　森　ひさ子　白石　雅彦
杜若　板倉　峰尾　坂井　音隆
浮舟　奥田　昌人　武田　祥照

仕舞　**田村**　クセ　岡本　雅子
紅葉狩　鈴木　恵子
敦盛　クセ　石川　幸子

素謡　**葵上**　坂口　貴信　鳥山　迪永　長山　桂三　武田　崇史
素囃子　**富士太鼓**　武田　章志　荒巻　洋子　武田　文志

素囃子　**熊野**　田淵　祐子　亀井　広忠　観世新九郎　藤田六郎兵衛
村雨留
融　横田多津子　亀井　広忠　観世新九郎　小寺真佐人
猩々　草本貴美子　亀井　広忠　観世新九郎　藤田六郎兵衛　小寺真佐人　竹市　学

素謡　**隅田川**　武田　章志　松井　弘　松木　千俊　佐川　勝貴
連吟　**薪之段**　下畑　明弘　清水　清　清水　巳良　中嶋　國彦　西垣津征男　蒲　忠成

仕舞　**屋島**　白石　雅彦
葛城　キリ　北原麻由里
通小町　河野　節子

舞囃子　**西行桜**　八賀サト子　亀井　広忠　観世新九郎　小寺真佐人
羽衣　和合之舞　椰野　晴美　亀井　広忠　観世新九郎　藤田六郎兵衛　小寺真佐人
西王母　齊藤　光江　亀井　広忠　観世新九郎　藤田六郎兵衛　小寺真佐人

素謡　**松風**　鵜澤　光　岡本　雅子　北原麻由里

舞囃子　**定家**　舟口　恵子　亀井　広忠　観世新九郎　藤田六郎兵衛
桜川　鳥山　迪永　亀井　広忠　観世新九郎　竹市　学

独鼓　**羽衣**　横田多津子　小寺真佐人

素謡　**雲林院**　楳木　映夫　塚田　照夫

番外
舞囃子　**高砂**　八段之舞　武田　友志　亀井　広忠　観世新九郎　小寺真佐人　竹市　学

―終了予定　十六時四十分―

御来場歓迎
入場無料

主催　鳳鳴会
武田友志

全国新作能面公募展

越前池田 能楽の里

募集期間 11月6日～17日

越前池田の能楽の里では、平成十年度から全国公募の能・狂言面の展示会を開催、今年度も全国より新作の能・狂言面を募集する。

この新作能面公募展は、前回十二回までに延べ四三五六名の方々より新作面六千三十五点の出品があり、地元の福井県池田町、および名古屋能楽堂にて展示が行われ話題を高めている。

第十三回新作能面公募展の募集要項は次のとおり。

［募集期間］　平成二十六年十一月六日(木)～十一月十七日(月)

［作品規定］本公募展未出品で新作の能・狂言面に限る。

［出品点数］一人二面までとする。

［出品料］一面出し：三千円、二面出し：四千五百円

出品料は、作品募集期間内に、次の郵便振替口座へ振込むこと。

［振替口座］00710・8・108411

加入者名　池田町伝統文化保存活用実行委員会

［審査日］平成二十六年十一月二十日(木)二十一日(金)

会場　能楽の里文化交流会館大ホール

［審査員］能楽師観世流シテ方・久田勘鷗氏、能楽師和泉流狂言方・佐藤友彦氏、能面師・桑田能忍氏、池田町長・杉本博文氏、池田町伝統文化保存活用実行委員会長・山口哲夫氏。

審査結果は十二月中旬までに出品者全員に通知される。

［賞］①最優秀賞　能楽の里大賞1点②福井県知事賞1点③池田町長賞1点④福井県教育委員会賞1点⑤池田町教育委員会賞1点⑥審査員特別賞3点程度⑦能楽の里賞7点程度⑧秀作10点程度⑨佳作20点程度⑩入選百点程度

作品展示　平成27年1月30日(金)～3月1日(日)　池田町能面美術館（TEL0778・44・7757）。入選以上の作品約百五十点を展示

平成27年3月7日(土)～3月26日(木)　名古屋能楽堂展示室（TEL052・231・0088）

佳作以上約50点を展示。

［表彰式］平成27年2月21日(土)十一時より、池田町能面美術館

入賞者には、表彰式にて賞状と額を授与。また副賞として池田町の特産品を贈呈

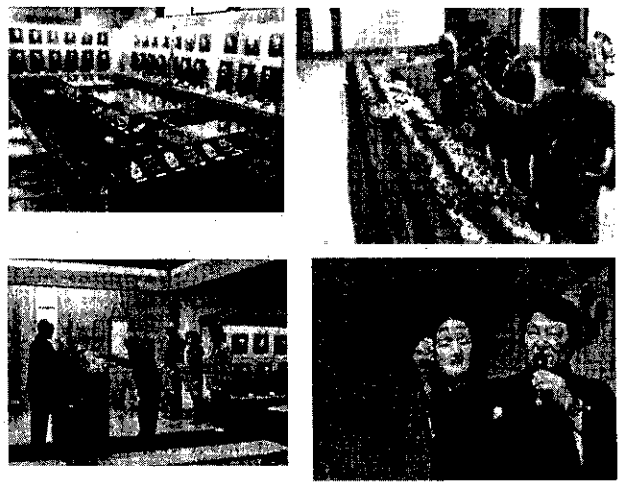
記念公演　平成27年2月21日(土)十四時より、能楽ワークショップ能楽の里文化交流会館能舞台

▽平成27年2月22日十三時三十分より能楽鑑賞会、能楽の里文化交流会館能舞台

応募作品中から舞台で使用する面を選び、演目を決定する。

［応募お問合せ先］（〒910－2511）福井県今立郡池田町薮田五－一、能楽の里文化交流会館（TEL778－44－8006　FAX778・44・7771、E－mail kyoui@town.ikeda/fukui.jp　フェイスブック・能面公募展（福井県池田町全国新作能面公募展）

新作能面公募展の平成25年の様子



栄謡曲クラブ

400回記念謡会

11月7日 北文化小劇場

能楽愛好者のつどいとして活動をつづける栄謡曲クラブ（三口謙介氏主宰）は、昭和五十六年（一九八一）四月に月例会を始めて、このほど通算四百回を数え、記念謡会をきたる十一月七日（金）、名古屋市北文化小劇場で開催する。午前十時始。誰でも自由に気楽に集まって謡曲（観世流）を楽しもうというのが趣旨で、広く同好者の参加を呼びかけている。

以前謡曲を習って何らかの事情で中断して、もう一度謡いたいと考えている人歓迎。

主宰の三口氏は「一度の欠会もなく続けられたのは支えて下さる皆様のおかげであり、感謝して賑やかなつどいに集まりに応えたい」と感謝のことばとともに呼びかけている。

問い合わせは、栄謡曲クラブ・三口謙介氏（電話090・9262・9247）

第4回 観正会

10月5日（日）開演午前十時

名古屋能楽堂

「安宅」を楽しく観て頂くためのレクチャー

ご挨拶　久田勘鷗

お話し　藤田六郎兵衛・久田舜一郎・上野義雄　笠田昭雄・今村哲朗・山中景昌・久田勘吉郎

子方・源義経　吉井紹智
〃　ツレ・義経の郎等　上野朝彦
〃　上田顕崇
〃　久田勘吉郎
〃　山中景晶
〃　梅若雄一郎
〃　上野雄介
〃　笠田祐樹
〃　武田大志
〃　今村哲朗
シテ・武蔵坊弁慶　久田勘鷗

能 **安宅**　ワキ・富樫　高安勝久　大鼓　上野義雄　小鼓　久田舜一郎　笛　藤田六郎兵衛

勧進帳　間・強力　佐藤友彦
瀧流　富樫の従者　野村又三郎

後見　藤谷音彌　上田拓司　笠田昭雄　松山幸親　山中雅志　久保信一朗　梅若義久　上田大介　下川宜長　上田貴弘　山田義高

地謡

（終了予定　十二時半頃）

主催　NPO法人　名古屋能楽振興協会

前売　指定席　八〇〇〇円（当日八五〇〇円）
自由席　六〇〇〇円（当日六五〇〇円）
学生　二五〇〇円（当日三〇〇〇円）
問い合わせ　NPO法人　名古屋能楽振興協会事務局　名古屋市名東区一社3－162　TEL　052・734・6192

名古屋観世九皐会

十月十八日（土）午後一時開演

名古屋能楽堂

能 **砧**　小島英明　中所宜夫　飯冨雅介　河村眞之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

間　松田高義

後見　奥川恒治　観世喜之　中森貫太

地謡　吉沢晃一　宇都宮公　五木田三郎　駒瀬直也　観世喜正　小島英明　観世喜正　坂真太郎　中森健之介

仕舞　定家　高橋暸一
景清　駒瀬直也

地謡

狂言　**蟹山伏**　シテ　野村又三郎　アド　野口隆行　アド　野村信朗

後見　伴野俊彦

仕舞　鵜之段　五木田三郎
玉之段　観世喜正

地謡　池上彰悟　奥川恒治　中森貫太　高橋暸一

―休憩十五分―

能 **張良**　坂真太郎　観世喜正　森常好　河村裕一郎　後藤孝一郎　上田悟　竹市学

間　野口隆行

後見　高橋暸一　五木田三郎　地謡　中森健之介　小島英明　奥川恒治　中森貫太　駒瀬直也　中所宜夫

附祝言

主催　公益社団法人観世九皐会

［料金］全自由席　五、〇〇〇円、学生券　二、〇〇〇円

問合わせ・申込み　観世九皐会（電話03・3206・7311）（FAX03・5261・2980）

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥⑨

竹尾　邦太郎

拾四　「朝日狂言会」③

――承前――

第一一回　朝日狂言会・昭和四四年六月二二日（日）二時半始。

素囃子「羯鼓」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・吉田定男、「二人大名」佐藤卯三郎（通行人）野村又三郎（大名・甲）佐藤秀雄（大名・乙）、小舞「大原木」河村丘造、「膏薬煉」茂山千之丞（上方ノ膏薬売）木村正雄（鎌倉ノ膏薬売）、「猿座頭」和泉保之（座頭）井上祐一（妻）井上松次郎（猿曳）井上豊弘（猿）、「素袍落」茂山千作（太郎冠者）茂山千之丞（主）木村正雄（伯父）、「六地蔵」井上礼之助（すっぱ）佐藤友彦（田舎者）大野弘之・井上義次・井上松次郎（以上すっぱ）。

第一二回　朝日狂言会・昭和四五年七月一二日（日）二時半始。

「犬山伏」佐藤卯三郎（山伏）佐藤秀雄（僧）大野弘之（茶屋）井上礼之助（犬）、「右近左近」善竹忠一郎（右近）茂山千五郎（妻）、「花盗人」和泉保之（花盗人）井上松次郎（何某）、素囃子「イロヘ掛り中之舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・河村総一郎、「神鳴」茂山千五郎（神鳴）善竹忠一郎（医師）、「釣針」井上礼之助（太郎冠者）佐藤友彦（主）河村丘造（女）井上祐一・井上義次・大野弘之・佐藤秀雄（以上・立衆）。なお大蔵流「右近左近」は和泉流では「内沙汰」。

第一三回　朝日狂言会・昭和四六年七月一一日（日）一時始。

素囃子「イロヘ掛り中之舞・村雨留」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・寛鉱一、「鼻取相撲」佐藤秀雄（大名）佐藤友彦（太郎冠者）大野弘之（奉公人）、「悪太郎」善竹忠一郎（悪太郎）善竹圭五郎（伯父）大蔵弥太郎（僧）、「水掛聟」佐藤卯三郎（舅）野村又三郎（聟）井上祐一（女）、「千鳥」大蔵弥太郎・善竹圭五郎（主）善竹忠一郎（酒屋）、「武悪」和泉保之（主）井上礼之助（武悪）井上松次郎（太郎冠者）。

第一四回　朝日狂言会・昭和四七年七月九日（日）二時始。

「合柿」和泉保之（柿売）佐藤友彦・大野弘之・井上松次郎・野村又三郎（以上・参詣人）、「宗論」茂山千作（浄土僧）茂山千五郎（法華僧）茂山正義（宿屋）、素囃子「羯鼓」藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・吉田定男「石神」井上礼之助（男）野村又三郎（妻）大野弘之（某）、「縄ない」茂山千五郎（太郎冠者）茂山正義（主）茂山千作（某）、「二人袴」井上松次郎（聟）佐藤卯三郎（親）佐藤秀雄（舅）井上礼之助（太郎冠者）。

第一五回　朝日狂言会・昭和四八年（一九七三）七月八日（日）二時始。

小舞「田植」和泉保之・野村又三郎（地頭）、「花子」佐藤卯三郎（何某）三宅右近（妻）井上松次郎（太郎冠者）・和泉保之（後見）、素囃子「安宅・瀧流シ」藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・河村総一郎、「狸腹鼓」茂山千五郎（妙寸尼、ノチ狸）茂山千作（喜惣太）・茂山正義・茂山あきら（後見）

特に第一五回記念を謳ってはいないが和泉・大蔵二流秘曲の上演。因に和泉流は奥伝大習の「釣狐」「花子」から、大蔵流は極重習の「釣狐」「花子」「狸腹鼓」から。「花子」を勤める佐藤卯三

郎は明治二四年（一八九一）生、八二歳の披曲は空前絶後では。一方、「狸腹鼓」の茂山千五郎は大正八年（一九一九）生、五四歳、前名は七五三、昭和四一年一月、父十一世千五郎が古稀を期し隠居名・千作（三世）を名乗ると同時に十二世として千五郎を継承。

なお、これまでも番組には無記名で曲目の梗概が記されていたが今回は細部に亘るので、参考に資するため次に転載する。

「花　子」　和泉流

「花子」「釣狐」はいずれも大習で特に「花子」は「釣狐」よりも重く扱はれて居る。釣狐が窮屈な姿勢と特異な発声で体力を消耗するのとはまた違った意味で苦労が多く、とくに後半に入ってシテ独演の形になると、吟の変化の多い小歌を自ら謡いながら所作をするので、全く地謡をも兼ねて一人二役を勤めなければならない。

太郎冠者が身代りをさせて花子の許へ急ぐ中入を「浮進ノ入」といふ、気もそゞろに先を急ぐ意である。又中入り後の出を「夢心ノ出」という。魂の遊離した放心の意である。これには足の運び方に秘事がある。

筋の上からは能の班女の後日談で、また隅田川の母の前身を示すことにもなるが、その花子当人の存在を陰のものとして舞台に出さないのは面白い趣向である。

和泉流の七代目の家元山脇元宜が寛永八年、禁裡で此の狂言を勤めて和泉守に任ぜられ、爾来和泉を流名としたと伝えられている。

花子と言う女の許へ通う為、妻には衾を被て座禅をすると偽って遠ざけ、自分の身代りに、太郎冠者に衾を被せて出て行く、間もなく気づいた妻は、冠者と入代り、嫉妬に燃える思いを座禅衾に包んで夫の帰りを待つ。やがて戻った夫は座禅衾の中を太郎冠者とばかり思い込んで其夜の花子の方のひめごとをこまごま語り、さて衾を取って見ると、太郎冠者と思いの外、やきもちやきの妻であった、という筋である。

この曲は古く浄瑠璃などにも取り入れられていたが、明治四十三年に岡村柿紅が長唄物所作事に改め、鷺流の曲名である座禅を採って身替座禅と題した。

「狸腹鼓」　大蔵流

喜多家三代目の作が井伊掃部頭（時の大老）がお声がかりにて、お抱狂言役者（九代目千五郎正虎、当代千五郎之曾祖父）が当時廿代目家元大蔵虎文相談之大蔵流狂言として復活され、嘉永五年九月十八日江戸表井伊家婚礼式之節、千五郎正虎に依て初演せられ、大蔵流最奥伝、釣狐、花子と共に並び位される秘曲で有る。又一名彦根狸又は井伊狸とも異名せられ以後茂山千五郎家の秘伝でも有る。去る昭和廿四年十一月十二日東京新聞社主催名曲能之節多摩川の能舞台に於て当代家元大蔵弥太郎氏、十代目千作（父）より相伝を受けられ初演せられ夫より当流の最高秘曲と成り現代に至る。

猟師喜惣太（アド）が度々狸を射取ると歎き何とかして止めさせんと思案を巡らし、喜惣太の伯母妙寸尼と化け、喜惣太の家に行き、色々と物語殺生の恐ろしき事を咄、意見の末喜惣太に尼の目前にて弓矢迄も捨てさせ満足の余り小唄を謡ひ乍ら戻る道すがら犬のほへる鳴声を喜惣太が聞て怪しみ、尼の戻った跡をしたひ行き、化の革を見破られ既に射殺さるゝ処を、早変りして狸の姿を現はし、月に詠めいり乍ら腹鼓を打つ、喜惣太其面白さに我を忘れて、弓矢迄捨て真似を仕て居るすきを見、狸その弓矢を取りあげアベコベに喜惣太を射かける真似をする。喜惣太肝をつぶし狸を捕まへかける時、狸弓矢を捨て逃げ入る。釣狐之悽惨さと替り、誠にユーモアたっぷりの狂言らしき曲で有る。

橋掛りにて見付けられ「たった一と矢に射殺いて呉う」言ふ詞にて一瞬に尼の姿を狸と変る（即ち早替り）するが此曲のみそである。

千作師書翰より

第一六回　朝日狂言会・昭和四九年七月一四日（日）一時始。

「二人大名」大蔵弥太郎（道通り）大蔵基嗣（大名）善竹長徳（連大名）、素囃子「男舞」藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・寛　鉱一、「宗論」佐藤卯三郎（浄土僧）井上礼之助（法華僧）井上佑一（宿主）、「貫鞍」井上松次郎（舅）大野弘之（聟）佐藤友彦（妻）、「井礒」善竹玄三郎（勾当）善竹長徳（菊都）大蔵基嗣（道通り）、「狐塚」和泉保之（太郎冠者）野村又三郎（次郎冠者）佐藤秀雄（主）。

第一七回　朝日狂言会・昭和五〇年七月六日（日）二時始。

「鞍猿」　佐藤卯三郎（大名）佐藤秀雄（猿曳）佐藤友彦（太郎冠者）佐藤　融（猿）、素囃子「神舞」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・寛　鉱一・助川龍夫、「瓜盗人」茂山千之丞（盗人）茂山千五郎（畑主）、「蝉」和泉保之（蝉ノ精）井上松次郎（旅僧）大野弘之（所ノ者）、「素袍落」茂山千五郎（太郎冠者）茂山千之丞（主）茂山千作（伯父）、「禰宜山伏」井上礼之助（山伏）野村又三郎（禰宜）井上祐一（茶屋）今枝靖雄（大黒）。

第一八回　朝日狂言会・昭和五一年七月一一日（日）一時半始。

素囃子「早舞」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫、「松楪」佐藤友彦（丹波国ノ百姓）大野弘之（津の国ノ百姓）井上礼之助（奏者）、「左近三郎」善竹忠一郎（狩人）善竹圭五郎（僧）、「内沙汰」井上松次郎（百姓）佐藤秀雄（妻）、「棒縛」善竹圭五郎（次郎冠者）善竹忠重（主）善竹忠一郎（太郎冠者）、「仁王」和泉保之（博奕打）野村又三郎（何某）佐藤友彦・歌村鴻助・石田喜樹・鷺見政行・今枝良治（以上・立衆）井上祐一（殿）。

なお、この回から番組リーフレット、レイアウトは変らないが一ツ折から二ツ折に細長くなり、会員券も右隅のミシン目から三角に千切る形から常の形になる（写真）。

――以下次号――

第十八回　朝日狂言会　昭和51年7月11日(日)午后1時30分始　於　熱田神宮能楽殿

会　員　券

自由席・￥1,000円

主催　朝日新聞社　狂言共同社

◆初夏から仲夏への舞台◆

「青陽会定式能」と「豊田市能楽堂さつき能」「第七回・西村同門会研究能」「第十七回ござる乃座」

竹尾邦太郎

「清経」

夫・清経の訃を齎す淡津三郎（ワキ勝久）、哀惜措く能わずの神妙な佇まいに存在感をみせれば、遺髪を手に、夫が前途の失望から入水して果てたと知る妻（ツレ勘吉郎）の怨嗟の憔悴あり〳〵、惹きつける（写真）。しかし、能一曲を通してはツレに未だ座れ慣れて居ない印象、落着きがほしいところ。また、筆者の先入観だが、女性に男体のシテ、男性に女性のツレ、と役が振られると倒錯めき、女流能楽師がシテの際には、絵空事とは言い条、自ずから演能曲目が制限されるのでは、と考えてしまう。

さて清経ノ亡霊シテ三津子、クセは入水に至る前後の情況描写。目的無く舟を出す哀れは一ノ松へ抜け、木の葉の様に揺れる小舟の心を七ツ拍子に二ノ松から更に幕際まで、鷺の群れを靡く源氏の旗と恐れる疑心暗鬼。〈ここに清経は、と戻って来ると常座で上ゲ端、〈あぢきなやとても消ゆべき露の身を、と上ゲ扇にお手上げの自嘲の心をみせ、〈月に嘯く気色にて、と月に向かい吟誦する様子は月ノ扇に（写真）。こゝはもっと右に面を照ラス方が良いが、総体に型どころ綺麗に極め女流の肌理の細かさ。（1時間4分）

『青陽会定式能』「清経」左より高安勝久、久田三津子　（撮影　杉浦賢次）

『青陽会定式能』「清経」久田三津子　（撮影　杉浦賢次）

『青陽会定式能』「瘦松」左より鹿島俊裕、今枝郁雄

「瘦松」

山賊の隠語に、幸せがよいを肥松、わるいを瘦松と言い習わすにも拘わらず、縁起を担ぎそうな、非合法な職業（？）の山賊（シテ郁雄）がわざ〳〵瘦松という名の在所へ出向き、「仕合はせを致さうと、存ずる」などと言う魂胆が分らないが、「あれへ日本一の者が来た」と女（アド俊裕）を捕えて長刀で脅し「命には換へられまい」と大きな袋包を奪い喜悦。手元の長刀の存在も忘れて中味の吟味に夢中になっていると、女はまんまと長刀を掠め取り、逆に山賊を威嚇にかかる（写真）。「一旦呉れた物を返すという事があるものか」と泣き事を言う山賊を尻目に匆々と立ち去る女。「やるまいぞ、やるまいぞ」と空しく追う山賊の、「瘦松か」と落胆しきりの呟きも聞かれようというもの。小品乍ら手堅く纏めて可。（17分）

第12回能面展

名古屋市博物館

中部能面研究社主催（代表　磯部峯雲氏）第十二回「新作能面展」は、九月二十三日（火・祝）から九月二十八日（日）まで、名古屋市博物館3階ギャラリー第一室で開催される。後援愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会。

出展作品は、「翁」「黒色尉」（三番叟）「延命冠者」「小面」「若女」「万媚」「増女」「孫次郎」「十寸髪」「山姥」「泥眼」「般若」「橋姫」「十六中将」「慈童」「蝉丸」「平太」「童子」「猩々」「中将」「景清」「弱法師」「怪士」「小牛尉」「大癋見」「小飛出」「大天神」「瘦男」「釣眼」「鼻瘤悪尉」「熊坂」「小癋見」出展。五十五点。

事務局　名古屋市瑞穂区船原町4－16－10－102

電話（052）882・4310

金春家文書の世界

法政大学能楽研究所が所蔵する般若窟文庫は能楽を伝える家のうち、最も古い家系を誇る金春家に代々伝えられてきた文書群で全二千点に及ぶ膨大な資料であり従来、これらの資料がまとまって一般に公開されることはなかったが、このたび、般若窟文庫蔵の金春家旧伝文書の采皆調査とデータベースの完成を機に、その主だった資料を展示し、一般に閲覧することになった。これに合わせて、九月十五日には金春流宗家・金春安明氏も参加して、金春家文書をテーマとするシンポジウムを開催し、金春家の歩んできた歴史を様々な角度から紹介される。

シンポジウム

開催日　九月十五日（月）午前十時三十分

金春家文書伝来の経緯　宮本経造

（法政大学能楽研究所教授）

展示　9月12日～10月6日

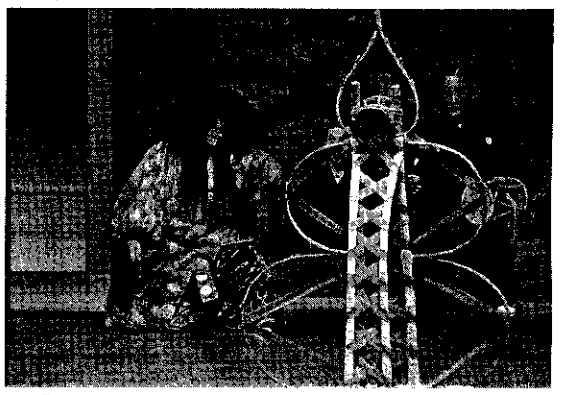
展示場所　法政大学市ヶ谷キャンパス

「天鼓・弄鼓」

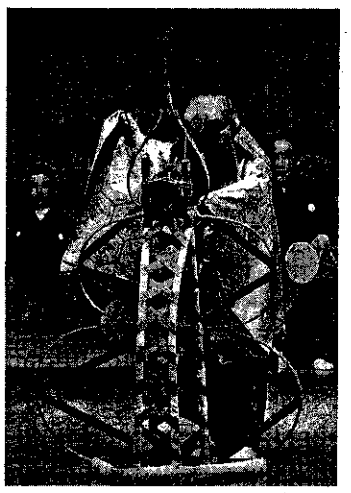
懐妊中、天から鼓が降る夢で天鼓と名付けられた男子、後にそれが正夢となり、鼓の妙音の噂が帝の耳に達して御召しが掛かれば、鼓と姿を眩ます天鼓。しかし帝の権力にあっさり見付かり呂水に沈められ、鼓は没収されるが誰が打っても鳴らないとあって、天鼓の父・王伯（前シテ勘鬘）が勅使（ワキ元）に呼び出される。

冒頭、王伯を訪ねずはならない経緯を情意を尽し述べるワキの名宣が巧い。「弄鼓」の小書で我子を亡くした老いの身を唧つ一セイ・サシ・下歌・上歌を省き、直ぐシテ・ワキ問答に。突然のワキの訪れに恐懼のシテ、来意を知り参内するが土壇場で老人の事ゆえ御免を〜と手を合わせ常座に下居、哀願も叶わず、膽を固めへ玉殿に初めて臨む老の身、とスッと立つもへ天の鼓を打たうよ、と正中へ出れば愛別離苦の絆を断てぬ苦衷、〈苦しみの海に沈むとかや、と下居にシヲル切なさ。この苦衷を敷衍するクセを省きロンギ。〈急いで鼓打つべし、の地（邦久・一政・大志ら）に急かされシヲリ解くとワキにアシラヒ、〈打つや打たずや、と直り、立つと雲龍閣の玉の階を幕へ眺め、薄氷踏む心に運ビ羯鼓台へ。撥を取り、渾身の力振り絞る印象は、〈打てば不思議や、と腰を捻り力強く打つ（写真）と、ワキは妙音を聴くか、右ウケで平伏。シテは撥取り落し、虚脱した様にたら〳〵と退り正中、頽れる様に安座双シヲリは緊張の解けた安堵と事を果した喜びだったろう。勅使の従者（アヒ松次郎）に「お立ちやれ、先づお立ちやれ」と促され、やっとシヲリ解くと介添されて立ち、中入は送り込み。後見が撥を拾って元に戻し、羯鼓台の後ろ、框の処を少し拡げると後場。

小書で天鼓ノ亡霊（後シテ勘鬘）は出端（誠・孝一郎・総一郎



『青陽会定式能』「天鼓・弄鼓」久田勘鷗
（撮影　杉浦賢次）



『青陽会定式能』「天鼓・弄鼓」久田勘鷗
（撮影　杉浦賢次）

舞台へ入るとへ菩薩も（此処に）、と唐団扇を後見に預け台の前、撥を取りへ打つなり〳〵、と踏む六ツ拍子に気分昂揚、撥で舞う達拝掛「楽」に。途中、二ノ松へ流れ、頭ヲ取って羯鼓を見込み、舞台へ戻ると台に寄り、両手の撥で羯鼓を打って退るとピョン〳〵跳ねて頭を振り（所謂イヤ〳〵）スミから台の後ろを通り抜けて舞上げるが、欣喜雀躍を動画で見るような面白さ。へ面白や・洋輝）で出るとスタスタといった感じで軽やかに一ノ松へ、へあら有難の御弔ひやな、と思い掛けぬ処遇を喜び、ワキと掛合のうち時もげに、と興趣未だ尽きず、へ水に戯れ、と膝をつき、へ波を穿ち袖を返すや（写真）、と喜々として興じる風情も活き活きと、シテ力量発揮の充実の舞台。（1時間14分・4月12日・青陽会定式能）

「牛盗人」

牛を盗まれた鳥羽離宮の牛奉行（アド友彦）、訴人者には望み通りの物を与える旨の高札を立てれば、子供（子方・蒼大）が兵庫三郎（シテ松次郎）なる者を告発。太郎・次郎両冠者（郁雄・融）を捕縛に向かわせ連行すれば、頑強に罪状認否するシテに子供を対決させる奉行。訴人が我子と知り、その真意も知らず悪態をつき喚くシテは、更に、牛を盗んで親の弔いの布施に代えたという仏弟子の先例を論（あげつら）い、己れの所行を正当化の詭弁、牢へ引っ立てられんとすると「先づお待ちなされませ」と遮る子供（写真）。奉行と問答に、望み通りの物を、と要求、こゝへきて我子の深慮遠謀を知るシテ、「物の憐れを知らざるは木石に異ならず」と奉行、許されてシテは縄目を解かれ、へかくて伴ひ立帰り、と地謡（高義・隆行・健太郎）のうちにシテは子供を介添え（写真）送り込みへげに有難き孝行の、喜びに舞うと「ちゃっと来さしめ〳〵」と入る。一休の頓知譚や大岡裁きも思われ子方が好演、人情の機微綾なす好舞台だった。（38分）

『豊田市能楽堂・さつき能』「牛盗人」
左より井上松次郎、井上蒼大（後列）佐藤融、今枝郁雄、佐藤友彦（撮影　杉浦賢次）

『豊田市能楽堂・さつき能』
「牛盗人」左より井上松次郎、井上蒼大　（撮影　杉浦賢次）

「鬼継子」

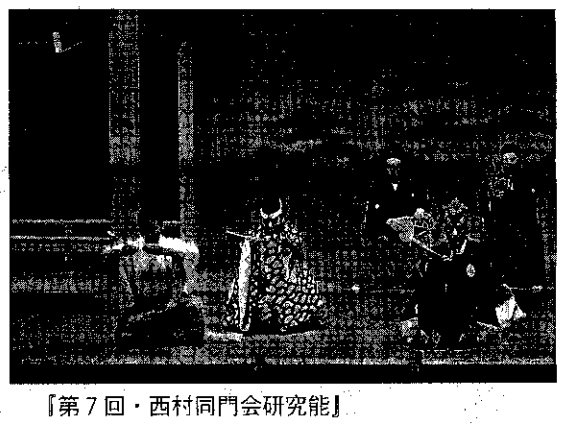
越中芦倉在の刑部三郎の妻（アド融）、夫と死別し赤子と親元へ戻る途次、鬼（シテ郁雄）と出くわし、命乞いをすれば「人は喰はぬ鬼ぢゃ」などと人を喰った応答が可笑しい。一悶着のち、女は鬼の妻になることを承知、身仕度のあいだ鬼に赤子を預ければ、あやすに鬼に情が移り、移れば舐めた位かわいく（写真）、挙句は舌舐めずりして食いたいが本性。危く取り戻した女は「腹立ちや〳〵」と追い込み、「許せ〳〵」逃げる鬼。悪鬼羅刹にはなり得ない一種剽軽な鬼を郁雄素直にみせる。（21分）

『第7回・西村同門会研究能』
「鬼継子」左より今枝郁雄、佐藤　融
（撮影　杉浦賢次）

「春栄」

宇治川合戦で虜囚となった増尾春栄（ツレ原　陸）が近々謀殺されると仄聞する兄・増尾種直（シテ驍）、従者（トモ俊介）を伴い囚人奉行・高橋権頭（ワキ雅介）に面会を乞い、応対に出た下人（アヒ松次郎）の取次で会うと、弟・増尾春栄との対面を望むが、弟は兄に後難が及ぶのを危惧し、ワキの執り成しに兄弟相見（まみ）えるも、弟は飽くまで此の人は兄に非ず家来、と言い張れば、弟と一緒に断罪されるつもりの兄は「いやとにかくに命を捨つるまで」と、自刃も辞さぬ覚悟。弟は、善かれと思いしたことが外れ、兄に許しを乞うと、互いを思い遣りシヲル兄弟愛にワキも感涙する。ここでワキはシテとの問答に、ツレへの好意は戦死の我子似るゆえ、後嗣に貰い受けたいと吐露すれば、何たる皮肉、鎌倉から虜囚を皆誅せよの声が伝えられる。ツレが断罪と決ればシテも同様にと、クドキで国元の母に事の詳細と母から頂戴の御守を形見にトモに托せば、ツレも最期の文と黒髪を。トモが二人の形見を持って退くと、連綿たる親子の縁は仏の教えを受けても苦は免れ得ないが、浄土は己れの心に在る、と述べるクリ・サシ・クセに。

上ゲ端あと、ワキはツレを介添して正面へ、促されてシテも出ると安座、二人はへ我らを照し給へと、合掌。そして、将に討たれんとするところへ早打（ワキツレ橋本　叡）が姿を見せる（写真）。ワキはワキツレとの問答に赦免状と知ると常座へ走り「あゝ嬉しゝ」と読む（写真）。大声で吼えたい程の喜びの兄弟、ワキは改めて春栄を後嗣に貰い受けて重代の太刀を贈り目出度く祝宴に。地謡（呻二・浩之・輝久・郷ら）へなほ喜びの盃の……、とワキがひとさし舞うのも珍しく（写真）、シテも勧められ、達拝して立つと男舞（誠・嘉津幸・眞之介）端正さわやかに活き〳〵と舞い年功を発揮（写真）、キリはへ親子兄弟と栄ふる事も、とワキを要に三人末広に下居、合掌（写真）、立つとへうち連れて、ワキ、ツレ、シテと橋懸へ、一ノ松でシテがユウケンして留メた。



『第7回・西村同門会研究能』
「春栄」左より原　陸、飯冨雅介、長田　驍

『第7回・西村同門会研究能』
「春栄」左より井上松次郎、飯冨雅介、長田　驍

『第7回・西村同門会研究能』
「春栄」左より橋本　叡、井上松次郎、長田驍、原　陸、飯冨雅介

一曲を通しワキの詞（コトバ）の多い遠い曲。文字通りの稀曲と真摯に取り組み破綻なく立派に仕遂げたシテ・ワキ以下演者に喝采。本来、春栄は子方の役だが余程よい子方でなければ舞台が締まらないだろう。配役に苦心の跡がみえ、調和のとれた力演の良い舞台だった。（1時間28分・5月6日・第7回西村同門会研究能）

『第7回・西村同門会研究能』
「春栄」飯冨雅介

「武悪」

誰そ居らぬかいやい、と苛立つ痛高い主（万作）の怒声に何事ならんと太郎冠者（博治）、無奉公者の武悪（萬斎）を討って来い、と太刀まで持たされては主命に背くなど以ての外。同輩を討つに忍ばない太郎冠者、いざ武悪に会えば来訪を喜ばれ、不意討もならず気持ちは萎えるばかり。この辺りの心理旨くみせ博治、進境をみせる。口実を設け、武悪が池で魚を捕る所を隙をみて、とは思うも信頼されきっていれば怯まざるを得ない。背後に何となく気配を感じる武悪、太郎冠者の魂胆が解れば主より寧ろ卑劣な太郎冠者に矛先を向け非難。進退窮まる太郎冠者の胸中見透かすように、多分延命だろうと高を括るかの武悪。この辺、斬れと居直った武悪の図太さが、後に幽霊となって執拗に主を翻弄するところに利く。

後場。武悪の霊を弔いに主、太郎冠者と東山清水寺へ来かゝると、目に留まる武悪の姿、泡食った太郎冠者は何とか此の危機を打開したいと此処が鳥辺野（火葬場）近くとみて幽霊では、と。怖じ気立つ主をみて武悪を幽霊に仕立てれば、主の弱味を知って武悪、散々に巫山戯ちらし、「もうよい加減にして去ねと言へ」と太郎冠者に命ずる主の言も実感。（48分）

「花折」

能「西行桜」のパロディ、桜立木はワキ座。新発意（シテ萬斎）に花見禁制を言いつけ住持（アド幸雄）が用事で出京すると、代って花見客（立衆頭・和憲ほか四人）が上って来るが境内へは入れず垣根越しの花見に宴を始めれば、シテは花に神酒を上げよを口実に酒に与り上機嫌だが一人しか入れない約束が破られ、宴が境内に移れば、侭よと大宴会に。肴には小舞謡、「花の袖」やら「小鼓」など〳〵謡い舞えば、もそっと長いのを、に応えてシテ、へ唯今奏づる舞歌の曲、と「道明寺」の一くさりを舞い出し、酩酊に及べば横臥。客が帰るとなれば、土産にと桜枝を手折って持たせ、三人目からは勝手に手折らせて「もそっと遊ばしやれ」の太平楽。醒め遣らぬ花見酒気分の一行は、へ雲かと見へて八重一重、と「熊野」の一節を謡い乍ら退いてゆくと、いっときの静寂の後のアドの雷、ぐっと締めて画龍点睛。（33分・5月25日・第17回ござる乃座）

能樂の友

発行　能　楽　の　友　社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１３００円
郵送の場合　１年　２０００円
一　　部　　１２０円

「萬歳楽座」第十回記念公演
能「紅葉狩」舞囃子「三番叟」
10月15日　国立能楽堂

能楽をより多くの方に身近に楽しんでもらうため、能楽笛方・藤田流十一世宗家・藤田六郎兵衛氏が主催する観能の会「萬歳楽座」は、平成二十二年第一回公演から毎年春秋の開催を関して、きたる十月十五日（水）東京・国立能楽堂で第十回記念公演を開催する。

演能は、舞囃子「三番叟」観世流能「紅葉狩・鬼揃」至高の能楽師の豪華出演で第十回の記念公演を飾る。

入場料金（全席指定）S席一二〇〇〇円　A席一〇〇〇〇円　B席八〇〇〇円　学生席三〇〇〇円

主催・藤田六郎兵衛事務所（TEL052・571・5763）

アポロ音楽事務所

演能次のとおり

［舞囃子］三番叟・野村萬・千歳・野村万蔵　笛・藤田六郎兵衛　小鼓・頭取・大倉源次郎　脇鼓・田邊恭資・飯冨孔明　大鼓・亀井広忠

能「紅葉狩」鬼揃　女／鬼女・観世清河壽、女（鬼女）・上田公威、藤波重彦、角幸二郎、清水義也、坂口貴信、平維茂、宝生閑、従者・殿田謙吉、勢子・御厨誠吾、則久英志、大日方寛、侍女・小笠原匡、末社之神・野村太一郎　笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井忠雄、太鼓・観世元伯、後見・武田宗和、観世喜正、野村昌司

地謡・梅若玄祥、観世銕之丞、大槻文蔵、観世芳伸、浅見重好、藤波重孝、武田友志、観世淳大

開場午後五時三十分、開演午後六時三十分（午後九時終演予定）

料金　S席五〇〇〇円、A席四五〇〇円

チケット販売　インターネット、http://yokkaichi.shinko.cum/yonbun/　四日市市文化会館窓口（９時～19時）

チケットぴあ（電話０５７０・０２・９９９９（Pコード４３８・１３３）

お問い合わせ・公益財団法人・四日市文化まちづくり財団（TEL０５９・３５４・４５０１）

主催　公益財団法人四日市文化まちづくり財団、能と狂言に親しむ会四日市研究会、助成・公益財団法人・岡田文化財団、公益財団法人三重県文化振興事業団、制作・国立能楽堂

スーパー能「世阿弥」
第26回四日市能
12月9日　四日市市文化会館

世阿弥生誕六五〇年を記念して、梅原猛が新たに現代語で書き下ろしたスーパー能「世阿弥」がきたる十二月九日（火）、四日市市文化会館で上演される。

この能は、米寿を迎えた梅原猛の肉体に世阿弥が乗り移り夢幻能のようにシテとなり、ワキとなりアイとなって、世阿弥親子の情愛を描き出す梅原猛の魂の能。作品は重要無形文化財保持者（人間国宝）の梅若玄祥が演出、出演する。

国立能楽堂委嘱作品。

世阿弥・梅若玄祥、寿椿・角当直隆、元雅・梅若紀彰、音阿弥・上野朝義、語り手・茂山七五三。

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・安福光雄、太鼓・加藤洋輝。

地謡・大槻文蔵、赤松禎英、山本博通、寺沢幸祐、武富康之。

十八時開場、十八時三十分開演、四日市市文化会館第１ホール

会と催し

伊勢の伝統の能楽まつり
9月20日　伊勢外宮

伊勢の伝統の能楽を継承する会は、伊勢神宮ご遷宮一周年記念奉納として、九月二十日（土）十二時三十分から、平成の伊勢三座により「第十七回伊勢の伝統の能楽まつり」を開催。

共催・一色町能楽保存会、通町能楽保存会、馬瀬の狂言保存会ところ／伊勢神宮外宮せんぐう館池畔奉納舞台

能組は、狂言「入間川」舞囃子「鞍馬天狗」狂言「附子」能「猩々」

ほか仕舞、独吟など。

事務局＝伊勢市一色町一三〇六番地、電話（〇五九六）二五・六五二六番

和泉流狂言大会

（初日）九月二十七日（土）十三時開演

狂言組

夷毘沙門　夷／毘沙門　服部摩里子　市川光子

柿山伏　有徳人　山伏（中三）　貝谷世美歌　兵藤朔哉　井上松次郎

寝音曲　柿主　太郎冠者　井上松次郎　市川達　佐藤融

口真似　太郎冠者（小二）　主人（小六）　今枝信二　今枝孝夫　今枝郁雄

語り　朝比奈　客　高橋芳子

創作狂言

詣男　男　女　大沢芳夫　井上松次郎

飛越　新発意　何某　石塚恵子　高橋芳子

附子　太郎冠者（中二）　次郎冠者（中二）　主人　寺田勝哉　米倉光希　中島知亮

（終演予定　十六時ごろ）

（二日目）九月二十八日（日）十一時開演

狂言組

宝の槌　太郎冠者　主人　スッパ　林正章　能登香奈恵　岸田朋子

盆山　盗人　何某　新納貴子　佐藤融

語り　敦盛　村野守

鱸包丁　伯父　甥　石黒生子　森綾

仏師　スッパ　田舎人　米倉愛　米倉宏貴

小舞　吉の葉　貝谷世美歌

暁道明寺　石塚恵子　森綾

棒縛　太郎冠者　次郎冠者　主人　各務文歌　三輪島子　杉本和代　二村敏勝

孫聟　祖父　岸田朋子　足立米子　能登香奈恵

間語　紅葉狩　男　太郎冠者　米倉宏貴　金子路江　森綾

瓜盗人　盗人　畑主　聟　岸田朋子　足立米子　能登香奈恵

番外狂言

靱猿　大名　猿曳　太郎冠者　小猿　今枝郁雄　井上松次郎　鹿島俊裕

（小二）石田龍之介

（終演予定十六時三〇分）

（入場無料　ご来場歓迎）

主催　狂言共同社

［事務所］〒466－0826　名古屋市昭和区滝川町54　サンハウス滝川３Ｄ　電話　052・834・8607　FAX

名古屋淡交会　90周年特別公演
十月十三日（月・祝）
名古屋能楽堂

砧　舞囃子　久田三津子　河村眞之介　大倉源次郎　藤田六郎兵衛　地謡　山崎浩之　八神孝充　坂口貴信　野村四郎　観世芳伸

能

井筒　観世清河寿　物者　福王和幸　河村眞之介　大倉源次郎　藤田六郎兵衛　後見　上田公威　橋岡慈観　地謡　上田宣照　吉沢清水　八神孝充　観世芳伸　松山幸親　久田勘鬼　義也

狂言

鬼瓦　佐藤友彦　佐藤融　後見　今枝郁雄

仕舞

碇潜　観世芳伸

遊行柳　クセ　野村四郎　地謡　吉沢清水　義也　上田公威　久田勘鬼　坂口貴信

藤戸　久田勘吉郎　福王和幸　佃良勝　久田舜一郎　観世元伯　竹市学　後見　坂口貴信　観世清河寿　橋岡慈観　地謡　上田彰敏　山崎浩之　吉沢孝充　松山幸親　上田公威　久田勘鬼　清水義也

乱　－終了予定　四時頃－

チケット案内（②面記事中）

NHK放送予定（平成26年10～11月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日６時～６時55分）

10月５日(日)　素謡「班　女」　観世流　シテ西村　高夫　ワキ山本　順之

10月12日(日)　素謡「実　盛」　宝生流　シテと地謡　小林与志郎　シテと地謡　東川　光夫

10月19日(日)　素謡「三井寺」　観世流　シテと地謡　山本　章弘　ワキと地謡　杉浦　豊彦　子方　吉井　紹智

10月26日(日)　素謡「浮　舟」　観世流　シテと地謡　阿部　信之　ワキと地謡　浅見　真洲

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［９月］

９月27日(土)　28日(日)　和泉流狂言大会　（無料）

［10月］

10月５日(日)　第四回　観正能

10月13日(月祝)　名古屋淡交会九十周年特別公演（有料）

10月18日(土)　名古屋観世九皐会　（有料）

10月19日(日)　武田謡楽会秋季大会　（無料）

10月24日(金)　名古屋能楽堂十月定例公演　（有料）

第30回記念 狂言やるまい会 東京公演

11月15日　喜多六平太記念能楽堂

狂言やるまい会（野村又三郎師主宰）は、第三十回記念やるまい会東京公演として、きたる十一月十五日（土）東京・喜多六平太能楽堂で開催する。開演十三時三十分。

番組は次のとおり

◇お話「本日の演目について」　松田　高義

狂言「文蔵」主・野口　隆行、太郎冠者・野村又三郎

狂言「石神」夫・奥津健太郎　妻・野口隆行、何某・松田高義、素囃子「水波之伝」笛・成田寛人、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤　洋樹

狂言「唐人子宝」趙観・野村又三郎、九劔何某・井上松次郎、太郎冠者・奥津健太郎、次郎冠者・伊藤泰、趙休・野村信朗、邊観、奥津健太郎、今若・井上蒼大

入場料　正面（前売）五〇〇〇円（当日六〇〇〇円）脇正面（前売）四〇〇〇円（当日五〇〇〇円）中正面（前売）三〇〇〇円（当日四〇〇〇円）

取り扱い　野村事務所　電話090・8323・3210

電子チケットぴあ（Pコード439・156）電話0570・02・9999、〔URL〕http://t.pia.jp/

法政大学第18回 能楽セミナー

10～11月「能楽の現在と未来」

法政大学能楽研究所では、10月19日、10月26日、11月10日の三回にわたり第十八回能楽セミナー（公開講座）「能楽の現在と未来」を法政大学市ヶ谷キャンパスで開催する。

『第一日』10月19日（日）午前十一時～十七時三十分

「現代に生きる能楽―さまざまな「現場」から

［趣旨説明］能楽の現在と未来―いま考えてみたいこと　山中玲子（能楽研究所所長）

［インタビュー］現代における能の輪郭　観世喜正（能楽師観世流・シテ方）

［報告］世界の能を目指す―宇高通成とINI国際能楽研究会

ディエゴ＝ペレッキア（立命館大学アート・リサーチセンター客員研究員）

［インタビュー］能楽の可能性と普及―今何をすべきか　野村万蔵（能楽師和泉流狂言方）

『第二日』10月26日（日）十三時～十八時

シンポジウム　能のエッセンス・能のかたち

『第三日』11月10日（月）十八時三十分～二十時三十分

能楽と西洋音楽

［講演］能楽から新しいオペラへ　細川俊夫（作曲家）鼎談＝細川俊夫、青木涼子（能×現代音楽アーティスト）、宮本圭造（司会）

問い合わせ先　法政大学野上記念能楽研究所（東京都千代田区富士見2－17－1　ボアソナード・タワー23階）

電　話03・3264・9815、ファックス03・3264・9607

名古屋淡交会 90周年特別公演

10月13日（祝・月）名古屋能楽堂

名古屋淡交会は、十月十三日（祝・月）名古屋能楽堂で、観世清河寿宗家が来演して、九十周年特別公演を開催する。

開演十二時半。入場料（全指定席）S席八〇〇〇円、A席七〇〇〇円、B席六〇〇〇円、学生三〇〇〇円（当日五〇〇〇円増）

能組は、能「井筒」能「乱」狂言「鬼瓦」舞囃子「砧」仕舞「碇潜」「遊行柳」「藤戸」

（番組①面掲載）

豊春会・秋の能 1910月日

豊嶋三千春舞台70年記念

金剛流・豊春会は、十月十九日豊嶋三千春舞台七十年記念「秋の能」を金剛能楽堂で開催する。なお、今回は芸能文化振興基金助成事業「京都府次世代等芸能普及促進公演」との助成を受けての上演。午後一時始。

番組次のとおり

能「経正」（平経正）豊嶋幸洋。ワキ福王知登

狂言「鳴子遺子」（茂山千五郎）

独吟「起請文」（中島謙昌）

仕舞「野宮」（四ツ井つや子）谷行（加藤かおる）

能「山姥」（シテ豊嶋三千春、ツレ・豊嶋晃嗣）ワキ久馬治彦

入場料　一般券七〇〇〇円　学生券三〇〇〇円

振替口座　（豊嶋後援会）01030・6・2887　FAX075・541・8987

豊春会＝京都市知恩院山内林下町四五五　電話075・561・5408

能「邯鄲」狂言「萩大名」

11月2日　豊田市能楽堂霜月能

豊田市能楽堂では、「霜月能」として、十一月二日（日）、能「邯鄲」狂言「萩大名」を上演する。

午後一時三十分開場、午後二時開演。

番組は次のとおり。

狂言（和泉流）「萩大名」（シテ・大名・野村又三郎、アド・太郎冠者・奥津健太郎、アド・庭の亭主・松田高義、後見・野村信朗）

能（観世流）「邯鄲」盤渉（シテ・盧生・梅若紀彰、子方・舞童・山中つばめ、ワキ・勅使・高安勝久、ワキツレ・大臣・杉江元、奥昇・岡充、同・高安受蔣

入場料／全席指定（税込）正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円、チケット販売・豊田市コンサートホール・能楽堂事務局（豊田参合館八階）インターネット予約　http://www.t-cu.gr.jp/チケットぴあ（TEL0570・02・9999　Pコード438・301）

［訂正］本紙前号（26年8月号）の2面「演能案内」にて10月5日・観正会とあるのは「観正能」の間違いでした。お詫びして訂正します。

演能案内

武田謡楽会秋季大会

十月十九日（日）午前九時三十分始　名古屋能楽堂

番外仕舞　清経（クセ）武田　大志

素謡　敦盛　若林　典子　長谷川邦彦
野宮　新　信子　奥田えつ子　岡田　明子　冨田さだ子

仕舞　三井寺　永田　慶子　川合　圭子
歌占（クセ）加藤　愛郎
阿漕　本田　享道
大江山　小瀬古勝己
殺生石　長谷川邦彦

舞囃子　百万（法楽之舞）田中　蔦子　河村眞之介　船戸昭弘　藤田六郎兵衛
梅　小瀬古豈代子　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
善知鳥　井田　順子　河村眞之介　船戸昭弘　藤田六郎兵衛

（十二時半頃）

素謡　鸚鵡小町　桑原　澪子　武田　大志

舞囃子　菊慈童　岡田　明子　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
遊行柳　齋藤　忠佳　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
熊坂　市川　敦子　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛

番外仕舞　井筒（替え型）片山九郎右衛門

能　猩々乱（木下　孝慈）高安　勝久　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　市和杉

独吟　砧　阿竹登代子

舞囃子　三輪　清水　和子　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　市和杉
班女　津田　静枝　河村眞之介　船戸昭弘　杉　市和

素謡　隅田川　井出モト子　橋本　正康　加藤　愛郎
景清（ツレ）小瀬古豈代子　（トモ）小瀬古　勝己　前山　鎮男　宮崎　正之

仕舞　楊貴妃　松隈　真澄　川合　圭子
鵺　林　いそ子　楠井みつ子　下里　紀子

素謡　蝉丸　栖（キリ）武田　邦弘

番外仕舞　国　武田　邦弘

（終了予定五時半頃）

〔御来場歓迎〕

主催　武田謡楽会　武田　邦弘　武田　大志

名古屋能楽堂十月定例公演

十月二十四日（金）午後六時三十分開演　名古屋能楽堂

狂言（和泉流）蟹山伏（山伏）今枝　郁雄　（強力）佐藤　融　（蟹ノ精）野村　信朗　後見　井上松次郎

能（観世流）大会（ツレ）吉沢　旭　（シテ）梅田　嘉宏　（ワキ）高安　勝久　（アイ）野村又三郎

大鼓　河村眞之介　小鼓　船戸昭宏　太鼓　加藤　洋輝　笛　大野　誠

後見　八神　孝充　梅田　邦久

地謡　伊藤　裕貴　本田　勲　清沢　一政　古橋　正邦　松山　武田　幸親　武田　邦弘　大志　祖父江修一

主催　名古屋市文化振興事業団　公益社団法人　能楽協会名古屋支部

チケット料金　前売指定四一〇〇円　（自由）一般三一〇〇円　学生二一〇〇円

名古屋宝生会定式能（第五十八期第四回）

十一月十六日（日）午後一時始　名古屋能楽堂

番組

能　三井寺（子方）片桐　遼　（シテ）玉井　博祐　杉江　元　高安　勝久　河村眞之介　（原）大　後藤孝一郎　鹿取　希世

問　井上松次郎　佐藤　融

後見　竹内　澄子　内藤　飛能　地謡　佐藤　純功　佐藤　耕司　吉村　衣斐　正宜　片桐　竹内　淳一　辰巳満次郎　真　玉井　道夫　和久荘太郎

狂言　水汲（シテ）佐藤　友彦　（アド）鹿島　俊裕　後見　今枝　郁雄

仕舞　高野物狂　内藤　飛能　道行　和久荘太郎　辰巳満次郎　融　衣斐　正宜　地謡　山内　崇生　辰巳大二郎

能　飛雲（シテ）衣斐　愛　飯富　雅介　河村裕一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　竹市　学　相元　正樹

問　今枝　郁雄

後見　衣斐　正宜　竹内　澄子　地謡　津田　節哉　鈴木久仁七　竹内　孝成　内藤　飛能　山内　崇生　和久荘太郎　辰巳大二郎

正会員券　一万八千円、入場券料　鑑賞券　五千円（一回限り）

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑳

拾四　「朝日狂言会」 ④

竹尾　邦太郎

――承前――

第一九回　朝日狂言会・昭和五二年七月一〇日（日）一時半始。

「佐渡狐」佐藤秀雄（佐渡の百姓）佐藤友彦（越後の百姓）井上松次郎（奏者）、「附子」大蔵基嗣（太郎冠者）大蔵基義（次郎冠者）大蔵弥太郎（主）、「井礒」和泉保之（勾当）井上祐一（菊市）野村又三郎（通行人）、「鎌腹」大蔵弥太郎（太郎）大蔵基義（太郎の妻）大蔵基嗣（近所の者）、素囃子「神舞」藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・笂鉱一・鬼頭喜太郎、「閻罪人」井上礼之助（太郎冠者）井上松次郎（主）大野弘之（立頭）佐藤友彦・歌村鴻助・今枝良治・石田喜樹・鷲見政行（立衆）。

第二〇回　朝日狂言会・昭和五三年七月九日（日）一時半始。

「鶏聟」佐藤　融（聟）佐藤秀雄（舅）佐藤友彦（教へ手）大野弘之（太郎冠者）、「魚説経」茂山千五郎（俄坊主）茂山千之丞（斎主）、素囃子「五段神楽」藤田昭彦・柳原富司忠・吉田定男・鬼頭八郎、「塗師平六」和泉保之（平六）野村又三郎（師匠）井上祐一（妻）、「武悪」茂山千之丞（武悪）茂山千五郎（主）茂山正義（太郎冠者）、「釣針」井上松次郎（太郎冠者）井上礼之助（主）佐藤友彦・石田喜樹・今枝良治・歌村鴻助・鷲見政行（女）大野弘之（乙）。

第二一回　朝日狂言会・昭和五四年七月八日（日）二時始。

「二人大名」野村又三郎（大名）佐藤友彦（大名）大野弘之（通行人）、「水掛聟」善竹忠重（聟）善竹忠一郎（舅）善竹長徳（嫁）、素囃子「神舞」藤田昭彦・山口　亮・笂　鉱一・鬼頭喜太郎、新作狂言「狛犬盗人」和泉元秀（盗人）野村又三郎（妻）井上松次郎（太郎）井上礼之助（太郎冠者）善竹忠一郎（太郎冠者）善竹幸四郎（主人）善竹玄三郎（何某）、「茸」井上礼之助（山伏）井上松次郎（所ノ者）野村信行（姫茸）佐藤友彦・今枝郁雄・今枝靖雄・佐藤融・石田喜樹・鷲見政行・今枝良治・歌村鴻助（茸）井上祐一（鬼茸）。

なお此の年、三月一一日、和泉保之が改名、元秀を名乗る。また「朝日狂言会」は今回から主催の朝日新聞社・狂言共同社に加え名古屋テレビが後援に名を連ねる。

第二二回　朝日狂言会・昭和五五年七月一三日（日）二時始。

「蚊相撲」茂山千五郎（大名）茂山正義（太郎冠者）茂山千之丞（蚊の精）、素囃子「神舞・水波ノ伝」藤田昭彦・後藤孝一郎・笂鉱一・助川龍夫、新作狂言「手塩焙烙」和泉元秀（太郎冠者）井上松次郎（長者）佐藤友彦（窯ぐれ）和泉祥子（子狸）、「瓜盗人」茂山千之丞（盗人）茂山千五郎（畑主）、「貰聟」井上松次郎（舅）大野弘之（聟）佐藤友彦（妻）、「榛縛」野村又三郎（太郎冠者）井上礼之助（次郎冠者）佐藤秀雄（主）。

第二三回　朝日狂言会・昭和五六年七月一二日（日）二時始。

「入間川」井上松次郎（大名）井上祐一（太郎冠者）大野弘之（何某）、「無布施経」大蔵弥太郎（僧）善竹幸四郎（施主）、「隠狸」和泉元秀（太郎冠者）野村又三郎（主）、「磁石」善竹幸四郎（見付の者）善竹玄三郎（人売）大蔵弥太郎（亭主）、「二人袴」佐藤友彦（聟）井上礼之助（親）野村又三郎（舅）大野弘之（太郎冠者）。

第二四回　朝日狂言会・昭和五七年七月一一日（日）二時始。

素囃子「三段神楽」藤田昭彦・福井啓次郎・笂　鉱一・鬼頭喜太郎、「三本柱」井上松次郎（大名）井上礼之助（太郎冠者）佐藤友彦（次郎冠者）大野弘之（三郎冠者）、「佐渡狐」茂山千之丞（佐渡の百姓）茂山真吾（越後の百姓）茂山千三郎（奏者）、「千鳥」和泉元秀（太郎冠者）井上松次郎（酒屋）井上佑一（主）、「鈍太郎」茂山千五郎（鈍太郎）茂山千之丞（下京の女）茂山真吾（上京の女）、「首引」野村又三郎（親鬼）井上礼之助（為朝）佐藤友彦（姫鬼）井上祐一・今枝靖雄・野村信行・井上靖浩・佐藤融・今枝郁雄（立衆鬼）。

第二五回　朝日狂言会記念公演・昭和五八年七月一〇日（日）一時半始。

「三番叟」井上松次郎・井上礼之助（千歳）藤田六郎兵衛・後藤孝一郎（頭取）柳原富司忠（手先）後藤嘉津幸（胴脇）河村総一郎、「釣狐」井上祐一（伯蔵主・狐）大野弘之（猟師）和泉元秀・佐藤友彦（後見）、「花子」大蔵弥太郎（何某）善竹善三郎（女）善竹幸四郎（太郎冠者）大蔵基嗣・善竹長徳（後見）。

第二六回　朝日狂言会・昭和五九年七月一五日（日）一時半始。

「木六駄」茂山千五郎（太郎冠者）茂山真吾（主）茂山千之丞（茶屋）岩崎狂雲（伯父）、素囃子「安宅・瀧流シ」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎、「釣狐」大野弘之（白蔵主・狐）井上松次郎（猟師）和泉元秀・佐藤友彦（後見）、「若市」和泉元秀（住持）井上祐一（若市）井上礼之助（尼）今枝靖雄・佐藤　融・歌村鴻助（尼）和泉元弥（重喜）井上松次郎（地頭）佐藤友彦・今枝良治・鷲見政行・鳥越正夫（後見）。

第二七回　朝日狂言会・昭和六〇年七月一四日（日）二時始。

「文相撲」井上礼之助（大名）大野弘之（太郎冠者）佐藤友彦（坂東方の者）、「箕被」善竹圭五郎（夫）善竹忠重（妻）、「蝸牛」和泉元秀（山伏）鳥越正夫（主人）佐藤友彦（太郎冠者）、「止動方角」井上松次郎（太郎冠者）井上祐一（主）井上礼之助（伯父）今枝靖雄（馬）。

第二八回　朝日狂言会・昭和六一年七月一三日（日）一時半始。

「墨塗」井上松次郎（大名）大野弘之（太郎冠者）井上祐一（女）、「磁石」大蔵弥太郎（すっぱ）大蔵基嗣（見付の者）大蔵基義（亭主）、「連歌十徳」和泉元秀（男）井上祐一（何某）井上松次郎（僧）佐藤友彦（女）、「寝音曲」善竹圭五郎（太郎冠者）善竹十郎（主）、「茸」井上礼之助（山伏）佐藤友彦（所の者）佐藤　融（姫茸）今枝郁雄・今枝靖雄・井上靖浩・小柳保志・小柳悠志（茸）大野弘之（鬼茸）。

第二九回　朝日狂言会・昭和六二年七月一二日（日）一時半始。

「角水聟」和泉元秀（河内国の者）井上松次郎（摂津国の者）佐藤友彦（播磨国の者）佐藤　融（太郎冠者）和泉元弥（乙）、「月見座頭」茂山忠三郎（座頭）善竹幸四郎（道通）、「縄ない」井上松次郎（太郎冠者）井上祐一（何某）大野弘之（主人）、「蝸牛」善竹幸四郎（山伏）茂山忠三郎（主）安東伸元（太郎冠者）、「千切木」井上礼之助（太郎）大野弘之（主人）井上靖浩（太郎冠者）佐藤友彦（女）今枝良治（立頭）今枝郁雄・井上祐一・佐藤　融・今枝靖雄・鳥越正夫（立衆）。

第三〇回　朝日狂言会・昭和六三年七月一〇日（日）一時始。

「舟渡聟」和泉元秀（船頭）和泉元弥（聟）井上祐一（妻）、「茶壷」大蔵弥太郎（スッパ）大蔵基嗣（中国の者）大西安春（目代）、「武悪」井上礼之助（主）大野弘之（武悪）佐藤友彦（太郎冠者）、「呼声」善竹圭五郎（太郎冠者）善竹十郎（主人）大蔵基義（次郎冠者）、「六地蔵」井上松次郎（スッパ）井上祐一（田舎人）佐藤　融・井上靖浩・今枝郁雄（スッパ）。

第三一回　朝日狂言会・平成元年七月九日（日）一時半始。

「入間川」井上松次郎（大名）佐藤友彦（太郎冠者）井上祐一（何某）、「川上」和泉元秀（座頭）和泉元弥（妻）、「縄綯」善竹玄三郎（太郎冠者）善竹長徳（主）、善竹幸四郎（何某）、「祢宜山伏」井上礼之助（山伏）大野弘之（祢宜）佐藤友彦（茶屋）井上祐一（大黒）。

第三二回　朝日狂言会・平成二年七月八日（日）一時半始。

「文相撲」井上松次郎（大名）井上祐一（太郎冠者）井上礼之助（新参者）、「千鳥」茂山千之丞（太郎冠者）茂山忠三郎（酒屋）丸石やすし（主人）、「花子」佐藤友彦（何某）大野弘之（太郎冠者）井上祐一（妻）、「蟹山伏」和泉元秀（山伏）和泉元弥（強力）鳥越正夫（蟹の精）。

――以下次号――

◆名古屋・豊田市の舞台から◆

「第五七回やるまい会」と「名古屋能楽堂定例公演」「観世会例会」「豊田市能楽堂六月定例能」

竹尾邦太郎

「松　楪」　園領主（上頭）に年貢を上納に摂津ノ百姓（シテ又三郎）は子の日の松を、丹波ノ百姓（アド隆行）は楪（ゆづりは）を持参、同道して雑談のうち御館に。奏者（小アド高義）が取次ぎ年貢が納まると、上頭から年貢によそえて歌を、の下命。両人して一首を詠めば御意に叶い賜わる烏帽子。それを着け御白洲へ、と奏者に促されると「お流れを下される」「引違へて三献のめ」と酒を勧められる。丹波に次ぎ代り番こに摂津も同様お流れに与るが、場所柄、緊張もあってか両人飲みっぷりが性急なら、一つしかない烏帽子を両人共に着て、と求められる難題に（二人袴に似る）、「今日は一入汗の出る事ちゃなあ」の摂津の言も実感。「さあ〜〜一所に居りやれ」と摂津、棒の先に烏帽子を掛けて両人で持つ着想の才気を褒める奏者（他派で烏帽子を載せた三方を担げて持つのを見たことがある）、その形（なり）で御前を賑々しく舞立ちに、と言い置き、「行くか、よう来た〜〜」と切戸へ退くと、へ囃せや〜〜松楪の、の賑やか。一心同体の心で舞う三段之舞は、摂津の右手の扇が丹波の左手に渡り二段、また摂津の右手に戻って三段を舞上げると、更に舞継ぎ、へやら〜〜目出度やな……千歳の門松、と正面で片膝つき、立って舞い続け大小前で目出度く舞上げた（写真）。奇抜な相舞の面白味に奏者の重み。

因に子の日の松は根付若松、楪は譲葉とも、春に新芽が出て旧葉が落ち後へ譲ることから。共に正月飾りの縁起物。（39分）

『第57回　やるまい会』　「松楪」左より野村又三郎、野口隆行
（杉浦賢次氏撮影）

「吃」　括りつけた棒を振りかざし夫（シテ萬斎）を追い立てる妻（小アド修一）、「鎌腹」に似る。夫婦喧嘩は犬も食わぬ、とは言うもの、中に割って入る何某（アド博治）、何とか収めようとするが（写真）夫のだらしの無さの一々を言い募る妻に、仲裁は時の氏神とばかり夫も妻のあれこれを訴える。が、何分にも夫は吃り、妻に一つ言えば十も二十も言い返されて（著名な漫才師の夫妻、大助・花子をふと思い出し可笑しい）始末に負えないので、暇を遣る旨を何某から伝えて貰えば、妻は嫁入に持参した十二単衣を戻せ、ととんでもない噴飯物の要求。有りもしない物を、と夫は捲し立てたいところだが吃りの悲しさ、苛立ち、あせれば言葉にならない。節にか〜れば言えるとて謡の様に節を付け、へ我は素よりど・ど・どもりにて、などと問えつゝも十二単衣の実体を暴き、妻の粗（あら）を探し言い立てるなど、おっかなびっくり乍らこゝぞと調子に乗る夫（写真）の心理、妙趣。キリは夫と何某、妻に追い込まれるが、夫の吃りが家庭不和の因？ために夫が勤労意欲を失い、妻もそれに乗じて怠惰に？生活保護を受ける画策？分らん。（19分）

『第57回　やるまい会』　「吃」左より野村萬斎、深田博治、中村修一
（杉浦賢次氏撮影）

『第57回　やるまい会』
「吃」野村萬斎
（杉浦賢次氏撮影）

「饅　頭」　大名（シテ泰太郎）帰国に際し「土産物を整えて」と、市であれこれ物色するうち「申し〜〜これを一つ召ませぬか」と呼びとめられ、「それは何ぢや」と問えば「これは点心と申し、また饅頭とも申す」と饅頭屋（アド則秀）。旨いと勧められて大名、それならば汝食うてみよ、と執拗に言われ、高価な商売物で商いはするが自身は口にした事もない饅頭屋、大名の奢りならばと念を押し、大口開けて（写真）食えば、旨い。それならばも一つ食え、と今度は強要気味の大名に支払を約束させて食べ、代金を請求すれば汝が食って何で某が払わねばならん、と大名の無体、「商売物をお闕りやってよいものか」と抗議はしても刀に手を掛けられては泣き寝入り。「近頃不調法を申してござる」とは、どちらが、と言いたい憤懣やる方ない胸のうち、「嗚呼しないたるなりかな」と退いて行く饅頭屋の、孤影悄然。大蔵流山本家の剛直風が、大名の傲岸不遜にうまく嵌まり、それだけに饅頭屋の潮垂れぶりの哀れ。（27分）

「唐人子宝」　主（アド松次郎）、召使う唐人・趙観（シテ又三郎）の息・唐子兄弟（信朗・健一郎）が父の帰国を願い宝物を携え来日と聞き太郎冠者・次郎冠者（健太郎・泰）にシテを呼びに遣れば、暇を賜りたいと懇願される。望郷の念は「仲麻呂、進士になり御年七十三歳」などと、在唐五十余年、玄宗に重用されるが海難に阻まれ帰国叶わなかった阿部仲麻呂の故事に及べば、「唐人ながら小賢しい事を言いだした」とアド。唐子兄弟と日本生れ今若（蒼大）の三人が呼ばれ（写真④面）、唐子の、

『第57回　やるまい会』　「饅頭」山本則秀
（杉浦賢次氏撮影）

父と共に帰国の嘆願が法を盾に拒まれたのを、不憫と思いシテの再度の切願に、アドは孝心に免じて許すが、今若もと願えば日本生れは不可、強いれば誰も帰国させぬと激怒。「アイヤー」と双シヲリにスミから一ノ松へ走る唐子、「子供の心底不憫なり」とシテも双シヲリ。「子供が刺し違えて死なうと言いまする」、「趙観が身を投げて死なうと申します」の騒ぎを聞きアド、「惣じて物の哀れを知らぬは木石にも劣るなあ」、「さても〜〜互いの態を聞いて落涙した」と。

愁嘆は一転、「疾く〜〜帰国を急ぐべし」アド、へ有難の御事や、とシテ、唐子持参の宝物を前に、地（高義・隆行ら）が喜びの胸中を謡い、帽子を被ると喜々として舞う「楽」（学・昭弘・眞之介・洋輝）に（写真）。舞上げ、へあら有難の御事や、とシテ、揃って帰国出来る感謝の地のうち子宝三人を先き立て二ノ松近く、「ありがたや」の一声に万感胸に迫るか。謡留メに幕へ。

シテ親子の会話は珍妙な唐音で、バイリンガルのシテは、アドの言は唐子に唐音で、唐子の言はアドに日本語で伝える。可憐さと健気さのある確りした子方を得て稀曲に精彩、調和のとれた上々の人情劇だった。それにしても北の拉致被害者、一日も早い帰国を願うや切。（27分・5月30日・第57回やるまい会）

『第57回　やるまい会』　「唐人子宝」
左より野村信朗、奥津健一郎、井上蒼大、野村又三郎、奥津健太郎、伊藤泰、井上松次郎　（杉浦賢次氏撮影）

『第57回　やるまい会』　「唐人子宝」
左より野村信朗、奥津健一郎、井上蒼大、野村又三郎、伊藤　泰、井上松次郎
（杉浦賢次氏撮影）

「附子」

禁じられゝば破りたくなるのが人の常、吹く風に当ってさえ滅却するという附子を主（アド泰）の留守に預る好奇心人並み以上に旺盛な太郎冠者・次郎冠者（シテ高義・小アド又三郎）、蓋をとればドンミリした旨そうな物、恨よと食えば後を引く美味（写真）、主の虚言と分れば腹癒せは主の秘蔵の掛軸を破り、天目茶碗を落し面白半分。主が戻れば、とんだ粗相をしたので死ぬつもり、附子にも手をつけた、と。若い主を手玉に取って十二分に楽しむ高義・又三郎のコンビ。（22分）

「頼政」

病の衣裳正宜に代りシテは東川光夫。悲劇の老雄・源三位頼政の、宇治川の合戦に現われ自刃に至る後場、クセは力強い床几の型に精彩をみせる。クセ切、へ寄する敵を待ち居たり、と正に直り、左袖さっと返してユウケンしようとする辺り（写真）、よき敵ござんなれ、の風姿。（1時間14分・6月7日・名古屋能楽堂6月定例公演）

『名古屋能楽堂　六月定例公演』
「附子」左より野村又三郎、松田高義
（杉浦賢次氏撮影）

「楊貴妃・台留」

玄宗命で貴妃（シテ文蔵）の魂魄を尋ね求める方士（ワキ勝久）、責任の大は次第・名宣・道行と神妙かつ謹直ぶりが如何にも、惹きつける。蓬莱国ノ者（アヒ松次郎）との問答から貴妃の居る太真殿辺り、様子うかゞおうと下居すると、蝸々たる笛（六郎兵衛）のアシラヒに雰囲気描写の素晴らしさ。一畳台に据えた小宮、初同（邦弘・勘鶴・修一ら）へ雨を帯びたる装ひの、の返シ句で引廻シ取ると、美麗煌びやかな玉簾の奥に床几のシテ。ワキの来訪の趣を知り、シテは証に釵を与えるが、釵には類が、帝と二人だけの私語を、とワキ。シテは往時の睦言に思いを馳せ、シヲルとへ（比翼も友を恋ひ）独り翼を片敷き、と小宮を出る。すらりとした谷姿は、華麗な唐織に緋大口でなく白地唐織に白地模様大口、気品に溢れ瀟洒。帝の心が昔と同じなら〜終の逢瀬を頼むぞと語り給へや、とワキへ詰メル心情、寂しみは発つワキを呼び止め、名残りに〜ありし夜遊をなすべし、と。ワキに釵を戻させると物着に天冠をつけ、イロエは省きクリ・サシにエンドレスの時空、生者必滅の諸相に触れ、シテの生い立ちから帝との出合いは会者定離の哲学を述べる舞ゲセ。上ゲ端へさるにても思ひ出づれば怨みある、と大左右は一種の苛立ちの表情であろう。へ会者定離ぞと聞く時は、と左右し、へ（逢ふこそ）別れなりけれ、とワキにアシラヒ、へ羽衣の曲、と常座へ、序之舞に（写真）。静かに往古を偲ぶか、心を籠め、しっとりと舞三段、唐団扇の捌き美しく舞上げると、へ恋しき昔の物語、の地で天冠から釵が外され再びワキの手に。ワキは釵を捧げ一礼へ勅使は都に、で立ちシテと行違いに橋懸へ。見送るシテはへさるにても、と一ノ松のワキへ招き扇に出て向き合い下居、ワキが深々と一礼するのを認め、視線を左へ替えシヲル慎ましやかな名残の哀感。キリは〜浮世なれども、と立ち、小宮へは入らず、その前で右膝ついて立つと大小（眞之介・嘉津幸）の残り留。端正な舞に秘められる幽愁、余情一入。（1時間33分）

『観世会定例公演』　「楊貴妃・台留」大槻文蔵
（杉浦賢次氏撮影）

『名古屋能楽堂　六月定例公演』
「頼政」東川光夫
（杉浦賢次氏撮影）

「鱸包丁」

官途成り（任官披露）に伯父（シテ友彦）から鯉を頼まれた甥（アド郁雄）、「ハタと忘れて御座る」とは言い条、根っからの嘘つきらしい。川獺が半身を食べ調達不能をお断りに、とやって来て早々辞去のつもりが足留めさせられて甥。先刻、嘘と承知の伯父は、嘘には嘘を以ってしっぺ返しと許り「ぽってと持て成して帰さうと存ずる」とたま〜〜到来の鱸を料って馳走しようと。どう料理をすれば、と問われて甥、打身（刺身）にと答えれば嘲笑される。伯父は、打身の故事から庖丁道の蘊蓄を傾け、仕形を交えての長広舌（写真）は伏見の酒や宇治の茶に及び、あれよあれよと言う間の口だけの持て成し。汝の鯉を川獺が食った様に、身共の振舞も謀生という虫が食った、と。呆気にとられた様な甥に、内心為て遣ったりの表情の伯父の北叟笑み、気負う長広舌の歯切れのよさが上々。（30分）

『観世会定例公演』　「鵜飼」観世芳伸
（杉浦賢次氏撮影）

「鵜飼」

旅僧（ワキ雅介）、従僧（ワキツレ宰）を伴い石和川の在に宿求むべく里人（アヒ俊裕）と問答、堂なら借りるまでもない、と高圧的に出れば、すねい僧かな、とアヒの擊蹬を買うワキが如何にも憎げ。いつもの様に鵜を休めに堂へ来る鵜使ノ老翁（シテ芳伸）と問答になれば、従僧が口を挟み、この鵜使には二・三年前に世話になった、と。しかし、その鵜使は既に亡く、当時の様子お聞かせするゆえ跡を弔うて、とシテ、正中へ出ると松明を傍に置き居語。禁漁の戒を破り捕らえられ、命乞いもならず簀巻にされ、沈められたが、その鵜使の亡者が実は私と。口跡確かに感情の籠った抑揚が美しく、罪亡ぼしにと見せる鵜飼のシミュレーション（模擬）、へ湿る松明振り立てゝ、と松明とって立つと〜鵜籠を開き、と眼目の鵜之段が鮮やか。

魚を追う鵜に目を走らせるきび〜〜した身のこなしが、ワキ正で止まり〜月になりぬる、と左上方に月を眺める風情、へ悲しさよ、と扇を。次いで松明を、ポトリと手放すと〜闇路に帰る、寂寥の思いに沈む中入、へ名残惜しさを如何にせん、の返シ句は、改めて見所に問いかけるか。アヒが立ち戻り、ワキと問答から居語に、箒潰され弔う人も無く回向を願う鵜使の事を語れば、ワキは、石を拾い一石に経を一字認め川に沈め弔おうと。アヒが退くと後場。

『観世会定例公演』　「鱸包丁」佐藤友彦
（杉浦賢次氏撮影）

「二人静」

若菜摘の神事に勝手宮ノ神職（ワキ雅介）から菜摘みに遣られる里女（ツレ大志）、未知の女（シテ嘉宏、実は静御前ノ霊）に呼び止められ、戻ったら罪深い私のため神職に一日経を以て弔いを、の言伝を頼まれる。

もしワキが、誰からと疑えば、その時わたしは貴方に憑いて詳しく名を明かそう、きっと約を違えぬように、とシテは中入。短い前場の、若い女同士の緊張感が良い。ツレとワキとツレ、待謡にアヒとの約を果せば、早笛（六郎兵衛・孝一郎・総一郎・洋輝）で閻魔大王（後シテ芳伸）は一ノ松、へそれ地獄遠きに非ず、と謡い出し、そも〜〜かの鵜使は罪悪多々、善事皆無、無間地獄へ堕つべきを曾て従僧の世話をした功徳、極楽へ送ろう、と〜法華の御法の済け船、舞台へ入り一巡、へ千里が外も雲晴れて、と袖被クのは（写真）雲晴れる前触れか。へ奈落に沈み果てゝ、とどっかと正中安座には〜浮かみ難き悪人の、姿。〜仏果を得ん事は、と扇で床を打つのは〜この経の力ならずや、と耳目を集める強調の張扇の趣、法華経を礼讃する地獄の閻魔大王の立場が小癪見ノ面と相俟って面白いと言うか愉快だった。（1時間6分・6月8日・観世会定例公演）

『豊田市能楽堂・能と吉野』　「二人静」左より梅田嘉宏・武田大志
（杉浦賢次氏撮影）

舞を御覧候へと触れ、幕内より静御前ノ霊（シテ嘉宏）が〜菜摘の女と思ふなよ、とツレに呼びかけて出る。判官義経の逃避行は三吉野を落ちて行くことを述べるサシにクセ。シテ・ツツレ同吟の個所はきれいだが、クセの舞と、静御前が不本意乍ら独り頼朝の前で舞わねばならなかった舞、シテ・ツレ相舞の序之舞は形影相伴うという訳にゆかなかった。

柳澤英樹著『宝生九郎傳』の中「三十番の整理と型の改正」に整理された三十番の中に次の記述がある。

「二人静」の如きは捨つるに惜しかったやうだが、丁度跳向のシテ二人揃って、舞がピッタリ合はなければこの能の價値は滅殺して了ふし、長絹も一対揃った結構のものがなければ引立たないので、勢ひ中途半端なものしか出来ないとすれば、ない方が宜いといふのが、彼の考へであった。

今回、跳向のシテ二人は揃っていた（写真）。紫長絹、赤地縫箔、一対揃った結構な物だった。

キリは〜思ひかへせば古も、の地（邦久・昭弘・正邦ら）の返シ句でシテはツレの右肩に右手を置き足拍子、へ（名をば）沈めぬ、と両人膝着くと〜武士の、と同吟、立つと地のうちにツレは一ノ松、シテは常座で〜静が跡を弔ひ給へ、ワキに合掌、左袖返シ留メ拍子。相舞が少々不満だが良い二人静だった。再演を望みたい。（1時間18分・6月29日・豊田市能楽堂六月定例能）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1300円
郵送の場合　1年　2000円
一　部　120円

ＮＨＫ放送予定（平成26年10～11月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日6時～6時55分）

10月26日(日)　素謡「浮　舟」　観世流　阿部　信之
11月2日(日)　「名演を聴く」　松本　恵雄
　　八世　観世鐃之丞
11月9日(日)　素謡「松　虫」　喜多流　中村　邦生
11月16日(日)　素謡「俊　寛」　観世流　梅若万三郎
11月23日(日)　素謡「木　賊」（再）
　　観世流　山本　順之
11月30日(日)　狂言「二人大名」（再）
　　大蔵流　善竹　忠重
　　「酢　薑」　大蔵流　善竹　忠重

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052―231―0088）（能楽関係のみ）

［10月］
18日(土)　名古屋観世九皐会　（有料）
19日(日)　武田謡楽会秋季大会　（無料）
24日(金)　名古屋能楽堂10月定例公演　（有料）
［11月］
2日(日)　名古屋金春流友会　（無料）
　　第35回名古屋金春会　（有料）
8日(土)　やっとかめ文化祭ろうそく能　（有料）
9日(日)　名古屋観世会定例公演能　（有料）
16日(日)　第58期名古屋宝生会定式能　（有料）
22日(土)　やっとかめ文化祭幸せを運ぶ能・狂言　（有料）
23日(日)　久田観正会　（無料）
25日(火)　名匠狂言会　（有料）

名古屋華舞台　能「恋重荷」

12月20日　名古屋能楽堂

中京テレビ主催の「名古屋華舞台」は、十二月二十日（土）名古屋能楽堂で、人間国宝梅若玄祥師の能「恋重荷」狂言「彦市ばなし」（茂山逸平、野村又三郎）を公演する。

午後三時開演。S席九千円、A席六千円、学生席二千五百円（全席指定）

能組出演次のとおり。

狂言「彦市ばなし」（殿様・野村又三郎、彦市・茂山逸平、天狗の子・茂山童司

能「恋重荷」シテ・梅若玄祥、ツレ井上貴美子、ワキ高安勝久、アイ野口隆行。

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞野介、太鼓・加藤洋輝、間狂言・野村又三郎

後見・赤瀬雅則、小田切康陽

地謡・川口晃平、河本望、山本博通、井上和幸、角当直隆、山崎野俊彦）

五色の会　能を観る　能「富士太鼓」

12月23日　岡崎　花朋会舞台

金剛流・朋の会（羽多野良子師主宰）による「五色の会・第十六回能を観る」公演は、きたる十二月二十三日（火・祝）、岡崎市の花朋会敷舞台（岡崎市大西町奥長入四七―四）で能「富士太鼓」はじめ狂言、仕舞が上演される。

「五色の会　能を観る」公演は、長年愛好者はじめ多数の鑑賞を徳川家康ゆかりの岡崎で、金剛流シテ方羽多野良子師が活躍、金剛流シテ方宇高通成師が来演して熱い支持を博しており、歴史ある岡崎での能楽鑑賞の機会として関心も高く、市民から期待されている。後援・岡崎市教育委員会

入場料・前売五〇〇〇円、当日五五〇〇円、高校生以下三〇〇〇円。

番組は次のとおり。開演午後二時。

仕舞「綾鼓」（シテ宇高通成、地謡・廣田幸稔、宇高竜成、宇高徳成）

狂言「清水」（太郎冠者・野村又三郎、主・松田高義、後見・伴野俊彦）

能「富士太鼓」（富士の妻・羽多野良子、富士の子・伊藤詩実、ワキ・高安勝久、アイ・野村又三郎、笛・鹿取希世、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介。

後見・廣田幸稔、伊藤雅子、小鴨梨辺華、地謡・宇高通成、宇高竜成、宇高徳成、百々康治、竹市幸司、天野幸輔）

問い合わせ・朋の会事務局／岡崎市中町5－2－15、電話0564・23・4364、090・4855・4013、MAIL／kahoukai@gmail.com

小牧市自主文化事業　古典の日　狂言会

11月1日　味岡市民センター

小牧市・小牧市教育委員会主催による小牧市自主文化事業として、十一月一日（土）、小牧市久保新町の味岡市民センター講堂で、親子で楽しめる分かりやすい解説つきの狂言公演「古典の日狂言会」を開催する。午後二時開演。

上演は「口真似」（井上蒼大、井上松次郎、佐藤融）「引敷聟」（今枝郁雄、大野弘之、大橋則夫、鹿島俊裕）。

入場料／大人：1000円（アート会員800円）小中学生500円（アート会員300円）取扱窓口東部・味岡・北里の各市民センター、市民会館、中部公民館、勤労センター、まなび創造館・南部、西部の各コミュニティセンター、小牧市役所文化振興課（電話0568・76・1188）

第35回名古屋金春会能

十一月二日（日）午後二時始　名古屋能楽堂

仕舞　山東実　姥北盛（クセ）　高橋汎　金春憲和　本田布由樹　地謡　永田孝司　鬼頭尚久　本田芳樹　前田功登　林

能　花筐（ツレ佐藤俊之　子方金春梓沙　シテ金春穂高）　ワキ橋本宰　奥橋本正樹　奥椙元叡　ワキツレ飯冨雅介　船戸昭弘　河村総一郎　鹿取希世　地謡　豊田雅均　廣瀬弘山　箕浦遼高橋　加藤剛金春憲和　後見　本田芳樹　鬼頭尚久　地謡　山井綱雄　高橋汎　高橋忍

狂言　井杭（シテ（算置）井上松次郎）　アド（井杭）井上蒼大　アド（何某）佐藤融　後見　佐藤友彦

午後四時頃

仕舞　難波　笹ノ段（金春安明）　山井綱雄　舟弁慶（地謡　廣瀬雅弘　金春憲和　本田布由樹　加藤英昭　鬼頭尚久）

能　融（シテ本田光洋　笠ノ舞）　ワキ飯冨雅介　アイ鹿島俊裕　河村眞之介　後藤嘉津幸　大野義命　鬼頭誠

後見　金春穂高　本田芳樹　地謡　前田登　鬼頭尚久　小島芳樹　小野瀬荘樹　山井綱雄　金春安明　高橋忍　本田布由樹

附祝言

〈午後六時頃終了〉

［チケット料金］
正面指定席　五〇〇〇円
中ワキ自由席　一般四〇〇〇円
学生三〇〇〇円

主催　名古屋秀麗会　名古屋春栄会

正道　チケット販売＝中京テレビ事業チケットセンター（TEL052・320・9933）チケットぴあ・Pコード439・112（TEL0570・02・9999）

名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）など

問合わせ／中京テレビ事業　電話052・957・3333。

名古屋観世会定例公演能

十一月九日（日）十二時三十分始　名古屋能楽堂

能　清経（吉沢清沢一旭一政）　後見　武田大志　梅田邦久　飯冨雅介　河村総一郎　船戸昭弘　地謡　八神孝充　松山幸親　中雅志　久保信一朗　梅田嘉宏　久田勘鷗　武田邦弘　大野誠

狂言　貰聟（シテ野村又三郎　アド松田高義　アド奥津健太郎　後見　伴野俊彦）

仕舞　白楽天　実盛（キリ久保信一朗　クセ武田邦弘）　葛城（キリ松山幸親　舞アト山中雅志）　地謡　本田祖父江修　古橋正邦一　加賀敏彦　鄙鞍馬天狗　梅田嘉宏

能　砧（梓之出）　武田大志　梅若玄祥　高安勝久　河村眞之介　久田舜一郎　加藤洋輝　鹿取希世　間　野村又三郎　後見　清沢一旭　武田邦弘　地謡　吉沢松山幸親旭　山中雅志　久保信一朗　梅田久田勘鷗　古橋邦久　正邦

（四時半頃終了予定）

名古屋宝生会定式能（第五十八期　第四回）

十一月十六日（日）午後一時始　名古屋能楽堂

番組

能　三井寺（シテ玉井博祐　子方片桐遵　高安勝久　原杉江元　大井上松次郎　河村眞之介　後藤孝一郎　間　佐藤融　後見　竹内澄子　内藤飛能　地謡　吉村純功　片桐真　竹内淳一　玉井道夫　衣斐正宜　辰巳満次郎　和久荘太郎　鹿取希世）

狂言　水汲（シテ佐藤友彦　アド鹿島俊裕　後見　今枝郁雄）

仕舞　高野物狂　融（道行　和久荘太郎　衣斐正宜　地謡　内藤飛能　辰巳満次郎　山内崇生　辰巳大二郎）

能　飛雲（シテ衣斐愛　飯冨雅介　椙元正樹　間　今枝郁雄　後見　衣斐正宜　竹内澄子　地謡　津田鈴木久仁七　竹内孝成　石森智幸　内藤節哉　山内崇生　和久荘太郎　辰巳大二郎　内藤飛能　加藤洋輝　竹市学）

［チケット］
当日指定席券　八五〇〇円
当日自由席券　六〇〇〇円
学生券（自由席）　二五〇〇円

主催　名古屋観世会
事務局　名古屋市名東区一社3－162　久田勘鷗方
電話　052・734・6192
FAX　052・705・1585

正会員券　一万八千円、入場券料　鑑賞券　五千円（一回限り）

主催　名古屋宝生会　衣斐正宜方
TEL／FAX052・882・5600

蝋燭能

能「嵐山」舞囃子「土蜘蛛」

12月22日　東急ホテル

名古屋東急ホテルでは、2014年のフィナーレを飾る「蝋燭能」を十二月二十二日（月）名古屋市中区・東急ホテル3階・ヴェルサイユの間で開催する。

協力・NPO法人名古屋能楽振興協会、受付午後六時。

番組は、狂言茂山家が来名、能「嵐山」、白頭替間猿聟、シテ久田勘鷗、子守・久田勘吉郎、勝手久田三津子、ワキ福王和幸、聟猿・茂山正邦、舅猿・茂山千五郎、太郎冠者猿・茂山逸平ほか

舞囃子「土蜘蛛」久田勘鷗、久田勘吉郎ほか

チケット＝特別席三〇〇〇円S席二八〇〇〇円（S席会員価格二五〇〇〇円）、A席二三〇〇〇円（能鑑賞、着席コースディナー、フリードリンク、サービス料、税金込）

問合わせは、名古屋東急ホテルディナーショー係。（電話052・251・5200、FAX052・251・2422）

新作能「中尊」上演

11月13日　豊橋・吉田城薪能

NPO法人・三河三座主催、第八回吉田城薪能「能楽らいぶ」は十一月十三日（木）、穂の国とよはし小劇場で、新作能「中尊」を上演、あわせて〝フクシマの鎮魂〟のテーマで、観世流シテ方・中所宣夫氏と哲学研究者・思想家の内田樹氏の講演・対談が催される。

新作能「中尊」は、女・地霊の化身・中所宣夫氏がシテ、下掛宝生流ワキ方安田登、地謡・観世流シテ方観世喜正ほか、笛・森田流槻宅聡氏らが出演する。

チケットは前売券四千円、当日券四千五百円（全席指定）、十七時三十分開場、十八時十五分開演、会場は、とよはし芸術劇場PLAT主ホール。

後援・豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市など・協力魚町能楽保存会。

チケットは、プラットチケットセンター（TEL0532・39・3090、東愛知新聞社、ロワジールホテル豊橋、精文館書店本店、豊川堂各店、穂の国百貨店など。

お問合せ／NPO法人三河三座（豊橋市新栄町鳥畷62・東愛知新聞社内、電話0532・32・3111）

新・古能面展

金沢能楽美術館

金沢能楽美術館では、平成二十六年度秋季企画展として「新・古能面展V」を十月四日から十一月三日（月・祝）まで開催している。同時開催・現代能面美術展（公募）特選・優良賞展示期間（十一月三日まで）

観覧料・一般・大学生三〇〇円（65歳以上二〇〇円）高校生以下無料、団体（20名以上）二五〇円。

金沢能楽美術館＝金沢市広坂一―二―二五、電話076・220・2790、FAX076・220・2791

開館時間　午前10時～午後6時

なお金沢能楽美術館では、「写謡の会」（しゃようの会）石川県立能楽堂で催される定例能の演目を、宝生流謡本の流麗な文字をなぞって書写する会を行っている。

〈持ち物は筆ペンまたは、筆・墨・すずり〉〔時間〕十時十五分～十一時十五分、参加料一回五〇〇円＋観覧料（一般三〇〇円、65歳以上二〇〇円）

ゲスト講師・宝生流能楽シテ方）

日程11月2日（日）「雨月」「通小町」講師・高橋憲正、会場・美術館三階研修室

▽12月7日「三輪」「俊寛」講師・高橋憲正、会場美術館3階研修室

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑦1

拾四　「朝日狂言会」 ⑤

竹尾　邦太郎

――承前――

第卅三回　朝日狂言会・平成三年七月一四日（日）一時半始。

「文蔵」大野弘之（主）井上松次郎（太郎冠者）、「地蔵舞」大蔵弥右衛門（旅僧）大蔵吉次郎（亭主）、「痩松」和泉元秀（山賊）和泉元弥（女）、「鳴子」井上祐一（太郎冠者）佐藤友彦（次郎冠者）井上礼之助（主）。

第卅四回　朝日狂言会・第十三回観世寿夫記念　法政大学能楽賞受賞祝賀・平成四年七月一二日（日）一時半始。「二人袴」井上靖浩（聟）井上松次郎（親）井上礼之助（舅）佐藤　融（太郎冠者）、「隠　狸」和泉元秀（太郎冠者）和泉元弥（主）、「右近左近」茂山千之丞（右近）茂山真吾（妻）、「武　悪」佐藤友彦（武悪）井上祐一（主）大野弘之（太郎冠者）。

第卅五回　朝日狂言会・平成五年七月一一日（日）二時始。

「舟渡聟」井上靖浩（聟）井上松次郎（舅）井上祐一（姑）、「昆布売」和泉元秀（大名）和泉元弥（昆布売）、「悪　坊」善竹幸四郎（悪坊）安東伸元（出家）善竹忠重（亭主）、「止動方角」佐藤友彦（太郎冠者）大野弘之（主）井上礼之助（伯父）佐藤融（馬）。

第卅六回　朝日狂言会・平成六年七月一〇日（日）一時半始。

舞囃子「神舞」大野　誠・福井啓次郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎、「大般若」井上松次郎（僧）佐藤友彦（神子）佐藤　融（施主）、語「奈須與市語」井上靖浩、「鱸包丁」山本東次郎（伯父）山本則直（甥）、「才　宝」和泉元秀（祖父）和泉元弥・井上靖浩・佐藤　融（孫）、「祢宜山伏」井上祐一（山伏）大野弘之

（③面へつづく）

名古屋能楽堂十二月特別公演

十二月七日（日）十二時三十分始

名古屋能楽堂

能　通盛（宝生流）

衣裴　内田　朝陽　愛

後見　竹内　澄子　玉井　博祐

アイ　飯冨　雅介　橋本　宰　奥津健太郎

地謡　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹内　孝成　石森　智幸　平田　正文　竹内　淳一　和久荘太郎　衣斐　正宜　佐藤　耕司　内藤　飛能　加藤　洋輝　鹿取　希世

狂言　首引（和泉流）

親鬼　井上松次郎

鎮西八郎為朝　野村又三郎

姫鬼　井上　蒼大

眷属鬼　松田　高義

眷属鬼　奥津健太郎

眷属鬼　藤波　徹

眷属鬼　伊藤　泰

眷属鬼　鹿島　俊裕

眷属鬼　今枝　郁雄

後見　佐藤　友彦

仕舞　井筒（金春流）　前田　登

地謡　廣瀬　雅弘　鬼頭　尚久　小島　芳樹　小野瀬荘樹

舞囃子　江口（金剛流）　竹市　幸司

地謡　河村眞之介　後藤孝一郎　田中　春奈　鈴村　昌美　大川　磨美　熊谷眞知子　伊藤　雅子　加藤かおる　羽多野良子　大野　誠

仕舞　山姥（喜多流）　キリ　長田　驍

地謡　伊藤　英毅　長田　郷　松井　俊介

能　邯鄲（観世流）

子方　江崎　太朗　久田　勘鷗

アイ　高安　勝久　杉江　元　橋本　宰　佐藤　叡　融

後見　前野　郁子　梅田　邦久

地謡　河村総一郎　船戸　昭弘　加藤　洋輝　竹市　学　伊藤　裕貴　吉沢　修一　八神　旭　本田　孝充　松山　幸親　武田　祖父江　勲　清沢　邦弘　一政

（午後四時三十分頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団

［名古屋能楽堂］

公益社団法人　能楽協会　名古屋支部

［チケット料金］

前売　指定五二〇〇円

自由四一〇〇円

自由席のみ　当日五〇〇円増

前売券取扱所　名古屋能楽堂（052・231・0088）

名古屋市文化振興事業団（052・249・9387）

栄プレチケ（052・953・0777）

チケットぴあ（0570・02・9999＝Pコード439・336）

大阪

梅猶会　第四回　大阪能楽公演

十二月七日（日）午後一時始

大槻能楽堂

舞囃子　砧　梅若　善高　辻　荒木　芳昭　賀光　赤井　啓三

仕舞　芦刈　越知　芳彦　野宮　梅若　善久　宮君　立花香寿子

地謡　小松　勝憲　梅若　基徳　池内光之助　井戸　良祐

狂言　酢薑　酢売　善竹　隆平　聟売　善竹　忠亮　後見　上吉川　徹

地謡　小松　勝憲　斎藤　信輔　梅若　修一　池内光之助

仕舞　松風　梅若　修一

地謡　小川　晴子　水田　雄晤　井戸　和男　梅若　善久　立花香寿子

源義経　前　静　後　平知盛ノ怨霊　梅若　利成　梅若　猶義

能　船弁慶　武蔵坊弁慶　福王茂十郎　広谷　和夫　是川　正彦　重キ前後之替

間　船頭　善竹　隆司

後見　梅若　基徳　梅若　修一

地謡　梅若雄一郎　斉藤　信輔　水田　雄晤　井戸　良祐　辻　荒木　芳昭　賀光　中田　弘美　赤井　啓三　井戸　和男　梅若　善高　梅若　基徳　梅若　善久

附祝言

（終了午後四時頃）

主催　大阪梅猶会

梅猶会定期能連絡所

梅若善高方

豊中市新千里南町3―18―12

電話06（6831）7854

［入場料］

全自由席　前売　五〇〇〇円（当日券五五〇〇円）

学生　二〇〇〇円（当日三〇〇〇円）

［取扱所］出演能楽師、公演会場

ローソンチケット（L53623）

（②面よりつづき）

（祢宜）井上礼之助（茶屋）大黒（小柳悠志。

第卅七回　朝日狂言会・平成七年七月九日（日）一時半始。

素囃子「遊舞ノ楽」大野　誠・福井啓次郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎、「塗　附」井上松次郎（塗師）井上靖浩（大名）佐藤　融（大名）、「千　鳥」大蔵弥右衛門（太郎冠者）大蔵基照（主）大蔵弥太郎（酒屋）、「清水座頭」和泉元弥（座頭）和泉淳子（瞽女）、「仁　王」大野弘之（博奕打）佐藤友彦（何某）井上祐一・鷲見政行・今枝靖雄・小柳保志・小柳悠志・佐藤　融（以上参詣人）井上礼之助（跛ノ男）。

なお此の年の六月三〇日、和泉流一九世宗家元秀、脳出血のため五八歳を一期にして急逝、ために「清水座頭」はシテ元秀・アド元弥の親子に役がついていたが、それ〴〵シテ元弥、アド淳子（元秀息女）が代勤。

第三八回　朝日狂言会・平成八年七月一四日（日）一時半始。

素囃子「天女之舞」竹市　学・後藤孝一郎・河村総一郎・助川龍夫、「鼻取相撲」井上松次郎（大名）井上靖浩（太郎冠者）佐藤融（坂東方ノ者）、「左近三郎」善竹十郎（狩人）善竹圭五郎（出家）、「花盗人」野村万蔵（花盗人）野村良介（何某）、「聞罪人」佐藤友彦（太郎冠者）井上祐一（主）大野弘之（立頭）井上礼之助・鷲見政行・今枝郁雄・今枝靖雄・佐藤　融（以上立衆）。

第三九回　朝日狂言会・平成九年七月一三日（日）一時半始。

素囃子「神　舞」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・筧　鉱一・鬼頭喜太郎、「蚊相撲」井上祐一（大名）大野弘之（太郎冠者）佐藤融（蚊ノ精）、「瓜盗人」茂山千五郎（盗人）茂山七五三（畑主）、「鎌　腹」野村万作（男）野村萬斎（妻）佐藤友彦（仲裁人）、狂言小舞「海道下り」野村又三郎、「才　宝（三世井上菊次郎襲名披露）」井上菊次郎（祖父）井上靖浩・佐藤　融・今枝靖雄（孫）・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・河村総一郎・助川龍夫。

なお今回から舞台が熱田神宮能楽殿から新設成った名古屋能楽堂に移る。今回の狂言組裏面に次の挨拶がある。

第39回朝日狂言会をご鑑賞いただきましてありがとうございます。

毎年7月に恒例となりました「朝日狂言会」は、おかげ様で第1回公演以来、和泉流・大蔵流両流の競演を重ねて、39年の歴史を有する伝統の会となりました。

また今年は、竣工なりました木の香も新しい名古屋能楽堂での公演であります。「狂言」の持つ、明るいおおらかな笑いをどうぞお楽しみください。

尚また名古屋の和泉流狂言共同社の長老、井上松次郎がこの度、父祖の芸事名井上菊次郎を襲名させて頂くこととなり、本日の「才宝」をもってお披露目とさせて頂きます。

井上菊次郎の芸事名は、弘化3年に生まれ、嘉永年間に尾張名古屋城内舞台で初舞台を踏みました祖父井上菊次郎を初世といたしておるものでございます（写真は能楽写真家協会会員・杉浦賢次氏の撮影）。

第四〇回　朝日狂言会（佐藤卯三郎師・河村丘造師追善）平成一〇年七月一二日（日）一時半始。

素囃子・竹市　学・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫、「今参り」大蔵弥右衛門（大名）大蔵基照（太郎冠者）大蔵吉次郎（新参ノ者）、「鞍馬聟」井上靖浩（鞍馬ノ聟）野村小三郎（三条ノ聟）井上祐一（舅）今枝靖雄（太郎冠者）佐藤　融（女）、「泣　尼」野村万蔵（僧）野村又三郎（尼）野村万之丞（施主）、「茸」佐藤友彦（山伏）大野弘之（何某）鹿島俊裕・今枝靖雄・今枝郁雄・今村哲男・林　泰礼・森　智一・鷲見政行（以上茸）井上靖浩（鬼茸）。

第四一回　朝日狂言会・平成一一年七月一一日（日）一時半始。

素囃子「高砂八段之舞」竹市　学・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫、「鍋八撥」野村万作（鍋売）野村萬斎（羯鼓売）石田幸雄（目代）、「賽の目」井上靖浩（算用聟）松田高義（舅）野村小三郎（不算聟）佐藤　融（不算聟）今枝靖雄（太郎冠者）大野弘之（娘）、「鐘の音」山本則直（太郎冠者）山本則重（主）山本則俊（済人）、「弓矢太郎」佐藤友彦（太郎）井上祐一（当屋）大野弘之・今枝靖雄・今枝郁雄・鹿島俊裕・鷲見政行・井上礼之助（以上参会人）佐藤　融（太郎冠者）。

この年、四一年もの間、盛夏、名古屋の風物詩であった名物狂言会「朝日狂言会」が納会を迎えた。番組リーフレットなどに特にこれに関する挨拶などは無く、朝日新聞も七月一日付夕刊の五段抜キ紙面に『和泉・大蔵流ベテラン競演』「朝日狂言会　11日、名古屋能楽堂で」と横書キの見出シで例年通り演目の紹介を載せるが、納会に触れる記事は無かった。

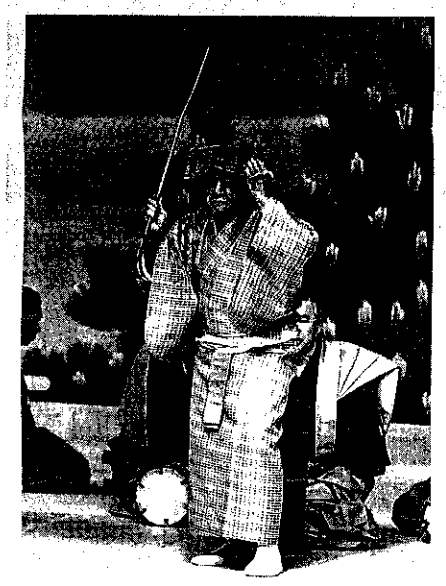
何事も無く共催する名古屋狂言共同社が朝日新聞と袂を分かち単独で主催する「御洒落名匠狂言会」に淡々と引き継がれてゆく印象だった。

因に「朝日狂言会」昭和三四年（発会）から平成一一年（納会）までの四一年間、本狂言上演の番数は「三番叟」（1）「奈須與市語」（2）を含め一八七番。曲目数は脇　狂言（8）大名狂言（13）小名狂言（15）聟　狂言（9）女　狂言（17）鬼　狂言（4）山伏狂言（6）出家狂言（17）座頭狂言（5）舞　狂言（1）集　狂言（13）、曲目分類は岩波講座『能・狂言』Ⅶに拠る。新作狂言（2）計一一〇曲目。

頻出曲は「縄　綯」（6）「千鳥」（5）「武　悪」「棒　縛」「二人袴」「鎌　腹」「花　子」「祢宜山伏」「瓜盗人」以上（4）「佐　渡　狐」「入間川」「文相撲」「二人大名」「鼻取相撲」「止動方角」「水掛聟」「茸」「左近三郎」「六　地　蔵」「釣狐」以上（3）

稀出曲は「煎物」「塗　附」「茶子味梅」「塗師平六」「若　市」「猿座頭」「狸腹鼓」

第39回『朝日狂言会』
「才宝」左より佐藤　融、井上菊次郎、今枝靖雄、井上靖浩
（撮影・杉浦賢次）



第39回『朝日狂言会』「才宝」井上菊次郎
（撮影・杉浦賢次）

◆盛夏から初秋の舞台◆

「青陽会定式能」「名古屋能楽堂七月定例公演」「第一五回記念・御洒落名匠狂言会」と「豊田市能楽堂ろうそく能」

竹尾邦太郎

「女郎花」

九州から都一見に上る僧（ワキ元）、途次、男山頂上に鎮座の石清水八幡に参詣のつもりが麓に咲き乱れる女郎花に惹かれて足を留め、手折らんとして花守の老翁（シテ一政）に咎められる。名宣から道行、麓の佳景を述べるサシ、ワキ元が名調を聞かせ舞台が整う。

花を採るの理非を古歌に求め、一件は落着するが隙取り、参詣が二の次になりかねないとワキはシテの案内で山上。男山の神域を描写の地（邦久・大志・瞭一ら）もしめやかに、シテ社前にへ伏し拝み、ワキと問答に暇を告げれば、ワキは関心事を問い忘れた心に女郎花と男山の謂れを質すことに。シテはワキを男塚、女塚に案内（写真）、土中は夫婦、女は都人、男は小野頼風と教えるが死の経緯曖昧のまゝ中入、男山麓ノ者（アヒ郁雄）の居語で詳細が知れる。即ち、小野頼風、訴訟で在京中、娶った女に下向の時は迎えを、と約束しながら多忙にかまけるうち、訪ねて来た女は応対の者に粗略に扱われて男の変節と誤解、世を儚み入水、これを知り男も後を追い、女塚からは着衣の色に似て女郎花が生えた、と。アヒの居語が巧くつなぎ待謡から出端（誠・嘉津幸・眞之介・洋輝）、生前の姿で妻（ツレ尚香）を先立て小野頼風（後シテ一政）が出る。シテ・ツレ掛合は、ツレの入水を知り埋葬の塚に生えた女郎花のへ花色も懐かしく、と左袖アシラヒ正先へ出るところに思いをみせ、クセは上ゲ端へ続いてこの川に身を投げて、と乗込拍子踏み正中に下居のところ、キリのへ剣の山の上に恋しき人は見えたり、と正を見上げ乗込拍子で飛返り下居に雲ノ扇からへ嬉しやとて行き登れば、と合膝のところなど、印象的。一体に慎重な舞台運びだった。（1時間25分）

『青陽会定式能』
「女郎花」左より清沢一政、杉江　元
（撮影・杉浦賢次）

「茶　壷」

主の使いで栂尾の茶を詰めて帰るさ、役を果した安堵か呑み過ぎて路傍に酔臥の男（アド松次郎）を見つけてスッパ（シテ融）、好き獲物とばかり連尺（荷縄）の片方が外れているを幸い己れの片腕を通し並んで横臥、アドが目覚め茶壷の所有権を争うことに（写真）。騒ぎに目代（小アド則夫）が中に入り、先づアドに事情聴取、次いでシテにもするが異口同音で埒が明かない。それなら、と入日記（納品明細）をアドに問えば、「とてものことに（いっそ）拍子にかゝって」と、へ我が物ゆえに骨を折る（自分の物だから苦労する）へ心の中ぞをかしき（心中の愚かしさよ）、と少々自嘲気味か、へさ候へばこそ俺が主殿は……、と、茶壷と己れの今ここに在る由って来る所以、仕方を交え答えると、同様にシテも。決着つかずに相舞をさせられゝばアドはシテをたぶらかす心、へ兵庫を指して下れバア、へ兵庫の津にモォ、へ袖をヂィ、などと言葉尻を伸ばしてシテを牽制すれば、シテはアドを警戒して「バァ」「モォ」「ヂィ」と呼応する無邪気、面白い。結局「論ずる者は中を取る」とて目代が茶壷を奪取するが、二人を裁く目代の重みは未だし。（26分）

『青陽会定式能』
「茶壷」左より佐藤　融、井上松次郎
（撮影・杉浦賢次）

「殺生石」

昔、鳥羽院に侍った妖狐の化身・玉藻ノ前、院の病から陰陽師に正体を見破られ、那須野に逃れるが追われて果て、執心石に凝って殺生石になったという。

前場、玄翁（ワキ勝久）と能力（アヒ俊裕）に呼掛ける里女（シテ勘吉郎）、ワキと問答に玉藻ノ前のことに触れると、「なほ〳〵玉藻ノ前の御事委しく」とワキに請われ、クリへ何処の誰とも、で作前に下居（写真）からサシ・クセと詳細を。上ゲ端へ帝それよりも御悩（病）とならせ給ひしかば、以後、少し下居に安定感を欠く憾みあるが中入地に立ち、へこの夜は明し、で左袖アシラヒ、へ石に隠れ、と少し屈み、返シ句に作物へ入る辺り中々。面に執拗な情痴をみせる近江女を掛け、シテの心情を托す若い演者の妙。アヒが居語に玉藻ノ前のこと「よく存じてあることかな」とワキをして言わしめ退くと後場。

ノットでワキは立ち、作物に向かい払子をトンと突き数珠で祈ると、へ石に精あり、と声が

（④面へつづく）

『青陽会定式能』「殺生石」
久田勘吉郎
（撮影・杉浦賢次）

『青陽会定式能』「殺生石」
久田勘吉郎
（撮影・杉浦賢次）

（③面よりつづき）

あり、地（修一・雅志・大志ら）のへ二つに割るれば、で姿を見せる床几の野干（後シテ）の異形。へ今は何をか包むべき、と素性を明かすところから、陰陽師安倍泰成に調伏されるところへ玉藻に御幣を持たせつゝ、まで口跡はっきり聞かれず残念だったが、地となって数拍子踏みへ飛ぶ空の、と台から飛び下りるところ（写真）、両介に那須野を追われ、射られ、矢を突き立てられて反り返って安座のところ、へ鬼神の姿は失せにけり、と飛返り袖被キ消え去るところ、廿代の若さ溢れるきび〳〵した身体能力が見事だった。大鼓は裕一郎、希世・嘉津幸・洋輝の先輩に伍して一所懸命、勘吉郎共々大成を願うや切。（1時間7分・7月5日・青陽会定式能）

『名古屋能楽堂七月定例公演』
「水掛聟」左より鹿島俊裕、佐藤　融、大野弘之
（撮影・杉浦賢次）

『御洒落名匠狂言会』
「引敷聟」今枝郁雄
（撮影・杉浦賢次）

「水掛聟」

灌漑が侭ならなかった時代、お百姓には水が死活に関わる大事、さればこそ聟（シテ俊裕）と舅（アド弘之）の仲であろうと水争いは必至。

日照り、水の様子を見回る舅は括袴・布羽織・三尺帯の出立に鍬を、聟は括袴・肩衣で鋤を手に。装束・小道具の違いは日常の立場。聟に水を盗られていると直ぐ盗り返し水の番をする舅、それを知らずにやって来た聟に浴せる一声は「なう〳〵俊裕、奇特にお出やったの」ときつい嫌味。目が笑っている癖に挑発的な此の一言にムカッとくる聟、水を盗られたと知って口論するうち水が掛かったの、わざと掛けられたのと、果ては泥のぬたくり合いにまで。聟が嫁（小アド融）を加勢につけ、二人して舅の足を取ろうとすれば逃げる舅（写真）。役を得た弘之、燻銀の魅力。（18分）

『名古屋能楽堂七月定例公演』
「三輪」左より長田　驍、飯冨雅介
（撮影・杉浦賢次）

「三輪」

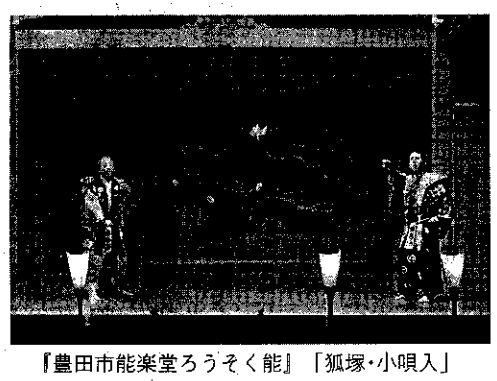
山居の玄賓（ワキ雅介）の許、毎日、樒・閼伽の水を運ぶ里女（シテ驍）。夜寒ゆえ衣を、と所望、恭しく受取り（写真）「あら有難や候、さらば御暇を申し候」と退くところ、ワキに住居を問われ、「杉立てる門を標に」と言い残して作物に消えるシテ、一抹の寂寥感。三輪明神に日参という里人（アヒ郁雄）。明神の縁起を独り言に来ると神木一の枝に見覚えあるワキの衣を発見、御注進とばかりにワキのところへ。思い当る節あるとワキが里女のことを話せば、アヒは、尊い御僧のところへ明神が里女となって現れ、神にも五衰三熱の苦しみ免れたいの思いを伝えるための衣では、急ぎ様子を御覧にと勧めて退くと、後場。

早速、出向くワキ、アヒの言う通り枝に衣、裾に金色でへ三つの輪は、と明神の詠一首が。下の句へ取ると思はじ、と吟じ下居すると作物からへちはやぶる、と三輪明神（後シテ）の声、恥し乍ら我が姿を上人にお見せしましょうへ罪を済けて賜び給へ、とシテ。掛合からへ女姿と三輪の神、と地（呻二・充雄・浩之ら）となり、へ御影あらたに、と引廻シ下ろされ面増・金風折・緋大口・白地単狩衣の気品、明神の姿が。クリへそれ神代の昔物語は末代の衆生のため、をシテが謡い、へ済度方便の、以下を地が。へ八千代をこめし玉椿、とワキにアシラヒ、打切に直ッて床几を立ち作物を出る。クセは神代の神婚説話、夜のみ通い来る男を不審し質せば、恥ずかしい姿の身を知れるなら通わずと。女は男のへ帰る所を知らんとて、衣の裾に糸を付け跡を追えばへ杉の下枝に止りたり、とスミから作物に向き合う。へこはそもあさましや（契りし人の姿か）、と作物を見上げる驚きの心はクセ切へ揺曳、男が三輪明神であったことへ語るにつけて恥かしや、とワキにアシラヒ左袖返シ面伏せるところ（写真）含羞の初々しさ。

ロンギへさらば神代の物語、と天の岩戸伝説、へこれぞ神楽の初めなる、と扇を幣の様に捧げ、達拝掛り神楽を優美に舞上げると岩戸伝説へ敷衍。天の岩戸に神が入りへ常闇の世とはやなりぬ、と下居、へこれを歎き神楽を奏して、と立つと、へ天照大神その時に、と作物横から中へ。へまた常闇の雲晴れて、作物出ると、へ人の面しろ〳〵と見ゆる、と面使ひへ面白やと。キリはへ思へば伊勢と三輪の神、とシテ、地の返シ句からへその関の戸の夜も明けて、と幕へ見て扇カザシ廻り、へ覚むるや名残なるらん、幕みてトメ拍子。若い地謡陣の一所懸命が清々しい。（1時間28分・7月6日・名古屋能楽堂定例公演）

『御洒落名匠狂言会』
「瓜盗人」左より佐藤友彦、佐藤　融
（撮影・杉浦賢次）

『御洒落名匠狂言会』
「武悪」左より善竹十郎、善竹富太郎、茂山良暢
（撮影・杉浦賢次）



『豊田市能楽堂ろうそく能』「狐塚・小唄入」
左より善竹忠一郎、善竹隆平
（撮影・杉浦賢次）

『御洒落名匠狂言会』
「金津地蔵」左より佐藤　融、井上松次郎、井上蒼大、今枝郁雄、鹿島俊裕　（撮影・杉浦賢次）

「引敷聟」

「二人袴」と同工。聟（シテ郁雄）、聟入に着用の袴を借用に何某（小アド俊裕）方へ行くが相憎く手元に持ち合わせが無く素袍の上しか無いと。窮余の一策、それを代用するが両袖に足を入れても尻が空く。何某の知恵で後ろには引敷（山仕事をする者が尻敷用として腰に下げている敷皮）を当て誤魔化すことに。「何と〳〵ようござりますか」とシテ、ファッションショウよろしく両袖広げ、くるりと一回転、破顔一笑するところが愉快。舅（アド弘之）宅ではお定まりの盃事、舅に引敷を気付かれ「鷹野から直ぐに野駈けでござる」の弁明も空しく、更に所の習い、の一言で肴に舞を求められ苦慮。何とか後ろを見せず切抜けるが（写真）相舞を求められ、ば後ろへの集中力が疎かになり「七ツ子」のへ殿が欲しいと諷うた、で尻が露見。（35分）

『御洒落名匠狂言会』
「金津地蔵」
井上松次郎、井上蒼大
（撮影・杉浦賢次）

「瓜盗人」

折角の案山子が荒され頭にきた畑主（アド融）それならば、と自身案山子に扮し瓜盗人（シテ友彦）を待ち受ければ、等身大の案山子の細工の妙に驚き、戯れるシテ（写真）、シテとアドの攻防、駈引きの微妙はすべからく間（ま）に。（31分）

「武悪」

冒頭、「誰そ居るかやい」と疳高い主（シテ十郎）の怒声の緊迫感。恐懼罷り出る太郎冠者（アド富太郎）に無奉公者の武悪（シテ良暢）を成敗してこいの命、朋輩を匿おうにも主命には逆らへず、何分武道に心得の武悪、騙し討ちに如くは無かろうと暗澹たる気持の太郎冠者。主に献上の魚を捕るのを口実にまんまと池に誘い出すが、無心に魚を追う武悪が、騙し討ちの卑怯を知って難詰するところ、主命と友情の板挟みに苦悶の太郎冠者がよい。成敗した事にして太郎冠者、「偏に命の親と存ずる」と武悪、双方シヲッて別れると太郎冠者は後見座で脱いだ右肩を入れて身繕いをし、戻ると主と問答に。「殊のほか気遣うたわいやい」「太刀の切れ味は」「手の内に覚えがござりませぬ」などとあって、「心が清々とするいやい」と上機嫌の主、この様な時には遊山に、と東山へ行くと遙かに武悪の姿か、疑心暗鬼を生じ穏やかでない。泡食ったのは太郎冠者、現実を糊塗せんと大童、狼狽える武悪を幽霊に仕立て難を逃れようとすれば、武悪はこゝぞと幽霊嫌いの主を翻弄することに。冥土の親御様の仰せ付けを楯に、主から様々な物を取り上げ、果ては主をお連れして来いとあって拒む主（写真）、良暢、活き〳〵と役を楽しむか。（1時間）

『豊田市能楽堂ろうそく能』
「葵上・無明之祈」金剛永謹
（撮影・杉浦賢次）

「金津地蔵」

堂を建立したはよいが仏が無く、都へ調達に来た田舎者（アド融）、スッパ（小アド松次郎）に誑かされてスッパの悴（シテ蒼大）をお地蔵だと摑まされて金津の在所へ戻れば篤信家ばかりの人々、早速、香華を手向ければ、頑是ない地蔵は、へ香華を呉れて嬉しけれど饅頭こそは食いたけれ、と。口を利いたと驚く人々に、安阿弥の作、奇瑞もあろうとアド。更に地蔵は古酒を求め、楽しいことをなそう、と。そこで人々、座像は堂に合わぬから立像に、と拍子にかゝって囃せば、立ちたくはないが仰せならへそと立たうよ、と地蔵、賑やかに拍子をとって踊り念仏もどき（写真）。馬脚を現わす前にとばかりスッパは地蔵に擬した悴を背負い遁走することに。蒼大君大奮闘。（45分・7月13日・第15回記念　御洒落名匠狂言会）

「狐塚・小唄入」

狐塚の田に下りる群鳥を追うよう主（アド隆司）から言いつかり、鳴子を引き賑やかに小唄を謡い、群鳥を追っ払おうと太郎冠者（シテ忠一郎）と次郎冠者（次アド隆平）、鳴子を引く、にかけた、「引く物尽し」の小唄、へ引けや引けや此の鳴子いざ〳〵鳥を追はうよ、と鳴子紐を引きながら謡い舞う裡（写真）興に乗り陶酔してゆく二人、兄弟ではなく父子の配役が舞台に厚み。

「葵上・無明之祈」

シテ永謹。常は中入に後見座でクツロギ物着だが小書で本幕の中入。後シテは緋長袴を穿き、唐織を被キ、横川小聖（ワキ勝久）の祈りの中で一ノ松へ出、ワキを見込ミ、舞台へ入ってワキの傍に。高貴な葵上に相応しい白練の出小袖を引っ摑み（写真）右へ飛び退き橋懸へ行こうとするをワキに奪い返され、数珠で打たれて橋懸へ逃れ、流レ足、ソリ返り等の型にワキの祈祷で苦しみ悶える様をみせる辺り技の切レ迫力、素晴しかった。（9月6日・豊田市能楽堂ろうそく能）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1300円
郵送の場合　1年　2000円
一　部　120円

NHK放送予定（平成26年12月）

◈NHK－FMラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日6時～6時55分）

11月30日(日)　狂言「二人大名」（大蔵流）善竹　忠重
「酢　薑」（大蔵流）善竹　忠重
12月7日(日)　素謡「山　姥」（観世流）関根　祥六
12月14日(日)　素謡「熊　坂」（宝生流）辰巳満次郎
12月21日(日)　素謡「三　輪」（金春流）本田　光洋
12月28日(日)　素謡「鉢　木」（観世流）坂井　音重

演能カレンダー

◈名古屋能楽堂◈

（TEL 052―231―0088）（能楽関係のみ）

［11月］
22日(土)　やっとかめ文化祭幸せを運ぶ能・狂言（有料）
23日(日)　久田観正会（無料）
25日(火)　名匠狂言会（有料）

［12月］
3日(水)・4日(木)　平成26年度名古屋能楽堂小中学生芸術鑑賞会（関係者）
4日　午後の部　半能「殺生石」
一般参加可（参加1人1000円）
6日(土)　名古屋大学観世会創部50周年記念大会（無料）
7日(日)　名古屋能楽堂12月特別公演
「秀吉と能」～のふにひまなく候～（有料）
13日(土)　恵比寿会（無料）
20日(土)　名古屋華舞台（有料）
21日(日)　第13回狂言三の会（有料）
23日(祝)　青陽会定式能（第58期第3回）（有料）

◆平成27年新春能2題◆

名古屋能楽堂公演

「翁」能「老松」狂言「八幡前」

名古屋能楽堂では、新春一月三日（土）正月特別公演として、能「翁」「老松」狂言「八幡前」を上演する。午後一時開演（番組③面掲載）

主催／名古屋市文化振興事業団、公益社団法人名古屋能楽堂

「翁」は天下泰平、国土安穏、五穀豊穣を祈る儀式。

また「老松」は、老松の神が大君に長寿を授け、永遠に続く御代を祈る能で、秀吉はこの能を少くとも七度演じている。

なお能楽堂では、本公演に来場の方の中から抽せんで10名に能楽グッズをプレゼントする。入場の際にパンフレットに応募券がつけられている。

× × × × × ×

豊田市能楽堂公演

能「西行桜」狂言「仏師」

豊田市能楽堂では、一月十二日（月・祝）、豊田市能楽堂（豊田参合館八階）で「新春能」を開催する。演能は、能「西行桜」（金春流）シテ本田光洋、狂言「仏師」（大蔵流）シテ茂山千三郎。

番組は「仏師」シテすっぱ・茂山千三郎、アド田舎者・茂山童司、後見・鈴木実、能「西行桜」シテ本田光洋、ワキ西行法師・宝生閑、ワキツレ花見の人・工藤和哉、則久　英志、大日方寛、高井松男、アイ・西行廣の能力・茂山茂。

午後二時開演、入場料／全席指定、正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円

大槻能楽堂新春能

1月3日、1月4日公演

大槻能楽堂では、二〇一四年度自主公演能として、一月三日（土）一月四日（日）二日間にわたって「新春能」を開催する。

能組は次のとおり。

一月三日（土）　午後二時開演

能「翁」翁・片山九郎右衛門三番三・茂山茂、千歳・片山清愛、面箱・山下守之

狂言「昆布売」昆布売・茂山七五三、何某・茂山あきら

能「猩々」前・童子、後・猩々　梅若玄祥・猩々・梅若猶義・高風・福王茂十郎、里人・茂山逸平笛・藤田六郎兵衛、小鼓・曽和尚靖、大鼓・河村大、太鼓・中田弘美、後見・大槻文蔵、赤松禎友

地謡・観世喜正、上田拓司、山本博通、浦田保親ほか

一月四日　午後二時開演

「翁」翁・大槻文蔵、翁・観世喜正、三番叟・野村万作・三番叟・野村萬斎、千歳・武富昌太朗、面箱・内藤連。

狂言「六地蔵」すっぱ・野村萬斎、田舎者・石田幸雄、すっぱ・深田博治、同・高野和憲、同・月崎晴夫

能「羽衣」天人・浅井文義、白龍・福王知登、漁夫・喜多雅人、漁夫・是川正彦。

入場料　全席指定、前売・S席八六〇〇円　A席・七〇〇〇円　B席五九〇〇円　学生席四三〇〇円

発売　大槻能楽堂事務局（TEL06・6761・8055）

名古屋大学観世会

創部50周年記念大会

名古屋大学観世会では、このほど同大学観世会創部五十年記念を迎え、きたる十二月六日（土）、名古屋能楽堂で「創部五十周年記念大会」を開催、日頃の研鑽を発表する。名古屋市後援。

番組は　能「経正」狂言「瓜盗人」「船弁慶」「鞍馬天狗」ほか連吟、仕舞、連調、独吟など三十数番

椙山女学園大学能楽部及びOB有志、南山大学観世会、金城学院大学能楽部、東京大学観世会、京都大学観世会の賛助出演も予定されている。

午前十一時開演（番組①面掲載）

久田観正会

十一月二十三日（日）開場午前九時
開演午前九時半
名古屋能楽堂

番組

番外仕舞　籠太鼓　久田三津子
歌占　久田勘吉郎

素謡　殺生石　渡辺　裕子　早川　誠一

連吟　羽衣　和田　森田　川田　小島　中田　幸子　蔦子　純子　芳枝　久栄

素謡　小督　市川　岡島　公子　由果　飯田　吉平　大川　宏

山姥　水無瀬量端　小田あさ乃　笠田　昭雄

舞囃子　邯鄲　小林　曙　河村眞之介　船戸昭弘　竹市　学　加藤　洋輝
當麻　後藤　玲子　河村眞之介　船戸昭弘　竹市　学　加藤　洋輝

能　俊寛　成経　小川　康頼　久田勘吉郎　岡田　浩　信道　高安　勝久　河村総一郎　久田舜一郎　竹市　学
問　子方　成瀬　久美　ツレ　前川　幸子　野村又三郎

素謡　木賊　ツレ　前川千鶴子　藤谷　音彌
池田　義仲　堤　賢太郎　久田勘吉郎

木曽　ツレ　小島　芳枝　ツレ　川田　純子　前川　幸子

求塚　志賀　禮子　上田　公威

能　半部　柴田得美子　問　高安　勝久　河村眞之介　船戸　昭弘　鹿取　希世

舞囃子　弱法師　盲目之舞　井上松次郎　大久保由実　河村総一郎　久田舜一郎　鹿取　希世

猩々　岡　佳代子　河村総一郎　久田舜一郎　加藤　洋輝　鹿取　希世

素謡　楊貴妃　豊島　庸子　井澤　雅夫

紅葉狩　廣瀬　之彦　杉山　善宏　田中　辰典

仕舞　兼平　堤　賢太郎
熊野　高坂　阪子
玉鬘　浅見　夏代
天鼓　濱口　矩光
菊慈童　伊藤　晏義
江口　中里三紀子
船橋　金井　美晴

番外仕舞　岩船　久田　勘鷗

―終了予定　六時半頃―

［御来場歓迎］

主催　久田観正会　久田　勘鷗

名古屋大学観世会

創部五十周年記念大会

十二月六日（土）　十時半開場
十一時開演
名古屋能楽堂

能組

発声　四海波　子供仕舞　養老　米田　敬史

仕舞　猩々　米田　篤史

仕舞　西王母　杉浦　光

仕舞　敦盛　長谷川万莉

連吟　山姥　仕舞　草子洗小町　柿下　夏美

連吟　小鍛冶

賛助出演　椙山女学園大学能楽部・能楽部OG有志

独吟　屋島　吉田　和之

仕舞　龍田　米田　真理

独吟　文之段　佐藤　安久

舞囃子　安宅　シテ　武蔵坊弁慶　山田　洋之　大鼓　池田　直樹　笛　水谷　真介　小鼓　山崎　雄介

仕舞　田村　佐古　彩衣

仕舞　吉野天人　金　載承

太鼓連調　海士

連吟　小袖曽我

（十二時半頃）

狂言　瓜盗人　シテ　盗人　石黒　生子　アド　畑主　森　緩　笛　坪井　宣幸　後見　佐藤　友彦

仕舞　嵐山　関根　真爾

仕舞　女郎花　石橋　直子

舞囃子　天鼓　シテ　天鼓　中野　裕子　大鼓　渡辺　剛　太鼓　加藤　啓　小鼓　世古口浩紀　笛　佐藤　謙

仕舞　田村　杉野かよ子

仕舞　二人静　宮田浩一郎　渡辺　八尋

賛助出演　南山大学観世会
金城学院大学能楽部

舞囃子　船弁慶　シテ　静御前　片山　明美　大鼓　岡田　涉　小鼓　米田　真理　笛　佐藤　謙

独吟　松風　渡辺　八尋

賛助出演　東京大学観世会
京都大学観世会

仕舞　花月　クセ　加納　朝子

舞囃子　鞍馬天狗　シテ　天狗　森　裕之　大鼓　大辻　（京大OB）　啓明　太鼓　水野　賀夫　小鼓　南谷　史織　笛　宮島富久雄

番外仕舞　花筐　狂　前野　郁子

能　経正　シテ　平経正　伊藤　洋元　ワキ　僧都行慶　長谷川万莉　大鼓　林　宣幸　小鼓　大濱　一郎　笛　水谷　真介

後見　伊藤　裕貴　前野　郁子

地謡　飯田眞喜男　海津　優　佐藤　安久　宮田浩一郎　吉田　和之　佐藤　謙　柏木　正之　加藤　啓

附祝言

十六時頃終了予定

名古屋能楽堂
新春謡初め

平成二十七年一月二日（金）
午後一時～二時半
（開場午後零時半）
会場　名古屋能楽堂

入場無料〈要整理券〉

※整理券は十二月十一日（木）午前九時より、名古屋能楽堂及び名古屋市文化振興事業団チケットガイド（ナディアパーク八階、平日午前九時から午後五時まで）他、事業団が管理する文化施設窓口でも配布（オンライン発券）します。【お一人様二枚まで】

※整理券をお持ちでない方はご入場いただけませんので、ご注意ください。

問合せ　名古屋能楽堂
TEL〇五二―二三一―〇〇八八
名古屋市中区三の丸一―一―一（名古屋城正門前）

江戸時代、幕府の式楽であった能。毎年正月には藩主の前で謡初めが行われました。当時謡われた「四海波」を始めとして、舞囃子・連吟・狂言小舞・狂言間語で賑やかに新年を祝います。名古屋ならではの五流派揃い踏みです。

曲目

連吟「四海波」（観世流）　梅田　邦久　他
舞囃子「高砂」（観世流）　ワキ　久田　勘鬼　高安　勝久
大鼓　河村眞之介　太鼓　鬼頭　義命
小鼓　船戸　昭弘　笛　竹市　学
鬼頭　尚久　他
連吟「小鍛冶」（金春流）　鬼頭　尚久　他
舞囃子「八島」（喜多流）　長田　郷
大鼓　河村総一郎　笛　竹市　学
小鼓　後藤嘉津幸　笛　佐藤　融
狂言小舞「七つ子」（和泉流）　伊藤　雅子
舞囃子「胡蝶」（金剛流）　大鼓　河村眞之介　太鼓　加藤　洋輝
小鼓　後藤孝一郎　笛　奥津健太郎　大野　誠
狂言間語「大瓶猩々」（和泉流）　内藤　飛能
舞囃子「岩船」（宝生流）　大鼓　河村総一郎　太鼓　加藤　洋輝
小鼓　船戸　昭弘　笛　大野　誠

第16回　万作を観る会

1月18日（日）午後2時開演
名古屋能楽堂

解説　林　和利
番組
小舞　七つ子　岡　聡史
芦刈　内藤　進
地謡　月崎　晴夫　野村　萬斎　深田　博治　飯田　豪
狂言　舟渡聟　船頭・男　石田　幸雄　妻　中村　修一　姑　高野　和憲　後見　飯田　豪
那須与市語　野村　万作　後見　深田　博治
狂言　連歌盗人　男　野村　萬斎　男　何某　深田　博治　野村　万作　後見　内藤　進

入場料　S席／八千円、A席／七千円
B席／六千円
お問合せ　万作の会（TEL）03・5981・9778
主催　なごや・万作の会

武蔵野大学　狂言鑑賞会

12月16日　雪頂講堂

武蔵野大学能楽資料センター主催による「狂言鑑賞会」は、十二月十六日（火）午後一時からと午後三時からの2部にわたって開催される。それぞれの公演は次のとおり。

［A公演］午後一時～二時半
「蟹山伏」山伏・野村萬斎、強力・中村修一、蟹の精・飯田豪
「孫聟」祖父・野村万作・舅・石田幸雄、太郎冠者・月崎晴夫、聟・高野和憲

［B公演］午後三時～四時半
「伊文字」女・使いの者・野村万作、主・中村修一、太郎冠者・高野和憲
「隠狸」太郎冠者・野村萬斎、主・石田幸雄

会場・武蔵野大学雪頂講堂（東京都西東京市新町一―一―二〇、電話＝能楽資料センター・042・468・9742）

「刀剣と能」展示会
金沢能楽美術館　多彩な企画

金沢能楽美術館は十一月八日から明年二月二十二日（日）まで、加賀藩前田家ゆかりの「刀剣と能」の展示会を開催している。

展示は、刀匠が主人公の能「小鍛冶」にちなみ、そのモデルとなった伝説の刀匠・三条宗近の系統を引く吉家・吉則の名刀や、藤島友重や兼若など加賀ゆかりの刀剣が展示される。また特別出品として、華麗な刀飾が桃山時代の傾（かぶ）きファッションアイテムの代表とされる加賀藩初代・前田利家所用の蒔絵朱鞘大小拵、歴代藩主のなかでもとりわけ能を愛好した幕末の13代・斉泰が前田家遠祖の北野天満宮に奉納した絢爛たる拵えの太刀、その金具制作にあたった白銀職頭取水野家に伝わる繊細巧緻な刀飾の絵図なども一堂に展観される。

また人気少女満漫画家・波津彬子氏がこの展示会のために描き下ろした「小鍛冶」の原画と、かまたきみこ氏による話題の刀剣漫画「KATANA」の複製原画が刀剣と能の幻想世界に誘う。

重要文化財・重要美術品6件を含む古今の名品約五十点により、武を美に昇華させた加賀藩前田家の豊饒な武家文化と現代人に通ずる能の奥深い身体感覚、刀剣から広がるイマジネーションの世界を堪能できる展示会である。

なお同美術館では、次のように多角的なイベントが行われる。

1月2日　お松囃子、1月3日　新春狂言▽連続講座「囃子方の語る《能の魅力》」（全三回）講師・帆足正規氏（同志社大学名誉教授）▽写謡の会＝12月7日「三輪」「俊寛」、1月4日「翁」「嵐山」「小鍛冶」2月1日「蟻通」「千手」▽能の楽器体験、11月～2月　各月にて実施、体験料・無料

名古屋能楽堂十二月特別公演

十二月七日（日）十二時三十分始
名古屋能楽堂

能「通盛」（宝生流）　衣裴　内田　朝陽　愛　飯冨　雅介　宰　橋本　奥津健太郎
アイ　後見　竹内　澄子　玉井　博祐　地謡　竹内　孝成　石森　智幸　平田　正文　竹内　淳一　佐藤　耕司　和久荘太郎　衣裴　正宜　内藤　飛能
狂言「首引」（和泉流）　親鬼　井上松次郎　鎮西八郎為朝　野村又三郎　姫鬼　井上　蒼大　眷属鬼　松田　高義　眷属鬼　奥津健太郎　眷属鬼　藤波　徹　眷属鬼　伊藤　泰　眷属鬼　鹿島　俊裕　眷属鬼　今枝　郁雄　後見　佐藤　友彦
仕舞「井筒」（金春流）　前田　登
地謡　廣瀬　雅弘　鬼頭　尚久　小島　芳樹　小野瀬荘樹
舞囃子「江口」（金剛流）　竹市　幸司　河村眞之介　後藤孝一郎　大野　誠
地謡　田中　春奈　鈴木　昌美　大川　磨美　伊藤　英毅　長田　郷　松井　俊介
仕舞「山姥」（喜多流）　キリ　長田　驍
地謡　伊藤　雅子　加藤かおる　羽多野良子
能「邯鄲」（観世流）　子方　江崎　太朗　久田　掛鬼　高安　勝久　杉江　元　橋本　宰　橋本　叡　佐藤　融　河村総一郎　船戸　昭弘　加藤　洋輝　竹市　学
アイ　後見　前野　郁子　梅田　邦久　地謡　伊藤　裕貴　吉沢　旭　八神　孝充　武田　邦弘　本田　勲　松山　幸親　武田　修一　清沢　一政

（午後四時三十分頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団
［名古屋能楽堂］
公益社団法人　能楽協会
名古屋支部

［チケット料金］
前売　指定五二〇〇円
自由席のみ　当日五〇〇円増
自由席四一〇〇円
前売券取扱所　名古屋能楽堂（052・231・0088）
名古屋市文化振興事業団（052・249・9387）
栄プレチケ（052・953・0777）
チケットぴあ（0570・02・9999＝Pコード439・336）

第二十二回　恵美寿会

十二月十三日（土）午前九時四十五分始メ
名古屋能楽堂

仕舞「八嶋」　衣裴　正宜
素謡「通盛」　ツレ　河田　直侃　シテ　山川　尚志　ワキ　山崎　利雄
仕舞「鉢木」　ツレ　岡本　篤彦　シテ　宇於崎千尋　ワキ　真野　久
仕舞「船弁慶」　キリ　坂口　怜
「草紙洗」　陶山さくら
「玉ノ段」　河合　佐紀
舞囃子「右近」　坂口　侑　河村眞之介　後藤嘉津幸
「遊行柳」　山田あき子　河村眞之介　後藤嘉津幸
「熊野」　小坂　絢子　河村総一郎　後藤孝一郎　加藤　洋輝　大野　誠　加藤　洋輝　大野　誠
番囃子「高砂」　中島　暉夫　竹内　淳一　平田　正文　星野　猛　大倉　三忠　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　大野　誠
独鼓「藤戸」　檀原　知治　河村眞之介
仕舞「加茂」　大前　数美
「若平」　キリ　常盤　昭雄　小林　福子
「兼藤戸」　大島田鶴江
舞囃子「実盛」　松村七雅子　河村眞之介　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
「松風」　門脇　達祐　河村総一郎　後藤嘉津幸　大野　誠
番囃子「東北」　鈴木マチコ　小坂　絢子　河村眞之介　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
地謡　山田あき子　小林　福子　大島田鶴江　犬塚　恵　内田　芳子　内田　愛　衣裴　武田　伊左　朝陽
素謡「船弁慶」　子方　関山　径子　シテ　竹内　銑治　ワキ　彰雄　松原　松辺　ツレ　渡辺　興作
舞囃子「鶴亀」　中島　暉夫　河村総一郎　後藤嘉津幸
「生田敦盛」　関上喜代枝　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛　大野　誠
「頼政」　犬塚　恵　河村総一郎　後藤孝一郎
独吟「隅田川」　犬山　昭三
「野宮」　前田　育宏
仕舞「江口」　クセ　服部　雅夫
「杜若」　キリ　寺部　良樹
「阿漕」　平田　正文
素謡「邯鄲」　ワキ　中村しきぶ　シテ　吉田　忠良　ツレ　伊藤　生郎　天野　元成
仕舞「玉ノ段」

（番組③面へつづく）

連載中の「○消息を辿る」の番外

永田虎之助先生寸描　水野　申三

竹尾　邦太郎編

頑固と「イツコク」の点では此の先生ほど他にヒケを取らない人はないだろう。曲った事は大キライで眞っ正直な人で、或る点では所謂頗る融通の利かない人であった。私事に亘って恐縮だが私も先生に輪を掛けたような人間だが、私と違った点は我が儘を通さない事であった。私が先生の門を叩いたのは大正七年早稲田大学卒業の翌月からで、其の当時は末廣町で毛皮屋を営んでおられたといっても、先生は商売はカラ下手で一切を奥さんが取り廻しておられたようだった。慾の薄い金銭的には恬淡な人であったので商売に向かないのは当り前だ。私の家は長兄林愿蔵が素謡に、次兄加藤善隆が福井初太郎先生に小鼓を習っておった反動で、大皮を永田先生に習う事になった事と思う。

頑固な一例として、其の当時永田先生が主催しておられた「五雲会」の囃子会の順序を、私の都合で番組面を変更してほしいと頼んでも聞き入れられず、更に尚クドク迫ったら怒り出されて、此の会は今日は中止するとトコ〳〵と帰られたのには他のお弟子達がビックリして懇望して戻って貰った事もあった。先生と弟子の喧嘩は以ての外の不埒で、当然弟子が慎むべきだったのに私の我が儘が此れを許さず、二・三度先生に櫂を付いた事は若気の至りとは言え、当然弟子が慎しむべきだったのに如何にも申し訳なかった事と常に恐縮しておる。兎に角堅い事では人後に落ちず、融通の利かぬ人だったが、趣味として撞球、碁以外の事は聞かぬ。書画、骨董には一切無関心の人のようだった。

人格者の点に於ては誰にも劣らず、戸次又一、木造大観、大野慶雄氏などの立派な人物を育て上げられた事は大したものだが、不幸にも先きだたれた事は晩年の先生には衝撃であり、寂しい事であったには違いない。次ぎの弟子であった私は我が儘ものであったため当てにはならず、其の後継者として若手の人格者篤鉱一君の如き眞面目な藝風をもった弟子を養成された事は、以て瞑するに足ると思う。

お稽古は普通の通りで変った事は無かったが、少々難かしい能を打ちたいと頼んでも許して貰えた先生は悟り切ったものだった。

人格的には少しも非難する事は無い。藝の事に関しては弟子が批評する事は以ての外の事で私は心から尊敬してゐる。

或るエライ人が能評如きものを、或る新聞に書いておるやに聞くが、私には其んな大それた大胆な度量も無いからお許し願いたい。

最後の締めくゝりとして言いたい事は昭和以後にも名人は出るかも知れない。然し永田先生の如き一家の見識を備へてゐて堂々とした典型的のお役者の俤を多分に有してゐた藝風藝格の人は決して出まい。段々に器用な人ばかりが喝采されて、しかと叩き込まれた上品な藝は地を拂って無くなるであろう。或る意味から言って先生は斯界最後の人であったと考へられても過言で無かろう。

因に永田虎之助は大倉流大鼓方、明治一六年（一八八三）生、昭和四五年（一九七〇）没、享年八七歳。明治・大正・昭和に亘って活躍。こゝに転載の水野申三の手稿（写真）は竹尾が生前の筧鉱一氏より頂戴したコピーから、表題が無く竹尾が「永田虎之助先生寸描」と仮称した。

水野申三は明治二九年（一八九六）生、昭和五六年（一九八一）没、享年八五歳。早稲田大学卒。出演数は多くはないが香椎袁二の名で大正末から昭和の一桁頃まで務めている。この頃、水野申三は当地の木造諷石・石田元季らと『謡曲界』に度々寄稿、「新愛知新聞」にも能評を書き、特筆すべきは「能楽界」紙（写真）を独力で発行している。

水野申三氏の手稿

能楽界

第13回　狂言三の会

十二月二十一日（日）午後二時開演

名古屋能楽堂

狂言　**福之神**　伴野　俊彦　奥津健太郎　野口　隆行

狂言　**附子**　野村　信朗　伊藤　泰　奥津健一郎

狂言　**止動方角**　松田　高義　野村又三郎　藤波　徹　野口　隆行

［入場料］一般五〇〇〇円　学生三〇〇〇円

事務局　TEL　090・6707・4714　FAX　042・392・5596

主催　狂言三の会

◆秋の舞台から◆「茂山狂言会　秋」「名古屋観世会定例公演能」

竹尾邦太郎

「靱猿」　茂山千五郎家の直系三代に亘る「靱猿」、大名（シテ千五郎）太郎冠者（アド茂）猿曳（次アド正邦）小猿（鳳仁）。

永の在京の気鬱散じに太郎冠者を供に遊山に出、たま〳〵出合う猿曳の小猿に目を留めて大名、その皮を剥ぎ靱（雨の濡れを防ぐ矢を収納の中空の籠）に掛けたいと言いだす我儘・己れの都合の良いよう相談事は全て太郎冠者に托し、段取り整えば体面保ちつゝ硬軟自在の大名、猿曳の「身に叶うた御用ならば承りませう」の言質を

（④面へつづく）

（番組②面恵美寿会からのつづき）

笹ノ段　竹内　孝成　右近　久野　幸三

舞囃子　**忠度**　千田美和子　**養老**　五段　梶川　陽子　後藤孝一郎　河村裕一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　大野　誠　河村総一郎　藤田六郎兵衛

素謡　**大仏供養**　子方　三原満都枝　シテ　荻原　忠太　ワキ　中村計一郎　ツレ　徳勢　正昭

能　**熊坂**　山本あけみ　間　飯冨　雅介　井上松次郎　後藤嘉津幸　河村裕一郎　後藤　洋輝　藤田六郎兵衛

後見　近藤乾之助　衣斐　正宜　衣斐　愛　地謡　竹内　淳一　平田　正文　辰巳大二郎　内藤　飛能　亀井　保雄　東川　光夫　東川　尚史　和久荘太郎

（終演　午後五時三十分頃）

［入場無料］［御来場歓迎］

〒466－0051名古屋市昭和区御器所三－二三－十九　御器所パークマンション八〇二　TEL・FAX　〇五二・八八二・五六〇〇

主催　恵美寿会　衣斐正宜

青陽会定式能（第58期第3回）

十二月二十三日（火・祝）十二時半開演

名古屋能楽堂

仕舞　**老蘇**　久田　勘鶴　**半キリ**　加賀　敏彦　**阿漕**　祖父江修一　**船橋**　久田勘吉郎　地謡　松山　幸親　清沢　一政　梅田　邦久　久保信一朗

狂言　**魚説法**　井上　蒼大　鹿島　俊裕　後見　井上松次郎

能　**小鍛冶**　吉沢　旭　橋本　宰　橋本　叡　大橋　則夫　河村裕一郎　船戸　昭弘　加藤　洋輝　大野　誠　久田勘吉郎　瀬戸　洋子　星野　路子　今沢　美和　松山　幸親　清沢　一政　祖父江修一　久保信一朗　久田三津子　久田　勘鶴　地謡　久田勘吉郎　星野　路子　祖父江修一　久保信一朗

仕舞　**春栄**　久田三津子　**枕之段**　星野　路子　地謡　角田　尚香　今沢　美和　前野　郁子　瀬戸　洋子

能　**玉鬘**　村井　邦子　間　杉江　元　今枝　郁雄　河村総一郎　後藤孝一郎　大野　誠　角田　尚香　伊藤　裕貴　祖父江修一　久田　勘鶴　八神　孝充　松山　幸親　加賀　敏彦　後見　前野　郁子　梅田　邦久　地謡　久保信一朗

附祝言

［チケット料金］前売券　二五〇〇円　当日券　三〇〇〇円　学生　一〇〇〇円

［取扱い］名古屋能楽堂及び各出演者宅　チケットぴあ　電話〇五七〇・〇二・九九九（Pコード786・492）

お問合せ　名古屋市名東区一社三の一六二　久田勘鶴事務所　電話〇五二－七三四－六一九二

主催　青陽会

名古屋能楽堂正月特別公演

一月三日（土）午後一時開演

名古屋能楽堂

能　**翁**（観世流）　翁　千歳　三番叟　面箱持　笛　脇鼓　小鼓頭取　脇鼓　大鼓　後見　狂言後見　久田　勘鶴　武田　大志　野口　隆行　伴野　俊彦　大野　誠　上田　敦史　久田舜一郎　吉阪　一郎　河村眞之介　梅田　嘉宏　武田　邦弘　井上松次郎　今枝　郁雄　伊藤　裕貴　吉沢　旭　八神　孝充　本田　勲　松山　幸親　祖父江修一　梅田　邦久　加賀　敏彦

狂言　**八幡前**（和泉流）　シテ　舛　アド　太郎冠者　アド　何某　地謡　奥津健太郎　松田　高義　伊藤　泰　野村又三郎　佐藤　融　後見

能　**老松**（観世流）　前シテ　老人　後シテ　老松の神　ツレ　男　ワキ　梅津某　ワキツレ　従者　ワキツレ　従者　アイ　門前の者　笛　竹市　学　小鼓　船戸　昭弘　大鼓　河村総一郎　太鼓　加藤　洋輝　地謡　清沢　一政　梅田　嘉宏　飯冨　雅介　橋本　宰　佐藤　友彦　後見　今澤　美和　梅田　邦久　伊藤　裕貴　吉沢　旭　松山　幸親　八神　孝充　久田　勘鶴　前野　郁子　武田　邦弘　武田　大志

（午後四時二十分頃　終了予定）

［チケット料金］指定　五二〇〇円　自由　一般四一〇〇円　学生　二一〇〇円

［取扱所］名古屋能楽堂　文化振興事業団　チケットぴあ　（052・231・0088）（052・249・9387）（0570・02・9999）（Pコード440・251）

主催　名古屋文化振興事業団　公益社団法人　能楽協会名古屋支部　［名古屋能楽堂］

（③面よりつづき）

楯に権高に出れば、戯れ言と思いきや本気と知ってその無体を難詰する猿曳、痛い所を衝かれ面子を潰された屈辱に激昂する大名、弓に手が掛かれば成り行きを注目していた太郎冠者も流石に看過できず、中に入って大手を広げ阻止。

こゝに至って小猿を差し出さゞるを得なくなった猿曳だが無邪気な小猿の様子に居た堪れず、太郎冠者の執り成しに縋って助命を哀願するが、太郎冠者とて大名から早よう小猿を出させよ、と急かされ頭に来ようというもの、「くどい、ならぬと言ふに」と怒声。如何にもの苛立ちは本曲のキーワード、利く。

こゝから場面が急転、猿曳のクドキは小猿の一挙一動に哀惜措く能わざる募る思い、小猿が救えれば己れの死をも厭わぬと。聴き耳をたて猿曳の心情を知る大名、「あの、それでな」と太郎冠者に話し掛け、弓とり落し「さて〳〵哀れな事ぢゃ」の涙声。

子猿は死を免れ、お礼に舞をお見せすると猿曳、物着で黒地金ノ日ノ丸烏帽子・赤地袖無を着せる間、太郎冠者は一折節これに松の切株がござる」と大名に床几をあてがい、場が整うと猿歌にのり舞う子猿。あどけない自然な姿に、駄々を捏ね太郎冠者を手古摺らせた大名も、喜々として舞に同化されようというもの。キリに子猿が幣で舞えば、大名も、トラブルの根源だった靫のことなど知らぬ気に、靫を幣に擬えて掲げ「イーヤアーッ」と片膝つき目出度くシャギリ留に。

子猿共々それ〴〵が役の面目を十二分に果し、調和のとれた晴れやかな舞台だった。（45分）

「栗　焼」　到来の栗が四十個、客は七・八十人とあってどの様にして供そうかと主（アド逸平）、太郎冠者（シテ童司）に相談すれば客を二分、上座には焼栗を、下座は他の菓子で、に一決。早速、太郎冠者は子供達に取られぬような処で焼くことに。初め、栗の芽を剪むのを忘れ爆ぜさせてしまうが、以後は庖丁にみなした扇にパチンと音させ次々剪む辺り巧い。焼ける途中に小粒、焦げ過ぎ、などと口に入れ、苦いのに当たれば口直しに、と僅かづつ減るを、全部焼き上げ主に届ける間に旨そうな匂いに克てず、一つ食うも二つ食うも叱られるのは同じ、廃められない止まらない、のコマーシャル・ソングよろしく唯食え〳〵と皆食べてしまう。こゝまでは若さの勢いがあるが、主の好人物を見越し、口調法を以て弁明せんとする小賢しい太郎冠者には、主を呑んでかゝる図太さというか老獪さが欲しいところ。何しろ竈ノ神夫婦と伴う三十四人の公達に進上した栗は三十六個、太郎冠者の苦しい弁明を先刻承知の上と思われる主の、残りの四個は、のきつい揶揄に抗するには。（30分）

「箕　被」　連歌に熱中の余り家計を顧みない夫（シテあきら）「一道も忘れずようお戻りなされました」と妻（アド七五三）の皮肉も何処吹く風、連歌を止めなければ暇を、と迫られゝば「何、暇をくれい」と呆れ返ったような表情の夫。根は気弱なのだろうが、連歌か妻か、の二者択一となればあくまで連歌に未練の夫、「気の毒ながら親里へ戻って下され」と。この辺りの哀調を帯びた夫の声音が情況を活写。暇を取るとなれば手切れの印が欲しい妻も、勝手向きがよくないとあっては貰える物は手馴れた箕だけ。「近頃面目もない」と夫、箕を被きしおらしく去って行く妻を見送り、「さても見すぼらしい」と感慨一入なら、後ろ姿に覚える興趣も一入。早速、「三日月（箕被）の出づるも惜しき名残かな」と発句、妻を呼び止めれば、門前の小僧よろしく、妻が「今宵ぞ出づる身（箕）こそ辛けれ」と脇句を付けたのに驚喜の夫、忽ち同好の士を得て離縁は氷解する。

家計に及ぼしてはいけないが、趣味嗜好が合わないからと軽々の離縁は禁物、お互い埋もれている資質を見極めて、の教訓。

キリに夫が妻から箕を受け、翳して舞い、謡う「芦刈」の一節、へ浜の真砂は詠み尽し尽すとも此の道（連歌）は尽きせめや、た、弄べ名にし負ふ難波の怨みうち忘れて在りし契りに帰り合ふ縁こそ嬉しかりけれ、と詞章通りの夫妻の情愛沁々と伝わる好舞台だった。（20分）

「鈍太郎」　下京に妻（アド宗彦）上京に妾（次アド茂）を持つ鈍太郎（シテ千三郎）、長引く訴訟で三年ぶりの帰洛に先づ下京に行けば、長年の無沙汰をきつく咎められた上、あろうことか棒使いを夫にしたと門前払いに。それならばと下京に行けば、こちらは長刀使いを夫に、と同様の仕打ちに合う。二人の女に、こゝを先途と邪険にされて意気銷沈はしても、世を儚み身投げも虚しければ、いっそ剃髪して仏門に入り、二人の女の成れる果、余所乍ら高みの見物の心、自尊心を傷つけられた思いは当てつけもきつい。

一方、二人の女は、それ〴〵すげなく帰してしまったシテを案じるが、示し合わせた訳でも無く以心伝心、二人してシテの修行妨げんの強い思いに為て遣ったりと北叟笑むかのシテ。この辺り、シテの老獪に手も無く手玉に取られて二人、シテの言われるが侭に。二人への一ヶ月の日程配分も身勝手で下京からさへ窘められる始末。果ては二人に手車を命じ、車上すると更には敬称・殿を付けて呼ばせ、へこれは誰の手車、を問の手に、へ鈍太郎殿の手車、と賑やかに囃させて洛中を誇示、得意満面が上京の細やかな抵抗は、へ鈍太郎奴の手車、を聞き咎め、険悪になり兼ねないところ何とか収まり、意気揚々引上げるシテ。当節、鈍太郎は男冥利に尽きようか、と言おうものならアナクロと一蹴され、時代錯誤の謗り免れないが、円転滑脱あっけらかんと活き〳〵演じて千三郎、力量発揮みごと。それにしても男女の心の機微はいつの世も不解。（49分・9月7日・金剛能楽堂・茂山狂言会　秋）

「賀　茂」　賀茂明神と御神体が同じも未だ参詣の無い播州室の神職（ワキ雅介）従者（ワキツレ幸・充）を伴い賀茂に詣ると、水汲む二人の里女（シテ喜正・ツレ嘉宏）と出合うと川近く壇に立つ矢を不審、シテに問えば「当社の御神体とも御神物とも」と。更に矢について問えばシテ語に昔、秦の氏女が神に供える水を汲む時、拾った矢を軒に挿すと懐胎して男子が出生と。いわゆる処女受胎の奇瑞か、矢は即ち父で天上して別雷神に、氏女と男子もそれ〴〵神となり賀茂三所に。不審は更に、御神体は昔の矢、末の世でも御神体であり得る謂れは如何にとワキの執拗に、水汲みの仕事中はやく切り上げたいかシテ、今昔の「隔てはあらじ何事も」と。ワキも結論へ誘われるようにシテとの掛合に乗せられるか、初同（邦弘・正邦・一政）が受け、隔衍、へいざいざ水を汲まうよ、となり、シテと掛合にロンギに。洛中の流れ尽しは、へ神の御心汲まうよ、でシテは壇の矢の前に下居合掌（写真）、敬虔な祈りは別雷神へのそれ、ワキに素姓を問われ、「誰とは今は愚かなり」と品位自ずと上がり、名は明かせないが、と左袖ワキにアシラヒ、へやごとなき神ぞかしと、出るところ如何にも里女を超越、静かに神隠れに退いて行く後ろ姿が美しい。代って末社ノ神（アと俊裕）が立シャベリに白羽の矢の仔細を語り、室ノ明神ノ神職を慰め一曲仕れとのことで、へやら〳〵めでたや、と三段ノ舞を陽気に舞上げて退くと後場。

出端（学・嘉津幸・眞之介・義命）で天女（ツレ雅志）が出、御代を守る、へ御祖の神徳、を言祝ぎ天女ノ舞を綺麗に舞う（写真）と、へ賀茂の山並御手洗の影、とワキ正で膝をつき、へ袖を水に浸して、扇で二度水をかけ涼をとり裳裾も潤すと、常座から招く心か、大きく幕へ雲ノ扇して地前に退くと、早笛で別雷神（後シテ喜正）が幣を持ち一ノ松へ走り、地と掛合に名乗り、三ツ拍子強々と踏み威風を示し、舞台へ入ると力感溢れきび〳〵した技の冴えも痛快な舞働（写真）。勢威をみせると風雨雷雨も自在に国土を守護するというキリ。へ稲葉の露にも、と正で下居に袖被ク辺りからトメまで型の連続を鮮やかに極めて見事。へ威光を顕し、と退いて行くツレを見送り、シテも両袖きりりと巻上げて橋懸へ、袖下ろし幣を捨て三ノ松で留メ拍子、爽やかな舞台だった。（1時間29分）

「飛　越」　茶の湯に不案内の男（アド融）造詣のありそうな新発意（シテ松次郎）を頼んで同道して貰うが、道々事前講習とばかりに茶は湯の滾る音から説くシテの得意。それも小川に出ると俄に疎んで尻込みの臆病。軽々飛び越えるアドに「此処は皆人が飛ぶ所でござる」と叱咤されても踏ん切りがつかない（写真。目を瞑って、走り掛って、などと試み掛けても駄目、では連れ飛びに、とアドがシテの手を取り、気合いを入れて飛べば、シテだけ川に落ち（写真）ずぶ濡れ。「濡れ烏ぢゃ」と笑うアドに、人は誰しもおかしい事があるものだ、とシテ。曾てアドが相撲に負けて醜態を曝したこと論えば、怒ったアドは無理矢理シテに相撲を挑み、負かすと「勝ったぞ勝ったぞ」と凱歌を上げるを、シテは「やるまいぞ、やるまいぞ」と追う。

茶の蘊蓄を傾け得意のシテが、小川も飛越えられず、ずぶ濡れを笑われ、更に相撲で倒されて意気も消沈の心の動き、振幅が旨くみえた。（24分）

「遊行柳・青柳之舞」　従僧（ワキツレ・正樹）を伴い諸国行脚、説法教化に努める遊行上人（ワキ勝久）、奥州へ下る道行で幕から老翁（シテ勘颯）に呼掛けられる。曾て先の遊行が通った古道へ案内とシテ・ワキ問答から初同（邦久・修一・嘉宏ら）は、へ（袖に朽ちにし）秋の霜、と舞台へ入り、へ朽木の柳枝さびて、と脇正から沁々柳の塚を見上げる風情に寂寥。更にシテ・ワキ問答・掛合に西行の事績を。中入地となり、へ（涼みとる）言の葉の、と杖を置き下居（写真）、へかくて老人上人の、と向き合いへ御十念（念佛十遍）を賜はり、と共に合掌、へ御前を（立つと）、杖取り立ち、その侭退って、へ失せにけり、と杖を手放し返シ句に後ろから塚に消える。所ノ者（アヒ友彦）が現われ、ワキから朽木の柳の謂れ問われ居語に、涼を齎らす西行法師の一首が関わり有名なことと、また、先の老翁は正しく柳ノ精、今宵は御回向され重ねての奇特をお待ちを、と退くと後場。

ワキ・ワキツレ待謡から出端（誠・孝一郎・義雄・洋輝）、塚の中、後シテ柳ノ精、柳にまつわる唐詩に今の心情を吟じ、へ白髪の老人忽然と現れ、と引廻シ下されると柳ノ精が床几に居る。先の老翁と風姿異にするを訝るワキに、シテは掛合に弥陀の教えへ身に受けて、とワキにアシラヒ、へ西方、と塚を出ると、へ上品上生に、行けるのが嬉しいと下居合掌する。柳に縁ある和漢の故事を言うサシ・クセ、へ沓の音、は軽く右足拍子一つ、踵心持ち進め爪先を上げる、鞠は高く上ったかしら。へ手飼の虎、は極く慎重に曳く趣なら舞も小書で静かに静かに杖で舞う姿は如何にも老柳ノ精。へこれまでなりと、ワキへ進み正中下居、へ名残の涙、にシヲリ（写真）へ暇申さんと、尽しへ御心汲まうよ、でシテは壇の矢の前に下居合掌（写真）、敬虔な祈りは別雷神へのそれ、ワキに素姓を問われ、「誰とは今は愚かなり」と品位自ずと上がり、名は明かせないが、と左袖ワキにアシラヒへやごとなき神ぞかしと、出るところ如何にも里女を超越、静かに神隠れに退いて行く後ろ姿が美しい。代って末社ノ神（アと俊裕）が立シャベリに白羽の矢の仔細を語り、室ノ明神ノ神職を慰め一曲仕れとのことで、へやら〳〵めでたや、と三段ノ舞を陽気に舞上げて退くと後場。

出端（学・嘉津幸・眞之介・義命）で天女（ツレ雅志）が出、御代を守る、へ御祖の神徳、を言祝ぎ天女ノ舞を綺麗に舞う（写真）と、へ賀茂の山並御手洗の影、とワキ正で膝をつき、へ袖を水に浸して、扇で二度水をかけ涼をとり裳裾も潤すと、常座から招く心か、大きく幕へ雲ノ扇して地前に退くと、早笛で別雷神（後シテ喜正）が幣を持ち一ノ松へ走り、地と掛合に名乗り、三ツ拍子強々と踏み威風を示し、舞台へ入ると力感溢れきび〳〵した技の冴えも痛快な舞働（写真）。勢威をみせると風雨雷雨も自在に国土を守護するというキリ。へ稲葉の露にも、

『観世会定例公演』「賀茂」
山中雅志
（撮影　杉浦賢次）

『観世会定例公演』「賀茂」
観世喜正
（撮影　杉浦賢次）

『観世会定例公演』「賀茂」
観世喜正
（撮影　杉浦賢次）

『観世会定例公演』「飛越」
左より井上松次郎、佐藤　融
（撮影　杉浦賢次）

『観世会定例公演』「飛越」
左より佐藤　融、井上松次郎
（撮影　杉浦賢次）

『観世会定例公演』「遊行柳・青柳之舞」久田勘颯
（撮影　杉浦賢次）

『観世会定例公演』「遊行柳・青柳之舞」久田勘颯
（撮影　杉浦賢次）

能面展

第39回愛面会仮面展

愛面会では十二月二日（火）から十二月七日（日）まで、名古屋・栄の市役所・朝日生命共同ビル（栄4－1－18）名古屋市民ギャラリー栄の7F第1展示室で第39回愛面会仮面展を催す。

第14回宏春会能面展

宏春会では、十二月九日（火）より十四日（日）まで名古屋栄の名古屋市民ギャラリー第9展示室で「宏春会能面展」を開催する。後援・愛知県労働協会、長円寺。

直ッて右ウケ鳥の声を聞く心は、へ別れの、で立ち、へ手折るは、とスミへ、扇左に左へ回り舞台一巡、へよろ〳〵よわ〳〵と、退り、へ倒れ伏し、と安座に枕ノ扇、へ一夜の契りも他生の縁、と居立ってワキにアシラヒ、へ西吹く秋の風、と幕へ見込み立つと、へ露も木の葉も、と扇右に取り返シ句の、へなり果て、と塚に入って沈みつゝ、左袖被キ、右へ見て立ち、右足から塚を出て残り留に。寂々として俳味のある好舞台。（1時間39分・9月15日・名古屋観世会定例公演）

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1300円
郵送の場合　1年　2000円
一　部　120円

ＮＨＫ放送予定（12月～平成27年1月）

◈ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（毎週日曜日6時～6時55分）

12月28日(日)　素謡「鉢　木」（観世流）坂井　音重
1月4日(日)　素謡「忠　度」（観世流）観世清河寿
1月11日(日)　素謡「老　松」（宝生流）宝生　和英
1月18日(日)　素謡「船弁慶」（金剛流）廣田　幸稔
1月25日(日)　素謡「盛　久」（観世流）長山禮三郎

演能カレンダー

◈名古屋能楽堂◈

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［12月］
23日(祝)　青陽会定式能（第58期第3回）　（有料）

［27年1月］
2日(金)　名古屋能楽堂新春謡初め　（無料）（要整理券）
3日(土)　名古屋能楽堂正月特別公演　（有料）
12日(月)　名古屋清韻会　（無料）
18日(日)　第16回万作を観る会　（有料）
25日(日)　第59期第一回名古屋宝生会定式能　（有料）

観世寿夫記念 法政大学能楽賞
森　常好氏　高橋悠介氏　受賞

法政大学は1979（昭和54）年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに三十五回の贈呈を重ねてきたが、本年も、各方面の識者にご推薦いただきました候補者について、選考委員（増田正人（法政大学国際学術支援本部担当常務理事）・廣瀬克哉（法政大学法人本部担当常務理事）・みなもとごろう・松本雍・西野春雄・観世銕之丞・山中玲子・宮本圭造）が慎重に審議した結果、第三十六回の受賞者を次のように決定した。

◎森　常好（もり　つねよし）氏

［贈呈理由］能楽脇方として研鑽を積んだ氏は、天性の美声と柔らかな節扱いに加え現代演劇など他ジャンルからも多くを吸収し、独自の演劇的センスと安定した芸によって、当代の能に欠かすことのできない存在となっている。2013年（檀風）で40年ぶりの秘曲をみごとに演じ、多くの観客を魅了したことも記憶に新しい。

◎高橋悠介（たかはし　ゆうすけ）氏

［贈呈理由］氏の近著『禅竹能楽論の世界』は、金春禅竹の能楽理論をその背後の宗教世界や身体論との関わりの中で精緻に読み解き、長らく低迷していた禅竹能楽論研究を確実に進めた学術的達成として高く評価される。

豊田市能楽堂　新春能
1月12日　能「西行桜」

豊田市能楽堂では「新春能」を一月十二日（月・祝）午後二時から開催する。

演能は　能（金春流）「西行桜」（シテ本田光洋）　狂言（大蔵流）「仏師」（シテ茂山千三郎）

入場料／全席指定・正面席六、〇〇〇円　脇・中正面席四、〇〇〇円

問い合わせ／豊田市コンサートホール・能楽堂事務局（豊田参合館8階）TEL0565・35・8200

主催・公益財団法人　豊田市文化振興事業団、豊田市・豊田市教育委員会。

［能組］

狂言　仏　師（シテ）茂山千三郎（アド）茂山　童司

能　西行桜（シテ）本田　光洋（ワキ）宝生　閑（ワキツレ）工藤　和哉
則久　英志
大日方　寛
（アイ）高井　松男
茂山　茂
（能力）藤田　次郎
（笛）荒木　賀光
（小鼓）河村総一郎
（大鼓）三島元太郎
（太鼓）金春　穂高
（後見）本田　芳樹
（地謡）前田　晴貴
小鬼頭明日香
小島　尚久
野瀬　芳樹
荘　登
樹
辻井　八郎
金春　安明
吉場　廣明
本田　布
由樹

催花賞
森田流笛方　帆足正規氏

法政大学は、服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して、1988（昭和63）年4月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽三役の功労者及び能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰する「催花賞」を設けた。観世新九郎家伝来の「催花」の額に基づく名称である。

各方面の識者に推薦いただいた候補者について、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受賞者を次のように決定した。

◎帆足　正規（ほあし　まさのり）氏

［贈呈理由］森田流笛方として京都の能楽界を支えるとともに、〈死神〉〈維盛〉をはじめとする新作狂言を数多く発表し、能楽の新たな世界の開拓に大きな功績を果たしてきた。京都能楽囃子方同明会の理事長として京都コンサートホールでの囃子会を新たに企画するなど、囃子方の活性化に尽力した点も高く評価される。

演能案内
名古屋能楽堂正月特別公演

一月三日（土）午後一時開演
名古屋能楽堂

能　翁（観世流）
翁　久田　勘鶴
千歳　武田　大志
三番叟　野口　隆行
面箱持　伴野　後彦
笛　大野　誠
脇鼓　上田　敦史
小鼓頭取　久田　舜一郎
脇鼓　吉阪　一郎
大鼓　河村眞之介
後見　梅田　嘉宏
武田　邦弘
井上松次郎
狂言後見　今枝　郁雄

狂言　八幡前（和泉流）
シテ　聟　伊藤　裕貴
アド　舅　吉沢　祖父江修一
アド　太郎冠者　八神　孝充
アド　何某　本田　梅田　邦久　勲　加賀　敏彦
地謡　奥津健太郎
松田　高義
伊藤　泰
野村又三郎
佐藤　融
後見

能　老松（観世流）
前シテ　老人
後シテ　老松の神
ツレ　男　清沢　一政
ワキ　梅津某　梅田　嘉宏
ワキツレ　従者　飯冨　雅介
ワキツレ　従者　橋本　宰
アイ　門前の者　橋本　叡
佐藤　友彦
笛　竹市　学
小鼓　船戸　昭弘
大鼓　河村総一郎
太鼓　加藤　洋輝
後見　今澤　美和
伊藤　裕貴　梅田　邦久
吉沢　孝充　松山　幸親
八神　勲　久田　勘鶴
前野　武田　邦弘
郁子　大志
地謡　孝充　旭
郁子

百周年記念
名古屋清韻会

平成二十七年一月十二日（祝）
午前十一時三十分始め
名古屋能楽堂

番組
素謡
玄象（師長）岩田　正子（ツレ）佐藤加代子　伊藤るり子　佐藤　尚雄
土蜘蛛　独吟　中村　大喜
安宅　素謡　義経　大槻　裕一
〃　杉浦　壽康
〃　加藤　千一
〃　福間　克彦
同　山田　薫
〃　吉沢　旭
敦盛　勧進帳　仕舞　冨士道　周明　赤松　禎友
木賊　素謡　近藤　幸江
鬼頭貴代子　山本　博通
井筒　一管独吟　渡辺　節子　藤田六郎兵衛
素謡
鸚鵡小町　篠田　幸子　大槻　文藏
阿漕　仕舞　谷口　寛子
定家　素謡　古井　佐季　齊藤　信隆
舞囃子
高砂　杉浦　壽康　河村眞之介
実盛　加藤　千一　後藤孝一郎　河村眞之介
道明寺　福間　克彦　後藤孝一郎　河村眞之介
祝言
石橋　大槻　裕一　大槻　文藏　河村眞之介　後藤孝一郎
地謡　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
後藤孝一郎　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
［入場無料］

（午後四時二十分頃　終了予定）

［チケット料金］
指定　五二〇〇円
自由　一般　四一〇〇円
学生　二一〇〇円

［取扱所］
名古屋能楽堂（052・231・0088）
文化振興事業団（052・249・9387）
チケットぴあ（0570・02・9999）（Pコード440・251）

主催　名古屋文化振興事業団
［名古屋能楽堂］
公益社団法人　能楽協会名古屋支部

主催　大槻清韻会

百周年記念 名古屋清韻会

新春 1月12日 名古屋能楽堂

観世流の名古屋清韻会は、大正三年（1914年）、大槻文蔵氏の祖父十三氏が名古屋での稽古をはじめたのを機に誕生、明春一月の恒例の演能を「百周年記念・名古屋清韻会」として、一月十二日（月・祝）名古屋能楽堂で、大槻清韻会主催により開催する。（番組①面掲載）

百周年記念催能にあたり、会主・大槻文蔵氏は次のようにあいさつを寄せている。

祖父 十三が名古屋へお稽古に伺い、初めて名古屋清韻会を催させて頂いたのが、大正三年（1914）で、本年百年を迎えることとなりました。

十三は同年呉服町能楽倶楽部舞台での、名古屋能楽会で「千手郢曲之舞」を シテ観世元滋 ツレ 十三にて名古屋での初役、大正五年 幸清流催能にて「養老」のシテを皮切りに、その後昭和三十七年に逝去致しますまで、永年に亘り御地名古屋にての活動をさせて頂いて参りました。

父も途中より祖父と共に名古屋へ伺い、平成二年まで演能、お稽古とさせて頂き、その後は私が引継がせていただき今日に至りまして、今回百周年の記念会を開かせて頂くことになりました。

これ偏に綿々とご後援を頂いておりますお社中の方々、又演能をご支援頂いてます皆々様のお蔭でございまして、深く御禮を申し上げる次第でございます。

今後とも何卒よろしくご支援、ご鞭撻をお願い申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

平成27年 新春能面展

1月6日から2月1日まで

面紹社 鶴舞中央図書館で

能面研究会面紹社（代表・保田紹雲氏）は、平成二十七年（第二十三回）「新春能面展」を一月六日（火）から二月一日（日）まで、名古屋市鶴舞中央図書館1階展示コーナーで開催する。（休館日一月十三日（火）一月十六日（金）毎週月曜日、但し一月十二日の成人の日は開館）

出展は、能面作品十八面、能絵（参考展示）十五点

出展者 面紹社中9名

保田紹雲、水野観雲、久保暁雲、山崎周雲、一色青雲、金人彗雲、漆畑健治、田崎未知、小坂友二

責任者 代表 保田紹雲（愛知県海部郡大治町花常東江端39番地 TEL052・441・1538）

〔能絵〕能英樹画「英樹画集」▽月岡耕漁画「能楽百番」▽宇和島伊達家伝来「能絵鑑」

法政大学能楽賞 受賞者の紹介

◎森 常好氏

［主な経歴］

宝生流脇方。1955年12月5日、森茂好（人間国宝）の長男として東京都に生まれる。父に師事。1963年、7歳のときに〈岩舟〉で初舞台。十代の頃は稽古が嫌いで逃げていたが、舞台は好きで、名人上手の能にワキツレとして座り、直に伝わってくるエネルギーを感じることが「修行」になったという。都立新宿高校在学中、能とは無縁のアルバイトを多く経験するうち、どの世界にもプロの仕事というものがあり自分にとってはそれが能の舞台だと気づき、自ら真剣に稽古を重ねるようになった。1982年〈道成寺〉、翌1983年に〈張良〉を披き、以来、1994年〈卒都婆小町〉、2000年〈谷行〉、2001年〈姨捨〉、2013年〈檀風〉等、脇方の重い習いの曲を次々と披く。1998年には芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。2000年に起ち上げた能楽伝承プロジェクト「花の会」は能の魅力を伝え正しく継承していく企画として、現在まで15回を重ねている。海外公演や復曲・新作等への参加も多く、現代の能界を支える重要な柱として活躍している。趣味は読書、芝居や映画の鑑賞。重要無形文化財総合指定保持者。日本能楽会会員。公益社団法人能楽協会理事。

◎高橋悠介氏

［主な経歴］

神奈川県立金沢文庫学芸員。1978年1月東京生まれ。2001年3月慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業、2003年3月同大学院文学研究科国文学専攻修士課程を修了し、2006年3月に東京大学大学院総合文化研究科博士課程を単位取得満期退学。日本学術振興会特別研究員を経て、2009年4月より現職。2009年12月に東京大学より博士（学術）の学位を取得。主な研究分野は、能楽を中心とした日本中世文学・文献学、及び中世宗教思想史。金沢文庫において重要文化財・称名寺聖教（しょうぎょう）の調査を行う一方、能楽研究においても主に中世の神仏世界や仏教史との関わりから能楽論や能作品の読解を進めている。松岡心平氏を中心とする観世文庫所蔵能楽関係資料の調査・研究、観世文庫のデジタル・アーカイブ編集にも参画。著書に『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）、近時の論文に「観世元章手沢・石畳艶模様紺表紙一番綴謡本の周辺」（松岡心平編『観世元章の世界』檜書店、2014年）などがある。法政大学能楽研究所兼任所員、一般財団法人観世文庫評議員、観世会荒磯能事前講座講師などをつとめる。

催花賞受賞

◎帆足正規氏

［主な経歴］

森田流笛方。1931年3月10日、東京に生まれる。湘南高校在学中に宝生流の高橋進に師事。1950年、京都大学文学部（哲学科美学美術史専攻）に入学し、在学中より森田流の貞光義次に師事。1951年9月に〈班女〉で初舞台を勤める。1960年、能楽協会入会。1968年5月に〈道成寺〉（シテ山本真義）。その後、〈翁〉〈清経音取〉〈鸚鵡小町〉等を披く。2003年、京都能楽囃子方同明会の理事長に就任。「囃子堂」を京都コンサートホールで企画するなど、能楽囃子の宣伝・普及にも努める。これまで〈死神〉（1981年）、〈維盛〉（1985年）、〈はらべ山〉（1996年）、〈ふろしき〉（1999年）、〈仁王と運慶と泥棒と〉（2000年）など、新作狂言を多数執筆。中でも、1981年に渋谷ジァンジァンで茂山千之丞の演出により初演された〈死神〉は、その後再演を重ね、既に狂言茂山家のレパートリーとして定着している。また新作能に、福山大島能楽堂の委嘱で執筆された〈鞆のむろの木〉（2002年）、京都薪能に上演された観世・金剛共演の〈紅葉賀〉（2008年）がある。能楽に関するエッセイの執筆も数多く、2000年4月に始まった能楽タイムズの連載「気まま見たまま思うまま」は、2008年9月まで百回に及んでいる。趣味は古書・陶器・落語。重要無形文化財総合指定保持者。日本能楽会会員。

第十六回 万作を観る会

一月十八日（日）午後二時開演　名古屋能楽堂

解説 林 和利

小舞 芦刈 七つ子 岡 聡史 内藤 連 地謡 月崎 晴夫 野村 萬斎 深田 博治 飯田 豪

狂言 舟渡聟 船頭・舅 石田 幸雄 聟 中村 修一 姑 高野 和憲 後見 飯田 豪

奈須与市語 野村 万作 後見 深田 博治

狂言 連歌盗人 男 野村 萬斎 男 何某 深田 博治 野村 万作 後見 内藤 連

主催 なごや・万作の会
後援 名古屋稲門クラブ 愛知県稲門教育会 中日新聞社

［入場料］S席 八千円 A席 七千円 B席 六千円 取扱い＝チケットぴあ、セブンイレブン サークルKサンクス、栄ブレチケ（052・953・0777）

名古屋宝生会定式能

一月二十五日（日）午後一時始　名古屋能楽堂

（12時30分）演目解説

ツレ 辰巳大二郎 ツレ 澤田 宏司 子方 片桐 賢 シテ 竹内 澄子

（13時）能 三笑 間 大鼓 河村眞之介 小鼓 船戸 昭弘 太鼓 加藤 洋輝 笛 大野 誠 後見 玉井 博祐 衣斐 愛 地謡 今枝 郁雄 片桐 真 津田 節哉 鈴木久仁七 佐藤 耕司 石森 智幸 内藤 飛能 和久荘太郎 衣斐 正宜

狂言 鶏聟 シテ 野口 隆行 アド 松田 高義 アド 鹿島 俊裕 アド 井上松次郎 後見 野村又三郎

仕舞 大江山姥 クセ 衣斐 正宜 衣斐 愛 地謡 石黒 孝 朝倉 俊樹 佐藤 耕司

——休憩15分——

能 鉢木 シテ 辰巳満次郎 ツレ 内藤 飛能 ワキ 宰 ワキツレ 橋本 雅介 ワキツレ 飯冨 正樹 間 相元 佐藤 友彦 佐藤 融 陶 野村 信朗 大鼓 河村総一郎 小鼓 後藤嘉津幸 笛 藤田六郎兵衛 後見 衣斐 正宜 辰巳大二郎 地謡 森下 成利 中村 朝倉 俊樹 清水 達郎 石黒 孝 大森 尚人 澤田 宏司 井上 蒼大 和久荘太朗

附祝言

16時20分 終了予定

演能案内

立合狂言会

ご挨拶

このたび、「立合狂言会」と銘打ち、狂言の流派や家の垣根を超えて、次代を担う若手の狂言師が集い研鑽を積む公演を企画いたしました。それぞれの家の古典狂言を演じ合うことで、より一層の芸の向上はもちろんですが、今後の狂言界の交流や発展の試金石になればと期待しております。

また観客の皆様には、出演者が懸命に狂言に取り組む姿をご覧いただき、狂言の新しい息吹を感じていただければと思います。毎年継続して参りますので、どうぞ宜しくお願い致します。

世話役 野村 万蔵 茂山千三郎

主催 名古屋宝生会 衣斐正宜方
お問合せは出演能楽師または名古屋宝生会 TEL／FAX 052・882・5600

正会員 一八、〇〇〇円（年間通用4枚綴り）
入場券（全自由席）五、〇〇〇円、学生券 二、〇〇〇円
鑑賞券
芸文・栄ブレチケ・文化振興事業団（ナディアパーク8F）

［東京公演］

日時 平成27年1月14日（水）
開場 午後6時、開演午後6時30分
会場 宝生能楽堂
入場料 正面席 三、〇〇〇円 中正面・脇正面席 二、五〇〇円
チケット取扱い チケットぴあ TEL 0570・02・9999（Pコード439・477）

萩大名 はぎだいみょう 大名 三宅 右矩 太郎冠者 三宅 近成 茶屋 高澤 祐介

察化 さっか 太郎冠者 島田 洋海 主 鈴木 実 すっぱ 増田 浩紀

——休憩

磁石 ししゃく 人商人 奥津健太郎 見附国府の者 野口 隆行 宿の亭主 野村又三郎

禰宜山伏 ねぎやまぶし 山伏 大蔵 基誠 禰宜 大蔵 教義 茶屋 大蔵千太郎 大黒 善竹富太郎

終演予定 午後九時頃

［京都公演］

日時 平成27年1月16日（金）
開場 午後6時、開演午後6時30分
会場 金剛能楽堂
入場料 正面席 三、〇〇〇円 中正面・脇正面 二、五〇〇円
チケット取扱い チケットぴあ（TEL0570・02・9999）（Pコード439・477）

（番組③面へつづく）

「消息を辿る」の番外（その2）

竹尾　邦太郎

先号で水野申三氏の手稿を掲載したが、氏独力で編輯の『能楽界』に関心を示す読者に参考のため昭和五年十二月一日発行の第三十七号を四回に亘り連載する。因に『能楽界』はA4判・二ツ折・表裏四頁だがB4判に拡大。

「注　釈」

能勢講師　能勢朝次（明治27年生）主著書『能楽源流考』『世阿弥十六部集評釈』『能勢朝次著作集・全十巻』

岡崎教授　岡崎義恵（明治25年生）『中世の歌舞演劇における風流』『日本文芸学』『日本芸術思潮』

高野講師　高野辰之（明治9年生）『日本歌謡史』『日本演劇史』『面と狂言』

佐成学習院教授　佐成謙太郎（明治23年生）『謡曲大観・全七巻』

野々村早大教授　野々村戒三（明治10年生）『能楽古今記』『能の今昔』『狂言集成』安藤常次郎と共編

公会堂覚書　名古屋市公会堂は昭和5年10月10日に観世流廿四世宗家左近（明治28年生）の「翁」で舞台披キ。昭和5年11月21日に覚書当該の「小袖曽我」金剛右京・金剛　巌・佐藤秀雄（アヒ）金森準三・田鍋惣一郎・西尾孫太郎、「末広かり」井上菊次郎・井上彦四郎・井上新三郎、「井筒・物着」金剛　巌・西村愛三・藤田豊二郎・福井五郎・永田虎之助、一調「松虫」金剛右京・田鍋惣太郎、「紅葉狩」大槻十三・西村弘敬・佐藤卯三郎・河村丘造・鈴木直恒・青木恒治・戸次又一・野崎光之丞、の番組で名古屋能楽会の催能があった。

「一エウバンリノフネノミチブジヨイノル」能「八島」へ一葉万里の船の道たゞ一帆の風に任す、から。

「ヨウスノサトニツキテソヨ（下段へつづく）

昭和五年十一月一日　能楽界　第三十七號（毎月一回発行）（1）

能楽界

昭和五年十一月二十五日印刷
昭和五年十二月一日発行
名古屋市中區八百屋町二丁目八番地（電話三二六九番）
発行所　能楽界社
名古屋市中區八百屋町二丁目
編輯人　水野申三
名古屋市中區矢場町一ノ切
印刷所　野田樂樂社

能の鑑賞に就いて

石田　元季

京都大學では能勢講師の謡曲の講義があり、東北大學では岡崎教授の狂言が講ぜられ、東大には高野講師の歌謡史があり、佐成學習院教授は謡曲の大部な解説をものせられ、野々村早大教授の狂言大成も近く出ると聞く。まことに學界の偉觀であり、寶玉の如き古典藝術が益々眞價を發揮しゆくことは吾人の喜びに堪へない所である。

私が知る所の或る學生は最近二年間世阿彌の研究に没頭してゐる。昨年一年間を費して忠度一番を詳覈した學生もある。風流の研究に頭を惱してゐる人もある。私の關係してゐる學校の試驗問題として私は田村の全曲を鑑賞批評せしめた。或る生徒は全部に形附の説明を附した。又或る學校では能の源流を論じ翁と千歳と三番叟との關係に及べといふ題を出した。生徒は春村の猿樂考證土代を見せよと求めた、私はその一部分の外知らないと答へた。

かゝる有様である。過ぐる日の井筒を見て、欠伸をしないのは寧ろ當然である。或る青年學生は序の舞の短きを慨んだ。私は水野氏の厚意により、本誌を通じて、彼等學生に代り、名古屋能樂會に御禮を申し、樂師諸氏の熱心なる演奏に對して感謝の誠意を表する。そして、なるべく變つた種々の能と狂言とを見せて下さることをお願ひする。

船辨慶の白波や土蜘蛛の千筋も結構である。安宅や望月も望ましい。壇風や谷行も脇方にお願ひする。それが如何に歌舞伎に移りゆく道程にあるかも研究せられねばならぬ。必ずしも面白いからといふのでは無い。さる代り、老女物など極めて靜かな物も、皆同様に然るべく按配せられたい。狂言の方は狂言盡もやつて戴きたい。狂言を馬鹿にするものは馬鹿の骨頂である。物の別つた者は極度にまで狂言を尊重する。私は今の若い人々によい狂言が見せたい。

私の少時に、京都の八阪神社で毎月茂山社中の奉納狂言があつた。遠い狂言の數々を見た嬉しい記憶は今に殘つてる。物の分つた若い人達を相手にして、見せて上げて下さい。あの井筒の物著の間靜かにしてゐた見所は間狂言に耳を傾ける人々であるあの一調に鼓といふ樂器の驚くべき美妙さを知つた者は、一管を鑑賞することをも喜ぶであらう。

能の有難さは古典味と禪味即ち優美と幽玄とにあるが、一つはその眞劍さに頭を下げるのである。能は古典藝術として發達の頂上にあるが、我國將來の樂劇はまた立派なものが生れ出ればならない。それは能から最もよいものを取つて現はれるでもあらうが、何よりもこの眞劍さを受け繼がせたい。私は世阿彌の時代と桃山の時代と元祿時代と、この三つの能の隆盛期が、皆眞劍の鑑賞家を相手とした眞劍の藝によつて生れたことを思ふ。脇方狂言方拍子方などのあらゆる流儀も、面打の赤鶴長右衛門、是閑河内もこゝから出、將來作り物の類までかゝる時代に定まつたことを思ふ。私どもは桃山の時代に、元祿の時代にかへり、世阿彌の精神にかへらねばならぬ。我國にかゝる藝術の存在することを喜び誇る私どもは、勢ひ多大の期待に驅られるのである。眞につまらぬ事を述べて、誓愧に堪へないけれども、能に對する一部の人の熱愛を一言して、能樂會當事の諸賢に感謝したいために元辯を陳れたのである。

他初めての人も相當の數に上り、見物席に一脈の生氣があつた事も特筆大書するに足る。但し十年一日の如く華かに着かざつて見るのやら見せるのやら解らぬレディーがなかつた譯ではない。その日の出來榮は近來にない收穫であつた樣に私は思ふ。久しく疎れて居た右京氏の藝は愈々冴えて心憎いまでに私の心を滿足させた、あの苦味のある美しさは追從を許さない。この藝で小袖曽我等でないもつと氏の持味の充分出し切れるものが見たいと思ふのは私一人ではあるまい。

厳氏が左京氏の添にあつて多少甘く見えたのは是非もないが、非筒では其上品な甘美さが充分生かされてゥツトリと見入らざるを得なかつた。井筒の樣なものは氏の畑に打つてつけたものであらふ。此後も度々兩氏の藝に觸れる機會が惠まれれば吾等の滿足此上ない。

大槻氏の紅葉狩には多少申上げたき事あれ共、物言へば唇寒き此の朝夕の冷氣の手前、御遠慮申す譯である諸氏御賢察の程を。扨今度の樣な催

公會堂能覺書

増阿彌

宣傳よろしきを得て、素晴らしい盛況であつた事は何よりで、學生そゞ

渡歐航行中の秩父丸の能樂團に K子より「一エウバンリノフネノミチブジヨイノル」と無線電信を打てば廿八日午前十一時、上海から「ヨウスノサトニツキテソヨ」と着報の返電あり、謡文句の洋上應酬、古い詞の新らい試み

（「番外」のつづき）

口」能「猩々」「楊子の里に（高風と申す民にて候）」から。

右の電報の往來については当事者であつた田鍋惣太郎氏の自著『小鼓芸話』に詳しい。

布池能樂堂工事中を利用して私は名古屋の樂師十一名を引率して上海に渡り演能いたしました。昭和五年十一月廿九日附の「上海日報」が幸い手許に殘つておりますが、その記事を見ますと次の樣に報ぜられて居ります。

「名古屋よりの能樂師一行十一名は、名古屋能樂会専務理事田鍋惣太郎氏引率の下に本日午前九時半入港の郵船秩父丸で滬山碼頭に着いた。（中略）田鍋氏は船上で次の樣に語る。名古屋能樂会は明治末年創立されたもので、今では毎回千人以上の会員が集つている。今度社団法人組織となり能樂堂を新築する事になつたので、余暇を得て御地にまいつたものである。今度新築している能樂堂は今年七月から工事にかかつたもので年内には完成する事になつている。工費十五万円で千三百人を収容し得る。云々。」

この上海での演能は、初日に「鉢木」（内藤鍠造、宝生）、「羽衣」（柴田初太郎・観世）を、二日目に「小袖曽我」（斉藤安次郎・柴田初太郎）、「猩々」（内藤鍠造）で主催者側では立派な番組を発行して演能の解説をのせたり、臨時と思われぬ樣な能舞台を作つたりして歓迎してくれました。両日共非常な盛況で外人の観客も多かつた樣に思います。往途の秩父丸は当時一番大きな船で進水したばかり、誠に快適な船旅で、私共は船中の日本間で囃子の稽古をしたりしましたが、帰りの長崎丸では悪天候に遭い玄界灘で一同船酔に苦しんだ事も思出になっております。近年になって能樂の海外進出が注目されて居りますが、私共は今から廿数年前に早くも能樂の大陸進出を試み大成功を収めた事は大いに斯界に先鞭をつけたものといささか自負しておる次第であります。なおこの上海行については当時上海に在住しておられた小早川靖二氏の御配慮に負う所が多かつた事を附記いたします。

――以下次号――

（②面立合狂言会つづき）

大名　昆布売　善竹富太郎
昆布売　善竹大二郎
太郎冠者　棒縛　鹿島　俊裕
次郎冠者　今枝　郁雄
主人　井上松次郎

――休憩――

太郎冠者　千鳥　茂山　良暢
主　山本　善之
酒屋　新島　健人
山伏　蝸牛　野村太一郎
主　泉　慎也
太郎冠者　吉住　講

終演予定　午後九時頃

お問い合わせ
特定非営利活動法人ACT・JT
「立合狂言会」事務局
〒170・0013　東京都豊島区東池袋5－7－4
マーブル東池袋7階
TEL　03・6914・0325
FAX　03・6914・0327

［入場料］
正面席　三〇〇〇円
中正面、脇正面席二五〇〇円

◆秋の舞台から（その二）◆

「第二回　演能空間」と「第四回　観正能」「淡交会九十周年特別公演」「観世九皐会」「名古屋能楽堂定例公演」

竹尾邦太郎

「橋弁慶」　弁慶（シテ満次郎）北野へ丑刻詣のつもりが五条橋で小童（子方凜太郎）が人々に危害を加えるゆえに外出は、と従者（トモ和磨）に戒められるも、面子に関わる事と思い直し身支度に早鼓（眞之介・達志）の中入。代って早打（アヒ郁雄）、常座で弁慶に仕える者と名宣、立シャベリに五条橋の刃傷沙汰の怖さ「言語道断」と嘆じ舞台一巡、要心喚起と触レて退き後場。普通アヒは二人出るが一人は珍しい。

先づ子方、へ橋板をとゞろ〳〵へと踏み鳴らし、六ツ拍子から橋上で人待つ心に正先で佇むと、一方シテは金入沙門帽子を白袈裟頭巾に、白大口は半切、黒水衣は法被に替え、一ノ松で長刀ゆるりと抜き威風を。橋板荒々しく石突トンと左足強く「踏み鳴らせば」、気付く子方が被衣に小腰屈め近寄るを見咎めてシテ、立廻に様子窺うか、女とみて看過すれば、長刀の柄元けられて挑発され、へすは痴者よ、とへ長刀やがて取り直し、足拍子二ツ、返シ句に踏む四ツ拍子、長刀振りかぶり一ノ松へ子方に迫り丁々発止と眼目の斬組。シテの鮮やかな長刀捌きに子方ひき立てる斬組の呼吸の良さ、偉丈夫の満次郎に相応しい器量の大。子方も元気溌剌と務め爽やかだが欲を言えばもう少し力強く突っ込んでゆきたかった。キリに主従の約を結び牛若丸、弁慶に羽織を着せ掛けられ退いてゆくところ、ほの〴〵した感慨、洛中を騒がせた悪戯小童の改悟成長の姿をみた。地謡は和英・俊樹・登ら。

当今は知らず曾て人口に膾炙した文部省唱歌「牛若丸」と能「橋弁慶」のシチュエーションは逆。（42分）

「魚説法」　親の追善に建立した持仏堂の堂供養を依頼に寺を訪ねる施主（アド松次郎）、住持が留守とて新発意（シテ蒼大）を頼めば碌に経も詠めぬに布施千匹に惹かれ、説法の様に節をつけて勤め、その場を凌げばの横着。口跡はつきりと小学生らしい年齢からくる悪戯心も覗え、実生活では父を相手に伸び〳〵演じ、「とっと、御帰りやれ」と面責され、「とびいお、とびいお」と飛んで帰ってゆく辺り如何にも無邪気。（23分）

「葵　上」　白地の出小袖、本幕で無く切戸から正先に延べられ病臥の葵上を象徴。密かに、という訳でも無かろうが対象が葵上、本幕の位で出したい、流是か。赤い小袖でないのは重篤ゆえであろう。何事もなく巫女（ツレ憲正）が座着き、臣下（シテヤツレ誠吾）が出、名宣に葵上の病ただならぬを述べ、病因究明とて口寄せ（霊媒）上手なツレに梓を掛けさせる。梓は霊媒の道具、梓の木で造った丸木の弓に張った弦を鳴らし呪文を唱え霊を呼び寄せるという。

アズサの囃子（眞之介・達志）で〽天清浄地清浄、と謡い（唱え）出すと現われる六条御息所ノ生霊（シテ荘太郎）、一ノ松で〽三つの車に法の道、と謡い出す一セイ、二ノ句もシテで〽遣る方なきこそ悲しけれ、とシヲリ、運ブと常座に。浮世の憂さ、儚さ、葵上への妬心、せめて紛らさんと梓に引かるゝも端ない振舞、月に姿曝さず、霊を呼び寄せるという梓弓の末弭（ウラハズ・弦を掛ける上端）を探し、晴れぬ気持を、と独白する次第・サシ・下歌・上歌、口跡明晰が結構。

ツレの梓に引かれる体のシテ、掛合に〽姿なければ問ふ人もなし、とシヲルをツレ、シテの素姓を悟り、「もし斯様の人にてもや候らん」とワキツレに。シヲリ解くシテにワキツレが名乗らせれば、シテは正中へ下居。何時さてさ迷いへ初めつらん、とシヲリ、御息所の怨霊と明かし、心情吐露するクドキに。これを受け代弁の初同（章・和英・俊樹ら）へ恨みは更に尽きすまじ、の返シ句に居立ち小袖へキッと面切ル怖さ、ツレと掛合に小袖へ寄るを〽あら浅ましや、と牽制のツレ、シテは扇で小袖ノ襟元つよく打ち据え、立つと常座、小袖を振り返り返り〽思ひ知れ、と扇で指ス辺り激しい憎悪。枕之段は、〽人の恨みの、で扇開き前へ、〽沢辺の蛍、のところは面使とさらりと、〽恨めしや夢にだに、と踏む数拍子は地団駄、〽枕に立てる、と小袖に目を遣り扇投げつけると唐織引っ被き後見座へ、物着。

後場。ワキツレが従者（アヒ又三郎）に横川小聖（ワキ欣哉）を呼び出させ、アヒ・ワキ問答あってワキの出。ワキツレと問答からワキは小袖の前、「これは以ての外の邪気にて候」とノットで加持で小袖ノ襟元つよく打ち据え、立つと常座、小袖を振り返り返り〽思ひ知れ、と扇で指ス辺り激しい憎悪。枕之段は、〽人の恨みの、で扇開き前へ、〽沢辺の蛍、のところは面使とさらりと、〽恨めしや夢にだに、と踏む数拍子は地団駄、〽枕に立てる、と小袖に目を遣り扇投げつけると唐織引っ被き後見座へ、物着。

後場。ワキツレが従者（アヒ又三郎）に横川小聖（ワキ欣哉）を呼び出させ、アヒ・ワキ問答あってワキの出。ワキツレと問答からワキは小袖の前、「これは以ての外の邪気にて候」とノットで加持気勢を恐れて関を通すワキに又しても従者、目覚く判官殿がと騒げば、へすは、と殺気立つ同山にシテにも又しても難局。白熱のシテ・ワキ問答は、強力（判官）を留め笈に目を着けるは盗人、として、何とあっても一人も通さぬ、とワキ。同山を代弁する地（貴弘・宣長・義高ら）へ方々は何故に、と同山、先づ左列ついで右列と一斉にワキへ殺到、最後は一団となって迫るを金剛杖右肩に凭せ掛け懸命に踏ん張り押し返すシテ、隠忍自重の弁慶の面目躍如。何とか関を遠く過ぎ小憩、先の非礼をシテ、判官に詫びて掛合、はき〳〵応じる判官の旨さが光る。不遇を憂え神仏を託つクリ・サシ・クセを省く。

「安　宅・勧進帳・瀧流」　判官（子方・紹智）主従の一行、奥州へ落ちて行く途次、安宅で関守・富樫（ワキ勝久）の嫌疑にかゝるが統率する弁慶（シテ勘鷗）の機略で難を逃れる。

落ち行くとはいえ意気軒昂の同山の道行はよく揃い力強い。判官が耳にした新関を強行突破と逸る同山を鎮め、判官から対策を一任されてシテ、判官を強力に窶れさせ事無きを得たと思いきや、職掌柄ワキは判官一行を端から作り山伏とみて留める。シテ・ワキ問答の緊迫、気色ばみ、したり顔にワキの従者（アヒ又三郎）大声で昨日も山伏を三人斬ったと差し出口を。昂ぶらず徐に「さてその斬ったる山伏は判官殿か」と問うシテは器の大きさを。が、「あら難しや、兎に角に一人も通し申すまじい上は候」と業を煮やす心のワキにシテも観念、この上は最期と許りにシテ・同山掛合の勤行。ノットのうち水衣の肩取り正先に安座のシテを頂点に、走り込む同山は末広に並び、居立チ、伸ばした右手の数珠一斉に揉み出す迫力は壮観。流石に職務忠実、堅いワキも「真の山伏にて候程に通し申すべし」とは言い条、勧進帳のことが。「何と勧進帳を読めと候や」とシテ、ぐっとワキにアシラヒ膨を固め、脇正、二列の同山の中、勧進帳にあらぬ巻物一巻とって戻り恭しく読み出す腹芸、ワキがさりげ無く近寄る気配察しつゝも朗々と読み切る胆力、見事。その気勢を恐れて関を通すワキに又しても従者、目覚く判官殿がと騒げば、へすは、と殺気立つ同山にシテにも又しても難局。白熱のシテ・ワキ問答は、強力（判官）を留め笈に目を着けるは盗人、として、何とあっても一人も通さぬ、とワキ。同山を代弁する地（貴弘・宣長・義高ら）へ方々は何故に、と同山、先づ左列ついで右列と一斉にワキへ殺到、最後は一団となって迫るを金剛杖右肩に凭せ掛け懸命に踏ん張り押し返すシテ、隠忍自重の弁慶の面目躍如。何とか関を遠く過ぎ小憩、先の非礼をシテ、判官に詫びて掛合、はき〳〵応じる判官の旨さが光る。不遇を憂え神仏を託つクリ・サシ・クセを省く。

舟舞は小書「瀧流」で〽面目や山水に、と開いた扇をスミに落とし数珠で舞う。途中、大小流シで三ノ松へ行き、舞台を受け目付柱へ瀧を望見する心、勾欄下を流れとみて盃を追う心に戻るとスミの扇（盃）を拾い上げ〽鳴るは瀧の水、とワカに。ユウケン扇は虎口を脱し得た喜びか、〽虎の尾を踏み、と正中で足拍子二ツ、橋懸へ走り三ノ松で留メ拍子踏んだ。若さ漲る同山（哲朗・大志・祐樹・雄介・雄一郎・景晶・勘吉郎・顕宗・朝彦）を率い力強い立派な弁慶ぶり、シテ勘鷗、晴れやかな舞台だった。（1時間30分・10月5日・第四回　観正能）

「井　筒・物着」　旅僧（ワキ和幸）が在原寺で出遭う里女（シテ清河寿）、問答・掛合に業平のこと問われ縁は無いが今も昔男の名を残す人の跡、〽一叢薄の穂に出づる、と離れて井筒の薄を見込むところ、そこはかとなき恋慕の情は空調の微風の所為で幽かにそよぐ薄の穂に揺らめく女心。寂寞とした秋の風情も一入に〽草茫々として露深々と、と右へ眺める辺りは、鄙には稀な里女の佇まいに気品の宗家。業平の事なお委しく、のワキに応えクリ・サシ・クセは床几で。ロンギになり、有常が娘とも井筒の女とも、言われたのは〽恥かしながら我なりと、ワキにアシラヒ、〽長き夜を契りし年は、と直ッて立つと〽井筒の陰に穏れ、と一足出て一足退き、返シ句に右膝つき、物着アシラヒで後見座へ。初冠・紫長絹・太刀を佩き、常座に立つとワキの待謡は小書「物着」で省く。

序之舞は如何にも静かで麗しく上品。

〽男なりけり、と井筒へするり〳〵と近寄り〽業平の面影、と左袖払って井桁に掛け〽見れば懐かしや、と沁々覗き込み、〽我ながら、と立ち〽懐かしや、とシヲルところ情緒纏綿、〽亡婦（魄霊）、と右へ回り直ッて扇面を面に当て〽凋める花の、としお〳〵沈む姿の優美。〽在原の、と立ち〽寺の鐘、と足拍子二ツ踏み、あと一ツを踏むを余韻に聞く。あくまで品の良い舞台だった。囃子は六郎兵衛・裕己・眞之介、地は四郎・芳伸・勘鷗ら。（1時間34分）

『名古屋観世九皐会』「砧」
左より中所宜夫、飯冨雅介
（撮影　杉浦賢次）

「鬼　瓦」　訴訟叶い帰国の大名（シテ友彦）、太郎冠者（アド融）を伴いお礼に因幡堂に詣で、御利益ある御堂を国元にも勧請したいと堂の設え隅々見て回るうち鬼瓦に目が留まる。それが妻君に面相が酷似「思ひ出されて懐しいことぢゃ」と双シヲリの男泣き。目鼻立ちの一々を微細に描写してゆく大名、それも俗に美とは対極の醜とあって太郎冠者はくす〳〵と忍び笑い。美醜感覚が諸に出たと言おうか、「口の耳せゝまで切れたところ、首筋に苔の生へたは其侭の女共ちゃ」と同意求められては誰しも素直に答えられようか。それにしても細君を愛する大名の、それこそ「蓼食う虫も好き〴〵」を具視化した大胆不敵、可笑しかった。（18分）

「乱」　和幸）、霊夢を蒙り揚子の市で酒を商えば、市が立つ毎に現われ酒を呑む猩々（シテ勘吉郎）を名乗る仁、酔余舞を舞う。重い習物で勘吉郎の披キ後見に観世宗家が就く。

乱は中之舞・乱・中之舞と三段に舞う。眼目の乱は酔って波の上に遊び戯れる心。頭を振る所謂いや〳〵は酔態、波を蹴り上げる乱レ足、足を爪立て波に乗り弧を描き流れてゆく流レ足、大波を避ける心に高々と抜キ足したり飛び跳ねるなど、活き〳〵と若さの躍動感が惹きつける。たゞ謡がくぐもるのが気になるが立派な披キだった。囃子は学・舜一郎・良勝・元伯、地謡は勘鷗・公威・義也ら。（33分・10月13日・名古屋淡交会40周年特別公演）

『名古屋観世九皐会』「砧」
左より中所宜夫、小島英明
（撮影　杉浦賢次）

「砧」　訴訟で上京の夫・芦屋某（ワキ雅介）に三年間も留守にされ孤閨を託つ妻（シテ宜夫）の許へ侍女・夕霧（ツレ英明）、年の暮には必らず戻るの伝言を齎せば妻は落胆阻喪、偶々砧の音に唐の故事を思い出し、我身に重ね合わせ、砧を打ち慰さまん、と。物着に唐織の肩を脱ぎ、砧の作物ワキ座前に。孤愁は風光に寄せる思いの砧之段、シテと地謡（三郎・直也・喜正ら）の名調素晴らしく〽ほろ〳〵はらはら〳〵と、砧を打つところうら悲しい。ツレは〽はらはら〳〵、で立ちシテの後ろに下居。「いかに申し候」とワキが暮にも戻れない由を知らせれば、〽怨めしや、とシテのクドキ。怨み嘯みしめるかにジリ〳〵と砧から直り、〽真に変り果て給ふぞや、とシヲリ、〽（心も弱る）かな、で立つと中入地に。ツレはシテを介添するが、〽病の床に、と橋懸へ入れればシテは既に空しくなって居り、シテの後から離れ地一杯に静かに中入。下人（アヒ高義）が女性の身の儚さ、奥方の心中察すると立ちシャベリに、ワキを呼び出して退くと後場。

何事もなく出るワキ、正先に処を替えた砧の作物に一寸目を遣り大小前から砧の前に下居、待謡に合掌してワキ座につくと後シテの出。〽叫べど声が、と耳を澄ましし、〽松風も聞えず、と幕を見遣り、〽呵責の声のみ、と杖を手放し退り、〽恐ろしや、と両手で耳を蔽い下居の辺り、確かな型の美しさ。〽執心の面影の、とワキへ詰め寄る気迫、〽あら由なや虚言や、とキッと正先へ出、扇で空を一打、ワキを睨め付ける恐さ。〽君いかなれば、とワキに近づけば合掌するワキ、〽思ひ知らずや、とワキへ指スのは何かお手をお上げなさいの様に見えたが、一体は引き締まったよい舞台だった。（1時間40分）

「蟹山伏」　山伏（シテ又三郎）強力（アド隆行）に行力の自慢をひけらかすも異形の蟹ノ精（信朗）あっさり面目失墜のていたらく、信朗君が立派になった。（18分）

『名古屋観世九皐会』「蟹山伏」
左より野口隆行、野村信朗、野村又三郎
（撮影　杉浦賢次）